言語文化学科　中国語中国文学コース

陸游の人間像に関する一考察　―夢の詩を手掛かりに―

学　部　　文学部

卒業年度　　2019 年度

学籍番号　　A16LA142

むらた　まゆ

村田　真由

目次

第 1 章　序論 4
1.1　研究の背景 4
1.1.1　研究のきっかけ 4
1.1.2　陸游の夢の詩について 5
1.1.3　研究動機 5
1.2　先行研究と問題意識　－陸游の「夢の詩」に関して 6
1.2.1　先行研究の傾向 1：「夢の詩＝愛国詩」という捉え方 6
1.2.2　先行研究の傾向 2：「夢の詩は本当に見た夢に基づいたものか」という議論 7
1.2.3　問題意識と仮説：陸游にはなぜ夢の詩が多いのか（2 つの挫折という観点から） 8
1.3　先行研究と問題意識　－陸游の「人間像」に関して 9
1.3.1　先行研究の傾向：「陸游は愛国詩人か、田園詩人か」という二分法的な捉え方 9
1.3.2　問題意識と仮説：晩年の陸游は自らの「愛国の憤慨」とどう向き合ったのか（夢の詩の観点から）　10
1.4　研究目的の設定とその意義 11
1.5　研究方法と論文の構成 11
1.5.1　夢の詩一覧の作成（資料編） 11
1.5.2　書き下し文・訳文の作成（資料編） 12
1.5.3　夢の詩についての総合的な分析（第 2 章） 12
1.5.4　陸游にはなぜ夢の詩が多いのか―結婚における挫折という観点から―（第 3 章） 12
1.5.5　陸游にはなぜ夢の詩が多いのか―官途における挫折という観点から―（第 4 章） 12
1.5.6　晩年の陸游は自らの「愛国の憤慨」とどう向き合ったのか―夢の詩の観点から―（第 5 章）　12

第 2 章　夢の詩についての総合的な分析 14
2.1　陸游は「夢」「眠り」をどのように捉えていたか 14
2.1.1　「夢」「眠り」についての詩 14
2.1.2　考察 18
2.2　夢の詩に表れるテーマについて 19
2.2.1　テーマ一覧 19
2.2.1　夢の詩全体における各テーマの割合（円グラフ） 20
2.2.1　各年代におけるテーマの分布（散布図） 21
2.2.2　考察 21
2.3　小結 21

第 3 章　陸游にはなぜ夢の詩が多いのか―結婚における挫折という観点から― 22
3.1　陸游の結婚における挫折について 22

3.2　陸游と唐婉について 22
3.3　結婚における挫折と夢の詩 23
3.4　小結 24

第 4 章　陸游にはなぜ夢の詩が多いのか―官途における挫折という観点から― 25
4.1　夢で「郷里」に帰ることで充実感を得ようとする 25
4.1.1　夢の詩における「望郷」というテーマについて 25
4.1.2　成都赴任中の望郷 27
4.1.3　建安赴任中の望郷 28
4.1.4　厳州赴任中の望郷 29
4.1.5　臨安赴任中の望郷 30
4.1.6　考察 30
4.2　夢で「過去」（主に四川にいた時代）に戻ることで充実感を得ようとする 31
4.2.1　夢の詩における「過去の回想」というテーマについて 31
4.2.2　四川という土地・生活の回想 32
4.2.3　四川時代の友人（故人）との再会 36
4.2.4　考察 40
4.3　夢で「人と交遊」することで充実感を得ようとする 41
4.3.1　夢の詩における「交遊」というテーマについて 41
4.3.2　客人との集い 41
4.3.3　新しい人物との出会い 47
4.3.4　考察 51
4.4　夢で「仙界および道教思想」に帰属意識を持つことで充実感を得ようとする 52
4.4.1　夢の詩における「仙界および道教思想」というテーマ、及び帰属意識について 52
4.4.2　仙人に丹薬をもらう 58
4.4.3　仙界の人々との交流 59
4.4.4　「丹窯」について 63
4.4.5　考察 65
4.5　夢で「愛国の憤慨」を新たにすることによって充実感を得ようとする 66
4.5.1　夢の詩における「愛国」というテーマについて 66
4.5.2　夢で軍の駐屯地を訪れる 66
4.5.3　夢で金の占領下にある北方地域を訪れる 69
4.5.4　考察 72
4.6　小結 72

第 5 章　晩年の陸游は自らの「愛国の憤慨」とどう向き合ったのか―夢の詩の観点から― 74
5.1　夢の詩において「老い」はどう表現されるか 74
5.1.1　夢の詩における「老い」というテーマについて 74

5.1.2　老いをやや悲観的に捉えたもの 74
5.1.3　老いを敢えてユーモラスに捉えたもの 78
5.1.4　考察 80
5.2　夢の詩において「愛国」と「老い」はどう関係するか 81
5.2.1　夢の詩における「愛国」と「老い」の関係性について 81
5.2.2　「老い」てなお、夢で「愛国」を維持 81
5.2.3　「老い」たため、夢での「愛国」を自嘲 85
5.2.4　考察 90
5.3　夢の詩における「愛国」と「老い」の関係性の変遷 91
5.3.1　関係性の変遷について（表） 91
5.3.2　考察 93
5.4　小結 94
第 6 章　結論 95
6.1　総括（研究の目的と考察の成果について） 95
6.2　課題点 96
6.3　今後の展望 96

参考文献 98

資料編
・夢の詩一覧
・書き下し文・訳文一覧

第1章 序論

1.1　研究の背景

1.1.1 研究のきっかけ

陸游（1125-1210）に、次のような夢を題材とした詩がある。

14[1]　　夢至成都悵然有作　二首　其一（巻十）[2]
（夢に成都に至り悵然として作る有り。）

春風小陌錦城西	春風の小陌　錦城の西
翠箔珠簾客意迷	翠箔の珠簾　客意迷う
下盡牙籌閑縱博	牙籌を下し盡くして　閑かに博を縱にし
刻殘畫燭戲分題	畫燭を刻み殘いて　戯れに題を分かつ
紫氈毹暖帳中醉	紫氈毹　暖くして帳中に醉い
紅叱撥驕花外嘶	紅叱撥　驕りて花外に嘶く
孤夢凄凉身萬里	孤夢　凄凉にして身は萬里
令人憎殺五更雞	人をして五更の雞を憎殺せしむ

（春風が吹き抜ける、錦城西の路地／翡翠や真珠の簾を掛けた店の間を渡り歩く。／牙籌を出し尽くして漫然と博打を楽しみ／飾りのある蝋燭に刻みを入れて気まぐれに分題し詩を作る。／紫の絨毯が敷かれた暖かい帳の中に酔い／外に繋いだ駿馬が花の向こうに嘶く。／一人夢から覚めると、成都からは万里も離れているという現実に落胆し／五更に鳴いた鶏が憎らしくて仕方がない。）

これは淳熙五年十月、陸游が成都から郷里の山陰に帰ってきて約一年が経ったころの作であり、成都赴任時代の放縱な生活を懐かしんだ内容である。前半の六句は夢の中の世界を、後半の二句は夢から覚めた後の現実を描写しており、夢の中の成都のきらびやかな街の様子と、成都から遠く離れた孤独な現実との対比が鮮やかである。第八句の「人をして五更の雞を憎殺せしむ」は、幸せな夢から覚めてしまったことを残念がる気持ちをよく表しており、現代の我々も共感を覚えるような部分である。私はこの詩を読んだことをきっかけに、陸游の詩のうちでも特に「夢」を題材とした詩に興味惹かれるようになった。

---

[1] 以下、各詩の前には、資料編「夢の詩一覧」における通し番号を示すこととする。
[2] 以下、各詩の後には、『劍南詩稿』における巻数を示すこととする。

1.1.2 陸游の夢の詩について

陸游には、このように夢を題材とした詩が際立って多い。『剣南詩稿』の中には、詩題に「夢」という語の含まれる詩が百五十七首あり[3]、詩句に「夢」の含まれる詩も合わせると実に九百首を超える。これは陸游の一万首近い詩のうち、十分の一をも占める数であり、同時代の詩人における夢の詩の割合と比べても圧倒的である。[4]

陸游の夢の詩のテーマは、上記の詩にあるような成都赴任時代の回想から、故人との交遊や酒宴、仙界への旅、望郷、北方地域を舞台に愛国の憤慨を述べた詩に至るまで多岐に渡っている。詩における夢の表現形式も様々であるが、大きく分けると次の二種類になる。

（ア）詩全体が夢の世界だけで表現されたもの。
（イ）詩の中に夢の世界と現実世界の両方が表現されたもの。

例えば(ア)の形式では、陸游が夢の世界へ、自身の精神の深層部へと没入していく様子が詩の全体によく表れている。夢の中で得た詩を目覚めてから書き留めた、という詩も(ア)に当たる。他方で(イ)の形式では、陸游は夢の世界と現実世界との境界をはっきりと認識し、一歩引いた目線で夢を表現している。多くの夢の詩を書き残した陸游が、夢そのものをどう捉えていたかが読み取れることも、この形式に特徴的である。夢の中でこれが夢であることを認識していた、という詩も(イ)に当たる。陸游は様々な詩の形式を通して、多岐にわたる夢のテーマを表現したのである。

これらの夢の詩のうち約四分の三は、陸游が山陰に帰郷した六十六歳以降に書かれたものであり、特に彼の晩年の内面世界が顕著に表れていると言える。

1.1.3 研究動機

それでは、陸游はなぜこれほど多く夢の詩を書いたのだろうか。また陸游自身は夢をどのようなものと捉えていたのか。これほど多く書いたということは、彼の人生（特に晩年）においての「夢」とは、その他の人々にとっての「夢」に比べると何か大きな意味を持っていたに違いないが、その意味とはどのようなものか。このような点に疑問を持ったことから、私は陸游の夢の詩を、彼が現実に経験したことと照らし合わせて読みながら、彼の夢の詩の特徴・独自性を分析し、陸游の人生（特に晩年）において夢はどのような役割を果たしたのか、探求したいと考えた。

さらに、夢とは極めて個人的な現象であり、普段は人の内側に隠れている微妙な心情が表れてくるものである。夢の詩は陸游の人間像を考察するうえで絶好の手掛かりになるのではないか。以前より、歴史に残る人間の思想・人となりに興味があった私は、陸游の夢の詩の研究を通して、彼の人間像の奥深さを自らの目で確かめ、新たな魅力を見出してみたいと考えるに至った。

---

[3] 以下、陸游の夢の詩とはこの百五十七首を指すものとする。

[4] 詩題に「夢」という語の含まれる詩は、楊万里では十一首、范成大では七首あるのみである。

1.2　先行研究と問題意識―陸游の「夢の詩」に関して―

1.2.1 先行研究の傾向 1：「夢の詩＝愛国詩」という捉え方

先述のように、陸游の夢の詩には多岐にわたるテーマが表現されている。しかしながら、夢の詩に関する先行研究においては、夢の詩の中でも「愛国の憤慨」が表現されたものだけが、もっぱら注目されてきた。それは以下の各氏の言及にも明らかである。

> 愛国の情は陸游の生命全体の中に充満し、陸游の全ての作品の中に横溢している。陸游は一幅の馬の絵を見ても、数輪の美しい花を目にしても、一声、雁の鳴き声を聴いても、何杯かの酒を飲んでも、数行の草書を書いても、国の仇をうち、国の恥をすすぎたいという思いがわき起こり、その血はたぎり始めた。しかもこの熱い血潮は、目がはっきり覚めている白日の現実生活の境界を突き破り、夢の領域にまでなだれ込んでいるのだ。この点もまた、余人の詩集には見いだし得ない特徴である。[5]

> 追憶と夢の主たる対象は、興元での生活、蜀を離れたのちは興元をもふくめた蜀での生活であり、そのテーマの多くは（中略）金に対する抗戦と国土恢復の希望である。実現されぬ理想を、夢と追憶において充足させた、としか考えられぬ。蜀を離れたのちも、愛国の詩篇はすくなくない。しかしそれらは回億と夢の形を取ることが比較的多い。[6]

> 彼は夢の中で彼の親戚と師友をたずね、想念の中のまぼろしの場所をたずねたが、しかしさらに多く南鄭とその周辺とをたずねた。（中略）要するに、彼はみずから軍馬にまたがり、敵のとりでを踏みつぶし、北方の失陥地区を回復することを夢みたのである。[7]

> 陸游は主戦論の主張が採用されなかったので、常に夢と幻想とを借りて、彼の愛国の熱情を寄託した。詩集中には夢を記した詩がたいへん多くあるものは詠懐詩にひとしい。これは現実の苦悩が生み出したものである。[8]

確かに、陸游が生涯にわたって愛国の志を持ち続けたこと、および夢の詩に愛国の憤慨を表し

---

[5] 銭鍾書（宋代詩文研究会訳注）『宋詩選注』（平凡社 2004 年）第 3 巻、p.98。

[6] 一海知義『陸游詩選』（岩波書店　2007 年）、p.386

[7] 朱東潤『陸游研究』（北京中華書 1961 年）、 p .157。

[8] 疾風『陸放翁詩詞選』（浙江人民出版社 1958 年）、p.48。

たものがあることは事実である。しかしながら、実際に陸游の夢の詩の全体を調べると、多く登場するのは、むしろ、故人との喜ばしい再会や、華やかな酒宴の場面の方なのである。つまり、陸游が夢の詩をこれほど多く書いた理由は、単に愛国感情を表明するためだけではなかったと捉える方が自然ではなかろうか。それにも関わらず先行研究では、陸游の夢の詩は、彼の愛国者的側面を強調するための材料として扱われるにとどまっている。

よって、本研究では陸游の夢の詩を論ずるにあたって、愛国のテーマにばかり目を向けるのではなく、多彩なテーマを整理し、詩の一つ一つが陸游にとってどのような意味を持っていたのかを分析することに重点を置きたいと考える。

1.2.2 先行研究の傾向 2：「夢の詩は本当に見た夢に基づいたものか」という議論

夢の詩に関する別の観点からの先行研究としては、陸游の夢の詩は実際に見た夢に基づくものか否か、という考察がある。陸游には夢の詩が多すぎるのではないか、本当に夢に基づくものなのか、という見方は次の張翼に代表される。

> 人生安んぞ許の如きの夢有るを得ん。此れ必ず詩有りて題無く、遂に之を夢に託するのみ。[9]

すなわち、陸游の夢の詩は実際に見た夢に基づいておらず、詩をまず作ってから、適当な題が思いつかずに夢という題を仮につけたのにすぎないという説であり、小川瑞樹氏はこの説に同調的である。[10]

これに対し、入谷氏は逆の立場をとる。すなわち、陸游の夢の詩では、夢を見た時の日付・時刻・状況等の記載が極めて具体的であるから、陸游は実際に夢を見たうえで夢の詩を書いたのだという。[11]

しかしながら、この議論には結局のところ明確な結論を出すことができない。小川氏自身も以下のように指摘する通りである。

> 詩人がほんとうに夢にみたとおりを詩にしたかどうか、そのせんさくは無用のことであろう。陸游が今生きていて、彼にあなたはほんとうに夢にみたとおりを詩にした

---

[9] 趙翼(江守義，李成玉校注)『甌北詩話校注』(人民文學出版社 2013 年)、巻六。
原文「人生安得有如許夢！此必有詩無題，遂托之於夢耳。」

[10] 小川環樹『陸游』（筑摩書房 中国詩文選 第 20 巻 1974 年）「陸游の夢　その一・二」。

[11] 入谷仙介『詩人の視線と聴覚―王維と陸游』(研文出版　2011 年)「陸游の夢の詩についての一考察」。

のですかと問うたならば、たぶん笑って答えないであろう。[12]

そもそも、夢の詩が実際に見た夢に基づいていたとしても、そうでなかったとしても、詩の一つ一つが陸游の内面の表れであることには相違ないのである。よって本研究では、この観点からの議論は一旦おいておき、詩の内容に焦点を当てることを優先することとする。

1.2.3 問題意識と仮説：陸游にはなぜ夢の詩が多いのか（2 つの挫折という観点から）

研究動機にも述べたように、これほど多く夢の詩を書いたということは、陸游の人生（特に晩年）においての「夢」とは、その他の人々にとっての「夢」に比べると大きな意味を持っていたに違いないのである。しかしながら、これまで述べてきたように、夢の詩についての先行研究は特定の観点からのものに限られてきた。

そこで、夢の詩に関する研究を深めるために、まず私が注目すべきと考えるのは、陸游は人生において二つの挫折を経験したということである。一つは結婚における挫折、もう一つは官途における挫折である。挫折は彼の人生を大きく変えることになったが、その一方で、これらの挫折があったからこそ、結果的に陸游の詩作は一層豊かで奥深いものになったともいえる。一海氏も次のように述べている。

> 二つの挫折は若い陸游に深い苦悩を味わわせ、ことに後者は彼の一生を支配さえした。だが結婚の挫折は、彼の純粋な感情と美しい詩をわれわれに示す契機とあったし、官界の登竜門での挫折は、不正への抗議と、それがほかならぬ和親論者秦檜に原因したことであるだけに、金に対する抗金の主張とに結晶し、陸游を正義の詩人、憂国の詩人として成長させる契機となった。[13]

挫折を経たことにより、陸游の詩作が豊かで奥深いものになったとすれば、夢の詩もまた挫折にきっかけを得た詩作であったのではないだろうか。現代の我々は往々にして、満たされない現実を夢の中で充足させるという経験を持っているが、私が思うに、陸游の夢にも同様の役割、つまり彼の現実の人生の「不充実」を補う役割があったのではないだろうか。（もちろん、陸游のように千年も昔に生きた人間が、現代の我々と全く同様に夢を認識していたとは言えないし、彼の夢の詩の全てに具体的な役割が見出せるとも限らない。ただ、本研究においては、詩はその人の内面の表れである、という大前提のもとで、陸游の夢の詩から彼の内面を読み取ることに重点を置き、当時の人々の夢の認識については深く触れないこととする。）

このようなことから、陸游は具体的にはどのような夢を見る（あるいは詩に書く）ことで、現実にはない充実感を得ようとしたのか、夢の詩をテーマ別に整理することで確かめることとする。またこの過程で、陸游の詩作における自由闊達な精神や、彼の人間像の奥深さを、夢の詩の

---

[12] 小川氏前掲書、p.85。

[13] 一海氏前掲書、p.371。

観点から捉えることができればと考える。

1.3　先行研究と問題意識―陸游の「人間像」に関して―

1.3.1 先行研究の傾向：「陸游は愛国詩人か、田園詩人か」という二分法的な捉え方

1.2 では本研究の主題である「夢の詩」について、先行研究とそれに対する問題意識を述べてきたが、1.1.3 の研究動機でも触れたように、私は以前より歴史に残る人間の人間像について興味を持ってきた。夢の詩を研究対象としたのも、夢の詩には人の内面がよく表れているのではないかと考えたからである。そこで、この項では陸游の「人間像」が先行研究においてはどう捉えられてきたのかについて概括しておくこととする。

先行研究においては、陸游の人間像は二分法的に論じられてきた傾向が強い。二分法とはすなわち、陸游は愛国詩人・田園詩人のどちらであったのか、という議論である。そもそも一人の人間を「愛国詩人」や「田園詩人」といった単純な言葉で捉えようとすること自体に無理があるのであるが、これついて、前野直彬も以下のように述べている。

> 昔から陸游について語ろうとする人たちは、憂国の志士としての陸游、孤高の隠者としての陸游という、矛盾した二つの姿に当面して、統一したイメージを描き出すのに困惑せざるを得なかった。昔から多くの学者や批評家がこの問題を避けて通ろうとし、陸游という詩人が二つの矛盾した顔を持っていたことだけを指摘して、あとは口を閉ざすという手段に出ているが、これに満足できない近頃の研究者は色々と説明を加えようとする。(中略)一つは志士としての陸游を本質的な姿と見て、そのエネルギーが社会上の挫折によって外へ伸びることを阻害されたとき、内へ深く沈潜して、静澄閑適の詩を生み出したと説く。もう一つは隠者的な姿をむしろ本質として、わが日常の生活を守り抜こうとする強固な意志が、当時の社会的・政治的環境の抑圧を受けて、必然的に天下国家へと視野を拡大するのに至ったのだという。[14]

事実、陸游はある詩では愛国主義的に国土恢復への熱情をうたったかと思えば、その直後の詩では大胆にテーマを転換させ、隠逸志向的に郷里での穏やかな日常をうたったりもする。しかしながら、陸游の詩の全てがこの二つのテーマだけに振り分けられるものでもない。例えば先に挙げた《夢至成都悵然有作》の詩も、愛国主義的とも隠逸志向的とも断ずることができない。

そのため、彼の詩を上述のような二分法で捉えてしまうと、彼の詩におけるテーマの広がりや、先の詩にみられるような繊細な感性を見逃し、人間像を偏った観点から作り上げてしまう恐れがある。前野氏、入谷氏の両氏も、先行研究における二分法的な人間像の捉え方を疑問視し、次のように述べている。

---

[14] 前野直彬『陸游』(集英社 1997 年)、p.22。

憂国の志士が、常に英雄的な精神を持ち続けるとは限らない。同様に、孤高の隠者でも絶えず超俗の心境にあるとは限らない。(中略)憂国の志士が人生に懐疑を持つような詩を作るのは恥ずかしい、というような顧慮は陸游には無く、かれの詩風の振れ幅は、その瞬間における彼の心の振れ幅が率直に表れたものにほかならないのである。[15]

陸游と言えば、終生、対金抗戦を叫び続けた大丈夫の士であり、政見の容れられないために、郷里での長い隠棲に甘んじた君子である。というのが従来の彼に対する見方であろう。それが誤っているというのではない。しかし、彼が一生のあいだに、生産したというのが似つかわしいほどに営々と書続けてきた大量の詩を検討するとき、そこには、愛国と閑適といった粗雑な二分法ではとらえきれない、こんとんたる、それゆえに豊饒なものが存在するように思われる。陸游はあまりにぼう大すぎるのである。[16]

さらには、陸游を「愛国詩人である」と単に一言で捉えた場合、陸游はその愛国の憤慨を「若い頃から晩年に至るまで全く等しく持ち続けた」詩人である、という見方に終始してしまいがちである。1.2.1 で挙げた各氏の言及にもその傾向は見られる。確かに、陸游には愛国的要素が述べられた詩が多く、彼が愛国詩人としての一面を持っていたことは認められるが、実際にはその裏に様々な葛藤や心の揺れもあったのではないだろうか。

よって、陸游の人間像を考察するうえでは、そのような単純な二分法から一度離れ、彼が詩に表現した豊かな性質をそのままに、連続的な広がりの中に捉えるべきであると考える。

1.3.2 問題意識と仮説：晩年の陸游は自らの「愛国の憤慨」とどう向き合ったのか（夢の詩の観点から）

陸游の人間像に関する先行研究においては、愛国詩人としての陸游が、晩年に至るまで愛国の憤慨を「持ち続けた」ことを強調することに、しばしば重点が置かれてきた。確かに、陸游が愛国の憤慨を「持ち続けた」こと自体は、彼の詩にも確認できる。しかしながら、そうは言っても、彼が若い頃から晩年に至るまで、全く同質の憤慨をただ単純に持ち続けたとは考えにくい。陸游とて人間であるからには、身体の老いに伴って、精神の在り方も変化するのが当然であろう。

実際、陸游の夢の詩における「愛国」のテーマには、度々「老い」というテーマが伴われ、夢の中における精神の若さと、現実の老いた自分とのギャップを自嘲的に捉える彼の姿もみられる。陸游は、老いてなお愛国の憤慨を持ち続ける自分自身を、第三者的な冷めた目で見つめることもあったのである。

---

[15] 前野氏前掲書、p.23。

[16] 入谷氏前掲書、「陸游と蛍」、p.128。

そこで、夢の詩に頻繁に登場する「愛国」と「老い」のテーマに焦点を当て、両者の関係性を分析することとした。(もちろん、「老い」というテーマは陸游という詩人、また夢の詩に限らず普遍的なテーマである。ただ陸游の場合は、これまでの研究において、1.3.1 で触れたように「愛国詩人であるか、田園詩人であるか」という議論が中心であったため、必ずしも「老いとどう向き合ったか」という観点では十分に議論されてきたとは言い難い。さらには、1.3.2 で触れたように「愛国の憤慨を持ち続けた」ことが強調されるだけにとどまっている研究も多く、「愛国」というテーマに「老い」がどう関係するかという点については、普遍的な問題でありながら重視されてこなかった傾向がある。よって、本研究の主題である「夢の詩」を手掛かりに、ここで改めて陸游の「愛国」と「老い」の問題について考察しておくことも、それなりに意義があると考える。)

このようなことから、陸游が愛国の憤慨を「どれほど維持したのか」ではなく、むしろ、避けられない「老い」とどのように向き合い、愛国の憤慨を持ち続ける自分の姿をどう捉えたのかを掘り下げることで、彼の人間像をより素直な形で捉えなおすことができればと考える。

1.4　研究目的の設定とその意義

本研究では、陸游の夢の詩の特徴・独自性を分析し、陸游の人生（特に晩年）において夢はどのような役割を果たしたのかを探求することを目的とし、その過程で、ともすれば固定化されてきた彼の人間像が真なるものかを自らの目で確かめ、新たな魅力を見出すことを目標とする。

元々、私の研究の出発点は、歴史に残る人間の生き様が、人々の心の支えや人生の基軸になり得るという考えから、歴史に残る人間について、自らの目で文献を忠実に研究し、その人間像を確かめ、真の魅力を捉え、今を生きる人々に発信し、一人でも多くの人の心の支えにしてもらいたい、またそれこそが文学研究の一つの大きな役割ではないかという思いを持ったことであった。本研究で陸游の人間像の複雑さ・奥深さを詩の中に見出し、社会に向けて彼の魅力を伝えることで、その役割を果たしたい。

また研究の過程で、当時の知識人が自国の複雑な政治・外交状況のもとでどのような考え方をしたのか、日々の繊細な出来事をどのように捉えたのかを追求することで、現在の我々の物事の捉え方を改めて問い直すきっかけにしたい。

このようなことから、本研究は社会的にも十分に意義がある研究であると考える。

1.5　研究方法と論文の構成

1.5.1 夢の詩一覧の作成（資料編）[17]

本研究では、『剣南詩稿』の中で詩題に「夢」の含まれる詩、157 首を研究の対象とする。

はじめに、『剣南詩稿校注』を参考にし、これらの詩の詩題・巻数・書かれた時期・場所を一

[17] 夢の詩一覧及び原文・書き下し文・訳文の一覧は、資料として付すこととする。

覧表にまとめ、1~157 までの通し番号を振る。

1.5.2 書き下し文・訳文の作成（資料編）

この段階では銭仲聯氏の校注[18]を主に参考にしながら、陸游の夢の詩 157 首全てについて、書き下し文・訳文を作成する。

その際、陸游の年譜や前後の詩も参照し、現実の出来事との相関についても調査する。あるテーマが夢の詩に表現された理由やきっかけを探るためにも、陸游が現実に経験した出来事や、置かれていた状況を把握し、一つ一つの夢の詩を作るに至った理由・背景を意識した解釈をすることに注力したい。

1.5.3 夢の詩についての総合的な分析（第 2 章）

第 2 章では、陸游の夢の詩の全体像を把握するため、夢の詩をテーマごと（夢における望郷／過去の回想／人との交遊／仙界／愛国など）に分類する。

当然、どのテーマにも即していない詩もあれば、複数のテーマが組み合わさった詩もあるが、ひとまずはいずれかのテーマに分類しておき、各テーマの現れる割合、現れる時期の特徴等を分析することとする。

1.5.4 陸游にはなぜ夢の詩が多いのか―結婚における挫折という観点から―（第 3 章）

1.5.5 陸游にはなぜ夢の詩が多いのか―官途における挫折という観点から―（第 4 章）

第 3，4 章では、陸游にはなぜ夢の詩が多いのかについて、結婚における挫折・官途における挫折の二つの観点から、夢の詩をテーマ別に分析し、彼が具体的にはどのような夢を見る（あるいは詩に書く）ことで、現実にはない充実感を得ようとしたのか考察することとする。

またこの過程で、陸游の詩作における自由闊達な精神や、彼の人間像の奥深さを捉えることができればと考える。

1.5.6 晩年の陸游は自らの「愛国の憤慨」とどう向き合ったのか―夢の詩の観点から―（第 5 章）

第 5 章では、第 4 章における「愛国」のテーマをより深く掘り下げるため、夢の詩に頻繁に登場する「愛国」と「老い」のテーマに焦点を当てる。両者の関係性を分析することで、陸游が避けられない「老い」とどのように向き合い、愛国の憤慨を持ち続ける自分の姿をどう捉えたの

[18] 銭仲聯『剣南詩稿校注』（上海古籍出版社 中國古典文學叢書 1985 年）。

かを明らかにすることとする。

結果として、先行研究においては単に、愛国の志を持ち続けた愛国詩人である、と強調されてきた彼の人間像を、より丁寧に、素直に捉えることができればと考える。

第2章 夢の詩についての総合的な分析

2.1　陸游は「夢」「眠り」をどのように捉えていたか

2.1.1 「夢」「眠り」についての詩

まず初めに、次の 31 の詩に注目する。

31　　記夢（巻十四）
（夢を記す。）

世事紛紛觸眼新	世事紛紛たり　眼に觸れて新たなるに
何由常作夢中身	何に由りてか　常に夢中に身を作すや
遠遊萬里纔移刻	遠遊　萬里　移刻纔かなり
豪飲千場不忤人	豪飲　千場　人に忤わず
鼓吹滿城壺日晚	鼓吹　城に滿つ　壺日の晩
鶯花如海洞天春	鶯花　海の如し　洞天の春
是間可老君知否	是間　老うる可きか　君知るや否や
莫信人言想與因	人言　想と因　信ずる莫かれ

（日々、世の中には真新しい出来事があるというのに／なぜ私は夢の中ばかりに身を置くのか／というのも、夢の中では万里のかなたに遊んでも時間が経つことはなく／千度の宴会で、人に勧められるままに痛飲する。／音楽が城中に満ち、壺中で暮らす日々の夜には／花が海のように満開で、まるで洞天の春のようだ。／夢の中で老いていくべきか、君は知っているだろうか／（世説文学における楽令の）夢とは「想」や「因」である（＝夢は「思考」であり、「原因」あって生じるものだ）という発言を信じてはいけないよ。（まさか私が日頃からこんなことばかり考えている訳がないだろう。））

この詩は、陸游自身が「夢」について言及した詩のうちの一つである。陸游は「現実の世界にも目新しい出来事が沢山あるというのに、なぜ自分は夢の中にばかり身を置きたがるのか」という疑問を第 1、2 句で提示したうえで、それに続く部分で夢の世界の魅力を表現し、初めの疑問に答えるといういわば自問自答の形をとっている。この詩では、陸游は夢の中の世界を、現実の時間や距離を超越し、日夜酒宴の開かれる洞天のようなものだと表現している。「まるで洞天のような」夢の世界に浸っていることを好んだ、と陸游は自分で述べているのである。

第 8 句においては、世説文学における楽令の、夢とは「想」や「因」である（＝夢は「思考」であり、「原因」あって生じるものだ）という発言を飽くまで否定し、自分が日頃から夢の中の酒宴のことばかり考えているわけではないと冗談気味に述べている。これと同様の内容は以下

の詩にも繰り返し見られる。[19]

実際、陸游の夢の詩には、夢の世界の楽しさ、心地よさを描いたものが多い。次の 23 の詩も、題には「飲酒して楽しきこと甚し」とあり、第 8，9 句目の「いつも、ただ眠りの楽しみだけを考えているのだから／茶甌を持ってきて、睡魔と戦わせる（眠らせないようにする）ようなことはやめて欲しい」という部分からは、陸游が眠っているうちに心地よい夢を見ることが、いかに好きであったかが分かる。

23　春晩坐睡忽夢泛舟飲酒樂甚既覺悵然有賦（巻十二）
（春晩、坐睡するに、忽として夢に舟を泛べ、飲酒して樂しきこと甚し。既に覺みて悵然として賦する有り。）

夢泛扁舟逸興多	夢に扁舟を泛かぶ　逸興多し
畫橈揺蕩麴生波	畫橈　揺蕩として　麴　波を生ず
微風蔌蔌生蒲葦	微風　蔌蔌たりて　蒲葦を生じ
小雨霏霏濕芰荷	小雨　霏霏たりて　芰荷を濕らす
舞落烏紗從歲去	舞落の烏紗　歲に從いて去らば
歌酣白紵奈情何	歌酣の白紵　情を奈何せん
年来惟覺華胥樂	年来　惟だ華胥の樂を覺ゆるのみ
莫遣茶甌戰睡魔	茶甌を遣り　睡魔と戦う莫かれ

（夢で小舟を浮かべることは一興である／飾りのある櫂を気ままに動かすと、酒杯に波が立つ。／微かな風がそよそよと蒲葦の草を揺らし／小雨が降って芰荷を濡らす。／舞い降りる渡り鳥が、季節に従っていなくなってしまえば／酒に酔った私はこの寂しさをどう紛らわせばよいのか。／いつも、ただ眠りの楽しみだけを考えているのだから／茶甌を持ってきて、睡魔と戦わせる（眠らせないようにする）ようなことはやめて欲しい。）

また、次の 3 の詩では題にもある通り、夜に見た夢の中で詩を作ったが、目覚めてからどのような詩であったか忘れてしまったので、夢で作った詩と同じ「笑い」というテーマについて戯れに一首を作った、という珍しい形態のものである。

3　九月六夜夢中作笑詩覺而忘之明日戯追補一首（巻四）
（九月六夜、夢中に笑詩を作り、覺めて之を忘る。明日、戯れに一首を追補す。）

吾家笑疾自士龍	吾家の笑疾　士龍に自る

[19] 記夢（巻十四）「是間可老君知否，莫信人言想與因」
書意二首 其一（巻四十五）「君知夢境無根底，莫信人言想與因」

我才雖卑笑則同	我才卑と雖も　笑は則ち同じ
紛紛世事何足計	紛紛たる世事　何ぞ計るに足らん
盡付撫掌掀髯中	盡く　撫掌掀髯の中に付さん
清樽可醉風月好	清樽　醉う可し　風月好し
虚空萬象皆絶倒	虚空の萬象　皆絶倒す
問君此笑是喜不	君に問う　此の笑　是れ喜ぶや不や
道得老夫輸一籌	道に老夫を得るも　一籌を輸す

（我が一族の笑疾は陸雲より始まっている。／私の才能は陸雲には及ばないが、笑疾は同じである。／細々と騒がしい世の中について、どうして深く考える価値があるだろう／すべて手を叩き、髭を振り乱して笑う中に片づけてしまおう。／酒樽から酒を飲み、風月の素晴らしさに酔えば／浮世のあらゆるものが、皆笑って絶倒する。／「お聞きしますが、このような笑いは好ましいものでしょうか？」／道中、老夫に会ったが、賭け事で負けてしまった。）

この詩において印象的なのは、第 3，4 句目の「細々と騒がしい世の中について、どうして深く考える価値があるだろう／すべて手を叩き、髭を振り乱して笑う中に片づけてしまおう。」という部分である。「紛紛たる世事」には、恐らく日常の細々とした問題だけでなく、陸游の官途における失敗、国土の危機など、世の中における様々な問題が包括されているように思う。陸游は実際には、晩年に至るまで愛国の憤慨を棄てることなく、現実の問題、世の中の動きを笑って忘れ去ってしまうことなど無かったのだが、その分、心地よい夢を見ているときには、現実にある多くの問題から一時的に離れることができたのかもしれない。

一方で、55，77 の二つの詩に注目する。

55　記夢（巻二十七）
（夢を記す。）

夢不出心境	夢　心境を出でざるも
曠然成遠遊	曠然　遠遊を成す
花殘杜城醉	花殘る　杜城に醉い
木落華山秋	木落つる　華山の秋
戰血磨長劍	戰血　長劍を磨き
塵痕洗故裘	塵痕　故裘を洗う
那知覺来處	那ぞ知らん　覺めて来たる處
身卧五湖舟	身は卧す　五湖の舟

（夢とは心の中から出ることはないはずだが／私は夢ではるか遠いところにまで遊ぶ。／花の散った春の終わりの杜城に酔ったかと思えば／木々が散った華山の秋も見る。／戦に出れば血

で長剣を染め／旅先では塵が付いた古い皮衣を洗う。／夢から覚めた自分がどこにいるかなど、どうやって分かろうというものだろう／（夢の中の自分は）五湖の舟の上に身体を横たえているのだが。）

77　　作夢（巻三十五）
（夢を作す。）

作夢今逾七十年	夢を作し　今逾ゆること七十年
平生懐抱尚依然	平生　懐抱すること　尚お依然たり
結茅杜曲桑麻地	杜曲　桑麻の地に茅を結び
覓句灞橋風雪天	灞橋　風雪の天に句を覓む
驃騎向來求作佛	驃騎　向來　作佛を求め
淮南末路望登仙	淮南　末路　登仙を望む
世間妄想何窮盡	世間の妄想　何くにか窮まりて盡きん
輸與山翁一醉眠	山翁に輸與せよ　一醉眠

（私は夢を描き続けてもう七十年になるが／日ごろから胸のうちに抱く思いは今なお昔と変わらない。／西安の桑麻の育つ土地に簡単な家屋を立てて住み／長安の灞橋の上で風雪の空を見上げながら詩を読みたいと願っている。／昔、驃騎将軍の可充は、若いころに仏になることを夢み／淮南の王安は、老年になってから仙人になることを夢みた。／人間の妄想というものはとどまるところを知らない。／だから今日も私に与えてくれ、ひと酔いの眠りを。）

これらの詩も、31 の詩と同じく、陸游自身が夢について言及した詩であるが、内容は 31 と対照的であると言っても過言ではない。31 の詩においては、陸游自身が夢の世界とは洞天のような楽しいものだと述べていたが、55、77 の詩においては、当時は金の占領下にあった北方地域を夢の舞台となる地に想定しており、愛国の憤慨を表現することが、夢の詩のテーマの一つとして、確かに陸游の意識の上に存在していたことが分かる。陸游は愛国の憤慨に加え、実際に南鄭の最前線地域に赴任した経験を持っていたために、複数の夢の中で、現実には行くことのできない北方地域や対金陣営の最前線に足を踏み入れるのである。

また、77 の詩の第 7，8 句では、北方の西安・長安の地に自分の足で立ちたいという陸游自身の願いを「世間の妄想」の一つとして自嘲気味に捉えつつも、「夢」「眠り」をその「妄想」の世界へ行くための手段として大切に思う気持ちが伝わってくる。陸游の「眠り」への思い入れは、次の詩における「竟きず　睡味の濃」、眠りの誘惑に取りつかれたままでいるという詩句にもよく表れている。

また、夢については次の 43 のような詩もある。

43　　我夢（巻二十）

（我夢む。）

我夢入烟海	我　烟海に入るを夢むるに
初日如金鎔	初日　金鎔の如し
赤手騎怒鯨	赤手　怒鯨に騎り
横身當渦龍	横身　渦龍に當たる
百日京塵中	百日　京塵の中
詩料頗闕供	詩料　頗る供を闕く
此夕復何夕	此夕　復た何の夕たるか
老狂洗衰慵	老狂　衰慵を洗う
夢覺坐嘆息	夢覺み　坐して嘆息す
杳杳三茆鍾	杳杳　三茆の鍾
車馬動曉陌	車馬　曉陌に動く
不竟睡味濃	竟きず　睡味の濃
平生擊虜意	平生　虜を擊つの意
裂眥髮上衝	眥を裂き　髮　上を衝く
尚可乘一障	尚お　一障に乘ずる可く
憑堞觀傳烽	堞に憑きて　傳烽を觀ん

（私は夢で大海原に身を躍らせた／太陽は金が溶けるようにまぶしく／素手で荒れ狂う鯨に乗り／身を横たえて龍と共に泳ぐ。／ここ百日ものあいだ都にあるが／詩の材料になりそうなものは乏しい。／今日の夕方も他の日の夕方と何ら変わらずに／老いた私は、衰えた自分の顔を洗う。／夢から覚めると落胆して溜息をつく／はるか遠くで三茆の鍾の音が聞こえている。／車馬が夜明けの小道に動き出しても／眠りの誘惑に取りつかれたままでいる。／日頃から、金を討ちたいという思いは／目を怒らせ、怒髪天を衝くような強さでもある。／今なおもう一度砦に登り／城壁の上の垣根のそばで、伝言ののろしを見なければ。）

この詩において特徴的であるのは、第 5，6 句目の「ここ百日ものあいだ都にあるが／詩の材料になりそうなものは乏しい。」という部分であろう。現実の生活に詩材が乏しいために、第 1，2 句に表現されているようなダイナミックな夢の世界が、詩材の役割を果たしているのである。一方で、第 12 句以降には愛国の憤慨の強さを述べており、夢の世界にばかり浸っていようとする自身を鼓舞する目的があるようにも思われる。

2.1.2 考察

以上、陸游が「夢」「眠り」をどう捉えていたのかを明らかにするべくいくつかの詩を取り上げてきたが、総じて言えるのは、陸游は「夢」「眠り」と自身との距離を冷静に認識していながらも、夢に対して強い結びつきを感じていたということである。夢の詩のテーマは実に様々で幅

広いものであるが、どのようなテーマであっても、夢は陸游にとって重要な存在であり、眠って夢を見る時間を好んでいたことが分かる。

2.2　夢の詩に表れるテーマについて

2.2.1 テーマ一覧

次に、夢の詩 157 首をテーマ別に分類するとすれば、およそ以下のようなものになる。
（当然、これらのテーマに完全には当てはまらない詩もあれば、何をテーマにしているのか難解で読み取れない詩もある。ただ、夢の詩全体においてこれらのテーマがどのような割合で現れるのか、また年代を通しての分布を大まかに把握することは重要である。よってひとまず次の 6 つのテーマに即して夢の詩 157 首全てを分類した。）

以下、テーマ 0 に属する詩はこの第 2 章で、テーマ 1～5 に属する詩は第 3 章以下で詳しく取り上げるため、ここでは簡単な説明にとどめる。

テーマ 0 夢そのものについて（9 首）

先ほど 2.1 で取り上げたのはテーマ 0 に当たる詩である。
特定の夢の内容についてではなく、総括的に夢そのもの、眠りそのものについて述べた詩がこれに当たり、陸游が夢・眠りについてどう認識していたのかを捉えるための貴重な材料となる。

テーマ 1 愛国（42 首）

ここでは便宜的に「愛国」とまとめておくが、実際にはテーマ 1 の詩は、ストレートに愛国感情を表明したものと、愛国感情の表明に加えて「老い」「自笑」の要素が組み合わさったものの 2 種類に大きく分けられ、それぞれかなり違った印象を読み手に与える。テーマ 1 については、特に第 5 章で詳しく取り上げる。

テーマ 2 望郷（13 首）

テーマ 2 は赴任先の地から、故郷を思った夢の詩である。

テーマ 3 過去の回想（30 首）

テーマ 3 の中には、過去に訪れた地を夢で再訪するものと、故人・友人と夢で再会するものの 2 種類があり、特に四川時代を回想した内容が多く見られる。

テーマ 4 現実にはない世界（24 首）

テーマ 4 は、テーマ 2、3 とは違い、現実では行ったことのない場所の訪問や、出会ったことのない人との交遊を述べた詩である。客人と「遊ぶ」ことに重点があるもの、初対面の人との「出

会いそのもの」に重点があるものに分けることができる。見知らぬ人物が詩を見せるために訪ねてくるというパターンのものもいくつかある。

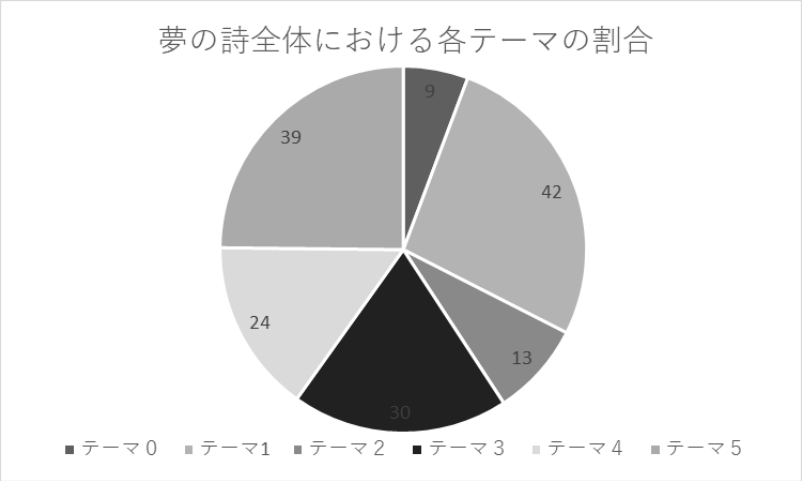
テーマ 5 仙界および道教思想（39 首）

陸游は現実の世界においても、自らの健康のために道教の知識を実践していたほか、自ら薬草を採りに出かけ、錬丹術を試していたことなどは既に明らかにされているが[20]、夢の世界においても、仙界・道教に関連する場面は多く登場する。（ただし、本来、仙界と道教とでは意味するところ・概念が異なるのだが、現段階で私自身がこのジャンルに詳しくないため、今回の論文では、便宜的に「仙界および道教思想」というテーマにまとめて扱うこととし、詳細な考察は今後の課題としたい。）

テーマ 5 はテーマ 1 と対照的ともいえる内容でありながら、陸游の夢の詩において両者は同程度の割合で現れる。内容的にも特に独自性が高い。

2.2.1 夢の詩全体における各テーマの割合（円グラフ）

これらの 6 つのテーマをもとに夢の詩を分類すると、全体に占める各テーマの割合は、次の円グラフのようになる。

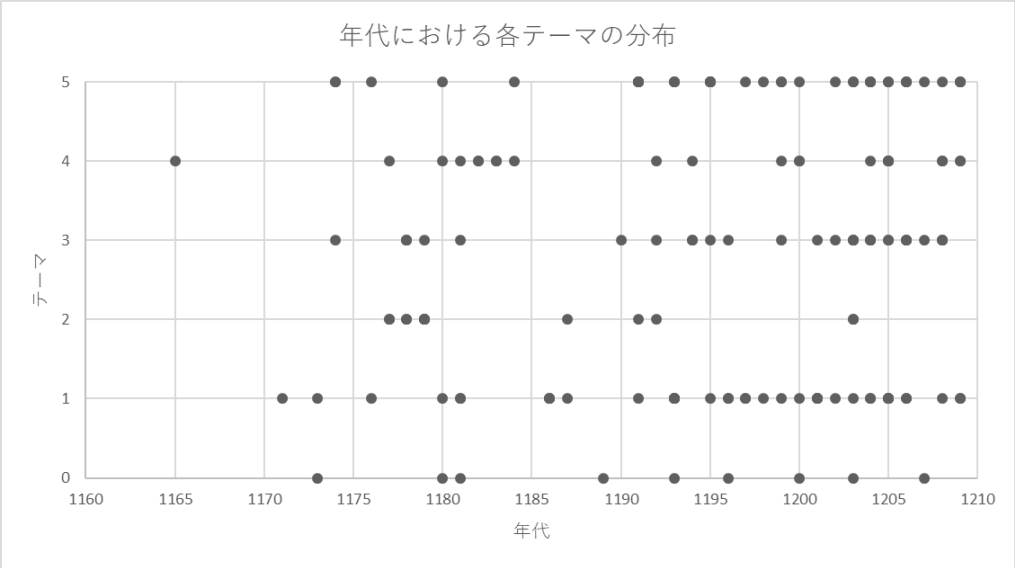


全体的には、夢について総括したテーマ 0 の詩を除くと、各テーマの量にはあまり偏りがないといえる。

[20] 三浦國雄『中国古代養生思想の総合的研究』「文人と養生―陸游の場合―」（平河出版社　1988 年）。

2.2.1 各年代におけるテーマの分布（散布図）

更に、どの年代にどのテーマが表れるのかを散布図で表すと、次のようになる。



詩の一つ一つを細かく見れば、その時々に陸游が置かれた状況に応じて詩が書かれるわけではあるが、この散布図を見る限りでは、年代とテーマとの大きな相関は見いだせず、年代によるテーマの偏りはほとんど見られない。

2.2.2 考察

以上、陸游の夢の詩にどのようなテーマがあるのかを分類し、夢のテーマが豊かな広がりを持っていて、更に年代による偏りがほとんどないことを確認した。

2.3　小結

第 2 章では、まず 2.1 で陸游が「夢」「眠り」をどう捉えていたのかについて考察し、陸游は「夢」「眠り」と自身との距離を冷静に認識していながらも、夢に対して強い結びつきを感じていたということを確認した。また、2.2 では陸游の夢の詩にどのようなテーマがあるのかを分類し、夢のテーマが豊かな広がりを持っていて、年代による偏りがほとんどないことを確認した。

以上のような夢の詩の全体像を踏まえて、第 3 章以降では多岐に渡るテーマの夢の詩を実際に取り上げ、陸游にはなぜ夢の詩が多いのか、各夢の詩がどのような意義を持っていたのか、考察することとする。

第3章 陸游にはなぜ夢の詩が多いのか―結婚における挫折という観点から―

3.1　陸游の結婚における挫折について

先に 1.2.3 で触れたように、陸游は若い頃に二つの大きな挫折を経験した。一つは結婚における挫折であり、もう一つは官途における挫折である。ここではまず前者について概要をまとめたうえで、夢の詩とどのような関りがあるのか考察することとする。

3.2　陸游と唐婉について

まず、陸游の結婚についてであるが、陸游は二十歳のころ、母方の姪にあたる唐婉と結婚した。二人の仲は円満だったが、まもなく陸游の母によって唐婉は離縁されてしまい、唐婉は趙士程という男と再婚し、陸游も二度目の妻をめとることになった。この離縁については、二人の仲があまりにも睦まじかったために、嫁と姑の間がうまくゆかなかったためともいわれる。

ところが、31 歳の春、紹興の近郊にあった沈氏の庭園に遊んだ陸游は、同じくここに遊びに来ていた趙夫婦を偶然見かけることになる。唐婉の方も気付いて夫に告げ、人をやって陸游に酒肴を届けさせた。陸游は傷心のままに、庭園の壁に一片の詞「釵頭鳳」を書きつけて立ち去った。[21]

次に挙げるのがその「釵頭鳳」である。

釵頭鳳（『渭南文集』巻四十九）

紅酥手　黄藤酒	紅酥の手　黄藤の酒
滿城春色宮牆柳	滿城の春色　宮牆の柳
東風惡　歡情薄	東風惡しく　歡情薄し
一懐愁緒	一懐の愁緒
幾年離索	幾年の離索
錯錯錯	錯てり　錯てり　錯てり
春如舊　人空瘦	春は舊の如く　人は空しく瘦せ
淚痕紅浥蛟綃透	淚痕は紅に浥いて蛟綃透る
桃花落　閑池閣	桃花落ち　池閣閑かなり
山盟雖在	山盟は在りと雖も
錦書難託	錦書託し難し
莫莫莫	莫かれ　莫かれ　莫かれ

[21] このエピソードは南宋末の周密が集めた逸話集『斉東野語』による。（一海氏前掲書、p.245。）

（桜色のつややかな腕からもたらされた、黄藤の酒。／山陰の町をおおう春の気配に、禹跡寺の土塀に添った柳の新芽の美しさ。／だが春風の憎らしいこと、恋人との情を深めることはできない。／胸いっぱいの憂い／何年別れて暮らしたことか。／思い返せば何もかも、誤っていた、誤っていた、誤っていた。）
（春は昔のままだけれど、人はただ痩せ細るばかり。／涙のあとはつややかに潤って、うすぎぬに染みとおる。／桃の花は散り、池のふちの高殿は静寂に包まれている。／二人の堅い誓いは今も変わらず残っているのに／もはや便りを交わすすべもない。／ああ、やんぬるかな。）

唐婉はその後まもなく他界する。陸游は晩年に至るまで彼女のことが忘れきれず、沈氏の庭園や、彼女の思い出にまつわる詩を幾篇も残している。

3.3　結婚における挫折と夢の詩

その唐婉の思い出にまつわる詩の一つが、次の 131,132 の夢の詩である。

131　　十二月二日夜夢遊沈氏園亭二首 其一（巻六十五）
（十二月二日夜、夢に沈氏の園亭に遊ぶ。）

路近城南已怕行	路　城南に近づけば　已に行くを怕る
沈家園裏更傷情	沈家の園裏　更に情を傷ましむ
香穿客袖梅花在	香は客袖を穿ちて　梅花在り
綠蘸寺橋春水生	綠は寺橋を蘸して　春水生ず

（路が城南に近づくほどに、足を進めるのが怖くなるというのに／ましてや沈家の園裏では、いっそう心が痛む。／梅の花は咲き誇り、香りが袖に滲みとおって／緑色の雪解け水は、寺院の橋下に満ちわたる。）

132　　十二月二日夜夢遊沈氏園亭二首 其二

城南小陌又逢春	城南の小陌　又た春に逢う
只見梅花不見人	只だ梅花を見るのみにして　人を見ず
玉骨久成泉下土	玉骨　久しく泉下の土と成るも
墨痕猶鎖壁間塵	墨痕　猶お壁間の塵に鎖さる

（城南の小道に、春はまたやって来ても／梅の花を見るだけで、あの人の姿はない。／（唐琬の）玉のような身体は、とっくに泉下の土となってしまったが／庭園の壁面には、私が昔書きつけた詩の筆跡だけが、塵に埋もれていまでも残っている。）

この 2 首は 1205 年、最晩年の 81 歳のころに書かれたものである。陸游にとって、若い頃の結婚の挫折がいかにつらいものであったか、また唐婉への思いがいかに切実なものであったかを感じさせる詩であると言えよう。

3.4　小結

以上、陸游の結婚における挫折と夢の詩との関わりについてまず取り上げ、陸游の夢の詩には、過去の挫折が直結した内容のものもあるということ、また過去を回想することで感傷的になる側面もあるということを確認することができた。これは第 4 章以降で取り上げる各詩にも共通する、陸游の夢の詩の特徴の一つであり、最初の段階で 122,123 の詩を取り上げたことには意義があったと思われる。

また、先に 1.2.3 で挙げた一海氏の言及[22]にもあるように、結婚の挫折によって陸游の純粋な思いと美しい詩が今にまで伝わることになったのもまた事実であるだろう。この点で、本章は陸游の夢の詩の魅力を見出すことに繋がった。

なお、唐婉に関する詩は上に挙げた 2 首の他にも存在するため、陸游の唐婉への思いをより詳しく読み取るには、夢の詩以外の詩についても考察する必要があるだろう。

[22] 一海氏前掲書、p.371。

第4章 陸游にはなぜ夢の詩が多いのか―官途における挫折という観点から―

4.1　夢で「郷里」に帰ることで充実感を得ようとする

4.1.1 夢の詩における「望郷」というテーマについて

先述のように、陸游は官途における挫折（秦檜の不正による科挙及第の阻止、および和平派官僚による度重なる糾弾）により、晩年に郷里の山陰に帰ってくるまでの人生のほとんどを、中央官としてではなく地方官として過ごすことになった。

次に挙げる 52 の詩は 1192 年、66 歳で免職になり帰郷したのちに、赴任の旅に出る夢を見たことで、これまで各地方に転々と赴任してきた自分の人生を振り返って書いた詩である。

52　　夢遊散關渭水之間（巻二十四）
（散關渭水之間に遊ぶを夢む。）

平生望眼怯天涯	平生　望眼　天涯を怯る
客裏何堪度歳華	客裏　何ぞ堪えん　歳華を度るを
但恨征輪無四角	但だ恨む　征輪に四角無きを
不愁歸路有三叉	愁えず　歸路に三叉有るを
驛窗燈闇傳秋柝	驛窗　燈闇く　秋柝を傳う
關樹烟深宿暮鴉	關樹　烟深くして　暮鴉を宿す
叱犢老翁頭似雪	犢を叱する老翁　頭雪に似たり
羨渠生死不離家	羨む　渠の生死　家を離れざるを

（私は常日ごろ天の果てにいて、遠くへ目を馳せることを恐れていた／旅の空でどうしていつまでも年月を過ごすことに耐えられよう。／赴任先へ行く車の車輪に、四角なものがないのが恨めしい（四角なら進まなくて済むのに）／故郷への帰り道なら、三つの別れ路があろうとも心配ではないのだが。／宿場の窓には灯りが暗く、秋の柝を叩く音が伝わり／関所の樹木には煙が深く横たわって、夕暮れの烏が宿っている。／子牛を叱りつけている老人は雪のような白い頭をしており／この老人が生きても死んでも我が家を離れず暮らしてゆく境涯が羨ましく思える。）

この詩では、まず第 1，2 句でこれまで長い間、自分が一生地方を転々として、郷里に帰れずに人生が終わってしまうのではないかと恐れていた気持ちを述べ、第 3，4 句では赴任の旅への気の進まなさと、帰郷の楽しさを対比して述べている。後半の第 5，6 句では赴任の旅路における宿場や関所の寒々しい景色を述べたうえで、第 7，8 句では旅先で見た老人が、一生郷里で穏やかに暮らせることを羨んでいる。

郷里に帰って過ごすことを理想とする傾向は当時の士大夫に共通のものであったと思われるが、陸游の場合は官途での挫折を経験しているため、地方官として各地に赴く人生に終わりが見

えない切実さが感じられる。52 の詩においても、第 3, 4 句は数字を使ったある種の言葉遊びのような、ユーモラスでありながら実感のこもった表現で、帰郷への思いを述べているという特徴がある。

陸游の人生に赴任の旅が付きものであったということは、次の 109 の詩にもよく表れている。

109　夢中賦早行（巻五十五）
（夢中、早行を賦す。）

夜分秉炬治裝齎	夜分 炬を秉りて　裝齎を治め
千里霜風入馬蹄	千里の霜風　馬蹄を入る
擁褐却尋孤驛夢	褐を擁し　却って尋ぬ　孤驛の夢
垂鞭時聽近村雞	鞭を垂れ　時に聽く　近村の雞
荒烟漫漫沉殘月	荒烟　漫漫たり　殘月を沉め
宿莽離離上古堤	宿莽　離離たり　古堤を上る
天色漸分寒更力	天色　漸いに分かつも　寒さ更に力まり
道傍沽酒坼官泥	道傍の沽酒　官泥を坼く

（夜が明けないうちに、かがり火を手に取り、旅の服装と道中に必要なものを準備して／冷たい霜風の吹く千里の遠い道へ馬を進める。／粗末な着物を手で押さえながら、敢えて寂れた宿場を尋ねる夢を見た。／鞭を垂れて行くうちに、ちょうど近村で明け方の鶏が鳴く声がした。／荒涼たる風景が延々と続き、明るさを失った月が沈んでいく。／枯れることのない雑草が密集して生えた古い堤防を上っていく。／空の色が次第に明るくなっていく一方で、寒さは更に厳しくなる。／市で買った酒を道端で飲みながら、地方官赴任の旅の塵を払う。）

この詩は 1203 年、陸游が 79 歳になって致仕を認められる直前に書かれた詩であるが、郷里での生活が長くなったのちのもこのような旅の情景を夢に見るほど、彼にとって赴任の旅とは強い印象を持っていたのである。109 の詩においては特に、夜明け前に出発する旅の寒々しさが、次第に明るくなっていく空と冷たい空気の描写によって際立っており、旅の厳しさと孤独さを強く感じさせる。

このように、陸游は帰郷するまでの大部分を地方官として過ごし、旅の厳しさ、孤独さを、身をもって知っていたのである。その分、陸游にとって郷里とは何物にも代えがたいものであったようで、彼は地方官としての任地を変えるたびに、各地で望郷の夢の詩を書いている。現実では身を落ち着けることのできない郷里を、夢で思うことによって、彼は赴任先で暮らす現実の「不充実」を補おうとしたのではないか。

よって、次項以降はこれらの望郷の詩を、年代順に、書かれた場所ごとに取り上げる。

4.1.2 成都赴任中の望郷

まず挙げる 11,12 の二首は、1177 年 11 月、成都においての作である。陸游は 1170 年に入蜀記を書いて四川へ向かってから、一度は南鄭の幕府に向かい、その後四川の周辺地域を何度か転任したのち、1177 年までを成都で過ごした。この間には、望郷をテーマにした夢の詩はこの二首のみしか書かれていない。

11　　記夢　二首　其一（巻九）
（夢を記す。）

烏巾白紵憶當年	烏巾　白紵　當年を憶う
抵死尋春不自憐	抵死　春を尋ねて　自ら憐れまず
憔悴劍南雙鬢改	劍南に憔悴し　雙鬢改むるも
夢中猶上暗門船	夢中　猶お上る　暗門の船

（いま、隠者の身なりをして昔を懐かしく思いつつも／せわしなく春を求めることで、自らを慰める。／成都に来てから時間が経ち、老いて髪も白くなったが／夢の中では今なお、杭州城西の清波門の周囲で船に乗る。）

12　　記夢　二首　其二（巻九）
（夢を記す。）

團臍霜蟹四腮鱸	團臍　霜蟹　四腮鱸
樽俎芳鮮十載無	樽俎　芳鮮　十載無し
塞月征塵身萬里	塞月　征塵　身は萬里
夢魂也復醉西湖	夢魂　也復　西湖に酔う

（團臍・霜蟹・四腮鱸といった杭州名産の海産物や／酒宴・ご馳走はもう長い間お預けだ。／長いあいだ、杭州からは遠く離れていて、旅先の塵が身に降り積もっているが／夢の中では魂が飛んでいき、今も西湖の上で酒に酔う。）

一首目では、四川に来てから 7 年の月日が経って自分も年老いてしまったことを述べたうえで、二首目では具体的に杭州名産の海産物の名前を挙げて、郷里の食事を懐かしんでいる。食文化が豊かな中国ならではの望郷の詩といえるかもしれない。

このあと 4.2 でも取り上げるように、成都と言えば陸游の人生において最も充実していた時代ではあるが、この詩が書かれたのは、陸游が免職になって放翁を称するようになった一年半後、また友人だった范成大が成都を離れてしまってから半年後という時期である。成都での暮らしも次第に孤独なものとなり、友人たちとの交遊の機会も減ったことで望郷の思いが強まった

ことで、このように郷里を夢に見たのだと考えられる。

4.1.3 建安赴任中の望郷

次に挙げる 17,22 の 2 首は、成都から一度郷里に戻ったのち、1178 年から 2 年間、建安へ赴任した際に書かれた詩である。

17　　夢藤驛二首 其二

又入千山去	又た入る　千山の去
真成萬里行	真に成す　萬里の行
履霜常早駕	霜を履みて　常に駕を早め
秉炬或宵征	炬を秉りて　或いは宵征す
古驛怪藤合	古驛に　怪藤合し
荒陂群雁鳴	荒陂に　群雁鳴く
客中常少睡	客中　常に少睡なり
歸夢若爲成	歸夢　爲めに成るが若し

（今年は成都から山陰、建安へと千の山を越えて赴任したため／まさに万里の旅をしてきたと言える。／霜の張る中、馬を急ぎ走らせ／かがり火を手に、ある日は夜も馬を進めた。／古い駅には奇妙な蔦が絡まり／荒れた山坂には鴈の大群が一斉に鳴く。／旅先では常に十分な睡眠がとれないから／故郷が懐かしくなって、帰郷の夢を見るのだろう。）

この詩は 16,17 の連作のうちの二首目であるが、一首目で旅の道中の不気味さと、郷里を離れて遠い地域に赴任することの憂鬱さを述べたうえで、二首目ではこれまでの長きに渡る旅の苦しさを振り返っている。第 8, 9 句目では、旅先にあって常に睡眠も十分にとれないことが原因で、望郷の夢をよく見るのだろうと自身で推測している。

また、次の 22 の詩は 19,20,21,22 の連作のうちの 4 首目であり、これまでの三首で郷里ののどかな情景と、親しい人々との宴会を描いたうえで、現在の自分の帰郷への思いを、鳥の鳴き声を借りて述べるという独特な内容である。

22　　初秋夢故山覺而有作四首 其四

杜宇真吾交	杜宇　真に吾と交う
勸去恨不速	去るを勸めるも　速やかならざるを恨む
忠告輸肝肺	忠告　肝肺を輸し
厚意均骨肉	厚意　骨肉に均し

陋哉鷓鴣語　　陋なる哉　鷓鴣の語
揣我貧念禄　　我を揣りて　禄を貧念す
竹雞更鄙淺　　竹雞　更に鄙淺
泥淖憂車軸　　泥淖として　車軸を憂う
秋風嚴瀨清　　秋風　嚴瀨の清
春雨戴溪緑　　春雨　戴溪の緑
行矣勿復疑　　行く矣　復た疑う勿れ
照影巾一幅　　照影す　巾一幅

（ホトトギスこそ私と交友するに相応しい。／（ホトトギスの鳴き声は私に）帰郷することを勧めているのに、早く帰れないことが恨めしい。／その忠告の鳴き声（＝不如帰去）は肺肝に／厚意は骨肉に染み入る。／（それに対して）鷓鴣の鳴き声（＝行不得哥哥）は、なんと卑しいのだろう／私の気持ちに反して、赴任先での収入を惜しむのだ。／竹雞は更に卑賤である／（郷里への道は）泥々で、車軸が折れてしまわないかと心配している。／秋風は嚴陵の瀨を清々しく通り抜け／春雨は戴溪を艶やかな緑に彩る。／もう出立すると決めた、だからこれ以上疑わないでくれ／そう思って鏡を見ながら頭巾を被った。）

郷里に帰ろうとする自分の気持ちと、様々な鳥の鳴き声とを結びつけたユーモアを感じさせる詩であるが、これによって陸游の帰郷への思いがより実感を伴って伝わってくる。4.1.1 で取り上げた 52 の詩の具体性とも共通する、陸游の望郷のあり方であると言えるだろう。

4.1.4 厳州赴任中の望郷

次に挙げる 41 の詩は、先ほどの 22 の詩が書かれてから 7 年後の 1186 年冬、別の赴任先である厳州任所において書かれた詩である。

41　　夢歸（巻十九）
（歸するを夢む。）

老去無餘念　　老い去りて　餘念無きも
時時夢弊廬　　時時　弊廬を夢む
細傾新釀酒　　細傾す　新釀酒
盡讀舊藏書　　盡く讀む　舊藏書
雲崦鉏畠粟　　雲崦　畠粟を鉏し
烟畦挽野蔬　　烟畦　野蔬を挽く
從渠造物巧　　渠の造物の巧に從い
賦芋戲群狙　　芋を賦して　群狙に戯ぶる

（老いて邪念（帰郷を望む気持ち）は減ってきたつもりだが／時々、郷里の粗末な家を夢にみる。／新しい醸酒をちびちび飲みながら／古い蔵書を読みつくし／雲のかかった山の間に田んぼを切り開き／畝を歩きながら野蔬を挽く。／荘子の斉物論に従って／（朝三暮四の故事のように）どんぐりを詩に歌って猿の群れをからかうのだ。）

この詩の第 1，2 句の「老いて邪念は減ってきたつもりだが／時々、郷里の粗末な家を夢にみる」という部分からは、今では年老いたため、昔のように強く帰郷を望み、度々郷里を夢に見るということが少なくなってきたことが分かる。それでもこの詩の中では、穏やかで気ままな郷里での日々の様子が、飾らない言葉で描かれており、帰郷して余生を過ごしたいという気持ちが素直に表れている。陸游はこのような夢の中で、現実にはなかなか叶わない郷里での生活に浸ってみたのかもしれない。

4.1.5 臨安赴任中の望郷

次に挙げるのは、1203 年、陸游が 79 歳の時に、一時的に臨安で実録編纂の仕事に携わった時の望郷の詩である。

101　癸亥正月十日夜夢三山竹林中筍出甚盛欣然有作（巻五十二）
（癸亥正月十日夜、三山の竹林中に筍の出ずること甚だ盛んなるを夢み、欣然として作る有り。）

新春身不到家園	新春　身は家園に到らざるも
東崦西村役夢魂	東崦　西村　夢魂を役す
一夜四山雷雨起	一夜　四山に雷雨起こり
滿林無數長龍孫	滿林　無數に龍孫を長ず

（現在は臨安にいて、新春を郷里の家で迎えることはできなかったが／夢魂は家のある西村を訪れた。／一夜のあいだ、周囲の山々に雷雨が降りしきると／翌朝林の中は無数に生えてきた筍で一杯になっていた。）

この詩は夢で郷里を訪れ、一晩のうちに林が筍で一杯になるのを見た、というユーモアを感じさせる詩である。第 1，2 句目にもあるように、陸游は筍の季節である新春を郷里で過ごすことができなかったのを残念に思っていたために、このような夢を見たのである。まさに現実での叶わない願いが、夢の中で実現するという形式であると言える。

4.1.6 考察

以上、3.1 では陸游の夢の詩における「望郷」を扱い、赴任の旅に出ることの多かった陸游が、

郷里で穏やかに過ごしたいという思いをどのように夢の中で補ったのかを詩の内容から読み取った。これにより、陸游が実際には行くことのできない郷里を夢で訪れたり、郷里の人々と夢で会話することによって、郷里を思う気持ちを表現した詩が存在することが分かり、現実の不充実を補うという夢の役割が確認できた。さらには、現実の願いが夢に現れるという現象が、現代の私たちに対してだけでなく、陸游に対しても十分通用するということも分かった。

ただ、「望郷」というテーマは夢の詩でなくても表現し得るテーマである。実際のところ、夢の詩における「望郷」の詩は、夢で郷里に帰るという形式よりは、むしろ孤独な赴任の旅の夢を見た後に、目覚めて故郷を思うという形式が多い。夢の詩における「望郷」に注目することで、陸游の望郷の詩における、故郷に帰ることを切に願いながらも、どこかユーモアを忘れない詩風がよく伝わってきたが、陸游と郷里との関係性について深く考えるには、夢の詩にこだわらず、もっと広く望郷の詩を取り上げる必要があるだろう。

4.2　夢で「過去」（主に四川にいた時代）に戻ることで充実感を得ようとする

4.2.1 夢の詩における「過去の回想」というテーマについて

夢の詩において、陸游が回想する「過去」とは、ほとんどの場合、四川にいたころの事を指している。例えば次の 144 の詩が典型的である。

144　　夢蜀（巻七十六）
（蜀を夢む。）

自計前生定蜀人	自ら計る　前生　定めし蜀人なるかと
錦官來往九經春	錦官に來往す　九經の春
堆盤丙穴魚腴美	盤を堆す　丙穴　魚腴の美
下箸峨眉栮脯珍	箸を下す　峨眉　栮脯の珍
聯騎雋遊非復昔	聯騎の雋遊　昔を復するに非ず
數編殘稿尚如新	數編の殘稿　尚お新たなるが如し
最憐栩栩西窗夢	最も憐れむ　栩栩たり　西窗の夢
路入青衣不問津	青衣にて路に入り　津を問わざるを

（自分で推測する、前世は蜀の人だったのではないかと。／九度の春（乾道六年冬に冀州に到着してから、淳熙五年に成都を去るまでの九年間）を錦官城（成都）で過ごしたが／（成都にいたころは）丙穴（四川省城口県の南）の肥えた美しい魚を盆に乗せ／峨眉山でとれた珍しい木耳に箸を付けたものだ。／馬を連ねて進む友人は、昔のようではなく／書きかけの詩の原稿は、今なお新しく書かれたもののようだ。／悲しむべきは、うっとりとひたっていたのは、西の窓辺の夢にすぎず／道を歩いていても、青衣の下役人から桃源郷に入る津（道のり）を問われもしないことだ）

第 1 句に「自分で推測する、前世は蜀の人だったのではないかと」とあるように、自分は前世、蜀の人であったのではないかと疑うくらい、陸游には四川という地域、そこでの生活がよく合っていたようである。かつて、陸游は 1172 年に一度南鄭の幕府に招かれ、喜び勇んで参加するものの幕府は一年もしないうちに解散してしまうという悲劇を経て、一時期は成都で放埒な生活を送っていた。しかしながら、范成大をはじめとする良き友人に多く出会ったことにより、陸游にとって成都での生活はずっと後になってからも繰り返し思い返されるような、「充実した過去」となったのである。

先述のように、陸游は官途において不遇であり、現実には不充実であることが多かったため、夢の中ではこの四川での生活を懐かしんで回想した詩が多くある。よって 4.2.2 では、夢の詩における「過去の回想」というテーマのほとんどを占める、四川にいた時代を回想した詩を取り上げる。その際、四川という土地・生活を回想したものと、友人を回想したものの二つに分類し、彼が四川を夢で回想することでどのように現実の不充実を補ったのか、考察することとする。

4.2.2 四川という土地・生活の回想

まず取り上げるのは、1178 年、成都を離れた直後に郷里の山陰で書かれた 14,15 の詩である。

14　夢至成都悵然有作　二首　其一（巻十）
（夢に成都に至り悵然として作る有り。）

春風小陌錦城西	春風の小陌　錦城の西
翠箔珠簾客意迷	翠箔の珠簾　客意迷う
下盡牙籌閑縱博	牙籌を下し盡くして　閑かに博を縱にし
刻殘畫燭戲分題	畫燭を刻み殘いて　戯れに題を分かつ
紫氈毹暖帳中醉	紫氈毹　暖くして帳中に醉い
紅叱撥驕花外嘶	紅叱撥　驕りて花外に嘶く
孤夢凄凉身萬里	孤夢　凄凉にして身は萬里
令人憎殺五更雞	人をして五更の雞を憎殺せしむ

（春風が吹き抜ける、錦城西の路地／翡翠や真珠の簾を掛けた店の間を渡り歩く。／牙籌を出し尽くして漫然と博打を楽しみ／飾りのある蝋燭に刻みを入れて気まぐれに分題し詩を作る。／私は紫の絨毯が敷かれた暖かい帳の中に酔い／外に繋いだ駿馬は花の向こうに嘶く。／一人夢から覚めると、成都からは万里も離れているという現実に落胆し／五更に鳴いた鶏が憎らしくて仕方がない。）

15　夢至成都悵然有作二首 其二

宦途元不羨飛騰　　宦途　元より飛騰を羨まず
錦里豪華壓五陵　　錦里　豪華にして　五陵を壓す
紅袖引行遊玉局　　紅袖を引きて行き　玉局に遊び
華燈圍坐醉金繩　　華燈を圍みて坐し　金繩に酔う
階前汗血洮河馬　　階前　汗血　洮河の馬
架上霜毛海國鷹　　架上　霜毛　海國の鷹
世事轉頭誰料得　　世事　頭を轉じて　誰か料るを得んや
一官南去冷如冰　　一官　南去して　冷たること冰の如きを

（元々、官途での栄達など望んではいないのだ。／成都の華やかさは皇帝の五陵をも圧倒するほどだった。／妓女を連れ歩いて賭博にふけり／華やかな灯りを囲んで座り、道観の一室に酔った。／堂に登る階段の前には洮河産の汗血馬が繋がれ／梁の上には海國産の真っ白な鷹がとまっていたものだ。／世の中のことは、頭をひねったところでだれが予想できるというのだろう／今私が成都を去り東の故郷に帰ってきて、寒々と氷の如く老いてゆくことになるなんて。）

14 の詩は本論文の冒頭 1.1.1 にも引用したが、夢の中の成都のきらびやかな街の様子と、目覚めてからの孤独が鮮やかに対比された詩であり、夢を詩で描く際の特徴がよく表れている。15 の詩は 2 首目に当たり、第 2 句から第 6 句までは 14 の詩の内容を受け継いで、成都の様子をきらびやかに描いている。

ここで注目するべきは、第 1 句目の「元々、官途での栄達など望んではいないのだ」、及び第 8 句の「世の中のことは、頭をひねったところでだれが予想できるというのだろう」という部分であろう。「世事」についてどうして頭を悩ませる必要があるだろう（深く考える必要はない）という陸游の開けっ広げで、どこか問題を投げ出したような考え方は、他の夢の詩にも度々見られる。現実の世界の不充実、満たされない境遇を、夢の詩の中では放り投げて考えないようにしようという傾向は、夢と現実の差が大きければ大きいほど顕著であるように思われる。

次の 30 の詩には陸游が親しんだ成都の情景が描かれており、夢の中の春ののどかさと、現実の眠りの心地よさがリンクして、実にゆったりと穏やかな詩に感じられる。

30　　夢中作（巻十四）
（夢中の作。）

路平沙軟淨無泥　　路平　沙軟　淨なりて泥無く
香草丰茸沒馬蹄　　香草　丰茸　馬蹄を沒す
擣紙聲中春日晚　　紙を聲中に擣りて　春日晚し
怳然重到浣花溪　　怳然として　重ねて浣花溪に到る

（道の砂はなめらかで、きれいに掃除されて泥もなく／香草が深く茂って馬の蹄を埋めている。

／馬のひづめの音を聞きながら詩を書くために紙を取り、春の日がのんびりと暮れていくなか／ぼんやりと、またもや浣花溪に辿り着いてしまったようだ。）

第 4 句目の「道を意識せずともまたもや浣花溪に辿り着いてしまった」という部分からは、陸游がいかに成都の生活に馴染んでいたか、またいかに成都という土地に愛着を持っていたかが伝わってくる。

この詩は 1181 年に故郷の山陰で書かれた詩であるが、この年は陸游の住む土地も大規模な飢饉に見舞われ、陸游は友人で地方官であった朱熹に救済を期待するも、なかなかそれが叶わずに、死者も多数発生するほどの苦しい状況にあった。そのような状況の中でも、あるいはそのような状況だからこそ、陸游は夢の中で穏やかな成都の地を訪れたのかもしれない。

次の 84 の詩は、先の 30 の詩における静かで落ち着いた成都の様子とは変わり、夢の中での賑やかな宴会の様子が印象的である。

84　　夢蜀（巻四十一）
（蜀を夢む。）

夢飲成都好事家	夢に飲す　成都　好事の家
新妝執樂雁行斜	新妝　執樂　雁行斜めなり
赭肩郫縣千筒酒	赭肩　郫縣　千筒の酒
照眼彭州百馱花	照眼　彭州　百馱の花
醉帽傾敧歌未闋	醉帽　傾敧す　歌の未だ闋まざるを
罰觥瀲灩笑方譁	罰觥　瀲灩たり　笑方に譁し
霜鐘喚覺晨窗白	霜鐘　喚きて覺む　晨窗白し
自怪無端一念差	自ら怪しむ　無端にして　一念差うを

（夢で、成都の趣味人の家にて宴会に参加した。／装いを改めた屋内で音楽を演奏し、屋外では雁が悠々と斜めに飛んでいる。／郫縣（成都西北）の、竹で醸造した郫筒の酒を千本も担いで肩を赤くし／彭州（成都西北）の輝くように鮮やかな花を百も荷に積んでいる。／酔って頭巾をあみだに被り、繰り返し歌われて終わることのない歌声に耳を傾け／なみなみと注がれた罰杯を飲むと、笑い声が巻き起こる。／鋭い鐘の音が鳴って夢から覚めると、窓の外は夜が明けかかって白くなっていた。／図らずも現実に戻ってしまったことが不思議でならない。）

詩が書かれたのは 1199 年、陸游が正式に致仕を認められたころであり、成都を離れてから実に 20 年の月日がたっているが、第 5，6 句目にも「酔って頭巾をあみだに被り、繰り返し歌われて終わることのない歌声に耳を傾け／なみなみと注がれた罰杯を飲むと、笑い声が巻き起こる」とあり、描写が実に生き生きとしている。成都にいたころは、実際にこの詩のように友人の家での酒宴に呼ばれることもよくあったのだろうと思わせる。

さらに、次の 135,136,138,142 の 4 首は、1206 年から 1207 年にかけて、陸游が 82 歳のころに連続して書かれた詩であり、全て四川を回想したものである。

135　自春來數夢至閬中蒼溪驛五月十四日又夢作兩絶句記之 其一（巻六十七）
（春來たりて自り、數夢にて閬中蒼溪驛に至る。五月十四日、又た夢み、兩絶句を作りて之を記す。）

騎驢夜到蒼溪驛　騎驢　夜到る　蒼溪の驛
正是猿啼月落時　正に是れ　猿啼く　月落の時
三十五年如電掣　三十五年　電掣の如し
敗牆誰護舊題詩　牆を敗り　誰か護らん　舊題の詩

（驢馬に乗り、夜、蒼溪驛（蜀の北部・閬州）に行きついたのは／ちょうど猿が鳴き、月が落ちた明け方の時間帯だった。／（蜀（王炎の幕府）を離れてからの）三十五年の時間は、電光が閃くほどの一瞬の間に過ぎ去ってしまった／（時間の）境界を取り払って、誰が昔書いた詩を大切にしようというのか。）

136　自春來數夢至閬中蒼溪驛五月十四日又夢作兩絶句記之 其二

亭皋敗葉先秋霣　亭皋の敗葉　秋に先んじて霣ち
城上驚烏半夜啼　城上の驚烏　夜半ばにして啼く
自笑遠遊心未已　自ら笑う　遠遊して　心未だ已まず
年來頻夢到蒼溪　年來　頻きりに夢む　蒼溪に至るを

（水辺の平地では、まだ秋にならないうちに枯れ葉が落ち／城壁の上では、驚いた烏が夜中に鳴く。／自分で自分を笑う、いまだに蜀にいたころが忘れられず魂が遠くへ飛んでいき／近頃頻りに蒼溪驛を夢みる自分を。）

138　舟中記夢（巻六十八）
（舟中、夢を記す。）

石帆山下一漁翁　石帆山の下　一漁翁
風雨蕭蕭卧短篷　風雨　蕭蕭たり　短篷に臥す
幽夢覺時還自笑　幽夢より覺める時　還た自ら笑う
閬州城北看蠶叢　閬州の城北　蠶叢を看るを

（石帆山（紹興東南の山）の下で船を浮かべる、漁翁のような自分は／外に風雨の音を聞きなが

ら、小舟の上で横になる。／愁いを帯びた夢から覚め、現実に戻ってきて、また自分で自分を笑う／閬州の城北、蜀の地を何度も夢にみることを。）

142　夢中作二首 其二

平羌江上月	平羌江上の月
伴我故山來	我を伴ないて　故山より來たる
幽興依然在	幽興　依然として在り
浮雲正爾開	浮雲　正に爾　開かんとす
清秋纔幾日	清秋　纔かに幾日にして
黄葉已成堆	黄葉　已に堆を成す
未醉江樓酒	未だ　江樓の酒に醉わずして
扁舟可得回	扁舟　回るを得るべけんや？

（平羌江（四川省の青衣江）の上にかかる月に／私は伴われて、郷里の山から（四川へと）（夢で）やって来た。／山河の深い趣は今も変わらずそこにあって／空の雲はちょうど開けて明るくなろうとしている。／清々しい秋になってからまだ数日しか経っていないというのに／黄葉した葉が地面に積もっている。／未だ河辺の酒楼で十分酔わないうちに／舟はどうして帰れるものか。）

ここで特徴的なのは、136 の詩においては第 3，4 句目に「自分で自分を笑う、いまだに蜀にいたころが忘れられず魂が遠くへ飛んでいき／近頃頻りに蒼溪驛を夢みる自分を」とあり、138 の詩では「愁いを帯びた夢から覚め、現実に戻ってきて、また自分で自分を笑う／閬州の城北、蜀の地を何度も夢にみることを」とあるように、「自笑」の要素が登場していることである。四川を離れてから 20 年以上の月日が経っても、なお若い頃と変わらずに当時を夢に見る自分の姿がどこか虚しく思えて、このような自嘲的な表現がされたのかもしれない。

この 4 首においては夢の中での情景も、これまでの詩にあったような華やかで暖かなものから、一人でいる静けさが感じられるものに変化している。これらの詩と 4.2.1 の冒頭に挙げた 144 の詩から、陸游は最晩年に至るまで、四川での充実した生活を繰り返し夢で思い返しては、現実の不充実を補っていたことが明らかであるが、詩の内容には、次第に「老い」や「孤独」の要素が加わり、夢を見る自分を第 3 者的に捉えるけいこが強まったことが分かる。

4.2.3 四川時代の友人（故人）との再会

次に取り上げるのは、四川についての回想の夢の中でも、「友人（故人）」を回想した詩である。先述のように、陸游は四川（特に成都）での生活の中で良き友人に恵まれたのだが、互いが別の赴任先へ旅立つことは避けられず、再会の見込みもなく別れることがよくあった。しかも、陸游は 85 歳という当時にしてはかなりの長寿を保ったため、周囲の友人は次々と先に亡くなってし

まい、晩年は同年代の友人もおらず、孤独であったと考えられる。

このようなことから、陸游は晩年に至るまで、夢の中で大勢の人物と交遊することになったのだが[23]、四川で出会った友人と夢で再会する詩は、情景描写や会話が特に生き生きとしている。

例えば次の 5 の詩がある。

5　　記夢（巻五）
（夢を記す。）

夢泛扁舟禹廟前	夢に扁舟を泛ぶ　禹廟の前
中流拂面風冷然	流れに中りて面を拂うに　風冷然たり
樓臺縹緲知幾疊	樓臺　縹緲たり　幾疊かを知らん
雲物點綴多餘妍	雲物　點綴たり　多く妍を餘す
蓮房芡觜采無主	蓮房　芡觜の采　主無く
漁歌菱唱聲滿川	漁歌　菱唱の聲　川に満つ
夢中了了知是夢	夢中　了了として是を夢と知る
却恐燕語來驚眠	却って恐る　燕語の來たりて眠を驚かすを
弄橈顧謂共載客	橈を弄し　顧みて共載の客に謂う
乖離不記經幾年	乖離してより經つること　幾年かを記えず
即今相逢兩幻質	即ち今　兩幻質に相い逢うも
轉盼變滅如飛烟	轉盼　變滅たりて　飛烟の如しと
斯言未竟客大笑	斯言　未だ竟わらずして　客大笑す
人生寓世豈獨堅	人生　寓世　豈に獨りとして堅ならんや
元章嘉叟君所見	元章　嘉叟　君の見る所は
一別丹旐俱翩翩	一たび　丹旐　俱翩翩たるに別るるなり
君知夢覺本無異	君知らん　夢より覺めて　本と異なる無きを
勿爲畫餅流饞涎	畫餅が爲に饞涎を流す勿かれと
我慚俛首夢亦斷	我慚じて首を俛するに　夢亦た斷す
尚覺細浪鳴船舷	尚お覺めて　細浪　船舷に鳴る

（夢で禹廟の前に小舟を浮かべ／水の流れに逆らって進むと、顔に当たる風が冷たい／楼台の様子が霞んで見え、どのくらいの高さなのか分からない。／景色は転々と連なり、余りある美しさを備えている。／蓮のつぼみやケシ／漁歌と菱の実を採る歌声が川に満ちている。／夢の中、明らかにこれが夢であると認識し、燕の鳴き声に目覚めはしないかと心配になった。／舟を漕ぎながら、同乗の友人を振り返って言った／「あなた方と別れてから何年が経ったか定かではありませんが／今二人の幻と再会したところ／その姿は流動的で点滅して、まるで煙のようなもの

[23] 客人との交遊、新たな人物との出会いについては 4.3 で詳しく取り上げる。

ですね」と。／私の言葉が終わらないうちに二人は大笑し／「人生とは、この世に仮住まいしているようなものだから、一人として確実な姿を持った人はいないのだ。／今、君が見ている元章・嘉叟の我々二人は／一度、葬儀の旗が翻る中に別れたものである。／君は、夢から覚めれば現実は何ら変わっていないということを知らないわけではあるまい。／絵に描いた餅に涎を垂らしていてはいけないよ」と。／私が恥ずかしく思ってうつむくと、夢は途絶えてしまったが／目覚めてなお、微かな波が船べりに当たって音を立てるのが聞こえている。）

この詩は、すでに亡くなった友人らの幽霊と夢の中で船に同乗し、陸游と会話をする場面を描いている。夢での友人の姿を不思議に思いつつも喜ぶ陸游の姿と、夢に現を抜かす彼に対して冷静な忠告をする友人の姿が、会話の場面に対照的で興味深い。これは夢の中の世界を描いた詩でありながらも、現実にもきっとこのような気の置けない関係性の友人たちであったのだろうと思わせるような生き生きとした詩である。

また、次の 13，66 の詩は、現実にあった友人との別れの場面を夢に見たという内容であり、情景描写も非常に写実的である。

13　夜夢與宇文子友譚德稱會山寺若餞予行者明日黎明得子友書感嘆久之乃作此詩（巻十）
（夜、宇文子友、譚德稱と山寺に會すを夢みるに、予の行を餞けするが若し。明日黎明、子友の書を得、感嘆すること之を久しくして、乃ち此詩を作る。）

夜夢集山寺	夜　山寺に集うを夢む
二三佳友生	二三の　佳き友生
相顧慘不樂	相顧みれば　慘にして樂しまず
若有千里行	千里行　有るが若し
在門僕整駕	門に在りては　僕　駕を整え
臨道騅嘶鳴	道に臨みては　騅　嘶鳴す
我友顧謂我	我友　顧みて我に謂う
天寒戒晨征	天寒ければ　晨征を戒めよ
遲速要當到	遲速は　當に到るを要す
徐驅勿貪程	徐驅して　程を貪る勿かれと
丁寧及藥餌	丁寧すること　藥餌に及び
依依有餘情	依依として　餘情有り
鄰鐘忽驚覺	鄰鐘　忽として驚きて覺み
鴉翻窗欲明	鴉翻りて　窗明けんと欲す
作詩謝我友	詩を作りて　我友に謝さん
有使頻寄聲	使の　頻りに聲を寄する有り

（夜、夢で山寺に集まり／二、三の成都の友人と会ったものの／お互いの顔を眺めると寂しさが

こみあげて心から楽しめず／この先千里の道のりをいくようだった。／門のそばでは既に僕が出発の用意を整え、道の傍らでは馬が待ちかねて嘶いている。／友人が私に向き直って言う／「寒い日は早朝の出発によく気をつけなさい／早く行こうが遅く行こうがきっと辿り着くだろうから／ゆっくり馬を走らせて、無理に道を急いではいけないよ」と。／薬や食べ物のことに至るまで懇ろに言い聞かせ／いつくしんで、いつまでも名残は尽きなかった。／不意に近くで鐘が鳴り、驚いて目が覚めると／カラスが飛んで、窓の外は明るくなろうとしていた。／詩を作って子友に感謝を伝えよう／まめに使いをやって手紙を寄せてくれることに。）

66　夢范參政（巻三十）
（范参政を夢む。）

夢中不知何歳月	夢中　歳月の何たるかを知らず
長亭慘淡天飛雪	長亭にて　慘淡たり　天雪を飛ばす
酒肉如山鼓吹喧	酒肉　山の如く　鼓吹喧しきも
車馬結束有行色	車馬　結束して　行色有り
我起持公不得語	我起き　公に持するも　語を得ず
但道不料今遽別	但だ道うのみ　今遽かに別るを料らずと
平生故人端有幾	平生　故人　端なること幾か有るも
長號頓足泪迸血	長號　頓足して　泪は血を迸らす
生存相別尚如此	生存して　相別るるに　尚お此の如くあらば
何況一旦泉壤隔	何況や　一旦　泉壤に隔たるを
欲懐雞黍病爲重	雞黍を懐わんと欲して　病重きを爲し
千里關河阻臨穴	千里　關河　臨穴を阻む
速死從公尚何憾	速死　公に從うに　尚お何をか憾まん
眼中寧復見此傑	眼中　寧ろ復す　此傑を見るを
青燈耿耿山雨寒	青燈　耿耿たり　山雨寒し
援筆詩成心欲裂	筆を援り　詩成りて　心裂けんと欲す

（夢の中では歳月など物ともせずに／今も（かつて范参政と別れた）宿場の、悲愴で物寂しく雪の降る様子を夢にみた。／宿場の中では酒や肉のごちそうが山のように積まれ、賑やかに音楽が演奏されているが／外では車馬が整列して、静かに出立を待っている。／私は范参政の傍に立ち、手を取ったが何も言うべき言葉が見つからずに／ただ「こんなに急に別れるなどと思いもしませんでした」と繰り返すのみだった。／范参政は日頃から度をわきまえて落ち着いた人柄だったが／この時ばかりは別れを惜しんで足を進めることができず、血の涙を流された。／生きて別れることでさえ、これほど辛いものであったからには／あの世とこの世とで別れるのは、どれほどの辛いものか。／生前の厚い情誼を思ってはいよいよ心は苦しく／故人の墓までは千里の道のりがあり、関所や河に隔てられている。／范参政の後に続いて早く死ねるなら、何も恨むことはない／目の前にまたこの英傑を見ることができるのだから。／（夢から覚めると）青い読書灯

の光が細々と寂しげに揺れ、周囲の山には冷たい雨が降っている。／筆を取ってこの詩を書きあげ、心が張り裂けんばかりだ。）

どちらも別れの場面ではあるが、13 の詩では、第 11，12 句にも「薬や食べ物のことに至るまで懇ろに言い聞かせ／いつくしんで、いつまでも名残は尽きなかった」とあるように、旅立とうとする陸游を送りだす友人たちの親身なやさしさが感じられるのに対し、66 の詩では最後の句も「筆を取ってこの詩を書きあげ、心が張り裂けんばかりだ」と締めくくられており、成都での良き友人であった范成大との別れの切実さが身に迫るようである。

実際、13 の詩は成都から離れて日も浅いうちに書かれた詩で、さらに夢から覚めた後、夢で会った子友から手紙が届いたというまるで正夢のような喜ばしい驚きもあるが、66 の詩は陸游が成都を離れてから既に 15 年の月日が経ってから書かれている。登場する范成大は既に亡くなっているため、このように切実な別れの場面を夢に見たのだろう。

ちなみに、この 66 の詩の 1 年後には、次の 67 の短い詩が書かれている。譚徳稱は 13 の詩にも登場した友人である。

67　正月十一日夜夢與亡友譚徳稱相遇於成都小東門外既覺慨然有作（巻三十一）
（正月十一日夜、亡友譚徳稱と成都小東門外に相遇するを夢み、既に覺めて慨然として作る有り。）

當年與子別江干	當年 子と　江干に別れ
漸老心知後會難	漸に老い　心に知る　後に會うことの難きを
豈料今宵清夢裏	豈に料らずや　今宵　清夢の裏
東門交轡說春寒	東門　轡を交え　春寒を說うを

（昔、あなたと川岸に別れてから／次第に年を取って、もう再会することは難しいだろうと心の中では分かっていましたが／まさか今宵、清々しい夢の中で／成都の東門で馬を並べ、春の寒さについて話すなんて（思いもよらない喜びでした。））

67 の詩においては「豈に料らずや　今宵　清夢の裏」とあり、友人と再会した夢の清々しさがよく伝わってくる。

四川で出会った友人を夢に見た詩をここまで取り上げたが、どの詩にも友人との再会の場面が丁寧に、また飾らない言葉で生き生きと描かれており、陸游が友人を大切に思う気持ちがよく表れているように思う。

4.2.4 考察

以上、陸游の夢の詩における「過去」の回想というテーマを、特に充実していたと考えられる

四川時代の回想に焦点を当てて取り上げた。4.2.2 では四川という土地・生活を回想した詩を、4.2.3 では四川で出会った友人を回想した詩をそれぞれ挙げ、四川を離れてからの陸游にとって、これらの夢がどのような意義を持ったかを考察したが、総じて言えるのは、陸游が当時の思い出を非常に大切にしていたということである。四川での思い出は、現実の不充実を補うことに大きな役割を果たしていたと考えられる。

また、3.2.3 では四川で出会った友人を夢に見たものを取り上げたが、この他にも別の地で出会った友人と夢で再会するという詩もいくつかある。これらの詩も、同じように、しばし現実の孤独を忘れさせてくれる役割があったに違いない。

4.3　夢で「人と交遊」することで充実感を得ようとする

4.3.1 夢の詩における「交遊」というテーマについて

陸游は 85 歳という当時にしてはかなりの長寿を保ち、周囲の友人は次々と先に亡くなってしまったため、晩年は同年代の友人もおらず、孤独であったと考えられる。このため、陸游は客人たちや、新たな人物との出会いを頻繁に夢で見ることにより、現実の孤独さを補った傾向がある。

よって、まず 4.3.2 では客人たちとの「集い」の場面、酒宴や談笑の様子に主題が置かれた詩を、次に 4.3.3 では現実には会ったことのない人物との「出会い」そのものに主題が置かれている詩を挙げて、夢の詩において陸游がどのような交遊をしたのかを考察することとする。

4.3.2 客人との集い

まず、次の 54 の詩に注目する。

54　夢與數客劇飲或請賦詩予已大醉縱筆書一絶覺而録之（巻二十六）
（數客と劇飲するを夢む。或るひと詩を賦するを請うに、予已に大醉し、筆を縱にして一絶を書す。覺めて之を録る。）

高談雄辯憑陵酒	高談　雄辯　酒に憑陵す
豪竹哀絲蹴蹋春	豪竹　哀絲　春を蹋蹴す
占斷名園排日醉	名園を占斷し　日を排して醉い
不教虚作太平人	虚しく太平の人と作らしめず

（盛大に談笑し、弁舌豊かに論じながら酒の勢いに任せる。／勢いよく伸びた竹と、哀愁を帯びた琴の音が、繊細な春の空気を凌駕する。／素晴らしい庭園を客と共に占領し、際限もなく酔い明かして／空しく太平の時代の人間になどなるものか。）

この詩は1192年、郷里の山陰に落ち着いて2年ほどが経った68歳の時に書かれた詩である。他の夢の詩においても、登場する「客」が具体的に誰であると書かれていないことが多いが、この 54 の詩の場合も、「客」が実際に陸游と交際のあった友人たちのことなのか、もしくは夢の中でのみ現れた人物なのかは定かではない。しかしいずれにしろ、庭園を占領した賑やかな宴席で酒を飲み明かす様子が生き生きと伝わってくる詩である。題の「予已に大醉し、筆を縱にして一絶を書す」という部分からも、陸游が酒宴をことに好み、夢の中では、その場の勢いに任せて流れるように、気分良くこの詩を書きあげたことがよく分かる。

最後の「虚しく太平の人と作らしめず」という句は解釈が難しいが、「単に静かな世の中でただ単調な日々を過ごすのではなく、時にはこのような宴で際限なく客と飲み明かすのも良いではないか」という意味にとっておきたい。先述のように、陸游は官途では不遇であったが、そのようなことにばかり拘らず、開き直って人生をのびのびと楽しんでやろうという気概のようなものが感じられる句である。

陸游の夢の詩には、酒宴に限らずとも、上の 54 の詩のように客人との集いの場面が描かれたものがいくつもある。以下、このテーマによく適合する詩を 3 首挙げる。

まず、1 の詩は陸游がまだ隆興にいたころ、41 歳という比較的若い時期に書かれた詩である。

1　　夜夢従數客雨中載酒出遊山川城闕極雄麗云長安也因與客馬上分韵作詩得遊字（巻一）

（夜夢、數客に従いて雨中に酒を載き、山川に出遊す。城闕極めて雄麗、云わく長安也と。因りて客と馬上に分韵して詩を作り、遊字を得る。）

有酒不謀州	酒有りて　州を謀らず
能詩自勝侯	詩を能くして　自ずから侯に勝る
但須繩繫日	但だ須からく　繩もて日を繫ぎ
安用地埋憂	安んぞ用て　地に憂いを埋めん
射雉侵星出	雉を射るに　星を侵して出で
看花秉燭遊	花を看るに　燭を秉りて遊ぶ
殘春杜陵雨	殘春　杜陵の雨
不恨濕貂裘	恨まず　貂裘の濕たるを

（酒を飲んで官の仕事を忘れ／詩を作って楽しめば、それだけで高官の位を得るより勝っている。／ただ太陽を縄で繫ぎ止め、昇らせないようにさえしておけば／憂いなどもはや地に埋めるまでもない。／星空のもとに雉狩りをし／蝋燭を持って花々を眺める。／残春の杜陵の古城に雨が降っていようと／毛皮の服が濡れるのを恨んだりはしない。）

この 1 の詩は、夢の中で数客と夜の古城を散策し、馬上に分題して「遊」の字を得て作った詩を目覚めてから書き記したという詩であり、陸游が夢の世界での出来事を、ほとんど現実に体験

したことのように感じていたことが分かる。夢の場面が夜であることも独特であり、他の夢の詩にはあまり見られない。

特に第 1，2 句目の「酒を飲んで官の仕事を忘れ／詩を作って楽しめば、それだけで高官の位を得るより勝っている」という部分は、自身の官途での挫折について、開き直って肯定的に捉えているようにも思える。第 3 句目以降も夜の清々しさや、客人たちとの散策の喜ばしさが描かれ、雨に濡れるのも気にならないという句で締めくくられている。客人たちとの会話文はないながらも、全体を通して、夢における爽やかな交遊の楽しさが感じられる詩である。

また、次の 33 の詩は 1 の詩が書かれたころから 20 年近くのち、郷里の山陰で書かれた詩である。

33　　夢宴客大樓上命筆作詩既覺續成之（巻十四）
（宴客の大樓の上で詩を筆作を命ずるを夢み、既に覺みて之を續成す。）

表裏江山亦樂哉	表裏の江山　亦た樂しき哉
華纓滿座敵鄒枚	華纓　座に満ちて　鄒枚に敵う
歌從郢客樓中聽	歌　郢客樓の中從り聽こえ
獵向樊姬墓上回	獵　樊姬墓の上に向かいて回る
梅蘂香清篸寶髻	梅蘂香　清なりて　寶髻を篸し
熊蹯味美按新醅	熊蹯味　美なりて　新醅を按ず
眼邊歷歷興亡事	眼邊　歷歷たり　興亡の事
欲賦章華恐過哀	章華を賦さんと欲して　哀に過ぐるを恐る

（周囲を江山の景色に囲まれてすばらしいものだ／飾りのある冠紐をした人々が集まり、（才弁に富む）鄒陽・枚乗にも匹敵するほどだ。／郢客樓の中から歌声が聞こえ／樊姬墓の上には笛の音がめぐる。／梅花の香りが清々しく、賓客の髻に絡みつき／獣の肉は美味で、濁り酒のあてにぴったりだ。／眼の前で絶え間なく興亡の歴史が繰り返されるはかなさに思いを馳せながら／楚の章華台のことを詩に書こうと思ったものの、哀切極まるものになることを恐れた。）

この詩では、登場する客人に対して「飾りのある冠紐」「賓」という言葉が使われているほか、題においても陸游に対して「筆作を命ず」とあることから、陸游よりも目上の客であることをうかがわせる。詩の内容も、音楽や香りの形容が高貴な雰囲気を作っており、これまでの 2 首における酒宴とはまた一味違った趣がある。このような宴席の場が現実の経験にもあったとすれば、どのような時期にあったものなのか定かではないが、夢における集いにおいても幅広い客人の層が存在することが読み取れる。

さらに、次の 37 の作は 33 の作の更に 2 年後に書かれている。

37　　十月四日夜記夢（巻十七）

（十月四日夜、夢を記す。）

四客聯轡来	四客　轡を聯ねて来たるも
我醉久不知	我醉いて　久しく知らず
倒衣出迎客	倒衣　客を出迎え
愧謝前致辭	愧謝す　前致の辭
客意極疏豁	客意　疏豁を極め
大笑軒鬚眉	大笑して　鬚眉を軒げる
禮豈爲我設	禮　豈に我が爲に設く
度外以相期	度の外るるに　以て相期す
衮衮吐雄辯	衮衮と　雄辯を吐き
泠泠誦新詩	泠泠と　新詩を誦す
共言攜酒壺	言を共にして　酒壺を攜え
掃地臨前墀	地を掃きて　前墀に臨む
意氣相顧喜	意氣　相顧して喜び
忽如少年時	忽ち　少年時の如し
老雞不解事	老雞　事を解さず
喚覺空嗟咨	喚くに覺め　空しく嗟咨す
涉世四十年	涉世　四十年
賢雋常追隨	賢雋　常に追隨するも
爾来風俗壞	爾来　風俗壞れ
動脚墮險巇	脚を動しては　險巇より墮つ
森然義府刀	森然たり　義府の刀
誰爲叔度陂	誰か爲さん　叔度の陂
起作四客篇	起きて作す　四客の篇
捕影吾其癡	影を捕らえんとするは　吾其れ癡かなり

（四人の客が馬を並べて私を訪ねてきたのに／私は酔っていて、長い間気付かなかった。／慌てて衣を逆さまに着て客を出迎え／この度の無礼を恥じて謝したが／四客はみなすこぶる大らかで度量が広大であり／大笑して表情をやわらげた。／礼は私のために設けられたわけではない／適宜、羽目を外すのもまた良いではないか。／（客と共に）水の流れるように雄弁し／次々と新しい詩を作る。／共に語り合って酒壺を手に取り／地面を掃除して高台に臨む。／お互い意気盛んであることを喜び合い／にわかに若い頃に戻ったようだ。／しかし、鶏は状況を察することができないもので／喚いて私を目覚めさせ、残念なあまり溜息をついた。／世を渡ること四十年の間は／常に頭脳が冴えていたが／それから時は経ち、今では身体も衰え／足を動かしては険しい道から滑り落ちるという始末だ。／義府の刀は奥に隠してある／誰が叔度の陂（大きな湖）

ような器の大きな人間になれるだろう。／起き上がってこの四客の詩を作り／夢の幻影を留めようとする私は、実に愚かなものだ。）

この 37 の詩で特徴的であるのは、夢での客が陸游を訪れてくる場面が描かれていることである。客が訪ねてきてくれたのに、既に酒宴が始まっていたせいか、陸游は酒に酔っていて長い間気付かず、慌てて着物を逆さまに着て迎えに行くというエピソードや、第 7，8 句目で「礼は私のために設けられたわけではない／適宜、羽目を外すのもまた良いではないか」と開き直る場面など、夢の中の世界であったとしても、陸游の自由闊達な人柄がよく表れているように思える。

また、第 19，20 句目で自らの身体が老いたことを述べているが、85 歳の長寿を全うした陸游はこの詩を書いたとき 60 歳であり、実際にはまだ十分に健康であったのに違いないのである。そのためか、「足を動かしては険しい道から滑り落ちるという始末だ」というどこかユーモラスな表現を使っている。

第 24 句には「夢の幻影を留めようとする私は、実に愚かなものだ」とある。夢を数多くの詩に書き残して、現実にはない夢の世界を留めておくこと、またその世界に留まることによって現実の不充実を補おうとした陸游は、そのような自分の姿を客観的に、自嘲気味に捉えてもいたことが分かる。

更に、夢の世界を好んだ陸游らしい詩として、以下に 89,90 の 2 首を挙げる。

89　三二年來夜夢每過吾廬之西一士友家觀書飲酒方夢時亦自知其爲夢也二首 其一（巻四十二）

（三二年來、夜、夢に每に吾が廬の西の一士友の家を過い、書を觀て酒を飲む。方に夢みる時に亦た自ら其の夢爲るを知る也。）

西鄰好友工談笑	西鄰の好友　談笑を工みにす
每見明知是夢中	見る每に　明らかに知る　是れ夢中なるを
樽酒不空書滿架	樽酒は空しからず　書は架に滿つ
何時真得與君同	何時か　真に君と同じきを得ん

（夢の中では、我が家の西隣には弁舌を巧みにする良き友人が住んでいるのだが／彼を夢にみるたびに、夢の中でこれが夢であることが分かる。／酒は樽に満ちて、本が棚にずらりと並んでいる。／いつか、本当に彼と会ってみたいものだ。）

90　三二年來夜夢每過吾廬之西一士友家觀書飲酒方夢時亦自知其爲夢也二首 其二

清言亹亹岸綸巾	清言　亹亹たり　綸巾を岸く
久矣吾遊無若人	久し　吾が遊に若の人無きや

自怪夢中來往熟　　自ら怪しむ　夢中　來往熟するを
抱琴携酒過西鄰　　琴を抱き　酒を携え　西鄰を過う

（綸巾をあみだに被り、水が流れるように話す彼が／近頃は私の夢に出てこなくなって久しい。／夢中で十分に行き来してしまったせいだろうかと疑問に思って／夢でまた琴を抱き、酒を携えて彼の家を訪ねることにした。）

この 89,90 の 2 首における「一士友」は、「吾が廬の西」に住んでいるという明確な情報がありながらも、「彼を夢にみるたびに、夢の中でこれが夢であることが分かる」「いつか、本当に彼と会ってみたいものだ」という部分から、この友人は夢の中にのみ存在する友人である可能性が高い。この友人が登場する夢の詩はこの 2 作以外にはないのだが、題に「三十二年来」とあるほか、2 首目で「近頃は私の夢に出てこなくなって久しい」とあることから、これ以前に三十二年間もの間、繰り返し陸游の夢に登場した人物であるが、最近は長らく夢で会っていないということらしい。

「夢でまた琴を抱き、酒を携えて彼の家を訪ねることにした」という部分から、恐らく眠る前にこの友人のことを思い浮かべ、夢に登場することを願って眠ったのだと考えられるが、陸游が夢の世界を現実と対等に、自分の行き来できる場所と捉えている様子が見受けられて興味深い。

更にこの次に挙げる 152,153 の 2 首は、上の 2 首の更に 10 年後、最晩年の 85 歳のころに書かれた詩であるが、若々しく意気盛んな夢での集いの様子が描かれている。

152　夢中作二首 其一（巻八十四）
（夢中の作。）

征途遇秋雨　　征途　秋雨に遇い
數士集郵亭　　數士　郵亭に集う
酒拆官壺綠　　酒　官壺の綠を拆き
山圍草市青　　山　草市の青を圍む
劇談猶激烈　　劇談　猶お激烈たるも
瘦影各伶俜　　瘦影　各伶俜す
四海皆兄弟　　四海　皆兄弟なれば
悠然共醉醒　　悠然　共に醉醒す

（旅の途中で秋雨に遭い／数人の士人たちと旅館に集った。／官製の酒の緑色の壺を開け／村の市場を青々とした木々が囲む。／言葉は今なお激烈であるものの／痩せた身体の影がさまよって揺れ動いている。／世の中の人はみな兄弟であるから（『論語・顔淵』「君子は敬みて失なく、人と与り恭しくして礼あらば、四海の内皆兄弟たらん」による）／我々は悠然と打ち解けて、酔うも醒めるも一緒だ。）

153　夢中作二首 其二

一客若蜀士	一客　蜀士の若く
相逢意氣豪	相い逢いて　意氣豪なり
偶談唐夾寨	偶ま談ず　唐の夾寨
遂及楚成皋①	遂に及ぶ　楚の成皋
頓洗風塵惡	頓に洗う　風塵の惡
都忘箠轡勞	都て忘る　箠轡の勞
蟬嘶笑餘子	蟬嘶きて　餘子を笑う
辛苦學離騷	辛苦して離騷を學ぶを

按：① 自注：二者皆所論事。（二者皆論ずる所の事なり。）

（（夢で集った数客のうちの）一人は、蜀の出身のようで／私と会って意気盛んであった。／偶然、唐の夾寨のことを話題にしたのをきっかけに／ついに話は楚の成皋のことにまで及んだ。／（彼と話していると）にわかに世俗の悪しき塵を洗い流し／馬に乗って遠くへ赴任した苦労をすべて忘れるようだった。／世間はやかましく騒ぎ立てて笑うだろう／苦労して屈原の「離騒」を学ぶ我々を。）

どちらも賑やかに歓談する場面ではあるが、ただ 152 には「言葉は今なお激烈であるものの／痩せた身体の影がさまよって揺れ動いている」とあり、老いた現実の自分自身の姿を、夢の中に表現しているようにも思える。

また、153 の詩では、集った客のうちでも特に蜀の出身の人物について描写されている。「私と会って意気盛んであった」とあるように、陸游はその人物と極めて気が合ったらしく、最晩年まで四川時代を懐かしみ、四川という場所、その出身者にまで絶えず愛着を持っていたことをうかがわせる。

4.3.3 新しい人物との出会い

これまで、4.3.2 では夢の中での客人との「集い」に重点が置かれた詩を取り上げてきたが、4.3.3 では、現実世界では確実に会ったことのない人と、夢の中で「出会うこと」そのものに重点が置かれた詩を取り上げることとする。

まず、次の 120 の詩を挙げる。

120　二月晦日夜夢欲卜居近邑道遇老父告以不利欣然從之（巻六十一）
（二月晦日夜、夢に卜居をせんと欲し、近邑の道に老父に遇う、告ぐるに以て利せず、欣然として之に従う。）

夢中行卜居　　夢中　卜居を行わんとし
道遇白髯叟　　道に遇う　白髯の叟
一面出苦言　　一面して　苦言を出だし
戒我棄勿取　　我を戒しむ　棄てて取る勿れ
人之生實難　　人之生　實に難し
失脚墮虎口　　失脚　虎口に墮つと
我深感其言　　我　深く其の言に感じ
解衣奉杯酒　　衣を解き　杯酒を奉ず
豈知立談間　　豈に知らんや　立談の間
得此直諒友　　此に得んとは　直諒の友
起坐心茫然　　起坐して　心は茫然たり
天闊樓挂斗　　天闊くして　樓は斗を挂く

（夢の中で、占いで住むのに良い場所を選んでもらおうと思っていると／行く道に、白髪の翁に出会った。／翁は私を一目見て、忠告の言葉を口にした。／私を戒めて言うことには「人生は実に難しいもので／慎重に行動しなければ、虎口に堕ちることになるぞ」と。／私はその忠告に深く感じ入り／着物を解いて酒を取り出し、翁に献上した。／誰が予想できようか、立ち話する短い間に／ここに誠実で信じるに足る友人を得ようとは。／夢から覚めると、夢でのこの出来事に茫然とした／空は広く澄み渡り、楼にはまだ北斗の星座が掛かって見える。）

この詩は 1205 年、最晩年の 81 歳のころに書かれた詩である。このような時期に「卜居」を行おうと思い立った理由が定かではないが、道に出会った翁と、立ち話する間に良き友人となったことに陸游は感動したようである。第 12 句の「空は広く澄み渡り、楼にはまだ北斗の星座が掛かって見える」という部分からも、この夢での「出会い」の清々しさが伝わってくる。

また、120 の詩が書かれたおよそ半年後、次の 122 の詩が書かれている。

122　乙丑七月二十九日夜分夢一士友風度甚高一見如宿昔出詩文數紙語皆簡淡可愛讀未終而覺作長句記之（巻六十三）
（乙丑七月二十九日夜分、一士友を夢む。風度甚だ高く、一見して宿昔の如し。詩文數紙を出だすに、語は皆簡淡にして愛す可し。讀むこと未だ終わらずして覺め、長句を作りて之を記す。）

客中得友絶清真　　客中　友を得る　絶めて清真なり
蓋未傾時意已親　　蓋の未だ傾かざる時　意は已に親しむ
枕冷不知清夜夢　　枕冷やかにして　清夜の夢なるを知らず
眼明喜見老成人　　眼に明らかに　老成の人を見るを喜ぶ

河傾斗落三傳漏　　河は傾き斗は落ち　三たび漏を傳う
霧散雲歸兩幻身　　霧散じて雲は歸り　兩幻身
心亦了然知是妄　　心亦た了然として　是は妄なるを知るも
覺來未免一酸辛　　覺め來たれば　未だ一酸辛を免れず

（宴席の客の中に、極めて純真素朴な友人を得て／夜がまだ明けないうちに、心が親しく通うほどになった。／これが冷たい枕の上でみた、清々しい夜の夢にすぎないとは気付かず／目の前にはっきりと、徳の高い人を見ることができて嬉しく思った。／（しかしながら現実には）天の川が傾き、北斗七星は空の低い所へ落ち、時刻を刻む夜漏は蠟を溶かして短くなり／目の前の光景は雲散霧消して、すべては夢の中の幻だったことが分かった。／心の中では、明らかにこれがただの幻だと分かっているつもりだが／夢から覚めた時のつらさは、どうにも免れようがない。）

この詩には「夜がまだ明けないうちに、心が親しく通うほどになった」ものの、夢が覚めてしまい残念に思ったとあり、120 の詩と似て、夢で初対面の人物と「出会い」、短時間のうちに親しくなったのを喜んでいるうちに目が覚めてしまうという形式になっている。

また、次の 128 のような詩もある。

128　記乙丑十月一日夜夢二首 其一（巻六十四）
（乙丑十月一日夜の夢を記す。）

夢裏江淮道上行　　夢裏　江淮の道上を行く
解裝掃榻喜新晴　　裝を解き　榻を掃きて　新晴を喜ぶ
店門邂逅綈袍客　　店門　邂逅す　綈袍の客
共把茶甌說養生　　共に茶甌を把り　養生を說ぶ

（夢の中で、長江と淮河の間の道を行く。／着物を着崩し、長椅子の上を手で払って座り、明るく晴れ渡った空を喜ぶ。／店の門のところで、厚絹で織った冬の着物を着た客と偶然出会い／店で共に茶碗を取って、互いの長寿健康を喜び合った。）

この詩も 81 歳のころに書かれた詩であり、偶然会った初対面の人物と「互いの長寿健康を喜び合った」という部分が、年齢相応の穏やかな「出会い」の場面を思わせる。

なお、夢における新しい人物との「出会い」がテーマとなる詩のうちでは、その人物から詩を示されるという形式の詩もいくつかある。以下に 32,34 の 2 首を紹介する。

32　五月十四日夜夢一僧持詩編過予有暴雨詩語頗壯予欣然和之聯巨軸欲書未落筆而覺追作此篇（巻十四）

（五月十四日夜、夢に一僧、詩編を持ちて予を過ぐ。暴雨の詩語頗る壯なる有り。予、欣然として之に和し、聯の巨軸なるに書かんと欲す。未だ落筆せずして覺め、此篇を追作す。）

黒雲塞空萬馬屯	黒雲　空を塞ぎ　萬馬屯す
轉盼白雨如傾盆	轉盼たる白雨　盆を傾けるが如し
狂風疾雷撼乾坤	狂風　疾雷　乾坤を撼かす
壯哉潤壑相吐呑	壯なる哉　壑を潤し　相吐呑するや
老龍騰拏下天闇	老龍　騰拏し　天闇より下り
鱗間火作電脚奔	鱗間　火を作し　電脚にて奔る
巨松拔起千年根	巨松　拔起す　千年の根
浮槎斷梗何足論	浮槎　梗を斷ちて　何ぞ論ずるに足らん
我詩欲成醉墨翻	我詩　成らんと欲して　醉墨翻る
安得此雨洗中原	安んぞ得ん　此雨　中原を洗い
長河袞袞来崑崙	長河　袞袞たりて　崑崙より来たり
鸛鵲下看黄流渾	鸛鵲　下りて看る　黄流の渾れるを

（空には黒雲が立ち込め、地には万馬がたむろしており／豪雨が盆を引っくり返したように激しく降る。／暴雨、稲妻が天地を揺さぶり／谷間に雨が降り注ぎ、濁流となる様子の何と激しいことか。／龍が天の暗闇から猛って下る／鱗には火を灯し、稲妻の速さで駆け巡る。／巨大な松は千年の根を引き抜かれて倒れるが／筏を浮かべて障害物など物ともしない。／私は詩を一息に書きあげようとして、一心不乱に筆を翻す。／私の詩でどうして表現できようか、この雨が中原を洗い／濁流となって崑崙山より流れ来たり／コウノトリが眼下に黄河の濁るのを見るという情景を。）

34　記夢（巻十五）

（夢を記す。）

夜夢有客短褐袍	夜夢　客有り　短褐の袍
示我文章雜詩騷	我に文章を示す　雑詩の騷
措辭磊落格力高	措辭　磊落にして格力高く
浩如怒風駕秋濤	浩きこと　怒風　秋濤を駕ぐが如し
起伏奔蹴何其豪	起伏　奔蹴して　其豪を何い
勢盡東注浮千艘	勢　盡く東に注ぎて　千艘を浮かぶ
李白杜甫生不遭	李白　杜甫　生きては遭わざれど
英氣死豈埋蓬蒿	英氣　死して豈に蓬蒿に埋まらんや
晩唐諸人戰雖鏖	晩唐諸人　戰いて鏖と雖も
眼暗頭白真徒勞	眼暗く　頭白くして　真に徒勞なり

何許老將擁弓刀	何許の老將　弓刀を擁し
遇敵可使空壁逃	敵に遇いて　空壁の逃を使う可けんや
肅然起敬竪髪毛	肅然と起敬す　竪なる髪毛
伏讀百過聲嘈嘈	伏して讀むも　百過の聲　嘈嘈たり
惜未終卷雞已號	惜しむらくは　未だ卷を終えずして　雞已に號すを
追寫尚足驚兒曹	追寫して　尚お兒曹を驚かすに足る

（夜、夢で短く粗末な着物の客が来て／私に雑言の騒を示した。／その詩は無駄な修辞がなく、おおらかで格式高く／強い風が波の上を渡るようにゆったりとしていた。／起伏が大きく、緩急があって豪放さを表現しており／水が勢いよく流れて千の船を浮かべるようだ。／李白、杜甫は生きては会えないが／その英気まで死後の世界に埋まっていると誰が言えようか／晩唐の詩人たちはそれなりに努力したかもしれないが／物事を見る眼はなく、老いただけでまことに徒労だったかもしれない。／しかし、何処の老将が、武器を持っていながら／敵前逃亡するだろうか。／短髪の客に敬意を表し／示してくれた詩を読もうとしたが、外は人々のがやがやとした声で騒がしくなってきた。／残念ながら最後まで読み切らないうちに鶏が鳴いて目覚めてしまったが／起きてからも十分詩を覚えていて追写できたので、子供たちに驚かれた。）

32 の詩では、夢の世界で見せてもらった詩に陸游自身が和した詩を実際に思い返して記しているのに対し、34 の詩では示された詩そのものについては、格式の高さを褒めたたえたうえで、その後に陸游自身の詩論を述べるような形になっている。34 の詩では第 16 首に「起きてからも十分詩を覚えていて追写できたので、子供たちに驚かれた」とあるため、夢で示された詩を起きてから書き記したようであり、どちらの詩においても夢で得た詩を陸游がかなり精密に記憶していたと言える。

4.3.4 考察

以上、夢の詩における客人との「集い」、また新しい人物との「出会い」にそれぞれ重点が置かれた詩を取り上げ、現実では必ずしも友人たちとの交遊を充実させることができなかった晩年の陸游が、夢の中でいかに充実した「交遊」の機会を得たかを考察した。

晩年の陸游が、郷里でどのような人間関係を持っていたのか、具体的には夢の詩以外の詩も合わせて読まなければわからない部分があるが、いずれにしても陸游が夢の世界での「交遊」の機会に高い充実感を感じていたこと、またその分、目覚めてからの喪失感は大きなものであったことを読み取ることができた。

また、「集い」をテーマにした夢の詩は比較的若い頃から最晩年まで継続して書かれているのに対し、新たな人物との「出会い」は 80 歳以降、最晩年に書かれた作品が多いという特徴がある。この点から、陸游は最晩年に向かうにつれて、より夢の世界の中に新鮮さや驚きを求めたと考えることもできる。

4.4　夢で「仙界および道教思想」に帰属意識を持つことで充実感を得ようとする

4.4.1 夢の詩における「仙界および道教思想」というテーマ、及び帰属意識について

これまで 4.1~4.3 においては、現実の世界においても実現可能な出来事や、実在する地域を夢に見た詩を取り上げてきたが、4.4 では「仙界および道教思想」というテーマを取り上げる。(ただし、2.2.1 でも触れたように、本来、仙界と道教とでは意味するところ・概念が異なるのであるが、本論文では、便宜的に「仙界および道教思想」というテーマにまとめて扱うこととし、詳細な考察は今後の課題としたい。)

夢の詩においては、仙界を単に自らが訪れるだけにとどまらず、仙人・仙女との会話も具体的に記され、また仙界に陸游自身の住居があることを思わせるような表現も多々現れる。

さらに、陸游は仙界に単に「憧れた」のではなく、仙界への「帰属意識」ともいえるような強い結びつきを感じていたようであり、この帰属意識は年代を追うごとに強まる傾向がみられる。

例えば、次の 48 の詩に注目する。

48　　夢海山壁間詩不能盡記以其意追補四首 其三

一劍能清萬里塵	一劍もて能く清める　萬里の塵
讒波深處偶全身	讒波され　深處にありて　偶たま身を全うす
那知九轉丹成後	那ぞ知らん　九轉の丹成りし後
却插金貂侍帝宸	却って金貂を插し　帝宸に侍するを

(剣の一振りで、この俗塵を払うことができる(と思ってはいたものの)／(約二年前に)讒言されて故郷に帰り、偶々無事を得たような始末だ。／仙人になれる九轉の丹薬が出来上がったのちにまで／皇帝に侍する臣下の冠飾を付けて、朝廷に侍るかどうか、どうして分かろうか。)

この 48 の詩は 1191 年、67 歳のころに山陰で書かれた作品であるが、第 3，4 句目においては「伝説の丹薬を手に入れたのちにまで出仕するかどうかは、はっきりとは言えない」というように、俗世を棄てて仙界へ帰りたいという願いを、「那知」という反語の形式を用いて述べるにとどめている。

ところが、その 4 年後、71 歳のころに書かれた次の 69 の詩では、大きく状況が変わってくる。

69　　五月二十三夜記夢(巻三十二)
(五月二十三夜、夢を記す。)

夜漏欲盡雞初唱	夜漏　盡きんと欲して　雞初めて唱す

夢到神仙信非妄　　夢に神仙に至る　信にして妄に非ず
泉流直春碧澗底　　泉流　直春す　碧澗の底
松根横走蒼崖上　　松根　横走す　蒼崖の上
徐行林際遇飛橋　　徐行するに　林際　飛橋に遇う
峭壁驚濤臨萬丈　　峭壁　驚濤すべし　萬丈に臨む
非惟履嶮足蹉踔　　非惟　嶮を履み　足蹉踔
已覺處憂神悄愴　　已に覺めて　憂する處　神悄愴たり
空巖滴乳久化石　　空巖　滴乳　久しく石と化し
寶蓋珠瓔紛物象　　寶蓋　珠瓔　物象に紛う
鬼神慘澹疑欲搏　　鬼神の慘澹たるを　疑いて搏えんと欲し
龍蜃蜿蜒誰敢傍　　龍蜃の蜿蜒たるに　誰か敢えて傍わん
長眉老仙乘白雲　　長眉の老仙　白雲に乘りて
握手授我綠玉杖　　手を握り　我に授く　綠玉の杖
三生汝有世外緣　　三生　汝は有す　世外の緣
一念已斷塵中障　　一念　已に斷つ　塵中の障
雖云曩事不復憶　　雖云　曩事　復び憶えず
憐汝瞳子神猶王　　憐れむ　汝の瞳子　神にして猶お王のごときを
何須更待熟金丹　　何ぞ須らく　更に待つや　金丹の熟るるを
從我歸哉住崑閬　　我に從い　歸する哉　崑閬に住まんと

（夜、時刻を知らせる蝋燭が溶けてなくなるころ、ちょうど鶏が鳴いた。／夢で神仙の地に行きついたことは本当のことで、妄言などではない。／泉の流れは谷間に流れる碧緑の川に、真っ直ぐに注ぎ込み／松の根はそびえ立つ断崖の上に、縦横に張っている。／ゆっくりと進んでいくと、林が終わるところで、空に架かる橋に行きついた。／切り立った崖は驚くべき高さで、万丈を見下ろすようだ。／山岳は空しく消えて、丹薬は永久にただの石ころとなり／豪華な傘蓋や宝石の組紐も、俗世のものと紛れてしまってもはや区別がつかない。／鬼神が悲嘆に暮れているのを怪しんで捕えようとし／龍がとぐろを巻いている姿に、誰が敢えて寄り添おうというのか。／夢では豊かな眉の老仙が白い雲に乗ってやってきて／私の手を取り、緑の宝石が付いた仙人の杖を私に授けてくれた。／（仙人が言うには）「三世（前世・今世・来世）のすべてにおいてお前は仙界と縁を持っているから／少し念じるだけで、俗世のしがらみから解放されるはずだ。／そうは言っても前世のことを思い出すことはできないだろう／可哀そうなことだ、お前の目は今も神聖な輝きを持っていて、王の目のようであるというのに。／どうしてお前は俗世に留まって丹薬が出来上がるのを待ち続けているのか／私について仙界に帰り、崑閬に住もうではないか」と。）

この詩の 12 句目までは夢での仙界の情景描写であるが、注目すべきは 13 句目以降、仙人が登場する場面である。仙人は、陸游に仙人の杖を授けたうえで、陸游に対して「お前は前世では仙人であったのだ」と語りかけ、仙界に共に住もうと誘うのである。この夢以降、陸游は仙界に

自分の住居があるに違いないという期待を抱くようになったようである。
　例えば次の 91 の詩がある。

91　　記夢（巻四十二）
　　（夢を記す。）

夜夢遊名山	夜夢　名山に遊ぶ
翠壁開巖扉	翠壁　巖扉を開ける
主人喜迎客	主人　喜びて客を迎え
劇談皆造微	劇談　皆造微たり
下臨萬里空	下に臨む　萬里の空
渺渺一鶴飛	渺渺たり　一鶴の飛ぶや
安得棄家去	安んぞ得ん　家を棄てて去り
丹竈常相依	丹竈の　常に相い依るを

（夜、夢で名山へ行き／翡翠の岩壁に取り付けられた扉をくぐった。／主人は喜んで私のことを迎え入れ／のびのびと話す言葉は、すべて精緻巧妙だった。／岩壁の下には万里の空を見下ろし／はるか彼方に、鶴の飛ぶ姿がかすかに見えた。／ただ家を捨て去って、丹薬を作る竈とともにいることのできないのが心残りだ。）

　この詩では「ただ家を捨て去って、丹薬を作る竈とともにいることのできないのが心残りだ」とあり、俗世を捨て去って仙界の住居に帰りたい（もしくは道教の実践を深めたい）という願望が述べられている。この「丹窯」の存在は、陸游の仙界への帰属意識の象徴とも捉えることができ、これ以後の夢の詩においても度々登場することとなる。[24]

　更に、次の 99 の詩に注目する。この詩は晩年に短期間、臨安に赴任した時に書かれたものである。詩自体は絶句で短いものであるが、題での状況説明が非常に具体的で、夢の中で会った仙人の台詞もそのまま書かれている。それによれば、夢の中で仙人から、仙界に新設された官位に就くことを勧められた、というのである。

99　　九月十四日夜雞初鳴夢一故人相語曰我爲蓮華博士蓋鏡湖新置官也我且去矣君能暫爲之乎月得酒千壺亦不惡也既覺惘然作絶句記之（巻五十一）
　　（九月十四日夜、雞初めて鳴くとき、一故人を夢む。相い語げて曰く「我は蓮華博士爲り。蓋し鏡湖に新置せられし官也。我且に去らんとするに、君能く暫く之を爲さんか。月に酒千壺を得るは、亦た悪しからざる也」と。既に覺めて惘然たり。絶句を作りて之を記す。）

[24] 陸游の夢における「丹窯」については、4.4.4 で取り上げることとする。

白首歸修汗簡書　　白首　歸修　汗簡の書
毎因嚢粟戯侏儒　　毎に嚢粟に因りて　侏儒に戯る
不知月給千壺酒　　知らず　月に千壺の酒を給せらるること
得似蓮華博士無　　蓮華博士の似きを得るや無や

（日々、白髪頭で歴史書の編纂事業にあたっており／少しばかりの給与のためにつまらない仕事をしている。／月に千壺もの酒が給与されるという／蓮華博士の官などにつけるものだろうか。）

第3, 4句目からも読み取れるように、陸游自身はこのような官の存在を若干訝しみながらも、第1，2句目においては、現在の自分の臨安での仕事を「少しばかりの給与のためにつまらない仕事をしている」と自嘲気味に捉えており、「蓮華博士」という官に就くことも満更でもない様子である。

この99の詩を経て、仙界に自分の官位が用意されているということを夢で確認したことにより、陸游は仙界への帰属意識をますます強めることになる。
例えば次の137の詩である。

137　夢中作（巻六十八）
（夢中の作。）

萬里行求藥　　萬里　藥を求めて行き
三生誓棄官　　三生　官を棄つるを誓う
鶴巣投暮宿　　鶴巣　暮宿に投じ
松麩續朝餐　　松麩　朝餐に續く
進火金丹熟　　火を進めて　金丹熟し
凌風玉宇寒　　風を凌ぎて　玉宇寒し
人間日月速　　人間　日月速く
歳暦又將殘　　歳暦　又た將に殘われんとす

（(夢の中で) 仙薬を求め、万里の遠くへ旅をしながら／三生、自分は出仕などしないと誓った。／夜は鶴の住処に寝泊まりし／朝食には松麩を並べる。／火を焚いて丹薬を生成し／風に乗って、冷たい大空を飛ぶ。／俗世では月日の流れが速く／この年ももう終わろうとしている。）

この詩は82歳の時に書かれた詩であるが、第1，2句目に「仙薬を求め、万里の遠くへ旅をしながら／三生、自分は出仕などしないと誓った」とあるように、出仕ではなく仙界への道を選びたいという願望をはっきりと述べるようになっている。仙界での生活についても、「夜は鶴の

住処に寝泊まりし／朝食には松麩を並べる。／火を焚いて丹薬を生成し／風に乗って、冷たい大空を飛ぶ」とあり、具体的なイメージを持っていることが分かる。

更に、陸游の最晩年、85 歳の時に書かれた次の 154 の詩を挙げる。

154　夢華山（巻八十四）
（華山を夢む。）

路入河潼喜著鞭	路は河潼に入り　喜び著しく鞭うつ
華山忽到帽裙邊	華山　忽ち到る　帽裙の邊
洗頭盆上雲生壁	洗頭盆の上　雲は壁を生じ
腰帯鞓前月滿川	腰帯鞓の前　月は川に滿つ
丹竈故基誰復識	丹竈の故基　誰か復た識らん
白驢遺迹但相傳	白驢の遺迹　但だ相い傳うるのみ
夢魂妄想君無笑	夢魂の妄想　君笑う無かれ
尚擬今生得地仙	尚お擬うる　今生　地仙を得るかと

（夢で河潼の道に入り、喜んで馬を走らせていると／突然、華山のふもとに至った。／洗頭盆の上には雲が壁のように立ち込め／腰帯鞓の前では月の光が川に満ちている。／丹薬を生成する窯の古い土台がここにあるなどとは、誰が知っていようか／白驢のいた痕跡も、語り継がれているだけだ。／夢の中での妄想だから、笑わないでくれたまえ／私は今生で地仙となれると今もなお考えているのであるから。）

第 8 句では「私は今生で地仙となれると今もなお考えているのであるから」とあるほど、仙界への強い帰属意識を持っていたことが分かる。この部分については、第 7 句で「夢の中での妄想だから、笑わないでくれたまえ」という前置きがされてはいるものの、他の詩における陸游の仙界および道教思想への意識の強さを踏まえると、どちらかと言えばこの第 7 句の方が建前上のもので、第 8 句の方に主意があるように思われる。

また、次の 157 の詩は、夢の詩の中でも最後に書かれた詩であり、先に挙げた 99 の詩における「蓮華博士」の官のことを踏まえた内容になっている。

157　夢中行荷花萬頃中（巻八十五）
（夢中、荷花萬頃の中を行く。）

天風無際路茫茫	天風　無際にして　路は茫茫たり
老作月王風露郎	老いて作らん　月王　風露の郎
只把千尊爲月俸	只だ千尊を把りて　月俸と爲すは

爲嫌銅臭雜花香　　銅臭の花香に雑わるを嫌うが爲なり

（天には風が際限なく吹き、道はどこまでも続いている。／老いたら就きたいたいものだ、月と風露の郎（仙界の官位）に。／（鏡湖に新設された仙界の官が）月に酒千樽を給与として与えられるのは／金銭の卑しい臭いが、蓮華の花の良い香りに混ざるのを嫌ったためだろう。）

この詩のもとになった 99 の夢は、この 157 の詩が書かれた 1209 年から 7 年も前に見た夢であるはずであるが、陸游にとっては相当印象深かったらしく、これまでにも詩にはしないまでも繰り返し思い返していたのかもしれない。入谷氏も次のように触れている。

> 年老いてこのような夢（＝99 の夢）を見、それが印象深く刻み込まれていて、臨終近い夢うつつの脳中に再現されたのであろう。[25]

また、特筆すべきは、仙界をテーマとしたこの 157 の夢の詩が、『剣南詩稿』において最後から二番目に収録されているということである。この点について、以下のような入谷氏の言及がある。

> この詩の後にはあまりにも有名な「示児」（児に示す）一首しかない。「示児」はあらゆる選集に、愛国詩人陸游の真面目を示す詩として収められているけれども、それだけに辞世としてはあまりにも決まりすぎている感がある。あるいは生前にあらかじめ作っておいて、息子たちに、詩集の最後に置くように命じてあったもので、真の絶筆はこの夢中行荷花の詩かもしれない。[26]

このことからも、夢の詩における「仙界」というテーマは、陸游の詩作の最後を締めくくるほど、重要な意味を持っていたと考えることができる。

もちろん、陸游の仙界及び道教思想への関心はあまりにも深く[27]、夢の詩のみを取り上げるだけでは総合的に考察することは当然難しい。ただ、夢の詩において「仙界」というテーマは相当な数登場し、それぞれの詩が独創的であることから、夢の詩の中においては仙界および道教思想がどのように登場するか、という焦点に絞って詩を整理・分析することは、陸游の詩の新たな側面の魅力を見出すことにもなるのではないか。

よって、夢の詩における陸游と仙界および道教思想との結びつきについて、以下、4.4.2 では夢で仙人に丹薬をもらう場面を描いた詩を、4.4.3 では夢での仙界の人々との交流を描いた詩を、

---

[25] 入谷氏前掲書「陸游の夢の詩についての一考察」、p.148。

[26] 同上。

[27] 于北山『陸游年譜』（上海古籍出版社　1985 年）付録「評陸游的道家思想」。

4.4.4 では仙界での陸游の住居に併設されていると考えられる「丹炉」についての言及がある詩を、それぞれ取り上げて、現実の世界での不充実を仙界への帰属意識がどう補ったのかという観点で考察することとする。

4.4.2 仙人に丹薬をもらう

まず挙げるのは、夢の中で仙人に丹薬をもらう場面を描いた詩である。以下に 36，70 の 2 首を挙げる。

36　記夢（巻十六）
（夢を記す。）

東吳春暮寒猶重　東吳の春暮　寒猶お重し
睡美不聞城角動　睡美しくして　城角の動を聞かず
身雖衰惰怕出門　身は衰惰にして　出門を怕ると雖も
江山尚入幽窗夢　江山　尚お入る　幽窗の夢
夢到青羊看修竹　夢に青羊に到り　修竹を看る
道人告我丹將熟　道人　我に告ぐ　丹の將に熟さんとするを
試求一黍換肝腸　試しに一黍を　肝腸と換うを求むるに
它日重来駕黄鵠　它日　黄鵠に駕して重来す
自注：青羊宮在成都南門外浣花道中。
（青羊宮は成都南門の外、浣花道中に在り。）

（会稽では春も終わろうとするのにまだ寒さが厳しい／眠るのに心地よく、城中の雑音から離れている。／私は衰惰の身だから外出を面倒に思うが／暗い窓辺で見る夢では、今なお江山をめぐっている。／夢で青羊宮に到り、長く伸びた竹を見ていると／仙人が私に、丹薬がちょうど出来上がるころだと教えてくれた。／試しに一粒を自分の肝腸と交換してほしいと求めたら／後日（に見た夢の中で)、黄鵠に乗って仙人がやってきた。）

70　夢有餉地黄者味甘如蜜戯作數語記之（巻三十三）
（夢に地黄なる者を餉る有り、味は甘く蜜の如し、戯れに數語を作して之を記す。）

有客餉珍草　客有りて　珍草を餉る
發奩驚絶奇　奩を發きて　驚絶奇なり
正爾取嚼齕　爾に正し　取りて嚼齕す
炮製不暇施　炮製　施すに暇あらず
異香透崑崙　異香　崑崙に透り

清水生玉池	清水　玉池に生ず
至味不可名	至味　名づく可からず
何止甘如飴	何ぞ甘きこと飴の如きに止まらん
兒稚喜語翁	兒稚　喜びて翁に語ぐ
雪頷生黒絲	雪頷　黒絲を生ずと
老病失所在	老病　所在を失い
便欲棄杖馳	便ち欲す　杖を棄てて馳せるを
晨雞喚夢覺	晨雞　喚きて夢より覺め
齒頰餘甘滋	齒頰　甘滋を餘す
寄聲山中友	聲を寄せん　山中の友
安用求金芝	安んぞ用って　金芝を求めん

（夢で客が来て、私に珍しい仙薬を持ってきた。／箱を開けてみると、あまりに希少な薬が入っていたので極めて驚いた。／この薬に正対し、手に取って噛んでみると／火で炙ってつくられた薬の効果はあっという間である。／強い香りは頭頂に到り／透き通った水が口中に生じる。／味は言葉で言い表せないほど美味を極め／その甘さは飴どころではない。／子供が喜んで私に言う／「白髪が黒髪に変わりましたよ」と。／日頃の老いと病もたちまち消えてなくなり／杖を捨てて走り出したい気分になった。／明け方、鶏が鳴いて夢から覚めても／歯や口の中にはなお甘い味が残っていた。／山中で修行する友人たちに告げたい／山中で金芝（伝説の薬草）を探す必要などないのだと。）

上の 36 の詩は比較的若い 60 歳のころに書かれた詩であるが、「私は衰惰の身だから外出を面倒に思う」という自らの老いに触れつつ、夢の中ではなお仙界をよく訪れると述べている。

なお、この詩では、仙人に勧められた丹薬を求めたところ、別の日の夢で仙人が丹薬を届けに来てくれたという、夢から夢への繋がりが読み取れる。他の夢の詩にも言えることであるが、陸游は同じ夢の世界を繰り返し別の日の夢で訪れるということが多くあったようであり、先述のように、夢の世界を現実の世界と同等に行き来できる世界と捉えていた傾向が見られる。

36 の詩に対し、70 の詩では、仙人にもらった丹薬の描写が極めて精密で、口の中に広がる甘さが具体的に述べられる。陸游は錬丹術を現実でも実践していたようであるが、この詩に出てくる丹薬の味も、陸游自身が作り出した薬の味の経験にきっかけがあるのかもしれない。

4.4.3 仙界の人々との交流

4.4.2 では、夢の詩における仙人に丹薬をもらう場面を描いた詩に注目したが、先に挙げた 36, 70 の 2 首においても、夢での仙人との交流が当たり前のように描かれている。

4.4.3 では、改めてこのような仙界の人々との交流に焦点を当てて、数首を取り上げることとする。

まず、69 歳のころの作である 62，63 の二首と、80 歳のころの作である 110 の詩を挙げる。

62　　記夢三首 其二

西巖老宿雪垂肩　　西巖の老宿　雪　肩に垂る
白石爲糧四百年　　白石を糧と爲す　四百年
喜我未忘山下路　　我が未だ山下の路を忘れざるを喜び
慇懃握手一欣然　　慇懃に手を握って一たび欣然たり

（西巖の長老は雪にまがう白髪を肩にまで垂れ／白い小石を糧にして四百年を生き延びた。／私が山の路を忘れずにいたのはうれしいと／心のこもった手を握るひとときの喜ばしさ。）

63　　記夢三首 其三

三髻山童喜欲顛　　三髻の山童　喜びて顛てんと欲し
下山迎我拜溪邊　　下山して我を迎え　溪邊に拜す
松陰拂罷蒼苔石　　松陰　蒼苔の石を拂罷す
接竹穿雲理舊泉　　竹を接ぎ　雲を穿ちて　舊泉を理む

（髪を三つに束ねた山童が喜んで慌て／山道を降りてきて私を迎え、渓流のそばで拝礼した。／松の陰で緑の苔に覆われた石をさっと払って座り／雲を突き刺すような背の高い竹は、古い泉をそのままに残している。）

110　　八月四日夜夢中作（巻五十八）
（八月四日夜、夢中の作。）

太華巉巉敷水長　　太華　巉巉たり　敷水長し
白驢依舊繫斜陽　　白驢　舊に依りて　斜陽に繫ぐ
山深乳洞藥爐冷　　山深の乳洞　藥爐冷え
花發雲房醅甕香　　花發の雲房　醅甕香る
鄰叟一樽迎谷口　　鄰叟　一樽もて　谷口に迎え
蠻童三髻拜溪傍　　蠻童　三髻にして　溪傍に拜す
中原俯仰成今古　　中原　俯仰のうちに　今古を成す
物外自閑人自忙　　物外　自閑なるも　人自ずから忙し

（太華山は険峻で、敷水は長大である。／故事のように、私は乗ってきた白驢を夕陽の差す山に繫いだ。／山奥の鍾乳洞は丹薬を生成する炉を冷やし／花が咲いた隠者の住居からは酒の香り

がしている。／数人の老翁が酒樽を持って、私を山の入り口に迎え／三髻の髪型をした山童が渓流のそばで私に拝礼する。／（太華山のある）中原は、時の流れなどほんの一瞬のものに感じられるほど雄大なものだ。／俗世を離れれば悠然たる時間が流れているというのに、俗世では人間は常にあわただしく生活している。）

62,63 の詩が書かれてから、110 の詩が書かれるまでには 10 年以上が経っているのにもかかわらず、仙界の人々が陸游を懐かしんで歓迎する様子、また仙人の連れている三髻の髪型をした山童が陸游に対して拝礼する様子は、ほとんど同じ場面のようである。特に 62 の詩においては「私が山の路を忘れずにいたのは」とあることから、陸游が以前にもこの場所に来たことがあること、もしくは前世では仙界に住んでいたと自分で考えていたことを思わせる。このようなことから、陸游は自分が仙界に行けば人々が喜ばしく懐かしみ、歓迎してくれるに違いないという自信に満ちた期待を、長期にわたって持ち続けていたようである。

また、次に挙げる 72,73 の詩は夢での仙女との交流が描かれたもので、テーマとしても独創的であるが、題の状況説明が極めて具体的で興味深い。題によれば、夢で数人の仙女と会い、そのうちの一人が詩を作って陸游に見せてくれたところ、その詩の内容はほとんど人間の作る詩と変わらない哀切さを持っていたのだが、最後の句だけが異色であった。それで陸游は仙女をからかって「この句さえなければ人間の詩かと思えたのに」と言ったところ、彼女は別の仙女に「二度と規則を忘れた詩作を行ってはならない」と戒められ、恥をかかされることになってしまった。自分がからかったせいで彼女がこのようなことになってしまい、陸游は非常に後悔して、からかったことを弁解するために、目覚めてからこの絶句 2 首を作った、というのである。この題だけを読んでも、陸游のユーモアのある人柄が見えるようである。

72　十月二十八日夜雞初鳴時夢與數女仙遇其一作詩示予頗哀怨如人間語惟末句稍異予戲之曰若無此句不可爲神仙矣其一從傍戒曰汝當勿忘此規作詩者甚有愧色予頗悔之既覺賦兩絶句以解嘲 其一（巻三十三）

（十月二十八日夜、雞初めて鳴きし時、夢に數女仙と遇う。其一、詩を作りて予に示すに、頗る哀怨たりて人間の語の如く、惟だ末句、稍異なるのみ。予、之に戯れて曰う、若し此句無くんば神仙を爲す可からずと。其一、傍に從り、戒しめて曰く、汝當に此規を忘れて作詩なる者をする勿かるべしと。甚だ愧色有り、予、頗る之を悔す。既に覺めて兩絶句を賦し、以て嘲を解す。）

玉姝眉黛翠連娟	玉姝の眉黛　翠にして連娟たり
弄翰閑題小碧箋	翰を弄びて　閑かに題す　小なる碧箋
人世愁多無著處	人世　愁い多く　著す處無し
故應分與蕊宮仙	故應　分與す　蕊宮の仙

（美しい仙女の眉は、翡翠の色で細く緩やかに弧を描いている。／筆を取って、優雅に小さな碧

玉の札の上に詩を作る。／俗世には憂いが多いから詩に書くべきこともない／だから蕊宮の仙界の様子を分題して詩にするのだろう。）

73　　十月二十八日夜雞初鳴時夢與數女仙遇其一作詩示予頗哀怨如人間語惟末句稍異予戲之曰若無此句不可爲神仙矣其一從傍戒曰汝當勿忘此規作詩者甚有愧色予頗悔之既覺賦兩絶句以解嘲 其二

虹作飛橋蜃吐樓	虹は飛橋を作り　蜃は樓を吐く
群仙來賦海山秋	群仙　來たりて賦す　海山の秋
玉姝定自多才思	玉姝　定めて自ずから才思多し
更與人間替說愁	更に人間と替わりて愁いを說う

（虹が空に橋をかけ、蜃気楼が楼台を形作る景色の中／仙女が集まって、仙界の秋の様子を詩に賦す。／美しい仙女は決まって才女であるものなのか／人間と見分けがつかないような言葉で、愁いを詩に書き表す。）

以上、夢での陸游と仙界の人々との交流が描かれた詩を取り上げてきたが、最後にもう一首、141 の詩を補足する。

141　　夢中作二首 其一（巻七十二）
（夢中の作。）

試說山翁事	試みに說う　山翁の事
諸君且勿譁	諸君　且た譁する勿れ
百年看似夢	百年　看ること夢の似く
萬里不思家	萬里　家を思わず
夜艾猶添酒	夜艾くして　猶お酒を添え
春殘更覓花	春殘れて　更に花を覓む
却嗤勾漏令	却って嗤う　勾漏令
辛苦學丹砂	辛苦して　丹砂を學ぶを

（試みに、山翁（陸游と知り合いの仙人）について話してみますが／皆さんはどうぞ騒ぎ立てたりなさいませんように。／（山翁にとっては）百年の時間も瞬く間に過ぎ去り／遠く離れた場所にいても、家に帰りたいと思うこともない。／夜が更けてもなお酒を手にし／春の終わりになっても更に花を求める。／却って勾漏令（西晋・東晋時代、丹薬の材料を探すために、勾漏令となって交趾に赴任しようとした道教研究家の葛洪のこと）をあざ笑う／苦労して錬丹術を学ぶなどとは。）

この 141 の詩は「夢中の作」とされながらも、「試みに説う」で始まっていることから、現実の人々に対して、夢で出てくる山翁について紹介した詩であると取ることもできる。山翁は、陸游と知り合いの仙人の事であると推測され、夢で出会う仙界の人物を、現実の世界と変わらないくらい具体的な存在として捉えていたことが分かる。

先に 4.3 においては、陸游が夢で「人と交遊」することで充実感を得ていたことを確認したが、これは夢の舞台が仙界であっても同じことであったようである。

4.4.4 「丹窯」について

最後に、4.4.1 においても陸游の仙界への帰属意識の象徴として取り上げた「丹窯」について、年代を追って扱うこととする。

陸游の夢の詩において、比較的早い段階では次の 61 の詩に「丹窯」（薬炉）が登場する。

61　記夢三首 其一（巻二十八）
（夢を記す。）

黄河袞袞抱潼關	黄河　袞袞として　潼關を抱く
蒼翠中條接華山	蒼翠たる中條は　華山に接す
城郭丘墟人盡老	城郭　丘墟となり　人盡く老いたり
藥爐依舊白雲間	藥爐　舊に依る　白雲の間

（黄河はたぎり流れつつ潼關を曲がってゆき／深い緑の中條山はこの華山とは山続きに見える。／城の中は荒れ果てて、住む人はみな老年になったが／白雲の重なるあいだ、丹薬の炉はむかしのままである。）

この詩においては、「丹窯」（薬炉）は時間が経っても昔のままで変わらない、とだけ書かれている。しかしながら、この後 69 の詩を経ると、以下の 118,119 の 2 首のように、本来は仙界に住むべき自分が火を絶やさずに使うはずの「丹窯」が、自分が俗世にいるせいで冷え切ってしまった、という表現が出てくる。

118　夢華山（巻六十）
（華山を夢む。）

古松偃蹇谷谽谺	古松　偃蹇たり　谷　谽谺たり
太華峰前野老家	太華の峰前　野老の家
久客未歸丹竈冷	久しく客し　未だ歸らずして　丹竈冷ゆ
碧桃八十一番花	碧桃　八十一番の花

（樹齢の長い松は高くそびえ、谷は険峻である。／華山の峰々を臨む道士の家には／来客も絶えて、丹薬を生成する炉も冷え切ってしまった。／（薬になる）碧桃が、八十一度目の花をつけている。）

119　夢中作（巻六十一）
（夢中の作。）

華山敷水本閑人	華山　敷水　本より閑人なるも
一念無端墮世塵	一たび念えば　端無く世塵を墮とす
八十餘年多少事	八十餘年　多少の事
藥爐丹竈尚如新	藥爐　丹竈　尚お新たなる如し

（華山、敷水の地は人気が無く静かだが／ひとたび物を考えると、図らずも世俗の塵埃の中に落ちてしまう。／私はこれまで八十年余りの間、様々な事があったが／華山にある、丹薬を生成する炉や窯は、今でも新品のようだ。）

この 119 の詩が書かれたのは 118 の詩が書かれたおよそ半年後の事であるが、詩の内容、使われる言葉はともに非常によく似ており、陸游が「仙界における自分の住居に併設された丹窯が、自分が俗世にいて仙界に帰れないせいで冷え切っている」という観念、また「仙界に早く帰らなければ」という意識を継続して持っていたとも読み取れる。

さらに、次に 133,140 の 2 首を挙げる。

133　夢中作（巻六十五）
（夢中の作。）

世事何由可控摶	世事　何に由りて　控摶す可きか
故山歸卧有餘歡	故山に歸卧し　餘歡有り
澗泉見底藥根瘦	澗泉　底を見るに　藥根瘦せ
石室生雲丹竈寒	石室　雲を生じ　丹竈寒し
人遠忽聞清嘯起	人遠くして　忽として聞く　清嘯の起こるを
山開頻得異書看	山開きて　頻りに得る　異書を看るを
一朝出赴安期約	一朝　出赴す　安期の約
萬里烟霄駕紫鸞	萬里の烟霄　紫鸞に駕す

（世の中の物事は自分で制御することができないから／故郷の山に帰って横になることにこそ楽しさがあるものだ。／（夢で見た）薬草が生じるはずの泉の底では、草の根が痩せ細っている

のが見え／（仙人の眠るとされる）石室には雲が立ち込め、丹薬を生成する窯は冷え切っている。／人気のない山奥で、突然、声を長く引いて詩を歌う声（世俗を離れた人物の嘯という行い）が聞こえると／山が開けて、道教の珍しい書物が沢山現れた。／ある朝、出かけて安期先生（神仙）と会い／万里の雲の上を伝説の紫鸞に乗って駆けるものとしよう。）

140　夢中作（巻六十九）
（夢中の作。）

野鶴翩僊啄粒微	野鶴　翩僊たりて　粒の微なるを啄え
碧桃縹緲著花稀	碧桃　縹緲たりて　花の稀なるを著す
海山又見春風到	海山　又た見る　春風到るを
丹竈苔封人未歸	丹竈　苔封じて　人未だ歸せず

（仙界に住んでいる鶴は、小さな丹薬の粒を口に加えてひらひらと飛び／薬になる碧桃は、希少な花を咲かせて風に揺れている。／海山にはまた春がやってくるというのに／主人は未だ帰らず、丹薬を生成する窯は苔むしている。）

先に挙げてきたいくつかの詩に見られる陸游の仙界への帰属意識を踏まえると、これら 2 首においては、まず 133 の詩での「石室」の主人、また 140 の詩での「丹窯」に帰すべき「人」は、それぞれ陸游自身の事を指しているとも考えられる。

このように、夢の詩における「丹窯」は陸游と仙界との結びつきを考えるうえで一つの重要な要素になると言えるだろう。

4.4.5 考察

以上、夢の詩における「仙界および道教思想」というテーマ、さらには陸游の仙界への帰属意識について、4.4.2 では夢で仙人に丹薬をもらう場面を描いた詩を、4.4.3 では夢での仙界の人々との交流を描いた詩を、4.4.4 では仙界での陸游の住居に併設されていると考えられる「丹炉」についての言及がある詩を、それぞれ取り上げて考察してきた。

これにより、陸游が主に 60 歳以降の晩年において、仙界そのものや仙界に住むと考えられる人々、また丹薬について繰り返し夢に見ていたこと、さらに 69, 99 の詩などで描かれる夢の内容が、陸游の仙界への帰属意識を特に高めるきっかけとなったことが分かった。

先述のように、夢の詩だけを取り上げて陸游と仙界および道教思想との結びつきを深く知ることは難しい。しかしながら、陸游が夢で実際に仙界を訪れ、仙界の人々と交流し、さらに帰属意識を強く持つことによって、かなり大きな充実感を得ていたということは、陸游の詩の独創性や彼の柔軟な人間像を捉えるうえで、大きな意味を持つように思う。

4.5　夢で「愛国の憤慨」を新たにすることによって充実感を得ようとする

4.5.1 夢の詩における「愛国」というテーマについて

これまで 4.1~4.4 において、現実で官途での挫折を経験した陸游が、夢の世界にどのように充実感を求めたかについて各テーマに分けて考察してきたが、この 4.5 で取り上げる「愛国の憤慨」についても同様に、「自分は愛国の高い志を持っているのだ」という自尊心を維持することによって、充実感を得ていたと考えることができる。

よってまず初めに、夢の詩においては愛国の憤慨はどのように表現される傾向があるのか、以下、夢に特徴的な 2 つの形式について、それぞれ数首を挙げて確認することとする。

4.5.2 夢で軍の駐屯地を訪れる

次に挙げる 4,24,71,75 の 4 首は、全て夢の中で軍の駐屯地を訪れ、自国の軍が装いも勇ましく意気盛んである様子を目にして、陸游自身も愛国の憤慨を新たにする、というものである。

4　　九月十六日夜夢駐軍河外遣使招降諸城覺而有作（巻四）
（九月十六日夜、軍を河外に駐し、使を遣わして諸城を招降するを夢み、覺めて作る有り。）

殺氣昏昏横塞上	殺氣　昏昏として　塞上に横たわり
東並黄河開玉帳	東のかた　黄河に並び　玉帳を開く
晝飛羽檄下列城	晝は羽檄を飛ばして　列城を下し
夜脱貂裘撫降將	夜は貂裘を脱ぎて　降將を撫す
將軍櫪上汗血馬	將軍の櫪上には　汗血の馬
猛士腰間虎文韔	猛士の腰間には　虎文の韔
階前白刃明如霜	階前の白刃　明らかなること霜の如し
門外長戟森相向	門外の長戟　森として相い向かう
朔風卷地吹急雪	朔風　地を卷きて　急雪に吹き
轉盼玉花深一丈	轉盼にして　玉花　深きこと一丈
誰言鐵衣冷徹骨	誰か言わん　鐵衣の冷きこと　骨に徹ると
感義懐恩如挾纊	義に感じ　恩を懐わば　纊を挾むが如し
腥臊窟穴一洗空	腥臊たる窟穴　一洗して空たり
太行北嶽元無恙	太行　北嶽　元より恙無し
更呼斗酒作長歌	更に斗酒を呼びて　長歌を作り
要遣天山健兒唱	天山の健兒をして唱わしむるを要めん

（殺気が黒々と砦に立ち込める中／我が宋王朝の軍は東のかなた、黄河に沿って陣を張る。／昼

には檄文を飛ばして敵の諸城を降伏させ／夜には貂の毛皮を脱いで降将を労わってやる。／我が将軍たちの馬小屋には汗血馬が控えており／勇猛な兵士たちの腰には虎皮の弓袋が下げられている。／階前には研ぎ澄まされた白刃が霜のようにきらりと光り／門外には長戟がずらりと林のように並んでいる。／北風が地に吹き付けて猛吹雪を巻き起こし／見る見るうちに白玉の花のような雪が、一丈の深さにまで降り積もった。／「鉄の鎧が冷たくて骨まで凍えそうだ」などと一体誰が言うものか／宋王朝への義、皇帝からの恩を思えば綿入れを着るように暖かいではないか。／生臭い敵の巣窟を一掃すれば／太行・北岳といった山々も平穏さを取り戻すことができる。／それから一斗の酒を持ってこさせて祝いの長歌を作り／天山の健児たちに歌わせようではないか。）

24　五月十一日夜且半夢従大駕親征盡復漢唐故地見城邑人物繁麗云西涼府也喜甚馬上作長句未終篇而覺乃足成之（巻十二）

（五月十一日夜且に半ばならんとするに、大駕の親征に従いて盡く漢唐故地を復すを夢む。城邑の人物の繁麗なるを見るに、云わく西涼府也と。喜ぶこと甚だしく、馬上に長句を作るも、未だ篇を終わらずして覺む。乃ち之を足成す。）

天寶胡兵陷兩京	天寶の胡兵　兩京を陷れしより
北庭安西無漢營	北庭　安西　漢營無し
五百年間置不問	五百年間　置いて問わざりしに
聖主下詔初親征	聖主　詔を下して　初めて親征す
熊羆百萬從鑾駕	熊羆　百萬　鑾駕に従い
故地不勞傳檄下	故地　檄を傳うるを勞せずして下る
築城絶塞進新圖	城を絶塞に築いて　新圖を進め
排仗行宮宣大赦	仗を行宮に排して　大赦を宣す
岡巒極目漢山川	岡巒　極目　漢の山川
文書初用淳熙年	文書　初めて用う　淳熙の年
駕前六軍錯錦繡	駕前の六軍　錦繡を錯え
秋風鼓角聲滿天	秋風　鼓角　聲　天に滿つ
苜蓿峰前盡亭障	苜蓿峰前　盡く亭障
平安火在交河上	平安火は　交河の上に在り
涼州女兒滿高樓	涼州の女兒　高樓に滿ち
梳頭已學京都樣	頭を梳って已に京都の樣を學ぶ

（天宝の昔、胡の兵が都を攻め落とした時から／北庭と安西（二つの都護府の治めた）地域で、漢軍の陣営はなくなった。／それより今まで五百年間、誰一人顧みもしなかった。／我が聖の君は詔を下し、今こそ親征したもうた。／熊のごとき勇士百万、みくるまに従って／漢・唐両朝のもとの領土は、檄をまわすまでもなく帰順した。／国の果ての境界線に築いた城の見取り図がもたらされ／行宮では儀仗兵が整列し大赦令が宣言された。／山や岡、目の届く限りは漢の土地／

公文書にも今初めてわが淳熙の年号が記される。／近衛の兵士たちの装束は錦のぬいとりうるわしく／太鼓と角笛の音は、秋風の中、空に満ちて響き渡る。／苜蓿峰のこなたは、どこもかしこも守備隊の営所があり／平安を報ずるのろしの煙は交河のほとりからここまで続く。／涼州のむすめたちは、二階家から鈴なりになってさし覗き／髪の結いよう、もうとっくに都のはやりをまねている。）

71　記九月三十日夜半夢（巻三十三）
（九月三十日夜半の夢を記す。）

一夢邯鄲亦壯哉	一たび邯鄲を夢む　亦た壯なる哉
沙堤金轡絡龍媒	沙堤　金轡　龍媒を絡う
兩行畫戟森朱戸	兩行の畫戟　朱戸に森たり
十丈平橋夾綠槐	十丈の平橋　綠槐を夾む
東閣群英鳴佩集	東閣の群英　鳴佩を集め
北庭大戰捷旗來	北庭の大戰　捷旗を來たす
太平事業方施設	太平の事業　方に施設されんとするに
誰遣晨雞苦喚回	誰か晨雞を遣て　苦だ喚かしめ回さしむるや

（邯鄲を夢にみると、やはり勇壮な様子だった。／砂で築いた城壁に沿って、金の轡をはめた駿馬が揃っている。／赤い門の両脇には装飾のある戟が立ち並び／長い橋の両側には緑のえんじゅが植わっている／砦の東閣には俊才が腰に帯玉を下げて集い／砦の北で大戦が起こると、素早く戦士たちを往来させる。／天下の大事業がまさに実行されようというこの時に／明け方の鶏を鳴かせ、私を夢から覚めさせたのは一体誰なのだ。）

75　五月七日夜夢中作二首 其二

霜露薄貂裘	霜露　貂裘に薄す
連年塞上留	連年　塞上に留む
蘆笳青冢月	蘆笳　青冢の月
鐵馬玉關秋	鐵馬　玉關の秋
振臂忘身憊	臂を振えば　身の憊るるを忘れ
憑天報國讎	天に憑りて　國讎に報いんとす
諸公方衮衮	諸公　方に衮衮たり
好運幄中籌	好運　幄中に籌る

（霜の冷たさが貂の衣に染み入るなか／長年にわたって我が軍は砦に留まっている。／古代の笛の根が響いて、月が墓を青く照らし出し／馬は鎧を付けたままで、砦で秋を過ごす。／私は腕を振り上げて激情を表し、身体の疲れももはや忘れ／天を頼みに、国の仇を討ちたいと願う。／

兵士たちは続々と集まり／天が我が軍に味方することを願い、幕中で謀をめぐらせているところだろう。）

これら 4 首では、総じて宋軍の勇ましい武具や、兵士たちの意気盛んな様子が具体的に描写されるが、それは陸游が 40 代の頃、短期間ではあったが実際に対金陣営の最前線である南鄭の幕府に行ったことがあったことに由来していると考えられる。

詩はすべて、宋王朝の勝利を力強く宣言することで締めくくられており、例えば 24 の詩には「涼州のむすめたちは、二階家から鈴なりになってさし覗き／髪の結いよう、もうとっくに都のはやりをまねている。」とあり、宋軍の勝利を楽観的に、当然のもののように述べている。陸游自身の愛国の志も、4 の詩の「「鉄の鎧が冷たくて骨まで凍えそうだ」などと一体誰が言うものか／宋王朝への義、皇帝からの恩を思えば綿入れを着るように暖かいではないか」という部分や、75 の詩の「私は腕を振り上げて激情を表し、身体の疲れももはや忘れ／天を頼みに、国の仇を討ちたいと願う。」という部分に、特に情熱的に述べられている。

また、71 の詩には「天下の大事業がまさに実行されようというこの時に／明け方の鶏を鳴かせ、私を夢から覚めさせたのは一体誰なのだ。」とあり、夢と現実の差の大きさを感じさせるような表現となっている。陸游は現実においては自身の積極的な対金政策が用いられることがなかったが、その分、夢の世界では陸游と同じように意気盛んな軍営、兵士たちを見ることによって、有り余るエネルギーを発散させていたのではないだろうか。

4.5.3 夢で金の占領下にある北方地域を訪れる

次に挙げるのは、現実では敵軍の占領下にあって訪れることのできない北方地域を夢の中で訪れ、目覚めてから現実との違いに憤りを新たにするというものである。以下、9,40,95,96 の 4 首を挙げる。

9　夢遊山水奇麗處有古宮觀云雲臺觀也（巻七）
（夢に山水の奇麗なる處に遊ぶに、古宮觀有り、云わく雲臺觀也と。）

神遊忽到雲臺宮	神遊　忽として到る　雲臺宮
太華彩翠明秋空	太華　彩翠　秋空に明らかなり
曲廊下闞白蓮沼	曲廊　下闞す　白蓮の沼
小閣正對青蘿峰	小閣　正對す　青蘿の峰
林間突兀見古碣	林間　突兀として　古碣を見
雲外縹緲聞疏鐘	雲外　縹緲として　疏鐘を聞く
褐衣紗帽瘦如削	褐衣　紗帽　瘦なること削の如し
遺像恐是希夷翁	遺像　恐るらくは　是れ希夷翁ならん
窮搜未遍忽驚覺	窮搜　未だ遍らずして　忽として驚き覺む
半窗朝日初曈曨	半窗　朝日　初めて曈曨たり

却思巉然五千仞　　却って思う　巉然たる五千仞
可使常墮戰塵中　　常に戰塵中に墮せ使む可きかと
小臣昧死露肝鬲　　小臣　死を昧して　肝鬲を露わにし
願扈鑾駕臨崤潼　　願わくは　鑾駕に扈いて　崤潼に臨まんことを
何當真過此山下　　何當か　真に過ぐるべし　此山の下
百尺嫋嫋龍旗風　　百尺　嫋嫋たる　龍旗の風

（夢の中に魂がさまよって、忽然と雲臺宮に辿り着いた。／太華山は青々と彩られ、秋空にくっきりと映えている。／曲がりくねった廊下の下には白蓮の沼が見え／小閣は青蘿の峰に向かい合っている。／林の間には高くそびえた古い石碑が見え／雲の向こうからは微かに鐘の音が聞こえる。／褐衣・紗帽の姿は筆刀のように痩せていて／もしや希夷翁の残像ではないかと疑った。／確かめようとするも、探し当てられないうちに突然はっと目が覚めてみると／窓の半ばあたりに朝日が見え、ちょうど夜が明けるころだった。／今改めて思う、あの高く険しい五千仞の山が／いつまでも胡の塵の中に堕ちていて良いものだろうかと。／私は死を賭して真心を明らかに示し／願わくは天子の親征に付き従って崤潼の地に出向きたいものだ。／この山の下を、いつか本当に通る日が来るだろうか／天子の御旗がずらりと並び、風を巻き起こす景色の中を。）

40　丙午十月十三夜夢過一大冢傍人爲余言此荆軻墓也按地志荆軻墓蓋在關中感嘆賦詩（巻十八）

（丙午十月十三夜、夢に一大冢を過ぐ。傍人、余が爲に言う、此れは荆軻の墓也と。地志を按ずるに、荆軻の墓は蓋し關中に在り。感嘆して詩を賦す。）

采藥遊名山　　藥を采りて　名山に遊ぶ
物外富真賞　　物外　真賞に富む
秋關策蹇驢　　秋關　蹇驢に策うち
雪峽蕩孤槳　　雪峽　孤槳を蕩す
還鄉忽十載　　還鄉　忽ち十載
高興寄遐想　　高興　遐想を寄す
夢行河潼間　　夢に行く　河潼の間
初日照仙掌　　初日　仙掌を照らす
坡陀荆棘冢　　坡陀　荆棘の冢
狐兔伏蓁莽　　狐兔　蓁莽に伏す
悲歌易水寒　　悲歌の易水寒く
千古見精爽　　千古の精爽を見る
國讎久不復　　國讎　久しく復せず
驚覺泚吾顙　　驚き覺めて　吾顙を泚す
何時真過兹　　何時か　真に兹を過ぎ
薄酹神所饗　　薄酹もて　神の饗くる所とならん

（薬草を取りに名山にやってくると／周囲のものは全て鑑賞に値する。／秋は山を、鈍い驢馬に鞭打って進み／冬は山峡を、ひとり船で舵を動かして流れゆく。／郷里に帰ってきて早くも十年が経ったが／南鄭の高興亭へ、はるか遠くに思いを馳せる。／昨夜は夢で河関、潼関の間を行くと／朝日が山岳を照らしていた。／険しい阪は荆棘の冢であり／狐や兎が草むらに隠れている。／荊軻の悲歌に歌われたとおりに易水は寒々しく／千古の昔の空気が、今も明瞭に感じられた。／しかしながら現実では、荆棘冢がある地は未だ国土として恢復されない。／その事実に恐れ、目覚めると情けなさに汗をかいた。／いつか、実際にあの場所へ行って／酒を地に注ぎ、荊軻を祭ろうではないか。）

95　　十二月二日夜夢與客並馬行黄河上憩於古驛二首 其一（巻四十九）
（十二月二日夜、夢に客と馬を並べて黄河の上を行き、古驛に憩う。）

並轡徐驅百里中	轡を並べて　徐驅す　百里の中
雲開太華翠摩空	雲開きて　太華　翠にして空に摩す
是間合有神靈在	是の間　合に神靈の在る有るべきも
七十餘年墮犬戎	七十餘年　犬戎に墮つ

（客と馬を並べて、百里の間、ゆっくりと馬を走らせた。／雲間に見えた太華山は、青々として空に迫るようだ。／この地には神々が住んでいるに違いないけれども／建炎四年に張浚が敗戦して以来、もう七十年余りのあいだ金に占領されたままになっている。）

96　　十二月二日夜夢與客並馬行黄河上憩於古驛二首 其二

河濱古驛闢重門	河濱の古驛　重門を闢き
雉兔紛紛黍酒渾	雉兔　紛紛たりて　黍酒渾る
吾輩豈應徒醉飽	吾輩　豈に應に　徒らに醉い飽きん
會傾東海洗中原	會ず東海を傾け　中原を洗わん

（黄河沿いの古い駅舎では、門が開け放しになって門番も立っておらず／雉や兔が多く住み付いて、きびの酒が放置されて濁っている。／私はどうしていたずらに酒ばかり飲んで、この状態を放っておけるだろうか／必ず東の海を引っくり返して、この地の金軍を一掃してやるのだ。）

これらの 4 首においては、それぞれ詩の前半で、夢の中で訪れた地の素晴らしさを細かく描写したうえで、後半では目覚めてからの落胆、憤慨を述べるという構成になっている。

例えば 9 の詩には「今改めて思う、あの高く険しい五千仞の山が／いつまでも胡の塵の中に墮ちていて良いものだろうかと。／私は死を賭して真心を明らかに示し／願わくは天子の親征に付き従って崤潼の地に出向きたいものだ。」、40 の詩には「しかしながら現実では、荆棘冢が

ある地は未だ国土として恢復されない。／その事実に恐れ、目覚めると情けなさに汗をかいた。／いつか、実際にあの場所へ行って／酒を地に注ぎ、荊軻を祭ろうではないか。」、96 の詩には「私はどうしていたずらに酒ばかり飲んで、この状態を放っておけるだろうか／必ず東の海を引っくり返して、この地の金軍を一掃してやるのだ。」とあり、全て強気に抗金の志を宣言することで締めくくられている点では、4.5.2 で挙げた詩における愛国の憤慨の述べられ方と共通している。

4.5.4 考察

以上、夢の詩においては愛国の憤慨はどのように表現される傾向があるのかについて、夢の詩に特徴的な、夢の詩であるからこそ用いることができる二通りの形式に焦点を当てて分析した。どちらの形式の詩においても、愛国の憤慨がストレートに述べられており、先行研究においていわゆる愛国詩として扱われてきたことにも納得できる。これらの詩においては、陸游が「自分は愛国の高い志を持っているのだ」という自尊心を維持することによって、充実感を得ていたと考えることができる。

しかしながら、このようないわゆる愛国詩だけに注目して、陸游が若い頃から晩年に至るまで、同質の憤慨を単純に持ち続けた愛国詩人である、と単に言ってしまって良いものだろうか。これまで 4.1~4.5 において取り上げてきたように、陸游は夢の詩において多岐に渡るテーマを展開した、奥深い人物であるのに加え、陸游とて人間であるからには、身体・精神の老いに伴って、その愛国の憤慨も若い頃の純粋さを保っていくのが容易ではなくなってくるのが普通である。それでは、晩年の彼は自らの「愛国の憤慨」とどう向き合ったのだろうか。

私はこのような疑問を抱いたため、次の第 5 章においては、陸游の夢の詩に頻繁に登場する「愛国」と「老い」のテーマに焦点を当て、彼が避けられない「老い」とどのように向き合い、愛国の憤慨を持ち続ける自分の姿をどう捉えたのかを、夢の詩の分析を通して考察を加えることとしたい。（もちろん、1.3.3 でも述べたように、「老い」というテーマは陸游という詩人に限らず普遍的なテーマであり、夢の詩以外の詩にも多く登場する。しかしながら陸游の場合には、これまでの研究において、愛国の憤慨を「持ち続けた」ことが強調されるだけにとどまっており、「愛国」というテーマに「老い」がどう関係するかという点については、普遍的な問題でありながら詳しく触れられてこなかった傾向がある。よって、本論文の主題である「夢の詩」を手掛かりに、ここで改めて陸游の「愛国」と「老い」の問題について、考察を加えたいと考える。）

4.6 小結

第 4 章では、官途での挫折を経験し、現実の世界に「不充実」の多かった陸游が、夢の中でどのように充実感を得たかという観点で、夢の詩を分析してきた。

まず 4.1 では陸游の夢の詩における「望郷」を扱い、赴任の旅に出ることの多かった陸游が、実際には行くことのできない郷里を夢で訪れたり、郷里の人々と夢で会話することによって、充

実感を得ていたことが確認できた。次に 4.2 では夢の詩における「過去」の回想というテーマをについて、特に充実していたと考えられる蜀にいた時代の回想に焦点を当てて分析し、陸游が蜀の地を離れてからも、長きに渡って当時の思い出、友人たちを非常に大切にしていたということを読み取ることができた。4.3 では夢の詩における「人との交遊」というテーマを、客人との「集い」、また新しい人物との「出会い」という観点に分けて分析し、現実では必ずしも友人たちとの交遊を充実させることができなかった晩年の陸游が、夢の中でいかに充実した交遊の機会を得たかを考察した。また、4.4 では夢の詩における「仙界および道教思想」というテーマを扱い、陸游が夢で実際に仙界を訪れ、仙界の人々と交流し、帰属意識を強く持つことによって、かなり大きな充実感を得ていたということ、また彼の詩の独創性を捉えることができた。さらに、4.5 では夢の詩における「愛国の憤慨」は、どのように表現される傾向があるのかについて、夢の詩に特徴的な二通りの形式に焦点を当てて分析し、彼が「自分は愛国の高い志を持っているのだ」という自尊心を維持することによって、充実感を得ていたことを確認した。

これらのような考察を経て、陸游が夢の中の世界に大いに充実感を得ていたこと、また最晩年に至るまで、夢の世界に新鮮さや驚きを求めていたことが分かった。陸游と同年代の詩人であり、また友人でも会った楊万里には、「臘夜普明寺睡覺二首 其二」という詩に「老い去りて夢成り難し」という句があるが[28]、陸游はこれと正反対であったと言える。

また、これまでの各項の考察においても触れたが、夢の詩を取り上げるだけでは考察に不十分であると考えられる点も当然ある。例えば、陸游と郷里との関係性について深く考えるには、夢の詩にこだわらず、もっと広く望郷の詩、または郷里に帰ってからの詩を取り上げる必要があるだろうし、晩年の陸游がどのような人間関係を持っていたのかについても、具体的には夢の詩以外の詩も合わせて読まなければわからない部分がある。陸游と仙界および道教思想との結びつきについては、さらに多くの文献を読む必要がある。ただ、夢の詩における多岐にわたるテーマや、各詩の場面の独創性、またユーモアを感じさせるような描写を読み解くことで、陸游の人間像を新たな側面から捉えることに繋がったといえる。

---

[28] 臘夜普明寺睡覺二首　（宋·楊萬里）『誠齋集』（巻一）

其一

旅夢忘爲客，檐聲忽唤愁。親庭未差遠，佛屋不勝秋。

只麽功名是，如今悟解不。十年行路飽，誰不遣吾休。

其二

作臘聊村酒，依人只短檠。略無更可數，聽到雨無聲。

犬吠知何苦，雞寒肯更鳴。生來眠不足，老去夢難成。

第5章 晩年の陸游は自らの「愛国の憤慨」とどう向き合ったのか―夢の詩の観点から―

5.1　夢の詩において「老い」はどう表現されるか

5.1.1 夢の詩における「老い」というテーマについて

この第 5 章においては、第 4 章における夢の詩の分析のうちでも「愛国」のテーマに焦点を当て、陸游の夢の詩に頻繁に登場する「愛国」と「老い」という観点から、彼が避けられない「老い」とどのように向き合い、愛国の憤慨を持ち続ける自分の姿をどう捉えたのかを、夢の詩の分析を通して考察を加えることとしたい。

まず、夢の詩において「老い」というテーマがどのように表現されているのかについて、5.1.1 では老いをやや悲観的に捉えた夢の詩を、5.1.2 では老いを敢えてユーモラスに捉えた詩を取り上げることで分析し、陸游が自らの老いとどのように向き合ったのかを二つの角度から考察することとする。

5.1.2 老いをやや悲観的に捉えたもの

陸游の夢の詩において、老いの要素が最初に登場するのは次の 44 の詩である。

44　　記夢（巻二十一）
（夢を記す。）

夢裏都忘兩鬢殘	夢裏　都て忘る　兩鬢の殘わるるを
恍然白紵入長安	恍然として　白紵もて長安に入る
硾教紙熟修温卷	教を硾れ　紙熟し　温卷を修め
僦得驢騎候熱官	僦うを得　驢騎　熱官を候う
紅葉滿街秋著句	紅葉　街を滿たして　秋は句を著し
青樓燒燭夜追歡	青樓　燭を燒きて　夜は歡を追う
如今萬事消除盡	如今　萬事　消除し盡くし
老眼摩挲静處看	老眼　摩挲して　静處より看る

（夢の中では老いた自分の姿を忘れ／忽然と、科挙受験前の時期、白い着物を着て長安を訪れた。／学問の教えを乞うために門を叩いてまわり、紙をぼろぼろにして温巻の準備をし／借りてきた驢馬で、権勢のある官僚のもとを訪問する。／紅葉が街に満ちる秋には詩を書き／燭台に明かりをともした妓楼で夜を飲み明かす。／そのような華やかな生活は、今ではすべて消えてなくなり／老いて霞んだ目で、世間の様子を隠居の身で見守るのみだ。）

この詩は 66 歳の頃に書かれたもので、陸游が科挙を受けに都へやって来た当時を夢で訪れる場面が描かれており、当時の士大夫が科挙の受験期間をどのように過ごしたのかが分かるという点で興味深い。老いについては、現在の自分は「老いて霞んだ目で、世間の様子を隠居の身で見守るのみだ」とあり、若かった当時と対照的な衰えた姿で捉えられている。ここでは身体面での「老い」を表現しているが、これ以後の詩においては、精神面での「老い」を詩に述べたものが増えてくる。

以下、年代順にまず 80,88 の 2 首を挙げる。

80　夢中遊禹祠（巻三十六）
（夢中、禹祠に遊ぶ。）

湖上無人月自明	湖上　人無くして　月自ずから明るし
夢中彷彿得閑行	夢中　彷彿として　閑行を得る
庭空滿地楸梧影	庭空しくして　地に滿つ　楸梧の影
風壯侵雲鼓角聲	風壯にして　雲を犯す　鼓角の聲
世異客懷增慘愴	世異なりて　客懷　慘愴を增す
秋高歲事已崢嶸	秋高くして　歲事　已に崢嶸たり
長歌忽遇騎鯨客	長歌し　忽として遇う　騎鯨の客
喚取同朝白玉京	同朝を喚取す　白玉の京

（湖の上には人気がなく、月の明るさが際立っている。／夢の中、ぼんやりとしながら、ひとり閑かに道を行く。／庭は閑散として、ただ葉の落ちた楸梧の影だけが地面に映っており／強い風が吹くなか、陣中の太鼓と笛の音が雲にまで刺さるように聞こえてくる。／世の中が移り変わっていくほどに、私の胸の内は悲壮なものになり／秋が盛りを迎えると、一年はあっという間に過ぎ去ってしまうのを寂しく思う。／声を放って詩を歌っていると、忽然と李白に会い／私を呼び止めて、天帝の居場所へと誘った。）

88　夢題驛壁（十二月二十七日夜）（巻四十二）
（夢に驛壁に題す。（十二月二十七日夜））

半生征袖厭風埃	半生　征袖　風埃を厭うに
又向關門把酒杯	又た關門に向かいて　酒杯を把る
車轍自隨芳草遠	車轍　自ら隨う　芳草の遠きに
歲華無奈夕陽催	歲華　無奈せん　夕陽の催るを
驛前歷歷堠雙隻	驛前　歷歷たり　堠の雙隻たる
陌上悠悠人去來	陌上　悠悠たり　人の去來す

不爲途窮身易老　　途に窮すを爲さざるに　身は老い易し
百年回首總堪哀　　百年　回首して　總べて哀に堪う

（私の人生の半分は旅先にあって、旅の塵を嫌ってきたが／今また酒杯を手に取って、関所へと行く。／車のわだちは芳しい草の香りが遠くへと漂うに従う。／時が過ぎて夕陽が迫りくるのをどうしようもない。／駅の前から道沿いに一里塚が並び、／小道には人々が悠々と行き来している。／終着点を見ることなく、この身は老いてしまい／これまでの長い人生を回想すると、すべて哀切なものに感じられる。）

80 の詩では「世の中が移り変わっていくほどに、私の胸の内は悲壮なものになり／秋が盛りを迎えると、一年はあっという間に過ぎ去ってしまうのを寂しく思う」、88 の詩では「終着点を見ることなく、この身は老いてしまい／これまでの長い人生を回想すると、すべて哀切なものに感じられる」とそれぞれあり、身体の老いに伴って、精神面でも特に大きな理由のない愁いや悲しみに取りつかれてしまう姿が寂し気に述べられている。

続いて 93.94 の 2 首を挙げる。

93　病足晝卧夢中譫諄乃誦尚書也既覺口占絶句二首 其一（巻四十七）
（病足にて晝卧し、夢中に譫諄たりて乃ち尚書を誦する也。既に覺めて絶句二首を口占す。）

唐虞已遠三千歲　　唐虞　已に遠し　三千歲
每誦遺書涕泗濟　　遺書を誦する每に　涕泗濟す
濟濟九官十二牧　　濟濟たり　九官　十二牧
我獨不得居其間　　我獨り　其間に居るを得ず

（堯舜の時代は、さかのぼること今から三千年も前になるが／前人の遺した書物を越えに出して読むたびに、涙を流さずにいられない。／舜の設置した九の大臣、十二州の長官たちがずらりと並ぶなか／私だけがその中に入りそびれたのだ。）

94　病足晝卧夢中譫諄乃誦尚書也既覺口占絶句二首 其二

人能不食十二日①　　人　十二日食わざるを能くするも
惟書安可一日無　　惟だ書のみは　安んぞ一日として無かる可けんや
唐虞雖遠典謨在　　唐虞　遠しと雖も　典謨在り
病卧蓬窗時囁嚅　　病卧　蓬窗　時に囁嚅す
按：① 自注：趙岐、柳開皆嘗不食十二日不死。
（趙岐、柳開は皆嘗て、十二日食わずして死せず。）

（人は十二日間食べなくても生きていられるらしいが／書物無くしては、一日たりとも生きていられない。／堯舜の時代は遠いと雖も、『尚書』の「堯典」「舜典」といった書物は今にも残っている。／草窓のそばで病に臥せりながら、時々ぶつぶつと独り言を言う。）

これら 93，94 の 2 首は、陸游が病で臥せっていた時に、昼の夢うつつに書かれた詩である。2 首目にある「人は十二日間食べなくても生きていられるらしいが／書物無くしては、一日たりとも生きていられない」という部分は、いかにも読書家であった陸游らしい内容で印象的である。しかしながらその他の部分では、例えば 1 首目の「前人の遺した書物を越えに出して読むたびに、涙を流さずにいられない」「私だけがその中に入りそびれたのだ」という、自分の官途における挫折を悲観的に捉えた内容や、また 2 首目の「草窓のそばで病に臥せりながら、時々ぶつぶつと独り言を言う」という、老いて病気がちになった自分を自嘲気味に捉えた内容が目立つ。

精神が老いたことにより、何となくぼんやりとしてしまう様子は、次の 98 の詩における「年月を経ると、酒がなくとも陶然とした気分になる」という部分にも表れている。

98　記夢（巻五十）
（夢を記す。）

信命從來不問天　　命を信じ　從來　天を問わず
經旬無酒亦陶然　　旬を經るに　酒無くして　亦た陶然たり
夢爲估客揚州去　　夢に估客と爲り　揚州へ去く
水調聲中月滿船　　水調の聲中り　月　船に滿つ

（これまでずっと運命のままに従い、天を疑ったことはなかった／年月を経ると、酒がなくとも陶然とした気分になる。／夢で（蘇軾の詩にあるような）行商になり、揚州へ行くと／（杜牧の詩にあるように）「水調歌頭」が歌われる中、月の光が船に満ちている。）

更に、その 1 年後に書かれた 102 の詩では、陸游は老いた自分自身の姿を道端に枯れ落ちた薔薇の花に例えていると考えられ、そのうえで臨安に赴任することへの消極的な気持ちを述べている。

102　二月二日夢中作（巻五十三）
（二月二日、夢中の作。）

零落薔薇委道傍　　零落の薔薇　道傍に委え
更堪微雨漬殘香　　更に　微雨の殘香を漬すに堪う

象床玉尺人何在	象床　玉尺の人　何くにか在る
腸斷新裁錦一方	腸斷　新裁す　錦一方

（枯れ落ちた薔薇の花は道端にしおれ／そのうえ、残われた香りを弱い雨が水に浸してしまうのをじっと忍んでいる。／象牙の寝台、白玉でできた尺を持った仙人はいったいどこにいるのだろうか／悲しみながら、新たな一地域（臨安）に赴任する。）

また、陸游は最晩年に至るまで、多岐に渡るテーマの夢の詩を書いたのであるが、次の 123 の詩には「今や新しい場所へ行くのが面倒になってきて、かつて来たところをもう一度訪れる」とある。

123　夢行益昌道中有賦（巻六十三）
（夢に益昌の道中を行き、賦する有り。）

朱棧青林小益西	朱棧　青林　小益の西
早行遥聽隔村雞	早行　遥かに聽く　隔村の雞
龍門閣畔千尋壁	龍門閣の畔　千尋の壁
江月亭前十里堤	江月亭の前　十里の堤
酒舍胡姬歌折柳	酒舍の胡姬　折柳を歌い
江津洮馬惜障泥	江津の洮馬　障泥を惜しむ
倦遊重到曾來處	遊ぶを倦い　重ねて到る　曾て來たりし處
自拂流塵覓舊題	自ら流塵を拂い　舊題を覓む

（小益（四川省）の西には赤い橋と青い林が見える。／朝早く出立し、隣村から鶏の鳴く声が聞こえる。／龍門閣の傍らには高い岩壁がそびえ／江月亭の前には長い土手が続いている。／酒店では店の女性が折柳の楽府を歌い／洮河の馬は泥よけを惜しんでいる。／今や新しい場所へ行くのが面倒になってきて、かつて来たところをもう一度訪れる。／旅の塵を払い落とし、以前にも使った詩題（→108 夢行小益道中二首）をもう一度使うことにする。）

陸游は、実際にはこの前後の夢の詩においても、実に様々な場所を訪れ、様々な人物との交遊の機会を得ているのだが、自らの老いた姿、精神をふと顧みたとき、この 123 の詩にあるように、新しい場所、新しい出会いを得ることが億劫になることもあったのかもしれない。

5.1.3 老いを敢えてユーモラスに捉えたもの

4.2.1 では老いた自分の身体・精神を素直に捉えた詩を取り上げたが、その分、どれも比較的悲観的で寂しい印象があった。しかしながら、陸游は常に自分の老いに対して悲観的であったわけではなく、彼らしい割り切った表現で、老いを敢えてユーモラスに捉えようとした詩もいくつ

かある。

例えば次の 81,111 の 2 首がある。

81　夢觀牡丹（巻三十七）
（夢に牡丹を觀る。）

忘却晨梳滿把絲	忘却せん　晨梳の把絲に滿つを
楝花嫌不似胭脂	楝花　胭脂に似ざるを嫌う
起來一笑看清鏡	起來　一笑し　清鏡を看る
惟插梨花却較宜	惟だ梨花を插すは　却って較宜なるのみ

（朝、髪を櫛で梳いたら、髪の束が抜けて櫛に沢山引っ掛かることなど忘れてしまおう／そんなことは、薄紫の楝の花が、紅でないことを嫌うようなものだ。／起き上がり、鏡に映る自分の姿を笑い飛ばす。／白髪になるのも、真っ白な梨の花を頭に挿しているようで、却って好ましいではないか。）

111　明日復理夢中意作（巻五十八）
（明日、復び夢中の意を理めて作る。）

白盡髭鬚兩頰紅	髭鬚を白盡して　兩頰紅なり
頽然自以放名翁	頽然　自ら放を以て　翁に名づく
客從謝事歸時散	客は　事を謝して歸りし時從り散じ
詩到無人愛處工	詩は　人の愛する處無きに到りて工なり
高挂蒲帆上黄鶴	高く蒲帆を挂げて　黄鶴に上り
獨吹銅笛過垂虹	獨り銅笛を吹きて　垂虹を過ぐ
閑人浪迹由來事	閑人浪迹　由來の事
那計猿驚蕙帳空	那ぞ計らん　猿驚きて蕙帳空しからんとは

（口髭、頬髯は真っ白になり、両頬は紅である。／衰頽して自分で翁に放と名を付けた（すなわち放翁）万事を断って官途から帰った時から客は散じてしまい／詩は誰も愛するものがなくなった境地に達してやっと巧みになった。／蒲席の帆を高く掲げて黄鶴楼に登ったり／ひとり銅の笛を吹き鳴らして垂虹橋のあたりを通る。／暇な人間が、處定めずあちこちをぶらつくのは、よくありがちなことだ／隠者がいなくなり蕙帳が空になって猿が驚いたと昔の人は言ったが、そんなことに関わり合ってはいられないのだ。）

これらの詩では、陸游は自らの老いた姿を却って好ましい翁の姿として捉え、軽い調子の詩に描いている。

さらに晩年の作では 156 の詩がある。

156　十月二十四日夜夢中送廬山道人歸山（巻八十五）
（十月二十四日夜、夢中、廬山道人の歸山するを送る。）

平生不到三公府	平生　至らず　三公の府
晩歳歸來五老庵	晩歳　歸來す　五老の庵
夙士極知成殿後	夙士の極知　殿後を成し
吾曹所頼作司南	吾曹の所頼　司南を作す
孤舟夜泊灘聲惡	孤舟に夜泊し　灘聲惡く
小甕晨香雪意酣	小甕の晨香　雪意酣なり
笑語床隅拄杖子	笑語す　床隅に杖子を拄きて
即今惟汝是同參	即ち今は　惟だ汝のみ是れ同參なりと

（あなたは平生三公の位に登ることはなく／晩年は廬山の東北にある五老峰に庵を構えて住んでいる。／以前、あなたは行軍の殿を務められるほどだったが／我々の頼るところといえば、指南（方位磁石）だけだ。／しかし今、ぽつんと船の中で夜泊すると、水の音が忌まわしく／朝、小さな甕に残る酒の香り、雪が今にも降ろうとしている。／寝床の隅に杖を立て掛けて戯れを言う／今はもはや、お前だけが私の連れ合いだ、と。）

この詩の前半部分は難解で解釈が難しいが、後半部分においては「寝床の隅に杖を立て掛けて戯れを言う／今はもはや、お前だけが私の連れ合いだ、と」とあり、杖に向かって話しかけるというユーモラスな場面でありながらも、やはり最晩年のどこか寂しげな様子を感じさせる。

5.1.4 考察

以上、夢の詩における老いの要素について、5.1.2 では老いをやや悲観的に捉えたものを、5.1.3 では老いを敢えてユーモラスに捉えたものをそれぞれ分類して取り上げ、夢の詩において陸游が「老い」とどう向き合ったかを読み取った。

ここでは 2 種類に分類してきたが、年代順にみるとこれらは入り混じって登場する。[29]例えば、5.1.2 で取り上げた 80 の詩において老年の愁いを述べた 1 年後には、5.1.3 で取り上げた 81 の詩において老いた自分の姿をユーモラスに述べており、またその更に 2 年後には 5.1.2 で取り上げた 88 の詩が書かれるという具合である。陸游は老いた自分の姿をただ悲観してばかりいるのではなく、時には夢の中で敢えてユーモラスに楽観的に老いを捉えようともしたが、やはり現実の世界では老年の寂しさから完全に逃れることはできなかったようである。

[29] 詳しくは 5.3 で取り上げることとする。

5.2　夢の詩において「愛国」と「老い」はどう関係するか

5.2.1 夢の詩における「愛国」と「老い」の関係性について

これまで、4.5 では夢の詩における「愛国」を、5.1 では夢の詩における「老い」を別のテーマとして扱ってきたが、実際には、陸游の夢の詩においては「愛国」に「老い」のテーマが伴われ、両テーマが重なり合って登場する詩が多くある。よって 5.2 では、夢の詩において「愛国」に「老い」のテーマが伴われたとき、愛国の憤慨はどのように表現され、また「いわゆる愛国詩」はどのような変化を見せるのかについて、5.2.2、5.2.3 の 2 つの分類に基づいて考察する。

5.2.2 「老い」てなお、夢で「愛国」を維持

まず 5.2.2 では、夢の詩において「老い」という要素がありながらも、自らの「愛国の憤慨」は「老い」などに左右されることなく今なお健在であり、揺らぐことはない、と改めて強調した詩を取り上げる。

例えば次の 2 の詩がある。

2　　記夢（巻二）
（夢を記す。）

夢裏都忘困晩途	夢裏　都て忘る　晩途に困すを
縱横草疏論遷都	縱横　草疏し　遷都を論ず
不知盡挽銀河水	知らざるや　盡く銀河水を挽かば
洗得平生習氣無	洗い得て　平生の習氣無し

（夢の中では、老年の苦しみを全て忘れ去り／自由自在に皇帝に遷都を上奏する。／知らないではないだろう、銀河水を挽けば／俗世の臭気を洗い流せよう。）

2 の詩においては、「夢の中では、老年の苦しみを全て忘れ去り／自由自在に皇帝に遷都を上奏する」とあるが、このように現実の老いた自分を夢の中では忘れ去って、自由自在に戦場を駆け回る、というような内容は、他の詩においてもよく登場する。

次の 29 の詩においても、「今は老いさらばえて病んだ身を床に横たえているものの／いざというとき腕をまくり出征軍に加わる覚悟はある」としたうえで、過去に訪れた前線地域である南鄭の軍営を、夢の中で再訪している。また、陸游は実際に南鄭で虎を殺したことがあり、自身の武勇を誇る詩を繰り返し書いているが、この夢の詩もその実際の場面の再現である。

29　　十月二十六日夜夢行南鄭道中既覺恍然攬筆作此詩時且五鼓矣（巻十四）

（十月二十六日夜、夢に南鄭道中を行く。既に覺めて恍然たり、筆を攬りて此詩を作るに、時且に五鼓ならんとす。）

孤雲兩角不可行	孤雲　兩角　行く可からず
望雲九井不可渡	望雲　九井　渡る可からず
嶓冢之山高插天	嶓冢之山　高くして天に插し
漢水滔滔日東去	漢水　滔滔　日に東に去る
高皇試劍石爲分	高皇　劍を試み　石爲めに分る
草沒苔封猶故處	草沒し苔封じて　猶お故處にあり
將壇坡陀過千載	將壇　坡陀たり　千載を過ぐ
中野疑有神物護	中野　疑うらくは神物の護有るかと
我時在幕府	我時に幕府に在り
来往無晨暮	来往して　晨暮と無し
夜宿沔陽驛	夜は宿す　沔陽驛
朝飯長木鋪	朝に飯す　長木鋪
雪中痛飲百榼空	雪中　痛飲して　百榼空しく
蹴踏山林伐狐兔	山林を蹴踏して　狐兔を伐つ
躭躭北山虎	躭躭たり　北山の虎
食人不知數	人を食らうこと　數を知らず
孤兒寡婦讎不報	孤兒寡婦　讎　報ぜず
日落風生行旅懼	日落ち風生ずれば　行旅懼る
我聞投袂起	我聞いて　袂を投じて起ち
大呼聞百步	大呼すれば　百步に聞こゆ
奮戈直前虎人立	戈を奮って直ちに前めば　虎は人立す
吼裂蒼崖血如注	吼は蒼崖を裂き　血は注ぐが如し
從騎三千皆秦人	從騎三千　皆く秦人
面青氣奪空相顧	面は青く　氣奪われて空しく相顧みる
國家未發渡遼師	國家未だ發せず　渡遼の師
落魄人間傍行路	人間に落魄して行路に傍う
對花把酒學醞藉	花に對して酒を把り醞藉を學ぶ
空辱諸公誦詩句	空しく諸公の詩句を誦するを辱なくす
即今衰病臥在床	即今　衰病し　臥して床に在り
振臂猶思備征戍	臂を振るって猶お思う　征戍に備わらんことを
南人孰謂不知兵	南人　孰か謂う　兵を知らずと
昔者亡秦楚三戸	昔者　秦を亡ぼせしは楚の三戸なり

（孤雲と両角の山々を越えることはとてもできまい／望雲や九井の早瀬もとうてい渡れない。／嶓冢の峰は一層高く天に突き刺さる勢いで／そこを発する漢水は来る日も来る日もどうどう

と東の方へ流れゆく。／漢の高祖が試しに切った岩は真二つに裂け割れて／草に隠れ苔にとじられ昔のままに今もある。／将軍壇は千年の月日の後もけわしく立ち／草原の中ほど、神々が守りたもうかといぶかられる。／その時私は本営におり／朝な夕なにこの道を通ったことであった。／沔陽の宿次では一夜を明かし／長木の継ぎ立て場で朝食を取った。／雪の降る日は痛飲するほどに百個の器を空にして／山林をふみしだき狐や兎の狩りをした。／恐ろしい目つきの虎が北山にいて／人を食い殺した数は知れない。／後に残った孤児とやもめの仇はまだ取れず／日が落ち風が立つ頃、旅人たちの恐怖は増した。／これを聞いた私は袂を翻してすっくと立ち／百歩の先まで聞こえる大声を上げた。／戈をにぎり勇ましく突進するや、虎は両足で立ち／吠えたける声に山壁は避け、血はどくどくと流れ出た。／後に従う三十騎はすべてが秦のものだったが／顔は青ざめ肝を失って目と目を見合わすばかりであった。／我が国は今もなお遼を渡る遠征軍を発せずにいる。／私は浮世に落ちぶれた全くの傍観者になれ果てた。／花を愛で、酒杯を手に月並みの暮らしをしている。／お偉方が詩を褒めてくださるだけの話である。／（しかしながら、）今は老いさらばえて病んだ身を床に横たえているものの／いざというとき腕をまくり出征軍に加わる覚悟はある。／江南のものだって戦ができぬとは誰が言う／昔秦を亡ぼしたのは楚の国の三家族だったじゃないか。）

次の 38 の詩も同様に、老いてからも夢で南鄭を訪れる、という内容の詩の一つである。

38　頻夜夢至南鄭小益之間慨然感懐二首 其一（巻十八）
（頻りに夜、夢に南鄭小益の間に至る、慨然として感懐す。）

身似庵居老病僧	身は庵居の老病僧に似て
罷參不復繫行縢	參ずるを罷め　復び行縢を繫がざるも
夢中忽在三泉驛	夢中　忽として三泉驛に在り
庭樹鳴梟鬼弄燈	庭樹　梟を鳴かしめ　鬼　燈を弄ぶ

（私は隠居している老病僧のようだ／出仕をやめ、旅のための行縢を付けることもない。／ところが、夢中突然南鄭の宿に至った。／庭の木には（不吉な）梟が鳴き、鬼神が灯りをちらつかせる。）

また、次の 56，59 の 2 首は 1193 年、陸游が 69 歳の頃に書かれた詩であるが、56 の詩には「清夢猶成塞上遊」、59 の詩には「夢中猶看洛陽花」とあり、老いてなお、夢の中で愛国の志を高く持ち続けていることが、勇ましい表現で強調されている。

56　枕上述夢（巻二十七）
（枕上にて夢を述ぶ。）
題注：五月十二日雞鳴時作（五月十二日、雞の鳴く時の作。）

江湖送老一漁舟　　江湖に老を送る　一漁舟
清夢猶成塞上遊　　清夢　猶お成す　塞上の遊
生馬駒馳鐵蹏跪　　生馬　駒馳　鐵蹏の跪
古鐃歌奏錦衣褥　　古鐃　歌奏　錦衣の褥
玉關雪急傳烽火　　玉關に雪急なりて　烽火を傳え
青海雲開見戍樓　　青海に雲開きて　戍樓を見る
白首不侯非所恨　　白首　侯せざるを恨む所に非ず
咿嚶床簀死堪羞　　咿嚶　床簀　死して羞に堪えん

（漁船にゆられ、官界から退いて老後の生活を送っているが／今でもすがすがしい夢の中では、敵国と対峙する城塞に行く。／若い馬を勢いよく走らせ、鉄の蹄も曲がらんばかりであり／戦場に銅鑼を打ち鳴らす兵士は、錦の衣を身にまとっている。／ところが、突然陣営には猛吹雪が起こって、敵の襲撃を知らせる烽火が伝えられると／雲間からはえびすの陣営が見えた。／老いて爵を受けていないことを恨みはしないが／寝床に呻く、死んでもこの屈辱に耐えることなどできないと。）

59　夢至洛中觀牡丹繁麗溢目覺而有賦（巻二十七）
（洛中に至るを夢みるに、牡丹の繁麗にして目に溢るを觀、覺めて賦する有り。）

兩京初駕小羊車　　兩京　初めて駕す　小羊の車
憔悴江湖歲月賒　　江湖に憔悴し　歲月賒し
老去已忘天下事　　老い去りて　已に天下の事を忘るるも
夢中猶看洛陽花　　夢中　猶お看る　洛陽の花
妖魂艶骨千年在　　妖魂　艶骨　千年在るも
朱彈金鞭一笑譁　　朱彈　金鞭　一笑して譁し
寄語氈裘莫癡絶　　氈裘に寄語す　癡絶する莫れ
祁連還汝舊風沙　　祁連より　汝を還さん　舊の風沙へと

（開封と洛陽の両都で小羊の車に乗って（幼年時代を過ごして）から／長らく俗世間に身を置いてきた。／年老いて既に天下に関心を失いつつあるが／夢の中ではなお、北方の洛陽の花を見る。／彷徨う魂、埋まった骨が、千年の都には残っているが／朱塗りの弓を背負い、金の鞭を奮って、すべて一笑に付すのみだ。／夷狄の地に取り残された人々に伝言してほしい、「いつまでも夷狄の好きにはさせません／夷狄の地から、いまにあなた方を故郷の地に帰還させましょう」と。）

ここで、124,125 の詩に注目する。

124　　記夢二首 其一（巻六十三）
（夢を記す。）

少日飛揚翰墨場　　少日　翰墨場に飛揚し
憶曾上疏動高皇　　憶ゆ　曾て上疏し高皇を動かすを
寧知老作功名夢　　寧んぞ知らん　老いて作す　功名の夢
十萬全裝入晉陽　　十萬　全裝し　晉陽に入る

（若い頃、宮廷の翰林院に取り立てられて活躍し／かつて献言して高皇に用いられたこともあったが／老いてなお、功名を成す夢を見るとは思いもしなかった。／武具を完全に身に着けた十万の軍を率いて、晉陽（山西省太原市）に入ろうとは。）

125　　記夢二首 其二

老來百事不關身　　老來　百事　身に關せず
北陌東阡一幅巾　　北陌　東阡　一幅の巾
忽夢行軍太行路　　忽として夢に行軍す　太行路
不惟無想亦無因　　惟わず　想無く亦た因無しとは

（年老いてからというもの、世の中のあらゆることは私の身には無関係になり／南北に通る道の北の端、東西に通る道の東の端に住み、頭巾を被って隠居しているが／突然、夢で太行路（山西省、河南省、河北省の三つの省の境界部分に位置する）に軍を率いた。／夢に「想」も「因」も関係ないとは思えない（関係しているに違いない。））

これらの2首においても、現実の老いた自分が夢でなお功名を立て愛国の志を成そうとした、という点では、これまでに挙げてきた詩における「老い」と「愛国」の関係性と共通している。しかしながら、現実の老いを忘れたような夢を見たことについて、124の詩では「寧知老作功名夢」、125の詩では「忽夢行軍太行路」とあり、夢の内容に対する意外性が述べられている。2首は81歳の頃に書かれた詩であるが、現実の自らの身体の老いと、夢の中での精神の若さに隔たりを感じていたということが読み取れる。

5.2.3 「老い」たため、夢での「愛国」を自嘲

上に述べたように、陸游は現実の自らの身体の老いと、夢の中での精神の若さに隔たりを感じることもあった。このようなことが表れた夢の詩で、最も早いものには次の42の詩がある。

42　　夢回（巻十九）
（夢より回る。）

病骨便衾暖　　病骨　衾暖に便れ
羈懐怯夢回　　羈懐　夢より回るを怯る
鐘殘燈燼落　　鐘殘われて　燈燼落ち
香冷雨聲来　　香冷たくして　雨聲来る
老抱憂時志　　老いてなお　憂時の志を抱くも
狂非濟世材　　狂いて　世材を濟ますに非ず
明朝入冬假　　明朝　冬假に入るも
燒兔薦新醅　　兔を燒きて　新醅を薦む

（病気の身は暖かな布団に慣れてしまい／旅先の心は、夢から現実に戻ってくるのを恐れている。／夜明けの鐘が鳴り終わって、蝋燭も燃え尽き／良い香りは冷え切って、雨の降る音が聞こえだした。／私は老いてもなお憂国の志を持ち続けてはいるが／世を救えるほどの人材でもない。／輝かしき宋王朝は、今は冬眠に入ったように消極的な政策しかとらないが／春の兎を料理し、新しい酒を地に注いで、神に祈るとしよう。）

この詩は 1187 年、63 歳の頃に赴任先の厳州で書かれたものであり、詩の中にも「羈懐」つまり「旅先の心」という語が使われている。この詩で注目すべきは「私は老いてもなお憂国の志を持ち続けてはいるが／世を救えるほどの人材でもない。」という詩句である。陸游はこの 42 の詩以前の夢の詩においては、自らの愛国の志を勇ましく強気に述べていたが、ここで初めて老いを悲観し、自らの力を消極的に捉えている。

ただ、この詩は病気の最中に書かれた詩であるから、一時的に弱気になっただけであるとも言えるし、また第 7，8 句では宋王朝の未来を諦めきってはおらず、まだ老いについての悲観が圧倒的になる段階にはないと言える。

ところが、その 7 年後に書かれた次の 60 の詩になると、詩句に「自笑」の要素が登場するようになる。

60　夢至小益（巻二十八）
（夢に小益に至る。）

夢覺空山泪漬衿　　夢より覺めて　空山　泪衿を漬す
西遊歳月苦駸駸　　西遊の歳月　苦だ駸駸たり
葭萌古路緣雲壁　　葭萌の古路　緣雲の壁
桔柏浮梁暗櫟林　　桔柏の浮梁　暗櫟の林
坐上新聲猶蜀伎　　坐上の新聲　猶お蜀伎なるも
道傍逆旅已秦音　　道傍の逆旅　已に秦音
荷戈意氣渾如昨　　戈を荷い　意氣　渾なること昨の如し

自笑摧頽負壯心　　自ら笑う　摧頽　壯心を負うを

（夢から覚めると、人気のない深い山の中、涙で襟を濡らした。／私が西方へ行った期間は、あまりに速やかに過ぎ去ってしまった。／葭萌の古路は雲が立ち込める絶壁に面し／桔柏の浮き橋は暗いクヌギの林の中にかかっていた。／私の耳にはまだ新鮮に、蜀の妓女の言葉が残っているが／旅の道中で聞こえるのは、すでに陝西の音楽だ。／戈を担いで戦場へ馳せ参じようという私の意気は、昔から衰えることなく盛んだが／近頃では、このように老いて衰えたのにも関わらず、いまだに壮志に満ちている自分を、自分で笑いたくなる。）

この詩では題 7，8 句目において「戈を担いで戦場へ馳せ参じようという私の意気は、昔から衰えることなく盛んだが／近頃では、このように老いて衰えたのにも関わらず、いまだに壮志に満ちている自分を、自分で笑いたくなる」とあり、夢の詩の中で陸游が自らの愛国の志を自嘲気味に捉えた最も早い例である。陸游は身体の老いと、精神の若さとの隔たりの大きさを、自分で冷静に捉えていたのである。

また次の 74 の詩に注目する。

74　　五月七日夜夢中作二首 其一（巻三十四）
（五月七日夜、夢中に二首を作す。）

征行過孤壘　　征行　孤壘を過ぐ
寂寞已千年　　寂寞　已に千年なり
馬病霜菅瘦　　馬病みて　霜菅にして瘦せ
狐鳴古冢穿　　狐の鳴くは　古冢を穿つ
烟塵身欲老　　烟塵に身は老いんと欲するも
金石志方堅　　金石の志は方に堅かるべし
零落英雄盡　　零落　英雄盡く
何人共著鞭　　何人　共に鞭を著さん

（出陣して、孤立した城塞を通り過ぎる。／寂寞たる城塞内の様子は、既に千年も続くようだ。／馬は病気になり、毛も白くなって痩せ衰え／狐の鳴き声が古い墓を抉るようだ。／戦場に身体は老いていくばかりだが／金石のように堅い志はいっそう強く持つべきだ。／しかしながら、勇敢な兵士たちが尽く敗退するなかで／誰が私と共に、鞭を持って馬に乗ってくれるというのか。）

この詩では、第 5，6 句目において「戦場に身体は老いていくばかりだが／金石のように堅い志はいっそう強く持つべきだ」とあり、身体の老いと精神の若さについては先ほどの 60 の詩のように悲観視することはない。ところが、第 7，8 句目では「しかしながら、勇敢な兵士たちが尽く敗退するなかで／誰が私と共に、鞭を持って馬に乗ってくれるというのか」とあり、「堅い

志」を自分一人が持ち続けていたところで、追随する者はどうせ誰もいないのだという諦めの気持ちが前面に表れている。

更に、次の 79 の詩は「殘夢」という題だけを見ても沈んだ印象を受けるが、内容としても老いを悲観的に捉え、愛国の志を投げやりに述べる傾向が一層強くなる。

79　殘夢（巻三十五）
（殘夢。）

少時鐵馬蹴河冰　少時　鐵馬　河冰を蹴るも
老去摧藏百不能　老い去りて　摧藏し　百能わず
風雨滿山窗未曉　風雨　山に滿ちて　窗未だ曉けず
只將殘夢伴殘燈　只だ將に　殘夢の殘燈に伴わんとするのみ

（若いころは、鎧をつけた馬に跨り、北方の河川を飛び越えて走ったものだが／今は老いて身体も衰え、何一つ私にできることはない。／窓の外では風雨が山に満ちて、夜がまだ明けずにいる。／ただ夢の残影が、燃え尽きようとしている蝋燭にまとわりついているだけだ。）

この 79 の詩の第 2 句「今は老いて身体も衰え、何一つ私にできることはない」という部分は、特に老いた自分を悲観的に捉えており、そのあとに続く第 3，4 句の物寂しい情景も、その悲観をより一層際立たせているように思われる。

これまでに挙げてきた詩に対し、次に挙げる 134 はどちらかと言えば意気盛んに愛国の志を述べた夢の印象であるが、最後の部分に注目すると「夢から覚めて空しく雨のように涙を流した／勇壮な気概は、もはや散じてしまって跡形もない」とある。夢の世界では若い頃のように愛国の志を語り合う友人を得たものの、現実に帰ればそのような高い志は、もはや保つことができないのである。

134　二月一日夜夢（巻六十五）
（二月一日夜の夢。）

夢裏遇奇士　夢裏　奇士に遇う
高樓酣且歌　高樓　酣にして且つ歌う
霸圖輕管樂　霸圖　管樂を輕んじ
王道探丘軻　王道　丘軻を探る
大指如符券　大指　符券の如く
微瑕互琢磨　微瑕　互いに琢磨す
相知殊恨晚　相い知ること殊に晩く

所得不勝多	得る所　勝げて多からざるを恨む
勝算觀天定	勝算　天定を觀
精忠壓虜和	精忠　虜和を壓とす
真當起莘渭	真に當に莘渭を起こすべくして
何止復關河	何ぞ關河を復すに止まらんや
陣法參奇正	陣法　奇正を參じ
戎旃相蕩摩	戎旃　相い蕩摩す
覺來空雨泣	覺め來たりて　空しく雨泣す
壯志已蹉跎	壯志　已に蹉跎たり

（夢の中で、徳行に優れ才智の傑出した人物に出会い／高楼に上って、酒を飲み、歌って楽しんだ。／彼が覇道を語れば、管仲・楽毅の策略を優に超え／彼が王道を語れば、孔子・孟子の思想に及ぶようだった。／大いなる志は、皇帝から軍の総指揮を任された人のようであり／小さな欠点も、互いに磨かれて消えてしまうようだった。／お互いに知り合うのがこんなにも遅くなってしまい／多くのことについて十分に語りつくせないのを恨めしく思った。／彼には天下を統一する勝算があり／敵国との融和政策を打倒する純粋な忠実さを持っていた。／莘渭の地をも奪還すべきであるというのに／どうして關河のみを恢復することに止まろうか。／彼の陣法は奇兵術・正攻法を併せ持ち／軍旗が翻ってお互いに触れあうようだった。／夢から覚めて空しく雨のように涙を流した／勇壮な気概は、もはや散じてしまって跡形もない。）

最後に 145 の詩を挙げる。

145　異夢（巻七十六）
（異夢。）

山中有異夢	山中　異夢有り
重鎧奮雕戈	重鎧　雕戈を奮う
敷水西通渭	敷水　西は渭に通じ
潼關北控河	潼關　北は河を控す
凄凉鳴趙瑟	凄凉　趙瑟を鳴らし
慷慨和燕歌	慷慨　燕歌に和す
此事終當在	此事　終に當に在るべくも
無如老死何	老死を如何ともする無し

（山中で、平生と異なる変わった夢を見た。／夢の中では幾重もの鎧を着て、麗しい矛を奮った。／敷水は西のかた、渭水に通じ／潼關は北のかた、黄河をひかえている。／そこで物悲しく趙の瑟を鳴らし／憤慨して燕の歌（易水の歌）に和した。／この夢にあったようなことは、この先必ずや実現するはずだが／それを見ずに老いて死ぬことをどうするわけにもいかない。）

この詩の前半においては、夢の中での若く勇ましい陸游自身の姿が描かれているものの、題は「異夢」であり、このような夢の内容が平生においては珍しかったことが分かる。さらに第 7, 8 句目においては「この夢にあったようなことは、この先必ずや実現するはずだが／それを見ずに老いて死ぬことをどうするわけにもいかない」とあり、宋王朝の未来に疑いを抱いてはいないことが強調されるものの、老いた自分はもはや主体的にそれに参加することはないという諦めの気持ちが表れている。

5.2.4 考察

以上、5.2 では、夢の詩において「愛国」に「老い」のテーマが伴われたとき、愛国の憤慨はどのように表現されるのかについて、5.2.2、5.2.3 の 2 つの分類に基づいて分析してきた。

これにより、いずれの分類の詩においても、はじめに 4.5 で挙げたようないわゆる愛国詩には表れてこない複雑な思いが表現されていることが分かった。先行研究においては専ら夢の詩におけるいわゆる愛国詩を取り上げて、陸游が愛国の憤慨を持ち続けたことが強調されてきたが、実際には、現実世界での老いていく自分と、夢の世界での精神の若さとの間には様々な葛藤があったのである。老いてなお自分が愛国の憤慨を持っていることを誇らしげに述べるときもあれば、老いても未だに理想主義的な愛国の夢を見る自分を自嘲的に捉えることもあった。夢の詩で愛国の憤慨を表現することが、官途における挫折を経験した彼にとっては、有り余るエネルギー発散の手段の一つであったに違いないが、晩年に向かうにつれて現実の世界との隔たりが大きくなるほど、諦めの気持ちが表れてくるのも事実である。科挙に本来首席及第するはずだったような知識人である彼が、若い頃から晩年に至るまで同じ愛国の憤慨を単純に持ち続けたわけがなく、理想主義的な自分の姿と第三者的に、冷静に向き合う目も持っていたのである。

5.3　夢の詩における「愛国」と「老い」の関係性の変遷

5.3.1 関係性の変遷について（表）

4.5、5.1、5.2 においては、陸游の夢の詩において「愛国」と「老い」のテーマがどのように表れるのか、またどう関係するかについて、詩を個別に取り上げて考察してきたが、ここで 5.3 では、「愛国」と「老い」のテーマの関係性がどのように変遷するのかを全体的な視点から分析することとする。

まず、4.5、5.1、5.2 で取り上げてきた詩を一覧にし、詩の中で「老い」の要素が登場するかどうか、また「老い」をどのように捉えているかによって、次のように色分けすることにする。

4章での分類と色分け	老いの要素
夢で軍の駐屯地を訪れ、愛国の憤慨を新たにする	なし
現実では金の占領下にある北方地域を夢で訪れ、愛国の憤慨を新たにする	
老いを敢えてユーモラスに捉えたもの	あり
「老い」てなお、夢で「愛国」を維持	
老いをやや悲観的に捉えたもの	
「老い」たため、夢での「愛国」を自嘲	

一覧は次の通りである。

夢の詩における「愛国」と「老い」					
番号	題	年代	年齢	場所	4章での分類
2	《記夢》	1171	47	夔州	「老い」てなお、夢で「愛国」を維持
4	《九月十六日夜夢駐軍河外遣使招降諸城覺而有》	1173	49	嘉州	夢で軍の駐屯地を訪れ、愛国の憤慨を新たにする
9	《夢遊山水奇麗處有古宮觀云雲臺觀也》	1176	52	成都	現実では金の占領下にある北方地域を夢で訪れ、愛国の憤慨を新たにする
24	《五月十一日夜且半夢從大駕親征盡復漢唐故地》	1180	56	撫州	夢で軍の駐屯地を訪れ、愛国の憤慨を新たにする
29	《十月二十六日夜夢行南鄭道中既覺恍然攬筆作》	1181	57	山陰	「老い」てなお、夢で「愛国」を維持
38	《頻夜夢至南鄭小益之間慨然感懷》	1186	62	嚴州任所	「老い」てなお、夢で「愛国」を維持
40	《丙午十月十三夜夢過一大冢傍人爲餘言此荊軻》	1186	62	嚴州任所	現実では金の占領下にある北方地域を夢で訪れ、愛国の憤慨を新たにする
42	《夢回》	1187	63	嚴州任所	「老い」たため、夢での「愛国」を自嘲
44	《記夢》	1190	66	山陰	老いをやや悲観的に捉えたもの
56	《枕上述夢》	1193	69	山陰	「老い」てなお、夢で「愛国」を維持
59	《夢至洛中觀牡丹繁麗溢目覺而有賦》	1193	69	山陰	「老い」てなお、夢で「愛国」を維持
60	《夢至小益》	1193	69	山陰	「老い」たため、夢での「愛国」を自嘲
71	《記九月三十日夜半夢》	1195	71	山陰	夢で軍の駐屯地を訪れ、愛国の憤慨を新たにする
74	《五月七日夜夢中作》	1196	72	山陰	「老い」たため、夢での「愛国」を自嘲
75	《五月七日夜夢中作》	1196	72	山陰	夢で軍の駐屯地を訪れ、愛国の憤慨を新たにする
79	《殘夢》	1197	73	山陰	「老い」たため、夢での「愛国」を自嘲
80	《夢中遊禹祠》	1197	73	山陰	老いをやや悲観的に捉えたもの
81	《夢觀牡丹》	1198	74	山陰	老いを敢えてユーモラスに捉えたもの
88	《夢題驛壁》	1200	76	山陰	老いをやや悲観的に捉えたもの
93	《病足晝臥夢中譫諄乃誦尚書也既覺口占絶句》	1201	77	山陰	老いをやや悲観的に捉えたもの
94	《病足晝臥夢中譫諄乃誦尚書也既覺口占絶句》	1201	77	山陰	老いをやや悲観的に捉えたもの
95	《十二月二日夜夢與客並馬行黃河上憩於古驛》	1201	77	山陰	現実では金の占領下にある北方地域を夢で訪れ、愛国の憤慨を新たにする
96	《十二月二日夜夢與客並馬行黃河上憩於古驛》	1201	77	山陰	現実では金の占領下にある北方地域を夢で訪れ、愛国の憤慨を新たにする
98	《記夢》	1202	78	山陰	老いをやや悲観的に捉えたもの
102	《二月二日夢中作》	1203	79	臨安	老いをやや悲観的に捉えたもの
111	《明日復理夢中意作》	1204	80	山陰	老いを敢えてユーモラスに捉えたもの
123	《夢行益昌道中賦》	1205	81	山陰	老いをやや悲観的に捉えたもの
124	《記夢》	1205	81	山陰	「老い」てなお、夢で「愛国」を維持
125	《記夢》	1205	81	山陰	「老い」てなお、夢で「愛国」を維持
134	《二月一日夜夢》	1206	82	山陰	「老い」たため、夢での「愛国」を自嘲
145	《異夢》	1208	84	山陰	「老い」たため、夢での「愛国」を自嘲
156	《十月二四日夜夢中送廬山道人歸山》	1209	85	山陰	老いを敢えてユーモラスに捉えたもの

この一覧を見て明らかであるように、陸游はその時々によって、老いてなお自分が愛国の憤慨を持っていることを誇らしげに述べるときもあれば、老いても未だに理想主義的な愛国の夢を見る自分を自嘲的に捉えることもあった。特に、42 の詩が書かれて以降は、老いを悲観する内容の詩も増え、その傾向が顕著である。例えば、74,75 の詩は連作であるにもかかわらず、愛国の述べられ方には差が見られるし、123 の詩で老いを悲観したかと思えば、続く 124,125 の詩では老いてなお愛国の憤慨を維持する自分を前向きに捉えている。

先にも述べたように、先行研究においては専ら夢の詩におけるいわゆる愛国詩を取り上げて、陸游が愛国の憤慨を持ち続けたことが強調されてきたが、実際には、現実世界での老いていく自分と、夢の世界での精神の若さとの間には様々な葛藤があったことが分かる。

5.3.2 考察

以上、これまでに 4.5、5.1、5.2 で取り上げてきた詩を全体的に見て、「愛国」と「老い」のテーマの関係性がどのように変遷するのかを分析し、現実世界での老いていく自分と、夢の世界での精神の若さとの間には様々な葛藤があったことを読み取った。

また、この項では夢の詩における「愛国」と「老い」にテーマを絞って詩を取り上げ、その現れ方や関係性の変遷に注目したが、実際にはこれらの詩の間に、更に多岐に渡るテーマの夢の詩が書かれることになる。

例えば、59 から 63 の詩のテーマの変遷は、次のようになっている。

番号	題	年代	年齢	場所	本論での分類
59	《夢至洛中觀牡丹繁麗溢目覺而有賦》	1193	69	山陰	「老い」てなお、夢で「愛国」を維持
60	《夢至小益》	1193	69	山陰	「老い」たため、夢での「愛国」を自嘲
61	《記夢》	1193	69	山陰	「丹窯」について
62	《記夢》	1193	69	山陰	仙界の人々との交流
63	《記夢》	1193	69	山陰	仙界の人々との交流

これらの詩は全て同じ 1 年に書かれたものであるが、まず 59 においては「老い」てなお夢で「愛国」を維持する自分を前向きに捉えるものの、次の 60 の詩においてはその愛国の憤慨を自嘲的に捉えており、さらに 61,62,63 の連作になると、夢の内容は仙界へと飛躍している。3.4 で取り上げた「丹窯」が、初めて夢の詩に登場するのもこの 61 の詩である。陸游は 60 の詩で、老いた自分を自嘲し、俗世への諦めの気持ちを持ったことにより、61 以降の詩で仙界への意識を強めたのかもしれない。

序論でも述べたように、陸游は短期間のうちにテーマを極端に変化させながら詩を書いたのであるが、それはこの一部分を取っても明らかである。陸游は詩のテーマに自分で制約を設ける

ことなく、その時々の考え方、感情をそのままに詩に書いた、まさに自由闊達な精神を持った詩人であると言えるだろう。

5.4　小結

第 5 章においては、晩年の陸游が避けられない「老い」とどのように向き合い、自らの「愛国の憤慨」とどう向き合ったのかについて、陸游の夢の詩に頻繁に登場する「愛国」と「老い」のテーマとその関係性に焦点を当てて考察してきた。

まず 5.1 では、陸游の夢の詩における「老い」の要素について、老いをやや悲観的に捉えたものと、老いを敢えてユーモラスに捉えたものとに分けて取り上げ、夢の詩において陸游が「老い」とどう向き合ったかを読み取った。これらを踏まえ、続く 5.2 では、夢の詩において「愛国」に「老い」のテーマが伴われたとき、愛国の憤慨はどのように表現されるのかについて分析し、4.5 で挙げたようないわゆる愛国詩には表れてこない複雑な思い、葛藤があったことが分かった。

何度も述べるように、「老い」というテーマは陸游という詩人に限らず普遍的なテーマであり、夢の詩以外の詩にも多く登場するが、本論文の主題である「夢の詩」を手掛かりに、改めて陸游の「愛国」と「老い」の問題について考察を加えたことにより、先行研究において、単に愛国詩人である、とだけ強調されてきた彼の人間像について、愛国の憤慨を持ち続けた彼にも、様々な葛藤や心の揺れがあったということ、また第 3 者的な目で、自分の姿を自嘲的に捉えることもあったのだということを改めて確認し、より自然で人間らしい陸游の姿を見出すことができた。

また、これらの考察全体および 5.3 を通して、陸游が短期間のうちにテーマを複雑に変化させながら、その時々の考え方、感情をそのままに詩に書いた、まさに自由闊達な精神を持った詩人であったことを改めて実感することができた。

第6章 結論

6.1 総括（研究の目的と考察の成果について）

本研究では、陸游の夢の詩の特徴・独自性を分析し、陸游にはなぜ夢の詩が多いのか、人生（特に晩年）において夢はどのような役割を果たしたのかを探求することを目的とし、その過程で、ともすれば固定化されてきた彼の人間像が真なるものかを自らの目で確かめ、二面では捉えきれない魅力を見出すことを大きな目標とした。

論ずるにあたっては、夢の詩 157 首を読んだうえで、テーマ別に整理し、陸游の人生における二つの挫折という観点から、陸游は具体的にはどのような夢を見る（あるいは詩に書く）ことで、現実にはない充実感を得ようとしたのかを確かめることとし、またこの過程で、陸游の詩作における自由闊達な精神や、彼の人間像の奥深さを、夢の詩の観点から捉えることができればと考えた。さらに、夢の詩における「愛国」というテーマについて、陸游が愛国の憤慨を「どれほど維持したのか」ではなく、むしろ、避けられない「老い」とどのように向き合い、愛国の憤慨を持ち続ける自分の姿をどう捉えたのかを掘り下げることで、彼の人間像をより丁寧に、素直な形で捉えなおすことができればと考えた。

まず初めに、夢の詩 157 首の全てについて、年代順に通し番号を付け、書き下し文・訳文を作成した。そのうえで第 2 章では、陸游が「夢」「眠り」をどう捉えていたのかについて考察し、彼が「夢」「眠り」と自身との距離を冷静に認識していながらも、夢に対して強い結びつきを感じていたということ、夢のテーマが豊かな広がりを持っていて、年代による各テーマの偏りがほとんどないことを確認した。

続く第 3,4 章では多岐に渡るテーマの夢の詩を実際に取り上げ、陸游にはなぜ夢の詩が多いのか、各詩がどのような意味を持っていたのかについて、二つの挫折を経験し、現実の世界に「不充実」の多かった陸游が、夢の中でどのように充実感を得たかという観点から考察した。第 3 章では陸游の結婚における挫折と夢の詩との関わりについて取り上げ、陸游の夢の詩には、過去の挫折が直結した内容のものもあるということ、また過去を回想することで感傷的になる側面もあるということを確認した。次に第 4 章では、官途での挫折を経験し、夢の詩を「望郷」「過去の回想」「人との交遊」「仙界および道教思想」「愛国」というテーマごとに分析し、各テーマがそれぞれ現実の世界の「不充実」を補う役割があったことを確認した。またこの過程で、夢の詩における多岐にわたるテーマや、各詩の場面の独創性、またユーモアを感じさせるような描写を読み解くことで、陸游の人間像を新たな側面から捉えることに繋がった。

さらに第 5 章では、本研究の主題である「夢の詩」を手掛かりに、陸游の「愛国」と「老い」の問題についてより掘り下げた考察を加えた。先行研究において、単に愛国詩人である、とだけ強調されてきた彼の人間像について、愛国の憤慨を持ち続けた彼にも、様々な葛藤や心の揺れがあったということ、また第三者的な目で、自分の姿を自嘲的に捉えることもあったのだということを改めて確認し、陸游の人間像を改めて丁寧に捉え直すことができた。

以上のような考察を通して、先行研究では詳しく取り上げられてこなかった陸游の夢の詩について、詩に書かれた意を素直に読み取り、夢の詩がなぜ多く書かれたのか、彼の人生にとって

どのような役割があったのかという観点から詳細な分析を加えることができた。結果として、陸游の人間像を自らの目で素直に捉えなおし、彼の詩の新たな側面・魅力を見出すことにつながり、初めに設定した研究目的に適う考察になったと思う。

6.2　課題点

論ずるにあたって最も重要な課題となったのは、夢の詩 157 首の書き下し文・和訳の作成であったが、この 157 首はほとんど全く陸游の詩選等には取り上げられておらず、もっぱら銭仲聯氏の校注や辞書をもとに、自分なりに詩を読み解釈することとなった。難解な詩も多々あり、解釈が不確かな部分も多く残っている。また私自身が漢詩の読解に未熟であるのに加え、扱う詩の数が 157 首と多すぎたため、各詩の表現や特徴についてはあまり詳しく取り上げることができなかったほか、書き下し文に乱雑な部分や誤りが目立つ結果になってしまった。もう少し熟語を開いたり、読み仮名を付けたりすることで、読みやすくする工夫も必要であったと思う。(例：「遠遊　万里　移刻纔かなり」→「万里を遠遊するに纔かに刻を移すのみ」／「花残る」→「花残（くず）る」など。)

さらに、これら夢の詩をどのような観点から論ずるか、どのようなテーマで分類するかが難しい問題であった。今回は「陸游の人生における二つの挫折」という観点から論ずることとし、仮に 5 つのテーマで分類したが、そもそも「陸游の人生に二つの挫折があった」とする見方がどの程度適切なのか、別の観点からの論じ方はないのか、彼の他の詩作も読んだうえで再考する必要があるだろう。

また、本論の各考察でも触れたが、陸游の夢の詩のみを取り上げただけでは考察しきれないようなテーマも多々あった。例えば、当時の人々と現代の我々との「夢」認識の違いについて、仙界および道教思想についてである。特に後者は、陸游の詩作を考えるうえで非常に重要なテーマであるにもかかわらず、今回は詳しく触れることができなかった。これらの詳細な考察は今後の課題としたい。

全体としては、陸游の人間像を丁寧に捉え直すことにはなったが、新たな人間像を打ち立てるということには至らなかったように思う。そもそも、陸游という極めて多作な詩人の人間像を考える材料としては、157 首では到底足りないのである。夢の詩についても、今回は便宜的に「詩題に夢の含まれる詩」のみを扱ったが、詩句に夢の含まれる詩も合わせると、陸游の夢に関する詩は 900 首を超える。よって、今後機会があればもう少し考察の対象を広げ、例えば陸游の夢以外の詩や、南宋の他の詩人の夢の詩との比較も行うなどして、彼の夢の詩の独自性および人間像を、より広い視野で明らかにしたい。

6.3　今後の展望

元々、私の研究の出発点は、歴史に残る人間の生き様が、人々の心の支えや人生の基軸になり得るという考えから、歴史に残る人間について、自らの目で文献を忠実に研究し、その人間像を確かめ、真の魅力を捉え、今を生きる人々に発信し、一人でも多くの人の心の支えにしてもらい

たい、またそれこそが文学研究の一つの大きな役割ではないかという思いを持ったことであった。本研究では、実際に陸游の夢の詩 157 首を読むことを通して、自らの目で彼の詩作の豊かさ、また人間像の複雑さ、新たな魅力を確かめることができた。この研究を機に、今後大学院進学にあたっては、さらにテーマを発展させ、陸游を中心とした南宋文人たちの詩作について研究を深め、彼らの真の人間像を自らの目で確かめ、さらには社会に向けてその魅力を伝えることで、文学研究の役割を果たすことを目標としたい。

参考文献

・錢仲聯『劍南詩稿校注』「中國古典文學叢書」上海古籍出版社　1985 年
（以下、出版年度順）
・鈴木虎雄『陸放翁詩解』上中下　弘文堂　1950-54 年
・一海知義『陸游』「中国詩人選集二集」第 8 巻　岩波書店　1962 年
・前野直彬『陸游』「漢詩大系」第 19 巻　集英社　1964 年
・石川忠久『陸游詩集』「中国の詩集」第 9 巻　角川書店　1973 年
・小川環樹『陸游』「中国詩文選」第 20 巻　筑摩書房　1974 年
・河上肇『陸放翁鑑賞』「河上肇全集」第 20 巻　岩波書店　1982 年
・三浦國雄『中国古代養生思想の総合的研究』平河出版社　1988 年
・村上哲見・浅見洋二『蘇軾・陸游』「鑑賞中国の古典」第 21 巻　角川書店　1989 年
・前野直彬編『宋詩観賞辞典』　東京堂　1998 年
・錢鍾書（宋代詩文研究会訳注）『宋詩選注』第 3 巻　平凡社　2004 年
・一海知義『陸游詩選』岩波書店　2007 年

謝辞

本研究を進めるにあたり、指導教官の松浦恆雄教授、並びに中国語中国文学コースの諸先生方には、研究テーマの設定から研究にあたっての姿勢・心構えに至るまで、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。また、東洋史コースの平田茂樹教授には、授業を通して多大な助言・示唆を賜りました。深く感謝申し上げます。

最後に、研究内容の指導及び膨大な量の詩の訳文添削を快く引き受けてくださった緒方賢一先生に、心より感謝申し上げます。

	冊数	巻数	ページ	題	書かれた時期			西暦	年齢	書かれた場所
1	1	1	89	《夜夢從數客雨中載酒出遊山川城闕極雄麗云長》	乾道	1	冬	1165	41	隆興
2	1	2	182	《記夢》	乾道	7	正月	1171	47	夔州
3	1	4	340	《九月六夜夢中作笑詩覺而忘之明日戲追補一首》	乾道	9	9月	1173	49	嘉州
4	1	4	344	《九月十六日夜夢駐軍河外遣使招降諸城覺而有》	乾道	9	9月	1173	49	嘉州
5	1	5	439	《記夢》	淳熙	1	7月	1174	50	蜀州
6	1	5	455	《夢入禪林有老宿方陞座或云通悟禪師也》	淳熙	1	8月	1174	50	蜀州
7	2	6	503	《甲午十一月十三夜夢右臂踊出一小劍長八九寸》	淳熙	1	11月	1174	50	榮州
8	2	7	584	《午夢》	淳熙	3	4月	1176	52	成都
9	2	7	595	《夢遊山水奇麗處有古宮觀云雲臺觀也》	淳熙	3	5月	1176	52	成都
10	2	8	696	《九月十八日夜夢避雨叩一僧院有老宿年八十許》	淳熙	4	9月	1177	53	成都
11	2	9	725	《記夢》	淳熙	4	11月	1177	53	成都
12	2	9	726	《記夢》	淳熙	4	11月	1177	53	成都
13	2	10	826	《夜夢與宇文子友譚德稱會山寺若餞予行者明日》	淳熙	5	9月	1178	54	山陰
14	2	10	831	《夢至成都悵然有作》	淳熙	5	10月	1178	54	山陰
15	2	10	831	《夢至成都悵然有作》	淳熙	5	10月	1178	54	山陰
16	2	10	845	《夢藤驛》	淳熙	5	10-11月	1178	54	建安郡境
17	2	10	845	《夢藤驛》	淳熙	5	10-11月	1178	54	建安郡境
18	2	11	878	《夢與劉韶美夜飲樂甚》	淳熙	6	6月	1179	55	建安
19	2	11	896	《初秋夢故山覺而有作》	淳熙	6	7月	1179	55	建安
20	2	11	896	《初秋夢故山覺而有作》	淳熙	6	7月	1179	55	建安
21	2	11	896	《初秋夢故山覺而有作》	淳熙	6	7月	1179	55	建安

22	2	11	896	《初秋夢故山覺而有作》	淳熙	6	7月	1179	55	建安
23	2	12	949	《春晚坐睡忽夢泛舟飲酒樂甚既覺悵然有賦》	淳熙	7	3月	1180	56	撫州
24	2	12	970	《五月十一日夜且半夢從大駕親征盡復漢唐故地》	淳熙	7	5月	1180	56	撫州
25	2	12	978	《夏日晝寢夢遊一院闃然無人簾影滿堂惟燕蹋箏》	淳熙	7	5月	1180	56	撫州
26	2	12	978	《夢仙》	淳熙	7	6月	1180	56	撫州
27	3	13	1071	《晝寢夢一客相過若有舊者夷粹可愛既覺作絕句》	淳熙	8	9月	1181	57	山陰
28	3	13	1080	《夢中作》	淳熙	8	10月	1181	57	山陰
29	3	14	1092	《十月二十六日夜夢行南鄭道中既覺恍然攬筆作》	淳熙	8	10月	1181	57	山陰
30	3	14	1110	《夢中作》	淳熙	8	12月	1181	57	山陰
31	3	14	1111	《記夢》	淳熙	8	12月	1181	57	山陰
32	3	14	1128	《五月十四日夜夢一僧持詩編過予有暴雨詩語頗》	淳熙	9	5月	1182	58	山陰
33	3	14	1139	《夢宴客大樓上命筆作詩既覺續成之》	淳熙	9	9月	1182	58	山陰
34	3	15	1208	《記夢》	淳熙	10	9月	1183	59	山陰
35	3	16	1231	《夜夢與數客觀畫有八副龍湫圖特奇客請予作詩》	淳熙	10	11月	1183	59	山陰
36	3	16	1263	《記夢》	淳熙	11	3月	1184	60	山陰
37	3	17	1300	《十月四日夜記夢》	淳熙	11	冬	1184	60	山陰
38	3	18	1398	《頻夜夢至南鄭小益之間慨然感懷》	淳熙	13	秋	1186	62	嚴州任所
39	3	18	1398	《頻夜夢至南鄭小益之間慨然感懷》	淳熙	13	秋	1186	62	嚴州任所
40	3	18	1410	《丙午十月十三夜夢過一大冢傍人爲餘言此荊軻》	淳熙	13	冬	1186	62	嚴州任所
41	3	19	1485	《夢歸》	淳熙	14	冬	1187	63	嚴州任所
42	3	19	1494	《夢回》	淳熙	14	冬	1187	63	嚴州任所
43	3	20	1573	《我夢》	淳熙	16	春	1189	65	臨安

44	3	21	1604	《記夢》	紹熙	1	春	1190	66	山陰
45	4	23	1712	《記九月二十六夜夢》	紹熙	2	秋	1191	67	山陰
46	4	23	1713	《夢海山壁間詩不能盡記以其意追補》	紹熙	2	秋	1191	67	山陰
47	4	23	1713	《夢海山壁間詩不能盡記以其意追補》	紹熙	2	秋	1191	67	山陰
48	4	23	1713	《夢海山壁間詩不能盡記以其意追補》	紹熙	2	秋	1191	67	山陰
49	4	23	1713	《夢海山壁間詩不能盡記以其意追補》	紹熙	2	秋	1191	67	山陰
50	4	23	1724	《夜夢遊驪山》	紹熙	2	冬	1191	67	山陰
51	4	24	1730	《夢斷》	紹熙	2	冬	1191	67	山陰
52	4	24	1771	《夢遊散關渭水之間》	紹熙	3	秋	1192	68	山陰
53	4	25	1812	《記夢》	紹熙	3	秋	1192	68	山陰
54	4	26	1853	《夢與數客劇飲或請賦詩予已大醉縱筆書一絕覺》	紹熙	3	冬	1192	68	山陰
55	4	27	1875	《記夢》	紹熙	4	春	1193	69	山陰
56	4	27	1892	《枕上述夢》	紹熙	4	夏	1193	69	山陰
57	4	27	1902	《癸丑七月二十七夜夢遊華嶽廟》	紹熙	4	秋	1193	69	山陰
58	4	27	1902	《癸丑七月二十七夜夢遊華嶽廟》	紹熙	4	秋	1193	69	山陰
59	4	27	1914	《夢至洛中觀牡丹繁麗溢目覺而有賦》	紹熙	4	秋	1193	69	山陰
60	4	28	1962	《夢至小益》	紹熙	4	冬	1193	69	山陰
61	4	28	1970	《記夢》	紹熙	4	冬	1193	69	山陰
62	4	28	1970	《記夢》	紹熙	4	冬	1193	69	山陰
63	4	28	1971	《記夢》	紹熙	4	冬	1193	69	山陰
64	4	30	2029	《六月二十六日夜夢赴季長招飲》	紹熙	5	夏	1194	70	山陰
65	4	30	2033	《七月二十一日午睡夢泛江風濤甚壯覺而有賦》	紹熙	5	秋	1194	70	山陰

66	4	30	2062	《夢范参政》	紹熙	5	秋	1194	70	山陰
67	4	31	2119	《正月十一日夜夢與亡友譚德稱相遇於成都小東》	慶元	1	春	1195	71	山陰
68	4	32	2157	《夢遊山寺焚香煮茗甚適既覺悵然以詩記之》	慶元	1	夏	1195	71	山陰
69	4	32	2165	《五月二十三夜記夢》	慶元	1	夏	1195	71	山陰
70	4	33	2176	《夢有餉地黃者味甘如蜜戲作數語記之》	慶元	1	秋	1195	71	山陰
71	4	33	2192	《記九月三十日夜半夢》	慶元	1	冬	1195	71	山陰
72	4	33	2205	《十月二十八日夜雞初鳴時夢與數女仙遇其一作》	慶元	1	冬	1195	71	山陰
73	4	33	2205	《十月二十八日夜雞初鳴時夢與數女仙遇其一作》	慶元	1	冬	1195	71	山陰
74	5	34	2253	《五月七日夜夢中作》	慶元	2	夏	1196	72	山陰
75	5	34	2253	《五月七日夜夢中作》	慶元	2	夏	1196	72	山陰
76	5	34	2260	《六月二十四日夜分夢范至能李知幾尤延之同》	慶元	2	夏	1196	72	山陰
77	5	35	2287	《作夢》	慶元	2	冬	1196	72	山陰
78	5	35	2301	《丁巳正月二日雞初鳴夢至一山寺名鳳山其尤勝》	慶元	3	春	1197	73	山陰
79	5	35	2312	《殘夢》	慶元	3	3月	1197	73	山陰
80	5	36	2334	《夢中遊禹祠》	慶元	3	秋	1197	73	山陰
81	5	37	2416	《夢觀牡丹》	慶元	4	秋	1198	74	山陰
82	5	38	2459	《記戊午十一月二十四夜夢》	慶元	4	冬	1198	74	山陰
83	5	40	2549	《微雨午寢夢憩道傍驛舍若在秦蜀間慨然有賦》	慶元	5	秋	1199	75	山陰
84	5	41	2596	《夢蜀》	慶元	5	冬	1199	75	山陰
85	5	41	2607	《夢中作遊山絕句》	慶元	5	冬	1199	75	山陰
86	5	41	2607	《夢中作遊山絕句》	慶元	5	冬	1199	75	山陰
87	5	42	2624	《夢中作》	慶元	5	冬	1199	75	山陰

88	5	42	2632	《夢題驛壁》	慶元	6	春	1200	76	山陰
89	5	42	2641	《三二年來夜夢每過吾廬之西一士支家觀書飲酒》	慶元	6	春	1200	76	山陰
90	5	42	2641	《三二年來夜夢每過吾廬之西一士支家觀書飲酒》	慶元	6	春	1200	76	山陰
91	5	42	2658	《記夢》	慶元	6	春	1200	76	山陰
92	5	44	2730	《夢行秦晉間有作》	慶元	6	冬	1200	76	山陰
93	6	47	2869	《病足晝臥夢中譫諄乃誦尚書也既覺口占絕句》	嘉泰	1	秋	1201	77	山陰
94	6	47	2869	《病足晝臥夢中譫諄乃誦尚書也既覺口占絕句》	嘉泰	1	秋	1201	77	山陰
95	6	49	2958	《十二月二日夜夢與客並馬行黃河上憩於古驛》	嘉泰	1	冬	1201	77	山陰
96	6	49	2958	《十二月二日夜夢與客並馬行黃河上憩於古驛》	嘉泰	1	冬	1201	77	山陰
97	6	49	2962	《夢韓无咎王季夷諸公》	嘉泰	1	冬	1201	77	山陰
98	6	50	2992	《記夢》	嘉泰	2	春	1202	78	山陰
99	6	51	3066	《九月十四日夜雞初鳴夢一故人相語曰我爲蓮華》	嘉泰	2	秋	1202	78	臨安
100	6	52	3108	《夢韓无咎如在京口時既覺枕上作短歌》	嘉泰	2	冬	1202	78	臨安
101	6	52	3117	《癸亥正月十日夜夢三山竹林中筍出甚盛欣然大》	嘉泰	3	春	1203	79	臨安
102	6	53	3130	《二月二日夢中作》	嘉泰	3	春	1203	79	臨安
103	6	53	3144	《記夢》	嘉泰	3	春	1203	79	臨安
104	6	53	3151	《夢遊》	嘉泰	3	夏	1203	79	臨安
105	6	53	3151	《夢遊》	嘉泰	3	夏	1203	79	臨安
106	6	53	3151	《夢遊》	嘉泰	3	夏	1203	79	臨安
107	6	55	3212	《夢行小益道中》	嘉泰	3	秋	1203	79	山陰
108	6	55	3212	《夢行小益道中》	嘉泰	3	秋	1203	79	山陰
109	6	55	3251	《夢中賦早行》	嘉泰	3	冬	1203	79	山陰

110	6	58	3384	《八月四日夜夢中作》	嘉泰	4	秋	1204	80	山陰
111	6	58	3384	《明日復理夢中意作》	嘉泰	4	秋	1204	80	山陰
112	6	58	3384	《又明日復作長句自規》	嘉泰	4	秋	1204	80	山陰
113	7	59	3403	《甲子秋八月丙辰雞初鳴時夢劉韶美示詩八篇高》	嘉泰	4	秋	1204	80	山陰
114	7	59	3427	《夢中作》	嘉泰	4	冬	1204	80	山陰
115	7	60	3442	《甲子歲十月二十四日夜半夢遇故人於山水間飲》	嘉泰	4	冬	1204	80	山陰
116	7	60	3442	《甲子歲十月二十四日夜半夢遇故人於山水間飲》	嘉泰	4	冬	1204	80	山陰
117	7	60	3468	《夜夢遇老人於松石間若舊嘗從其遊者再拜敘間》	嘉泰	4	冬	1204	80	山陰
118	7	60	3479	《夢華山》	嘉泰	4	冬	1204	80	山陰
119	7	61	3487	《夢中作》	開禧	1	春	1205	81	山陰
120	7	61	3505	《二月晦日夜夢欲卜居近邑道遇老父告以不利欣》	開禧	1	春	1205	81	山陰
121	7	62	3561	《記夢》	開禧	1	秋	1205	81	山陰
122	7	63	3573	《乙丑七月二十九日夜分夢一士友風度甚高一見》	開禧	1	秋	1205	81	山陰
123	7	63	3597	《夢行益昌道中賦》	開禧	1	秋	1205	81	山陰
124	7	63	3615	《記夢》	開禧	1	閏8月	1205	81	山陰
125	7	63	3615	《記夢》	開禧	2	閏9月	1205	81	山陰
126	7	64	3633	《夢中作》	開禧	1	9月	1205	81	山陰
127	7	64	3633	《夢中作》	開禧	1	9月	1205	81	山陰
128	7	64	3642	《記乙丑十月一日夜夢》	開禧	1	10月	1205	81	山陰
129	7	64	3642	《記乙丑十月一日夜夢》	開禧	1	10月	1205	81	山陰
130	7	64	3654	《十月十四夜夢與客分題得早行》	開禧	1	冬	1205	81	山陰
131	7	65	3677	《十二月二日夜夢遊沈氏園亭》	開禧	1	冬	1205	81	山陰

132	7	65	3677	《十二月二日夜夢遊沈氏園亭》	開禧	1	冬	1205	81	山陰
133	7	65	3695	《夢中作》	開禧	2	春	1206	82	山陰
134	7	65	3699	《二月一日夜夢》	開禧	2	春	1206	82	山陰
135	7	67	3760	《自春來數夢至閬中蒼溪驛五月十四日又夢作兩》	開禧	2	夏	1206	82	山陰
136	7	67	3760	《自春來數夢至閬中蒼溪驛五月十四日又夢作兩》	開禧	2	夏	1206	82	山陰
137	7	68	3827	《夢中作》	開禧	2	秋	1206	82	山陰
138	7	68	3836	《舟中記夢》	開禧	2	秋	1206	82	山陰
139	7	69	3846	《記夢》	開禧	2	冬	1206	82	山陰
140	7	69	3880	《夢中作》	開禧	2	冬	1206	82	山陰
141	7	72	3977	《夢中作》	開禧	3	秋	1207	83	山陰
142	7	72	3978	《夢中作》	開禧	3	秋	1207	83	山陰
143	7	73	4050	《記夢》	開禧	3	冬	1207	83	山陰
144	8	76	4156	《夢蜀》	嘉定	1	夏	1208	84	山陰
145	8	77	4186	《異夢》	嘉定	1	夏	1208	84	山陰
146	8	77	4201	《記夢》	嘉定	1	秋	1208	84	山陰
147	8	79	4291	《夢中江行過鄉豪家賦詩二首既覺猶歷歷能記也》	嘉定	1	冬	1208	84	山陰
148	8	79	4291	《夢中江行過鄉豪家賦詩二首既覺猶歷歷能記也》	嘉定	1	冬	1208	84	山陰
149	8	79	4303	《夢曾文清公》	嘉定	1	冬	1208	84	山陰
150	8	80	4335	《夢中作》	嘉定	1	冬	1208	84	山陰
151	8	81	4354	《書夢》	嘉定	2	春	1209	85	山陰
152	8	84	4482	《夢中作》	嘉定	2	秋	1209	85	山陰
153	8	84	4483	《夢中作》	嘉定	2	秋	1209	85	山陰

154	8	84	4488	《夢華山》	嘉定	2	秋	1209	85	山陰
155	8	84	4498	《八月二十三夜夢中作》	嘉定	2	秋	1209	85	山陰
156	8	85	4529	《十月二四日夜夢中送廬山道人歸山》	嘉定	2	冬	1209	85	山陰
157	8	85	4542	《夢中行荷花萬頃中》	嘉定	2	冬	1209	85	山陰

夢の詩　書き下し文・訳文一覧

1　夜夢從數客雨中載酒出遊山川城闕極雄麗云長安也因與客馬上分韵作詩得遊字（巻一）
（夜夢、數客に從いて雨中に酒を載き、山川に出遊す。城闕極めて雄麗、云わく長安也と。因りて客と馬上に分韵して詩を作り、遊字を得る。）

有酒不謀州	酒有りて　州を謀らず
能詩自勝侯	詩を能くして　自ずから侯に勝る
但須繩繫日	但だ須からく　繩もて日を繫ぎ
安用地埋憂	安んぞ用て　地に憂いを埋めん
射雉侵星出	雉を射るに　星を侵して出で
看花秉燭遊	花を看るに　燭を秉りて遊ぶ
殘春杜陵雨	殘春　杜陵の雨
不恨濕貂裘	恨まず　貂裘の濕たるを

（酒を飲んで官の仕事を忘れ／詩を作って楽しめば、それだけで高官の位を得るより勝っている。／ただ太陽を縄で繫ぎ止め、昇らせないようにさえしておけば／憂いなどもはや地に埋めるまでもない。／星空のもとに雉狩りをし／蝋燭を持って花々を眺める。／残春の杜陵の古城に雨が降っていようと／毛皮の服が濡れるのを恨んだりはしない。）

2　記夢（巻二）
（夢を記す。）

夢裏都忘困晚途	夢裏　都て忘る　晚途に困すを
縱横草疏論遷都	縱横　草疏し　遷都を論ず
不知盡挽銀河水	知らざるや　盡く銀河水を挽かば
洗得平生習氣無	洗い得て　平生の習氣無し

（夢の中では、老年の苦しみを全て忘れ去り／自由自在に皇帝に遷都を上奏する。／知らないではないだろう、銀河水を挽けば／俗世の臭気を洗い流せよう。）

3　九月六夜夢中作笑詩覺而忘之明日戲追補一首（巻四）
（九月六夜、夢中に笑詩を作り、覺めて之を忘る。明日、戯れに一首を追補す。）

吾家笑疾自士龍	吾家の笑疾　士龍に自る
我才雖卑笑則同	我才卑と雖も　笑は則ち同じ
紛紛世事何足計	紛紛たる世事　何ぞ計るに足らん

盡付撫掌掀髯中　　盡く　撫掌掀髯の中に付さん
清樽可醉風月好　　清樽　醉う可し　風月好し
虚空萬象皆絶倒　　虚空の萬象　皆絶倒す
問君此笑是喜不　　君に問う　此の笑　是れ喜ぶや不や
道得老夫輸一籌　　道に老夫を得るも　一籌を輸す

（我が一族の笑疾は陸雲より始まっている。／私の才能は陸雲には及ばないが、笑疾は同じである。／細々と騒がしい世の中について、どうして深く考える価値があるだろう／すべて手を叩き、髭を振り乱して笑う中に片づけてしまおう。／酒樽から酒を飲み、風月の素晴らしさに酔えば／浮世のあらゆるものが、皆笑って絶倒する。／「お聞きしますが、このような笑いは好ましいものでしょうか？」／道中、老夫に会ったが、賭け事で負けてしまった。）

4　九月十六日夜夢駐軍河外遣使招降諸城覺而有作（巻四）
（九月十六日夜、軍を河外に駐し、使を遣わして諸城を招降するを夢み、覺めて作る有り。）

殺氣昏昏横塞上　　殺氣　昏昏として　塞上に横たわり
東並黄河開玉帳　　東のかた　黄河に並び　玉帳を開く
晝飛羽檄下列城　　晝は羽檄を飛ばして　列城を下し
夜脱貂裘撫降將　　夜は貂裘を脱ぎて　降將を撫す
將軍櫪上汗血馬　　將軍の櫪上には　汗血の馬
猛士腰間虎文韔　　猛士の腰間には　虎文の韔
階前白刃明如霜　　階前の白刃　明らかなること霜の如し
門外長戟森相向　　門外の長戟　森として相い向かう
朔風卷地吹急雪　　朔風　地を卷きて　急雪に吹き
轉盼玉花深一丈　　轉盼にして　玉花　深きこと一丈
誰言鐵衣冷徹骨　　誰か言わん　鐵衣の冷きこと　骨に徹ると
感義懷恩如挾纊　　義に感じ　恩を懷わば　纊を挾むが如し
腥臊窟穴一洗空　　腥臊たる窟穴　一洗して空たり
太行北嶽元無恙　　太行　北嶽　元より恙無し
更呼斗酒作長歌　　更に斗酒を呼びて　長歌を作り
要遣天山健兒唱　　天山の健兒をして唱わしむるを要めん

（殺気が黒々と砦に立ち込める中／我が宋王朝の軍は東のかなた、黄河に沿って陣を張る。／昼には檄文を飛ばして敵の諸城を降伏させ／夜には貂の毛皮を脱いで降将を労わってやる。／我が将軍たちの馬小屋には汗血馬が控えており／勇猛な兵士たちの腰には虎皮の弓袋が下げられている。／階前には研ぎ澄まされた白刃が霜のようにきらりと光り／門外には長戟がずらりと林のように並んでいる。／北風が地に吹き付けて猛吹雪を巻き起こし／見る見るうちに白玉の花のような雪が、一丈の深さにまで降り積もった。／「鉄の鎧が冷たくて骨まで凍えそうだ」な

どと一体誰が言うものか／宋王朝への義、皇帝からの恩を思えば綿入れを着るように暖かいではないか。／生臭い敵の巣窟を一掃すれば／太行・北岳といった山々も平穏さを取り戻すことができる。／それから一斗の酒を持ってこさせて祝いの長歌を作り／天山の健児たちに歌わせようではないか。）

5　記夢（巻五）

（夢を記す。）

夢泛扁舟禹廟前	夢に扁舟を泛ぶ　禹廟の前
中流拂面風泠然	流れに中りて面を拂うに　風泠然たり
樓臺縹緲知幾疊	樓臺　縹緲たり　幾疊かを知らん
雲物點綴多餘妍	雲物　點綴たり　多く妍を餘す
蓮房芡觜采無主	蓮房　芡觜の采　主無く
漁歌菱唱聲滿川	漁歌　菱唱の聲　川に満つ
夢中了了知是夢	夢中　了了として是を夢と知る
却恐燕語來驚眠	却って恐る　燕語の來たりて眠を驚かすを
弄橈顧謂共載客	橈を弄し　顧みて共載の客に謂う
乖離不記經幾年	乖離してより經つること　幾年かを記えず
即今相逢兩幻質	即ち今　兩幻質に相い逢うも
轉盼變滅如飛烟	轉盼　變滅たりて　飛烟の如しと
斯言未竟客大笑	斯言　未だ竟わらずして　客大笑す
人生寓世豈獨堅	人生　寓世　豈に獨りとして堅ならんや
元章嘉叟君所見	元章　嘉叟　君の見る所は
一別丹旐俱翩翩	一たび　丹旐　俱翩翩たるに別るるなり
君知夢覺本無異	君知らん　夢より覺めて　本と異なる無きを
勿爲畫餅流饞涎	畫餅が爲に饞涎を流す勿かれと
我慚俛首夢亦斷	我慚じて首を俛するに　夢亦た斷す
尚覺細浪鳴船舷	尚お覺めて　細浪　船舷に鳴る

（夢で禹廟の前に小舟を浮かべ／水の流れに逆らって進むと、顔に当たる風が冷たい／楼台の様子が霞んで見え、どのくらいの高さなのか分からない。／景色は転々と連なり、余りある美しさを備えている。／蓮のつぼみやケシ／漁歌と菱の実を採る歌声が川に満ちている。／夢の中、明らかにこれが夢であると認識し、燕の鳴き声に目覚めはしないかと心配になった。／舟を漕ぎながら、同乗の友人を振り返って言った／「あなた方と別れてから何年が経ったか定かではありませんが／今二人の幻と再会したところ／その姿は流動的で点滅して、まるで煙のようなものですね」と。／私の言葉が終わらないうちに二人は大笑し／「人生とは、この世に仮住まいしているようなものだから、一人として確実な姿を持った人はいないのだ。／今、君が見ている元章・嘉叟の我々二人は／一度、葬儀の旗が翻る中に別れたものである。／君は、夢から覚めれば

現実は何ら変わっていないということを知らないわけではあるまい。／絵に描いた餅に涎を垂らしていてはいけないよ」と。／私が恥ずかしく思ってうつむくと、夢は途絶えてしまったが／目覚めてなお、微かな波が船べりに当たって音を立てるのが聞こえている。）

6　夢入禪林有老宿方陞座或云通悟禪師也（巻五）
（夢に禪林に入るに、老宿の方に陞座せんとする有り、或ひと云う、通悟の禪師也と。）

塵埃車馬何憧憧　　塵埃　車馬　何ぞ憧憧たる
麞頭鼠目厭妄庸　　麞頭　鼠目　妄庸を厭う
樂哉夢見德人容　　樂しき哉　夢に德人の容を見る
巍巍堂堂人中龍　　巍巍　堂堂たり　人中の龍
舉頭仰望太華峰　　舉頭　太華峰を仰望し
攝衣欲往路無從　　攝衣　往かんと欲するに　路の從る無し
忽然夢斷難再逢　　忽然　夢斷じて　再び逢うこと難し
空記說法聲如鐘　　空しく記す　說法の聲　鐘の如きを

（（夢で訪れた場所には）塵埃や車馬も全くなかった。／卑しい人間であればこそ、凡庸であることを嫌うもので／立派な人の姿を夢にみることは、なんと楽しいことかと思えた。／気高く堂々とした様子は、まるで人の中に龍がいるようだった。／頭を挙げて太華山を仰ぎ見／衣服を整えて行こうとして、辿るべき道も必要としない。／忽然と夢から覚めて再び会うことも叶わずに／説法の声が鐘のように響いていたことを、空しく覚えているだけだ。）

7　甲午十一月十三夜夢右臂踊出一小劍長八九寸有光既覺猶微痛也（巻六）
（甲午十一月十三夜、右臂より一小劍、長さ八九寸、光有るの踊り出るを夢み、既に覺みて猶お微かに痛む也。）

少年學劍白猿翁　　少年　劍を白猿翁に學び
曾破浮生十歲功　　曾て破る　浮生十歲の功
玉具拄頤誰復許　　玉具　頤を拄くるは　誰か復た許さん
蒯緱彈鋏老猶窮　　蒯緱　鋏を彈じ　老いて窮するが猶し
床頭忽覺蛟龍吼　　床頭　忽として覺む　蛟龍の吼
天上方驚牛斗空　　天上　方に驚くべし　牛斗の空
此夢怪奇君記取　　此夢　怪奇なり　君記取せよ
佩刀猶得世三公　　佩刀　猶お得ん　三公を世にするを

（幼いころ、白猿公に剣を習い／これまで十年間、学んできたことが無駄だと知った。／　　／　　突然、枕上に龍の声を聞いて目が覚めると／驚くべきことに、天には牛斗の星座がかかっていた。／皆よ、この夢は貴重であるから記録しておきなさい／佩刀を得たというこ

とは、この世で三公の位に昇ることの暗示かもしれないから。）

8　午夢（巻七）
（午、夢む。）

苦愛幽窗午夢長　苦だ愛す　幽窗　午夢の長きを
此中與世暫相忘　此中　世と暫し相い忘る
華山處士如容見　華山　處士の容の見すが如きに
不覓仙方覓睡方　仙方を覓めずして　睡方を覓めん

（静かな窓辺で、長々と午夢をみるのはなんと幸せなことだろう／夢の中では暫くの間、この世と互いに存在を忘れ去る。／昔、華山に隠居して百日のあいだ寝たままだった雲台翁のように／私も仙人の術より、眠る術を習得したいものだ。）

9　夢遊山水奇麗處有古宮觀云雲臺觀也（巻七）
（夢に山水の奇麗なる處に遊ぶに、古宮觀有り、云わく雲臺觀也と。）

神遊忽到雲臺宮　神遊　忽として到る　雲臺宮
太華彩翠明秋空　太華　彩翠　秋空に明らかなり
曲廊下闞白蓮沼　曲廊　下闞す　白蓮の沼
小閣正對青蘿峰　小閣　正對す　青蘿の峰
林間突兀見古碣　林間　突兀として　古碣を見
雲外縹緲聞疏鐘　雲外　縹緲として　疏鐘を聞く
褐衣紗帽瘦如削　褐衣　紗帽　瘦なること削の如し
遺像恐是希夷翁　遺像　恐るらくは　是れ希夷翁ならん
窮搜未遍忽驚覺　窮搜　未だ遍らずして　忽として驚き覺む
半窗朝日初曈曨　半窗　朝日　初めて曈曨たり
却思巉然五千仞　却って思う　巉然たる五千仞
可使常墮戰塵中　常に戰塵中に墮せ使む可きかと
小臣昧死露肝鬲　小臣　死を昧して　肝鬲を露わにし
願扈鑾駕臨崤潼　願わくは　鑾駕に扈いて　崤潼に臨まんことを
何當真過此山下　何當か　真に過ぐるべし　此山の下
百尺嫋嫋龍旗風　百尺　嫋嫋たる　龍旗の風

（夢の中に魂がさまよって、忽然と雲臺宮に辿り着いた。／太華山は青々と彩られ、秋空にくっきりと映えている。／曲がりくねった廊下の下には白蓮の沼が見え／小閣は青蘿の峰に向かい合っている。／林の間には高くそびえた古い石碑が見え／雲の向こうからは微かに鐘の音が聞こえる。／褐衣・紗帽の姿は筆刀のように痩せていて／もしや希夷翁の残像ではないかと疑っ

た。／確かめようとするも、探し当てられないうちに突然はっと目が覚めてみると／窓の半ばあたりに朝日が見え、ちょうど夜が明けるころだった。／今改めて思う、あの高く険しい五千仞の山が／いつまでも胡の塵の中に堕ちていて良いものだろうかと。／私は死を賭して真心を明らかに示し／願わくは天子の親征に付き従って崤潼の地に出向きたいものだ。／この山の下を、いつか本当に通る日が来るだろうか／天子の御旗がずらりと並び、風を巻き起こす景色の中を。）

10　九月十八夜夢避雨叩一僧院有老宿年八十許邀留甚勤若舊相識者夢中爲賦此詩（巻八）
（九月十八夜、夢に雨を避けて一僧院を叩くに、老宿の年八十許なる有り、留むることを邀むること甚だ勤む、舊より相い識る者の若し。夢中、爲めに此詩を賦す。）

畫簷急雨傾高秋	畫簷の急雨　高秋に傾き
夜投丈室燈幽幽	夜　丈室に投じて　燈幽幽たり
耆年擁毳雪滿頭	耆年　毳を擁して　雪　頭に滿つ
拂拭床敷邀我留	床敷を拂拭し　我の留むるを邀む
雛猊戲擲香出喉	雛猊　戯れに擲つ　香出の喉
蓬蓬結成蒼玉毬	蓬蓬として　結成す　蒼玉の毬
蠻童掲簾侍者憂	蠻童　簾を掲げて　侍者憂う
觸散香烟當罰油	觸れて香烟を散ずれば　罰油に當たらんと

（秋の盛りに、急な雨が飾りのある軒から流れ／夜、丈室に投宿すると、燈火がほのかに灯っていた。／毛皮を着た白髪の高齢の僧が／寝床を整えて、私が留まるように迎えてくれた。／雛猊の香炉は香をたく喉から気ままに息を吐き／青色の煙を丸い形にゆらゆらと作り出す。／小童が簾を上げたので、侍者は心配した。／香煙を散らしてしまえば、罰せられるだろうと。）

11　記夢　二首　其一（巻九）
（夢を記す。）

烏巾白紵憶當年	烏巾　白紵　當年を憶う
抵死尋春不自憐	抵死　春を尋ねて　自ら憐れまず
憔悴劍南雙鬢改	劍南に憔悴し　雙鬢改むるも
夢中猶上暗門船	夢中　猶お上る　暗門の船

（いま、隠者の身なりをして昔を懐かしく思いつつも／せわしなく春を求めることで、自らを慰める。／成都に来てから時間が経ち、老いて髪も白くなったが／夢の中では今なお、杭州城西の清波門の周囲で船に乗る。）

12　記夢　二首　其二（巻九）
（夢を記す。）

團臍霜蟹四腮鱸	團臍　霜蟹　四腮鱸
樽俎芳鮮十載無	樽俎　芳鮮　十載無し
塞月征塵身萬里	塞月　征塵　身は萬里
夢魂也復醉西湖	夢魂　也復　西湖に酔う

（團臍・霜蟹・四腮鱸といった杭州名産の海産物や／酒宴・ご馳走はもう長い間お預けだ。／長いあいだ、杭州からは遠く離れていて、旅先の塵が身に降り積もっているが／夢の中では魂が飛んでいき、今も西湖の上で酒に酔う。）

13　夜夢與宇文子友譚德稱會山寺若餞予行者明日黎明得子友書感嘆久之乃作此詩（巻十）
（夜、宇文子友、譚德稱と山寺に會すを夢みるに、予の行を餞けするが若し。明日黎明、子友の書を得、感嘆すること之を久しくして、乃ち此詩を作る。）

夜夢集山寺	夜　山寺に集うを夢む
二三佳友生	二三の　佳き友生
相顧慘不樂	相顧みれば　慘にして樂しまず
若有千里行	千里行　有るが若し
在門僕整駕	門に在りては　僕　駕を整え
臨道騅嘶鳴	道に臨みては　騅　嘶鳴す
我友顧謂我	我友　顧みて我に謂う
天寒戒晨征	天寒ければ　晨征を戒めよ
遲速要當到	遲速は　當に到るを要す
徐驅勿貪程	徐驅して　程を貪る勿かれと
丁寧及藥餌	丁寧すること　藥餌に及び
依依有餘情	依依として　餘情有り
鄰鐘忽驚覺	鄰鐘　忽として驚きて覺み
鴉翻窗欲明	鴉翻りて　窗明けんと欲す
作詩謝我友	詩を作りて　我友に謝さん
有使頻寄聲	使の　頻りに聲を寄する有り

（夜、夢で山寺に集まり／二、三の成都の友人と会ったものの／お互いの顔を眺めると寂しさがこみあげて心から楽しめず／この先千里の道のりをいくようだった。／門のそばでは既に僕が出発の用意を整え、道の傍らでは馬が待ちかねて嘶いている。／友人が私に向き直って言う／「寒い日は早朝の出発によく気をつけなさい／早く行こうが遅く行こうがきっと辿り着くだろうから／ゆっくり馬を走らせて、無理に道を急いではいけないよ」と。／薬や食べ物のことに至るまで懇ろに言い聞かせ、いつくしんで、いつまでも名残は尽きなかった。／不意に近くで鐘が鳴り、驚いて目が覚めると／カラスが飛んで、窓の外は明るくなろうとしていた。／詩を作って

子友に感謝を伝えよう／まめに使いをやって手紙を寄せてくれることに。）

14　夢至成都悵然有作　二首　其一（巻十）
（夢に成都に至り悵然として作る有り。）

春風小陌錦城西　　春風の小陌　錦城の西
翠箔珠簾客意迷　　翠箔の珠簾　客意迷う
下盡牙籌閑縱博　　牙籌を下し盡くして　閑かに博を縱にし
刻殘畫燭戲分題　　畫燭を刻み殘いて　戯れに題を分かつ
紫氈毹暖帳中醉　　紫氈毹　暖くして帳中に醉い
紅叱撥驕花外嘶　　紅叱撥　驕りて花外に嘶く
孤夢凄凉身萬里　　孤夢　凄凉にして身は萬里
令人憎殺五更雞　　人をして五更の雞を憎殺せしむ

（春風が吹き抜ける、錦城西の路地／翡翠や真珠の簾を掛けた店の間を渡り歩く。／牙籌を出し尽くして漫然と博打を楽しみ／飾りのある蝋燭に刻みを入れて気まぐれに分題し詩を作る。／私は紫の絨毯が敷かれた暖かい帳の中に酔い／外に繋いだ駿馬は花の向こうに嘶く。／一人夢から覚めると、成都からは万里も離れているという現実に落胆し／五更に鳴いた鶏が憎らしくて仕方がない。）

15　夢至成都悵然有作二首 其二

宦途元不羨飛騰　　宦途　元より飛騰を羨まず
錦里豪華壓五陵　　錦里　豪華にして　五陵を壓す
紅袖引行遊玉局　　紅袖を引きて行き　玉局に遊び
華燈圍坐醉金繩　　華燈を圍みて坐し　金繩に酔う
階前汗血洮河馬　　階前　汗血　洮河の馬
架上霜毛海國鷹　　架上　霜毛　海國の鷹
世事轉頭誰料得　　世事　頭を轉じて　誰か料るを得んや
一官南去冷如冰　　一官　南去して　冷たること冰の如きを

（元々、官途での栄達など望んではいないのだ。／成都の華やかさは皇帝の五陵をも圧倒するほどだった。／妓女を連れ歩いて賭博にふけり／華やかな灯りを囲んで座り、道観の一室に酔った。／堂に登る階段の前には洮河産の汗血馬が繋がれ／梁の上には海國産の真っ白な鷹がとまっていたものだ。／世の中のことは、頭をひねったところでだれが予想できるというのだろう／今私が成都を去り東の故郷に帰ってきて、寒々と氷の如く老いてゆくことになるなんて。）

16　夢藤驛二首 其一（巻十）

（藤驛を夢む。）

倦馬投孤驛　　倦馬　孤驛に投ず
一峰青壓門　　一峰の青　門を壓す
蕭條秋浦路　　蕭條たり　秋浦の路
荒陋夜郎村　　荒陋たり　夜郎の村
地瘴霜常薄　　地　瘴にして　霜常に薄し
林深日易昏　　林　深くして　日易く昏す
百年常作客　　百年　常に客を作す
排悶近清樽　　悶を排し　清樽に近づく

（疲れた馬をさびれた駅舎に繋ぐ。／そびえる山の青さが門に迫っている。／ひっそりと細長い秋浦路（かつて入蜀の時に通った場所）や／荒れた狭い夜郎村（かつて栄州知事をしていた時に入った場所）を思わせる様子だ。／土地には毒気が立ち込めて、霜が常に張っており／林は深く、日はすぐに没して暗くなる。／長い間、私は異国に寓居の身であり／何とか憂いを晴らそうと、酒に浸るしかない。）

17　夢藤驛二首 其二

又入千山去　　又た入る　千山の去
真成萬里行　　真に成す　萬里の行
履霜常早駕　　霜を履みて　常に駕を早め
秉炬或宵征　　炬を秉りて　或いは宵征す
古驛怪藤合　　古驛に　怪藤合し
荒陂群雁鳴　　荒陂に　群雁鳴く
客中常少睡　　客中　常に少睡なり
歸夢若爲成　　歸夢　爲めに成るが若し

（今年は成都から山陰、建安へと千の山を越えて赴任したため／まさに万里の旅をしてきたと言える。／霜の張る中、馬を急ぎ走らせ／かがり火を手に、ある日は夜も馬を進めた。／古い駅には奇妙な蔦が絡まり／荒れた山坂には鴈の大群が一斉に鳴く。／旅先では常に十分な睡眠がとれないから／故郷が懐かしくなって、このような帰郷の夢を見るのだろう。）

18　夢與劉韶美夜飲樂甚（巻十一）
（劉韶美と夜飲して樂しきこと甚しを夢む。）

死生契濶十年餘　　死生の契濶　十年餘
欲話交情涕已濡　　交情を話るを欲して　涕已に濡る

夢裏偶同清夜宴　　夢裏　偶　清夜の宴を同じくし
醉中猶攬故人鬚　　醉中　猶お攬む　故人の鬚
岸巾談笑今誰記　　岸巾　談笑　今誰か記さん
滿腹詩書只自愚　　滿腹　詩書　只だ自ら愚かなるのみ
我亦與公同此病　　我亦た　公と此病を同しくす
早收身世老江湖　　早に身世を収め　江湖に老う

（死に別れてから十年余りの時が経ったが／生前の交わりを人に語ろうとすると未だに涙を流さずにはいられない。／夢の中で、偶然清々しい夜の宴を共にして／酔いながら、今一度彼の髭を掴むことができた。／頭巾をあみだに被って談笑している時に、誰が文字など書こうというのか／満腹の中で詩や書をなすのは、ただただ愚かなだけだ。／私もまた彼と同じ性質があるらしい／早くに官としての人生を終え、民間に老いていこうというのだから。）

19　初秋夢故山覺而有作　四首 其一（巻十一）
（初秋、故山を夢み、覺めて作る有り。）

陂水白茫茫　　陂水　白くして茫茫
草烟濕霏霏　　草烟　濕いて霏霏
牧童一聲笛　　牧童　一聲の笛
落日無餘暉　　落日　餘暉無し
遥山已漸隱　　遥山　已に漸く隱る
村巷亞竹扉　　村巷　亞竹の扉
老翁延我入　　老翁　我を延きて入らしめ
苦謝柿栗微　　苦ろに謝す　柿栗微なるも
幸逢歲有秋　　幸いに　歲の秋有るに逢う
一醉君勿違　　一醉　君違うこと勿かれと
念此動中懷　　此を念いて　中懷を動かし
命駕吾將歸　　駕を命じ　吾將に歸らんとす

（大きな池の水は白く茫々とたたえ／草の煙は湿って霏霏と細かな水蒸気を立てている。／牧童が一声笛を吹き、夕日はもはや光を残さない。／遥かなる山もだんだんと隠れる中／村の小道に竹に覆われた扉の家がある。／その家の老人が私を中に引き入れて／懇ろに断りを言う、「柿も栗も不出来で少しばかりしかありませんが／幸いに今年は豊作で穀物が採れました／まあ否まずにひと酔いなさいまし」と。／この夢を思い返して私は胸の内を動かした／車を命じて早く故郷へ帰ってしまおうと。）

20　初秋夢故山覺而有作四首 其二

犬吠舍前後　　犬　舍の前後に吠え
月明村東西　　月　村の東西を明らす
岸草蛩亂號　　岸草に　蛩　亂號し
庭樹鳥已栖　　庭樹に　鳥　已栖す
我僕城中還　　我僕　城中より還り
擔頭有懸雞　　擔頭　雞を懸くる有り
小兒勸我飲　　小兒　我に飲を勸め
村酒拆赤泥　　村酒　赤泥を拆く
我醉不自覺　　我醉いて　自ら覺えず
頽然葛巾低　　頽然として　葛巾低し
著書笑蒙莊　　著書　蒙莊を笑う
茗芋物自齊　　茗芋して　物自ずから齊しと

（犬が家の周りで吠え／月は村の隅々まで明るく照らしている。／川岸の草にはあちこちでこおろぎがやたらと鳴き／庭の樹には鳥が多く集まっている。／私の従僕が城中から戻ってきた／頭の上に鶏をぶら下げて。／子供が私に酒を進め／また村の酒の赤泥でできた酒壺の蓋を開く。／私は酔って前後不覚に陥り／床に崩れ落ちて、頭巾も垂れ下がる。／自分の書いた文章と、荘子の思想を笑っているが／酩酊すれば荘子の言うように、すべての物は斉同である。）

21　初秋夢故山覺而有作四首 其三

昔我東歸時　　昔　我　東歸の時
父老迎舩頭　　父老　舩頭に迎え
開篷相勞苦　　篷を開きて　勞苦を相し
怪我領雪稠　　我の雪を領くことの稠きを怪しむ
故山何負君　　故山　何ぞ君に負かん
且作數月留　　且く　數月の留を作せと
豈知席未暖　　豈に知らんや　席の未だ暖からずして
疋馬来南州　　疋馬　南州より来るを
蠻花四時紅　　蠻花　四時紅にして
瘴霧日夜浮　　瘴霧　日夜浮かぶ
歸哉不可遲　　歸らん哉　遲る可からざれば
勿與婦子謀　　婦子と謀る勿れ

（昔、私が帰郷したときは／村の父老が舟先にまで迎えに来て／舟の覆いを開いて私の疲れ具合を調べ／私の白髪が多いことを心配してくれた。／「郷里がお前をどうして迎え入れないでいられよう／ここはしばらく、数か月は留まっていきなさい」と。／どうして予想できただろう、私がまだ郷里に落ち着かないうちに／次の赴任先である南州から迎えの使者がやってくるなど

とは。／（南州では）未開の地の花が年中赤く咲き／毒気が一日中立ち込めている。／帰郷しよう、一刻もぐずぐずしてはいられない／妻や子供と相談する暇はないのだ。）

22　初秋夢故山覺而有作四首 其四

杜宇真吾交	杜宇　真に吾と交う
勸去恨不速	去るを勸めるも　速やかならざるを恨む
忠告輸肝肺	忠告　肝肺を輸し
厚意均骨肉	厚意　骨肉に均し
陋哉鷓鴣語	陋なる哉　鷓鴣の語
揣我貧念禄	我を揣りて　禄を貧念す
竹雞更鄙淺	竹雞　更に鄙淺
泥淖憂車軸	泥淖として　車軸を憂う
秋風嚴瀨清	秋風　嚴瀨の清
春雨戴溪緑	春雨　戴溪の緑
行矣勿復疑	行く矣　復た疑う勿れ
照影巾一幅	照影す　巾一幅

（ホトトギスこそ私と交友するに相応しい。／（ホトトギスの鳴き声は私に）帰郷することを勧めているのに、早く帰れないことが恨めしい。／その忠告の鳴き声（＝不如帰去）は肺肝に／厚意は骨肉に染み入る。／（それに対して）鷓鴣の鳴き声（＝行不得哥哥）は、なんと卑しいのだろう／私の気持ちに反して、赴任先での収入を惜しむのだ。／竹雞は更に卑賤である／（郷里への道は）泥々で、車軸が折れてしまわないかと心配している。／秋風は嚴陵の瀨を清々しく通り抜け／春雨は戴溪を艶やかな緑に彩る。／もう出立すると決めた、だからこれ以上疑わないでくれ／そう思って鏡を見ながら頭巾を被った。）

23　春晩坐睡忽夢泛舟飲酒樂甚既覺悵然有賦（巻十二）
（春晩、坐睡するに、忽として夢に舟を泛べ、飲酒して樂きこと甚し。既に覺みて悵然として賦する有り。）

夢泛扁舟逸興多	夢に扁舟を泛かぶ　逸興多し
畫橈揺蕩麴生波	畫橈　揺蕩として　麴　波を生ず
微風蔌蔌生蒲葦	微風　蔌蔌たりて　蒲葦を生じ
小雨霏霏濕芰荷	小雨　霏霏たりて　芰荷を濕らす
舞落烏紗從歲去	舞落の烏紗　歲に從いて去らば
歌酣白紵奈情何	歌酣の白紵　情を奈何せん
年来惟覺華胥樂	年来　惟だ華胥の樂を覺ゆるのみ
莫遣茶甌戰睡魔	茶甌を遣り　睡魔と戰う莫かれ

（夢で小舟を浮かべることは一興である／飾りのある櫂を気ままに動かすと、酒杯に波が立つ。／微かな風がそよそよと蒲葦の草を揺らし／小雨が降って芰荷を濡らす。／舞い降りる渡り鳥が、季節に従っていなくなってしまえば／酒に酔った私はこの寂しさをどう紛らわせばよいのか。／いつも、ただ眠りの楽しみだけを考えているのだから／茶甌を持ってきて、睡魔と戦わせる（眠らせないようにする）ようなことはやめて欲しい。）

24　五月十一日夜且半夢從大駕親征盡復漢唐故地見城邑人物繁麗云西涼府也喜甚馬上作長句未終篇而覺乃足成之（巻十二）

（五月十一日夜且に半ばならんとするに、大駕の親征に従いて盡く漢唐故地を復すを夢む。城邑の人物の繁麗なるを見るに、云わく西涼府也と。喜ぶこと甚だしく、馬上に長句を作るも、未だ篇を終わらずして覺む。乃ち之を足成す。）

天寶胡兵陷兩京	天寶の胡兵　兩京を陷れしより
北庭安西無漢營	北庭　安西　漢營無し
五百年間置不問	五百年間　置いて問わざりしに
聖主下詔初親征	聖主　詔を下して　初めて親征す
熊羆百萬從鑾駕	熊羆　百萬　鑾駕に從い
故地不勞傳檄下	故地　檄を傳うるを勞せずして下る
築城絕塞進新圖	城を絕塞に築いて　新圖を進め
排仗行宮宣大赦	仗を行宮に排して　大赦を宣す
岡巒極目漢山川	岡巒　極目　漢の山川
文書初用淳熙年	文書　初めて用う　淳熙の年
駕前六軍錯錦繡	駕前の六軍　錦繡を錯え
秋風鼓角聲滿天	秋風　鼓角　聲　天に滿つ
苜蓿峰前盡亭障	苜蓿峰前　盡く亭障
平安火在交河上	平安火は　交河の上に在り
涼州女兒滿高樓	涼州の女兒　高樓に滿ち
梳頭已學京都樣	頭を梳って已に京都の樣を學ぶ

（天宝の昔、胡の兵が都を攻め落とした時から／北庭と安西（二つの都護府の治めた）地域で、漢軍の陣営はなくなった。／それより今まで五百年間、誰一人顧みもしなかった。／我が聖の君は詔を下し、今こそ親征したもうた。／熊のごとき勇士百万、みくるまに従って／漢・唐両朝のもとの領土は、檄をまわすまでもなく帰順した。／国の果ての境界線に築いた城の見取り図がもたらされ／行宮では儀仗兵が整列し大赦令が宣言された。／山や岡、目の届く限りは漢の土地／公文書にも今初めてわが淳熙の年号が記される。／近衛の兵士たちの装束は錦のぬいとりうるわしく／太鼓と角笛の音は、秋風の中、空に満ちて響き渡る。／苜蓿峰のこなたは、どこもかしこも守備隊の営所があり／平安を報ずるのろしの煙は交河のほとりからここまで続く。／涼州

のむすめたちは、二階家から鈴なりになってさし覗き／髪の結いよう、もうとっくに都のはやりをまねている。）

25　夏日晝寢夢遊一院闃然無人簾影滿堂惟燕蹋箏弦有聲覺而聞鐵鐸風響璆然殆所夢也邪因得絶句（巻十二）

（夏日、晝寢ね、夢に一院に遊ぶ。闃然として人無く、簾影堂に滿つ。惟だ燕の箏弦を蹋みて聲有るのみ。覺みて鐵鐸の風に響きて璆然たるを聞く。殆ど夢みし所也邪。因りて絶句を得。）

桐陰清潤雨餘天	桐陰　清潤　雨餘の天
簷鐸揺風破晝眠	簷鐸　風に揺れて　晝眠を破る
夢到畫堂人不見	夢に畫堂に至るも　人を見ず
一雙輕燕蹴箏弦	一雙の輕燕　箏弦を蹴る

（桐の陰から見る雨上がりの空は清々しく潤っている。／風に揺れる風鈴の音で、昼寝から覚めた。／夢で、彩色の施された無人の堂に入ると／一羽の小さな燕が、琴糸の上を歩いて音を立てていた。）

26　夢仙（巻十二）

（仙を夢む。）

題注：夢朝謁大宮殿，仰視去天甚近，星皆大如月，氣候清寒如十月間時庚子六月一日也

（大宮殿に朝謁するを夢みるに，仰視して天より去ること甚だ近く，星は皆大なること月の如く，氣候は清寒なること十月間の如し。時に庚子六月一日也。）

中宵遊帝所	中宵　帝所に遊ぶ
廣殿綴仙官	廣殿　仙官を綴る
天逼星辰大	天逼　星辰は大なり
霜清劍珮寒	霜清　劍珮は寒し
賦詩題碧簡	詩を賦するに　碧簡に題し
侍宴跨青鸞	宴に侍するに　青鸞に跨る
惆悵塵緣重	惆悵す　塵緣の重きを
夢殘更未殘	夢　更に未だ殘われざるを殘う

（深夜、天帝の所に遊ぶと／広大な御殿に仙官が並んでいる。／天には遍く星が間近に見え／霜は清らかで、身に帯びた剣は冷ややかだ。／碧玉の札に詩を書きつけ、青い鸞に乗って宴へ行く。／恨めしいのは、世俗との腐れ縁があることだ／今しがたまで見ていた夢は次第に消えて、名残を残しておくこともできない。）

27　晝寢夢一客相過若有舊者夷粹可愛既覺作絶句記之（巻十三）

（晝寢ねて、夢に一客と相い過う。舊有る者の若し。夷粹にして愛す可し。既に覺みて絶句を作り、之を記す。）

夢中何許得嘉賓　　夢中　何許にか　嘉賓を得る
對影胡床岸幅巾　　胡床に對影す　岸幅の巾
石鼎烹茶火煨栗　　石鼎もて茶を烹　火もて栗を煨く
主人坦率客情真　　主人は坦率　客情は真

（夢中に、とある場所で喜ばしき賓客に相対した。／簡単な椅子に向き合って、頭巾をあみだに被る。／石鼎で茶を煮出し、秀栗を焼いた。／主人である私は率直で、客は真に誠実だった。）

28　夢中作（巻十三）
（夢中の作。）

拓地移屯過酒泉　　地を拓き　屯を移して　酒泉を過ぎ
第功圖像上凌烟　　功を第し　像を圖りて　凌烟を上る
事權皂纛兼黄鉞　　事權皂纛　黄鉞を兼ね
冨貴金貂映玉蟬　　冨貴　金貂　玉蟬に映ゆ
油築毬場飛騕褭　　油築の毬場に　騕褭を飛ばし
錦裁步障貯嬋娟　　錦裁の步障は　嬋娟を貯う
擁塗士女千層看　　塗に擁す　士女　千層の看
應記新豐舊少年　　應に記すべし　新豐の舊少年

（天子は地を切り開き、軍営を移しながら酒泉を過ぎ／功績を賞し、像に描きながら凌烟へ行く。／軍の指揮官としての役目を負い／富貴な金貂の衣がまばゆい。／つやつやした毬場では馬を飛ばし／錦で編まれた足元には優雅さをまとっている。／道には幾重にも士女が立ち並び／　　）

29　十月二十六日夜夢行南鄭道中既覺恍然攬筆作此詩時且五鼓矣（巻十四）
（十月二十六日夜、夢に南鄭道中を行く。既に覺めて恍然たり、筆を攬りて此詩を作るに、時且に五鼓ならんとす。）

孤雲兩角不可行　　孤雲　兩角　行く可からず
望雲九井不可渡　　望雲　九井　渡る可からず
嶓冢之山高插天　　嶓冢之山　高くして天に插し
漢水滔滔日東去　　漢水　滔滔　日に東に去る
高皇試劍石爲分　　高皇　劍を試み　石爲めに分る
草沒苔封猶故處　　草沒し苔封じて　猶お故處にあり

將壇坡陀過千載	將壇　坡陀たり　千載を過ぐ
中野疑有神物護	中野　疑うらくは神物の護有るかと
我時在幕府	我時に幕府に在り
来往無晨暮	来往して　晨暮と無し
夜宿沔陽驛	夜は宿す　沔陽驛
朝飯長木鋪	朝に飯す　長木鋪
雪中痛飲百榼空	雪中　痛飲して　百榼空しく
蹴踏山林伐狐兔	山林を蹴踏して　狐兔を伐つ
躭躭北山虎	躭躭たり　北山の虎
食人不知數	人を食らうこと　數を知らず
孤兒寡婦讎不報	孤兒寡婦　讎　報ぜず
日落風生行旅懼	日落ち風生ずれば　行旅懼る
我聞投袂起	我聞いて　袂を投じて起ち
大呼聞百步	大呼すれば　百步に聞こゆ
奮戈直前虎人立	戈を奮って直ちに前めば　虎は人立す
吼裂蒼崖血如注	吼は蒼崖を裂き　血は注ぐが如し
從騎三千皆秦人	從騎三千　皆く秦人
面青氣奪空相顧	面は青く　氣奪われて空しく相顧みる
國家未發渡遼師	國家未だ發せず　渡遼の師
落魄人間傍行路	人間に落魄して行路に傍う
對花把酒學醞藉	花に對して酒を把り醞藉を學ぶ
空辱諸公誦詩句	空しく諸公の詩句を誦するを辱なくす
即今衰病臥在床	即今　衰病し　臥して床に在り
振臂猶思備征戍	臂を振るって猶お思う　征戍に備わらんことを
南人孰謂不知兵	南人　孰か謂う　兵を知らずと
昔者亡秦楚三戸	昔者　秦を亡ぼせしは楚の三戸なり

（孤雲と両角の山々を越えることはとてもできまい／望雲や九井の早瀬もとうてい渡れない。／嶓冢の峰は一層高く天に突き刺さる勢いで／そこを発する漢水は来る日も来る日もどうどうと東の方へ流れゆく。／漢の高祖が試しに切った岩は真二つに裂け割れて／草に隠れ苔にとじられ昔のままに今もある。／将軍壇は千年の月日の後もけわしく立ち／草原の中ほど、神々が守りたもうかといぶかられる。／その時私は本営におり／朝な夕なにこの道を通ったことであった。／沔陽の宿次では一夜を明かし／長木の継ぎ立て場で朝食を取った。／雪の降る日は痛飲するほどに百個の器を空にして／山林をふみしだき狐や兎の狩りをした。／恐ろしい目つきの虎が北山にいて／人を食い殺した数は知れない。／後に残った孤児とやもめの仇はまだ取れず／日が落ち風が立つ頃、旅人たちの恐怖は増した。／これを聞いた私は袂を翻してすっくと立ち／百歩の先まで聞こえる大声を上げた。／戈をにぎり勇ましく突進するや、虎は両足で立ち／吠えたける声に山壁は避け、血はどくどくと流れ出た。／後に従う三十騎はすべてが秦のものだった

が／顔は青ざめ肝を失って目と目を見合わすばかりであった。／我が国は今もなお遼を渡る遠征軍を発せずにいる。／私は浮世に落ちぶれた全くの傍観者になれ果てた。／花を愛で、酒杯を手に月並みの暮らしをしている。／お偉方が詩を褒めてくださるだけの話である。／今は老いさらばえて病んだ身を床に横たえているものの／いざというとき腕をまくり出征軍に加わる覚悟はある。／江南のものだって戦ができぬとは誰が言う／昔秦を亡ぼしたのは楚の国の三家族だったじゃないか。）

30　夢中作（巻十四）
（夢中の作。）

路平沙軟淨無泥　　路平　沙軟　淨なりて泥無く
香草丰茸沒馬蹄　　香草　丰茸　馬蹄を沒す
擣紙聲中春日晚　　紙を聲中に擣りて　春日晚し
怳然重到浣花溪　　怳然として　重ねて浣花溪に到る

（道の砂はなめらかで、きれいに掃除されて泥もなく／香草が深く茂って馬の蹄を埋めている。／馬のひづめの音を聞きながら詩を書くために紙を取り、春の日がのんびりと暮れていくなか／ぼんやりと、またもや浣花溪に辿り着いてしまったようだ。）

31　記夢（巻十四）
（夢を記す。）

世事紛紛觸眼新　　世事紛紛たり　眼に觸れて新たなるに
何由常作夢中身　　何に由りてか　常に夢中に身を作すや
遠遊萬里纔移刻　　遠遊　萬里　移刻纔かなり
豪飲千場不忤人　　豪飲　千場　人に忤わず
鼓吹滿城壺日晚　　鼓吹　城に滿つ　壺日の晚
鶯花如海洞天春　　鶯花　海の如し　洞天の春
是間可老君知否　　是間　老うる可きか　君知るや否や
莫信人言想與因　　人言　想と因　信ずる莫かれ

（日々、世の中には真新しい出来事があるというのに／なぜ私は夢の中ばかりに身を置くのか／というのも、夢の中では万里のかなたに遊んでも時間が経つことはなく／千度の宴会で、人に勧められるままに痛飲する。／音楽が城中に満ち、壺中で暮らす日々の夜には／花が海のように満開で、まるで洞天の春のようだ。／夢の中で置いていくべきか、君は知っているだろうか／（世説文学における楽令の）夢とは「想」や「因」である（＝夢は「思考」であり、「原因」あって生じるものだ）という発言を信じてはいけないよ。（まさか私が日頃からこんなことばかり考えている訳がないだろう。）

32　五月十四日夜夢一僧持詩編過予有暴雨詩語頗壯予欣然和之聯巨軸欲書未落筆而覺追作此篇（巻十四）

（五月十四日夜、夢に一僧、詩編を持ちて予を過ぐ。暴雨の詩語頗る壯なる有り。予、欣然として之に和し、聯の巨軸なるに書かんと欲す。未だ落筆せずして覺め、此篇を追作す。）

黒雲塞空萬馬屯	黒雲　空を塞ぎ　萬馬屯す
轉盼白雨如傾盆	轉盼たる白雨　盆を傾けるが如し
狂風疾雷撼乾坤	狂風　疾雷　乾坤を撼かす
壯哉澗壑相吐呑	壯なる哉　壑を潤し　相吐呑するや
老龍騰拏下天闇	老龍　騰拏し　天闇より下り
鱗間火作電脚奔	鱗間　火を作し　電脚にて奔る
巨松拔起千年根	巨松　拔起す　千年の根
浮槎斷梗何足論	浮槎　梗を斷ちて　何ぞ論ずるに足らん
我詩欲成醉墨翻	我詩　成らんと欲して　醉墨翻る
安得此雨洗中原	安んぞ得ん　此雨　中原を洗い
長河袞袞来崑崙	長河　袞袞たりて　崑崙より来たり
鸛鵲下看黄流渾	鸛鵲　下りて看る　黄流の渾れるを

（空には黒雲が立ち込め、地には万馬がたむろしており／豪雨が盆を引っくり返したように激しく降る。／暴雨、稲妻が天地を揺さぶり／谷間に雨が降り注ぎ、濁流となる様子の何と激しいことか。／龍が天の暗闇から猛って下る／鱗には火を灯し、稲妻の速さで駆け巡る。／巨大な松は千年の根を引き抜かれて倒れるが／筏を浮かべて障害物など物ともしない。／私は詩を一息に書きあげようとして、一心不乱に筆を翻す。／私の詩でどうして表現できようか、この雨が中原を洗い／濁流となって崑崙山より流れ来たり／コウノトリが眼下に黄河の濁るのを見るという情景を。）

33　夢宴客大樓上命筆作詩既覺續成之（巻十四）

（宴客の大樓の上で詩を筆作を命ずるを夢み、既に覺みて之を續成す。）

表裏江山亦樂哉	表裏の江山　亦た樂しき哉
華纓滿座敵鄒枚	華纓　座に満ちて　鄒枚に敵う
歌從郢客樓中聽	歌　郢客樓の中從り聽こえ
獵向樊姫墓上回	獵　樊姫墓の上に向かいて回る
梅蘂香清篸寶髻	梅蘂香　清なりて　寶髻を篸し
熊蹯味美按新醅	熊蹯味　美なりて　新醅を按ず
眼邊歴歴興亡事	眼邊　歴歴たり　興亡の事
欲賦章華恐過哀	章華を賦さんと欲して　哀に過ぐるを恐る

（周囲を江山の景色に囲まれてすばらしいものだ／飾りのある冠紐をした人々が集まり、（才弁に富む）鄒陽・枚乗にも匹敵するほどだ。／郢客樓の中から歌声が聞こえ／樊姫墓の上には笛の音がめぐる。／梅花の香りが清々しく、賓客の髻に絡みつき／獣の肉は美味で、濁り酒のあてにぴったりだ。／眼の前で絶え間なく興亡の歴史が繰り返されるはかなさに思いを馳せながら／楚の章華台のことを詩に書こうと思ったものの、哀切極まるものになることを恐れた。）

34　記夢（巻十五）

（夢を記す。）

夜夢有客短褐袍	夜夢　客有り　短褐の袍
示我文章雜詩騷	我に文章を示す　雑詩の騒
措辭磊落格力高	措辭　磊落にして格力高く
浩如怒風駕秋濤	浩きこと　怒風　秋濤を駕ぐが如し
起伏奔蹴何其豪	起伏　奔蹴して　其豪を何い
勢盡東注浮千艘	勢　盡く東に注ぎて　千艘を浮かぶ
李白杜甫生不遭	李白　杜甫　生きては遭わざれど
英氣死豈埋蓬蒿	英氣　死して豈に蓬蒿に埋まらんや
晩唐諸人戰雖鏖	晩唐諸人　戰いて鏖と雖も
眼暗頭白真徒勞	眼暗く　頭白くして　真に徒勞なり
何許老將擁弓刀	何許の老將　弓刀を擁し
遇敵可使空壁逃	敵に遇いて　空壁の逃を使う可けんや
肅然起敬竪髮毛	肅然と起敬す　竪なる髮毛
伏讀百過聲嘈嘈	伏して讀むも　百過の聲　嘈嘈たり
惜未終卷雞已號	惜しむらくは　未だ卷を終えずして　雞已に號すを
追寫尚足驚兒曹	追寫して　尚お兒曹を驚かすに足る

（夜、夢で短く粗末な着物の客が来て／私に雑言の騒を示した。／その詩は無駄な修辞がなく、おおらかで格式高く／強い風が波の上を渡るようにゆったりとしていた。／起伏が大きく、緩急があって豪放さを表現しており／水が勢いよく流れて千の船を浮かべるようだ。／李白、杜甫は生きては会えないが／その英気まで死後の世界に埋まっていると誰が言えようか／晩唐の詩人たちはそれなりに努力したかもしれないが／物事を見る眼はなく、老いただけでまことに徒労だったかもしれない。／しかし、何処の老将が、武器を持っていながら／敵前逃亡するだろうか。／短髪の客に敬意を表し／示してくれた詩を読もうとしたが、外は人々のがやがやとした声で騒がしくなってきた。／残念ながら最後まで読み切らないうちに鶏が鳴いて目覚めてしまったが／起きてからも十分詩を覚えていて追写できたので、子供たちに驚かれた。）

35　夜夢與數客觀畫有八幅龍湫圖特奇客請予作詩其上書數十字而覺不復能記明旦乃追補之亦彷彿夢

中意也（巻十六）
（夜、夢に數客と畫を觀るに、八幅龍湫圖の特奇なる有り、客、予に作詩を請うに、其上に數十字を書きて覺む。復た記す能わず、明旦、乃ち之に追補するに、亦た夢中の意に彷彿たる也。）

高堂閲畫娯嘉賓　　高堂　畫を閲し　嘉賓と娯しむ
巨幅小卷縱横陳　　巨幅　小卷　縱横に陳なる
其間一圖最傑作　　其間　一圖　最も傑作なりて
命意落筆驚倒人　　命意　落筆　人を驚倒せしむ
奇峰峭立插地軸　　奇峰　峭立　地軸に插さり
飛瀑崩瀉垂天紳　　飛瀑　崩瀉　天紳より垂る
壽藤老木幻荒怪　　壽藤　老木　荒怪を幻わせ
深潭危棧愁鬼神　　深潭　危棧　鬼神を愁えしむ
忽然白晝起雷電　　忽然　白晝　雷電を起こし
始覺異物蟠奫淪　　始めて覺ゆ　異物　奫淪に蟠するを
陰雲四興誅老魃　　陰雲　四興　老魃を誅り
甘澍連夕蘇疲民　　甘澍　連夕　疲民を蘇らす
豈惟陂澤苗盡立　　豈に惟だ　陂澤の苗　盡く立て
已活億萬介與鱗　　已に　億萬の介と鱗を活かすのみならん
文章與畫共一法　　文章と畫は　共に一法
腕力要可回千鈞　　腕力　千鈞を回す可くを要す
錙銖不到便懸隔　　錙銖　到らざれば　便ち懸隔す
用意雖盡終苦辛　　用意　盡くすと雖も　苦辛に終きる
君看此圖凡幾筆　　君看るや　此圖　凡そ幾筆かを
一一圜勁如秋蓴　　一一　圜勁　秋蓴の如し
乃知世間有絶藝　　乃ち知る　世間に絶藝有り
天造草昧參經綸　　天造の草昧　經綸に參ず
吾言未竟且復止　　吾言　未だ竟わらざるも且に復た止めんとす
剩發幽奥天公嗔　　剩え發さん　幽奥　天公の嗔り

（高堂で賓客と絵を見て楽しんだ。／巨大な掛け軸や、小さな絵巻が縦横に連なって並んでいる。／その中の一枚に最も傑作なものがあり／そこに含まれる意や、筆の運び方が人を圧倒するようだ。／鋭い山の峰が地軸から突き出て／瀑布が天界より流れている。／樹齢の長い藤と老木が荒れて奇怪な風景を作り出し／深い湖と険しい桟道は鬼神をも恐れさせる。／忽然と白昼に稲妻が起こり／怪物が水の深いところにとぐろを巻いている姿が初めて露になった。／暗い雲が四度起こって悪者を征伐し／甘い雨が連夜降って疲れた民たちを蘇生する。／どうして水際に穀物の苗を生かし／億万の甲殻類・魚類を生息させないわけがあろうか。／（私自身のことを振り返ってみると）文章も絵画も同様に一つの芸術であり／千回ろくろを回す腕力が必要だ。／

最初の所で少しでも躓けば、完成品は良作とは大きく隔たったものになるし／意を尽くしたところで結局は徒労に終わるというものだ。／あなたはこの絵画が何筆で書きあげられているか分かるだろうか／曲線、強い線、それぞれが秋のジュンサイのように細く限りがない。／この絵を見て分かった、世の中には芸術の極めて素晴らしいものがあると。／天地創造のとき、万物が混沌としていたのを秩序付ける計画にたずさわるようなものだ。／私はこのあたりで、まだ言葉を言い終えないうちにやめておこう／このうえ更なる深みを明らかにしたら、天公が怒ってしまうから。）

36　記夢（巻十六）
（夢を記す。）

東吳春暮寒猶重　　東吳の春暮　寒猶お重し
睡美不聞城角動　　睡美しくして　城角の動を聞かず
身雖衰惰怕出門　　身は衰惰にして　出門を怕ると雖も
江山尚入幽窗夢　　江山　尚お入る　幽窗の夢
夢到青羊看修竹　　夢に青羊に到り　修竹を看る
道人告我丹將熟　　道人　我に告ぐ　丹の將に熟さんとするを
試求一黍換肝腸　　試しに一黍を　肝腸と換うを求むるに
它日重来駕黄鵠　　它日　黄鵠に駕して重来す
　自注：青羊宮在成都南門外浣花道中。
（青羊宮は成都南門の外、浣花道中に在り。）

（会稽では春も終わろうとするのにまだ寒さが厳しい／眠るのに心地よく、城中の雑音から離れている。／私は衰惰の身だから外出を面倒に思うが／暗い窓辺で見る夢では、今なお江山をめぐっている。／夢で青羊宮に到り、長く伸びた竹を見ていると／仙人が私に、丹薬がちょうど出来上がるころだと教えてくれた。／試しに一粒を自分の肝腸と交換してほしいと求めたら／後日、黄鵠に乗って仙人がやってきた。）

37　十月四日夜記夢（巻十七）
（十月四日夜、夢を記す。）

四客聯轡来　　四客　轡を聯ねて来たるも
我醉久不知　　我醉いて　久しく知らず
倒衣出迎客　　倒衣　客を出迎え
愧謝前致辭　　愧謝す　前致の辭
客意極疏豁　　客意　疏豁を極め
大笑軒鬚眉　　大笑して　鬚眉を軒げる
禮豈爲我設　　禮　豈に我が爲に設く

度外以相期	度の外るるに　以て相期す
衮衮吐雄辯	衮衮と　雄辯を吐き
泠泠誦新詩	泠泠と　新詩を誦す
共言攜酒壺	言を共にして　酒壺を攜え
掃地臨前墀	地を掃きて　前墀に臨む
意氣相顧喜	意氣　相顧して喜び
忽如少年時	忽ち　少年時の如し
老雞不解事	老雞　事を解さず
喚覺空嗟咨	喚くに覺め　空しく嗟咨す
涉世四十年	涉世　四十年
賢雋常追隨	賢雋　常に追隨するも
爾来風俗壞	爾来　風俗壞れ
動脚墮險巇	脚を動しては　險巇より墮つ
森然義府刀	森然たり　義府の刀
誰爲叔度陂	誰か爲さん　叔度の陂
起作四客篇	起きて作す　四客の篇
捕影吾其癡	影を捕らえんとするは　吾其れ癡かなり

（四人の客が馬を並べて私を訪ねてきたのに／私は酔っていて、長い間気付かなかった。／慌てて衣を逆さまに着て客を出迎え／この度の無礼を恥じて謝したが／四客はみなすこぶる大らかで度量が広大であり／大笑して表情をやわらげた。／礼は私のために設けられたわけではない／適宜、羽目を外すのもまた良いではないか。／（客と共に）水の流れるように雄弁し／次々と新しい詩を作る。／共に語り合って酒壺を手に取り／地面を掃除して高台に臨む。／お互い意気盛んであることを喜び合い／にわかに若い頃に戻ったようだ。／しかし、鶏は状況を察することができないもので／喚いて私を目覚めさせ、残念なあまり溜息をついた。／世を渡ること四十年の間は／常に頭脳が冴えていたが／それから時は経ち、今では身体も衰え／足を動かしては険しい道から滑り落ちるという始末だ。／義府の刀は奥に隠してある／誰が叔度の陂（大きな湖）ような器の大きな人間になれるだろう。／起き上がってこの四客の詩を作り／夢の幻影を留めようとする私は、実に愚かなものだ。）

38　頻夜夢至南鄭小益之間慨然感懐二首 其一（巻十八）
（頻りに夜、夢に南鄭小益の間に至る、慨然として感懐す。）

身似庵居老病僧	身は庵居の老病僧に似て
罷參不復繫行縢	參ずるを罷め　復び行縢を繫がざるも
夢中忽在三泉驛	夢中　忽として三泉驛に在り
庭樹鳴梟鬼弄燈	庭樹　梟を鳴かしめ　鬼　燈を弄ぶ

（私は隠居している老病僧のようだ／出仕をやめ、旅のための行縢を付けることもない。／ところが、夢中突然南鄭の宿に至った。／庭の木には（不吉な）梟が鳴き、鬼神が灯りをちらつかせる。）

39　頻夜夢至南鄭小益之間慨然感懐二首 其二

客枕夢遊何處所　　客枕　夢に何處の所へも遊ぶ
梁州西北上危臺　　梁州　西北　危臺に上る
雪雲不隔平安火　　雪雲　平安火を隔てず
一點遥從駱谷来　　一點　遥かに駱谷從り来たる

（郷里を離れていると、夢で色々な所へ行く。／昨夜は南鄭（関中）西北の城のやぐらに登った。／平安を知らせるのろし火は雪雲に隔てられることなく／一つの火が、遥かに駱谷（関中と漢中の間の要道）から伝わってきたのが見える。）

40　丙午十月十三夜夢過一大冢傍人爲余言此荆軻墓也按地志荆軻墓蓋在關中感嘆賦詩（巻十八）
（丙午十月十三夜、夢に一大冢を過ぐ。傍人、余が爲に言う、此れは荆軻の墓也と。地志を按ずるに、荆軻の墓は蓋し關中に在り。感嘆して詩を賦す。）

采藥遊名山　　藥を采りて　名山に遊ぶ
物外富真賞　　物外　真賞に富む
秋關策蹇驢　　秋關　蹇驢に策うち
雪峽蕩孤槳　　雪峽　孤槳を蕩す
還鄉忽十載　　還鄉　忽ち十載
高興寄遐想　　高興　遐想を寄す
夢行河潼間　　夢に行く　河潼の間
初日照仙掌　　初日　仙掌を照らす
坡陀荆棘冢　　坡陀　荆棘の冢
狐兔伏蓁莽　　狐兔　蓁莽に伏す
悲歌易水寒　　悲歌の易水寒く
千古見精爽　　千古の精爽を見る
國讎久不復　　國讎　久しく復せず
驚覺泚吾顙　　驚き覺めて　吾顙を泚す
何時真過兹　　何時か　真に兹を過ぎ
薄酹神所饗　　薄酹もて　神の饗くる所とならん

（薬草を取りに名山にやってくると／周囲のものは全て鑑賞に値する。／秋は山を、鈍い驢馬に鞭打って進み／冬は山峡を、ひとり船で舵を動かして流れゆく。／郷里に帰ってきて早くも十年

が経ったが／南鄭の高興亭へ、はるか遠くに思いを馳せる。／昨夜は夢で河関、潼関の間を行くと／朝日が山岳を照らしていた。／険しい阪は荆棘の冢であり／狐や兎が草むらに隠れている。／荊軻の悲歌に歌われたとおりに易水は寒々しく／千古の昔の空気が、今も明瞭に感じられた。／しかしながら現実では、荆棘冢がある地は未だ国土として恢復されない。／その事実に恐れ、目覚めると情けなさに汗をかいた。／いつか、実際にあの場所へ行って／酒を地に注ぎ、荊軻を祭ろうではないか。）

41　夢歸（巻十九）
（歸するを夢む。）

老去無餘念　老い去りて　餘念無きも
時時夢弊廬　時時　弊廬を夢む
細傾新釀酒　細傾す　新釀酒
盡讀舊藏書　盡く讀む　舊藏書
雲崦鉏畲粟　雲崦　畲粟を鉏し
烟畦挽野蔬　烟畦　野蔬を挽く
從渠造物巧　渠の造物の巧に從い
賦芧戲群狙　芧を賦して　群狙に戲ぶる

（老いて邪念は減ってきたつもりだが／時々、郷里の粗末な家を夢にみる。／新しい釀酒をちびちび飲みながら／古い蔵書を読みつくす。／雲のかかった山の間に田んぼを切り開き／畝を歩きながら野蔬を挽く。／荘子の斉物論に従って／（朝三暮四の故事のように）どんぐりを詩に歌って猿の群れをからかう。）

42　夢回（巻十九）
（夢より回る。）

病骨便衾暖　病骨　衾暖に便れ
羈懷怯夢回　羈懷　夢より回るを怯る
鐘殘燈燼落　鐘殘われて　燈燼落ち
香冷雨聲来　香冷たくして　雨聲来る
老抱憂時志　老いてなお　憂時の志を抱くも
狂非濟世材　狂いて　世材を濟ますに非ず
明朝入冬假　明朝　冬假に入るも
燒兔薦新醅　兔を燒きて　新醅を薦む

（病気の身は暖かな布団に慣れてしまい／旅先の心は、夢から現実に戻ってくるのを恐れている。／夜明けの鐘が鳴り終わって、蝋燭も燃え尽き／良い香りは冷え切って、雨の降る音が聞こ

えだした。／私は老いてもなお憂国の志を持ち続けてはいるが／世を救えるほどの人材でもない。／輝かしき宋王朝は、今は冬眠に入ったように消極的な政策しかとらないが／春の兎を料理し、新しい酒を地に注いで、神に祈るとしよう。）

43　我夢（巻二十）
（我夢む。）

我夢入烟海	我　烟海に入るを夢むるに
初日如金鎔	初日　金鎔の如し
赤手騎怒鯨	赤手　怒鯨に騎り
横身當渦龍	横身　渦龍に當たる
百日京塵中	百日　京塵の中
詩料頗闕供	詩料　頗る供を闕く
此夕復何夕	此夕　復た何の夕たるか
老狂洗衰慵	老狂　衰慵を洗う
夢覺坐嘆息	夢覺み　坐して嘆息す
杳杳三茆鍾	杳杳　三茆の鍾
車馬動曉陌	車馬　曉陌に動く
不竟睡味濃	竟きず　睡味の濃
平生擊虜意	平生　虜を擊つの意
裂眥髮上衝	眥を裂き　髮　上を衝く
尚可乘一障	尚お　一障に乘ずる可く
憑堞觀傳烽	堞に憑きて　傳烽を觀る

（私は夢で大海原に身を躍らせた／太陽は金が溶けるようにまぶしく／素手で荒れ狂う鯨に乗り／身を横たえて龍と共に泳ぐ。／ここ百日ものあいだ都にあるが／詩の材料になりそうなものは乏しい。／今日の夕方も他の日の夕方と何ら変わらずに／老いた私は、衰えた自分の顔を洗う。／夢から覚めると落胆して溜息をつく／はるか遠くで三茆の鍾の音が聞こえている。／車馬が夜明けの小道に動き出しても／眠りの誘惑に取りつかれたままでいる。／日頃から、金を討ちたいという思いは／目を怒らせ、怒髪天を衝くような強さでもある。／今なおもう一度砦に登り／城壁の上の垣根のそばで、伝言ののろしを見なかればならないのに。）

44　記夢（巻二十一）
（夢を記す。）

夢裏都忘兩鬢殘	夢裏　都て忘る　兩鬢の殘わるるを
恍然白紵入長安	恍然として　白紵もて長安に入る
硾教紙熟修温卷	教を硾れ　紙熟し　温卷を修め

僦得驢騎候熱官	僦うを得　驢騎　熱官を候う
紅葉滿街秋著句	紅葉　街を滿たして　秋は句を著し
青樓燒燭夜追歡	青樓　燭を燒きて　夜は歡を追う
如今萬事消除盡	如今　萬事　消除し盡くし
老眼摩挲静處看	老眼　摩挲して　静處より看る

（夢の中では老いた自分を忘れ／忽然と、科挙受験前の時期、白い着物を着て長安を訪れた。／学問の教えを乞うために門を叩いてまわり、紙をぼろぼろにして温巻の準備をし／借りてきた驢馬で、権勢のある官僚のもとを訪問する。／紅葉が街に満ちる秋には詩を書き／燭台に明かりをともした妓楼で夜を飲み明かす。／そのような華やかな生活は、今ではすべて消えてなくなり／老いて霞んだ目で、世間の様子を隠居の身で見守るのみだ。）

45　記九月二十六夜夢（巻二十三）

（九月二十六夜の夢を記す。）

海山萬峰鬱参差	海山　萬峰　鬱　参差し
宮殿挿水蟠蛟螭	宮殿　挿水　蛟螭　蟠す
碧桃千樹自開落	碧桃　千樹　自ら開落し
飛橋架空來者誰	飛橋　架空　來者誰ぞ
桐枝高聳棲丹鳳	桐枝　高く聳え　丹鳳の棲
蓮葉半展巣金龜	蓮葉　半ば展きて　金龜の巣
和風微度寶箏響	和風　微かに度り　寶箏　響き
永日徐轉簾陰移	永日　徐ろに轉わり　簾陰　移る
西廂恍記舊遊處	西廂　恍かに記さる　舊遊の處
素壁好在尋春詩	素壁　好く在る　尋春の詩
當年意氣不少讓	當年　意氣　少かにも讓らず
跌宕醉墨紛淋漓	跌宕　醉墨　紛として淋漓
宿酲未解字猶濕	宿酲　未だ解さず　字の猶お濕たるを
人間歲月浩莫推	人間　歲月　浩くして推す莫し
嘆驚撫几忽夢斷	嘆驚し　几を撫でれば　忽として夢斷ず
海濶天遠難重期	海濶　天遠にして　重期し難し

（海山には万の山が連なって鬱蒼としており／宮殿には水が引かれ、蛟螭がとぐろを巻いている。／（丹薬になる）碧桃の樹が千も植わって花を咲かせたり散らせたりしている。／空に架かった橋は誰が往来するのだろう。／桐の枝は高くそびえたち、丹鳳の住処となっており／蓮の葉は半ば広がって金龜の巣となっている。／穏やかな風が微かに拭いて、美しく装飾された箏が響き／日がゆっくりと転じ、簾の影もそれに従って移ろっていく。／正堂の西側の壁を見やると、昔この場所を訪れた人の書きつけた文字がほのかに見えた／装飾の無い壁に綺麗に残っていた

のは、春の景色の中に遊んだという詩だった。／今になっても、書きつけられた文字の意気は少しも薄れることなく／豪放な筆跡の墨が、今も黒々と滴るようだ。／二日酔いの頭では、その字がなぜ今も墨を滴らせているのか分からず／人の世の歳月とは、豊かで大きく、人の想像をはるかに超えるものだと思った。／感嘆して、机に触れてみようとしたところ、忽然と夢から覚めてしまい／海はあまりに広く天はあまりに遠く、もう一度訪れることなど叶いそうにないと落胆した。）

46　夢海山壁間詩不能盡記以其意追補四首 其一（巻二十三）
（海山を夢みるに、壁間の詩、記し盡くす能わず、以て其意を追補す。）

碧海無風鏡面平　　碧海　無風にして　鏡面平らかなり
潮來忽作雪山傾　　潮來たり　忽として作す　雪山の傾
金橋化出三千丈　　金橋　化して出づ　三千丈
閑把松枝引鶴行　　閑かに松枝を把り　鶴を引きて行く

（青い海は無風で、水面が鏡のように平らだったが／突然、波がやってきて雪山のように膨れ上がった。／その中から出てきた三千丈にもわたる金の橋の上を／のどかに松枝を杖にして、鶴を引率して歩く。）

47　夢海山壁間詩不能盡記以其意追補四首 其二

海上乘雲滿袖風　　海上　雲に乘りて　袖風に滿つ
醉捫星斗躡虛空　　醉いて　星斗を捫り　虛空を躡む
要知壯觀非塵世　　知るを要す　壯觀にして　塵世に非ず
半夜鯨波浴日紅　　半夜　鯨波　日の紅なるを浴ぶ

（海の上で雲に乘って飛び、袖に風を受けつつ／酔って北斗七星を手に取り、天を歩く。／あまりに壮観で、俗世でないことを明らかに知りながら／長い夜の後、大きな波の上で日の出を待つ。）

48　夢海山壁間詩不能盡記以其意追補四首 其三

一劍能清萬里塵　　一劍もて能く清める　萬里の塵
讒波深處偶全身　　讒波され　深處にありて　偶たま身を全うす
那知九轉丹成後　　那ぞ知らん　九轉の丹成りし後
却插金貂侍帝宸　　却って金貂を插し　帝宸に侍するを

（剣の一振りで、この俗塵を払うことができる（と思ってはいたものの）／（約二年前に）讒言

されて故郷に帰り、無事だったのも偶々の事。／仙人になれる九轉の丹薬が出来上がったのちにまで／どうして皇帝に侍する臣下の冠飾を付けて、朝廷に侍ろうか。）

49　夢海山壁間詩不能盡記以其意追補四首 其四

春殘枕籍落花眠　　春殘れ　枕籍き　落花に眠る
正是周家定鼎年　　正に是れ　周家　定鼎の年なり
睡起不知秦漢事　　睡より起くるも　秦漢の事を知らず
一尊閑醉華陽川　　一尊　閑かに醉う　華陽の川

（春の終わり、花の落ちる中枕を敷いて眠ったのは／周の国が国都を定めた年だった。（CF：桃花源記）／眠りより覚めると秦漢のことなど遠い昔の話だ。／酒樽を隣に置き、ひとりのどかに華陽川の上（成都）で酔う。）

50　夜夢遊驪山（巻二十三）
（夜、驪山に遊ぶを夢む。）

秦楚相望萬里天　　秦楚　相望む　萬里の天
豈知今夕宿温泉　　豈知らんや　今夕　温泉に宿るを
穿雲漱月無窮恨　　雲を穿ち　月を漱ぎて　恨み窮まる無し
依舊潺湲古縣前　　舊に依りて　潺湲す　古縣の前
　自注：温飛卿詩云至今湯殿水，嗚咽縣前流。
　（温飛卿の詩に云うらくは「今に至るまで湯殿の水，嗚咽して縣前に流る」と。）

（秦（長安）と楚（紹興）から、共に同じ空を見上げる。／今宵、驪山の温泉に宿る身となろうとは思いもかけなかった。／雲間をくぐり、月影を洗う一筋の川水は積年の恨みなど知らず／昔のままに古の県のほとりをさらさらと流れゆく。）

51　夢斷（巻二十四）
（夢斷ず。）

夢斷燈殘聞雁聲　　夢斷じ　燈殘われて　雁聲を聞く
攬衣起坐待天明　　攬衣　起坐して　天明を待つ
街頭濁酒不堪醉　　街頭　濁酒　醉うに堪えず
窗外疏梅空復情　　窗外　疏梅　情を復すに空し
人欲見擠真砭石　　人　真の砭石を擠されんと欲するも
身寧輕用作投瓊　　身は寧ろ　輕にして用て　投瓊を作す
南湖可引春疇美　　南湖　引く可し　春疇の美

只合躬耕畢此生　　只だ合に　躬ら耕し　此生を畢うるべし

（夢から覚めると灯りは既に消えて、雁の鳴き声が聞こえていた。／衣服を整え、起き上がって夜が明けるのを待つ。／街頭で売っている濁り酒は酔うのにも値しないし／窓の外の梅は、気持ちを取り戻すにはまだあまりに疎らだ。／私は石針による病気の治療を受けようと思っていたのだが／身はどちらかといえば健康で、博打に参加できるくらいだ。／春の田んぼの美しさを備えているこの南湖の周囲で／ただこれからも自ら耕し、余生を終えたいものだ。）

52　夢遊散關渭水之間（巻二十四）
（散關渭水之間に遊ぶを夢む。）

平生望眼怯天涯　　平生　望眼　天涯を怯る
客裏何堪度歳華　　客裏　何ぞ堪えん　歳華を度るを
但恨征輪無四角　　但だ恨む　征輪に四角無きを
不愁歸路有三叉　　愁えず　歸路に三叉有るを
驛窗燈闇傳秋柝　　驛窗　燈闇く　秋柝を傳う
關樹烟深宿暮鴉　　關樹　烟深くして　暮鴉を宿す
叱犢老翁頭似雪　　犢を叱する老翁　頭雪に似たり
羨渠生死不離家　　羨む　渠の生死　家を離れざるを

（自分は常日ごろ天の果てにいて、遠くへ目を馳せることを恐れていた／旅の空でどうしていつまでも年月を過ごすことに耐えられよう。／行く車の車輪に四角なものがないのが恨めしい（四角なら進まなくて済むのに）／故郷への帰り道なら、三つの別れ路があると心配ではないのだが。／宿場の窓には灯りが暗く、秋の柝を叩く音が伝わり／関所の樹木には煙が深く横たわって、夕暮れの烏が宿っている。／子牛を叱りつけている老人は雪のような白い頭をしており／この老人が生きても死んでも我が家を離れず暮らしてゆく境涯が羨ましく思える。）

53　記夢（巻二十五）
（夢を記す。）

我夢結束遊何邦　　我夢に結束し　何れの邦へか遊ぶ
小憩野館臨幽窗　　野館に小憩し　　幽窗に臨む
千峰廬山錦繡谷　　千峰　廬山　錦繡の谷
一水蜀道玻瓈江　　一水　蜀道　玻瓈の江
春耕叱犢翁眉厖　　春に耕し　犢を叱る　翁眉は厖
曉汲負盎女髻雙　　曉に汲み　盎を負う　女髻は雙
忽然夢斷已雞唱　　忽然と夢斷じ　已に雞唱す
擁衾坐待鄰鐘撞　　衾を擁し　坐して待つ　鄰鐘の撞かるるを

（私は夢で旅の装束を整え、ある地方を訪れて／村の宿にしばし休息し、静かな窓の外を見る。／千の険しい山が連なる廬山（蜀から帰る途中に訪れた江西省の山）の谷には花木が茂って錦の織物のように鮮やかで／蜀の桟道の下を流れる川は水晶のように透き通っている。／春の耕作をしながら牛を追い立てる翁の眉は豊かであり／夜明けに水を汲みに行き、ほとぎを背負って帰るむすめの髪は二つに結ってある。／忽然と夢から覚めると、既に鶏が鳴いていた。／掛け布団を抱いて横になったままで、近所の鐘がつき鳴らされるのを待つ。）

54　夢與數客劇飲或請賦詩予已大醉縱筆書一絶覺而録之（巻二十六）
（數客と劇飲するを夢む。或るひと詩を賦するを請うに、予已に大醉し、筆を縱にして一絶を書す。覺めて之を録る。）

高談雄辯憑陵酒　　高談　雄辯　酒に憑陵す
豪竹哀絲蹴蹋春　　豪竹　哀絲　春を蹋蹴す
占斷名園排日醉　　名園を占斷し　日を排して醉い
不教虚作太平人　　虚しく太平の人と作らしめず

（盛大に談笑し、弁舌豊かに論じながら酒の勢いに任せる。／勢いよく伸びた竹と、哀愁を帯びた琴の音が、繊細な春の空気を凌駕する。／素晴らしい庭園を客と共に占領し、際限もなく酔い明かす。／泰平な人間になどなるものか。）

55　記夢（巻二十七）
（夢を記す。）

夢不出心境　　夢　心境を出でざるも
曠然成遠遊　　曠然　遠遊を成す
花殘杜城醉　　花殘る　杜城に醉い
木落華山秋　　木落つる　華山の秋
戰血磨長劍　　戰血　長劍を磨き
塵痕洗故裘　　塵痕　故裘を洗う
那知覺来處　　那ぞ知らん　覺めて来たる處
身卧五湖舟　　身は卧す　五湖の舟

（夢とは心の中から出ることはないはずだが／私は夢ではるか遠いところにまで遊ぶ。／花の散った春の終わりの杜城に酔ったかと思えば／木々が散った華山の秋も見る。／戦に出れば血で長剣を染め／旅先では塵が付いた古い皮衣を洗う。／夢から覚めた自分がどこにいるかなど、どうやって分かろうというものだろう／（夢の中の自分は）五湖の舟の上に身体を横たえているのだが。）

56　枕上述夢（巻二十七）
（枕上にて夢を述ぶ。）
題注：五月十二日雞鳴時作
（五月十二日、雞の鳴く時の作。）

江湖送老一漁舟　江湖に老を送る　一漁舟
清夢猶成塞上遊　清夢　猶お成す　塞上の遊
生馬駒馳鐵蹏跪　生馬　駒馳　鐵蹏の跪
古鐃歌奏錦衣褠　古鐃　歌奏　錦衣の褠
玉關雪急傳烽火　玉關に雪急なりて　烽火を傳え
青海雲開見戍樓　青海に雲開きて　戍樓を見る
白首不侯非所恨　白首　侯せざるを恨む所に非ず
咿嚶床簀死堪羞　咿嚶　床簀　死して羞に堪えん

（漁船にゆられ、官界から退いて老後の生活を送っているが／今でもすがすがしい夢の中では、敵国と対峙する城塞に行く。／若い馬を勢いよく走らせ、鉄の蹄も曲がらんばかりであり／戦場に銅鑼を打ち鳴らす兵士は、錦の衣を身にまとっている。／ところが、突然陣営には猛吹雪が起こって、敵の襲撃を知らせる烽火が伝えられると／雲間からはえびすの陣営が見えた。／老いて爵を受けていないことを恨みはしないが／寝床に呻く、死んでもこの屈辱に耐えることなどできないと。）

57　癸丑七月二十七夜夢遊華嶽廟二首 其一（巻二十七）
（癸丑七月二十七夜、夢に華嶽廟に遊ぶ。）

驛樹秋風急　驛樹　秋風急なり
關城暮角悲　關城　暮角悲しむ
平生忠憤意　平生　忠憤の意あり
来拜華山祠　来拜す　華山祠

（宿場の木々を秋風は厳しく吹き／関所の城壁には夕暮れの角笛が悲しく響く。／愛国の憤りを持ち続けた私は／華嶽のやしろにもうでに来たのだった。）

58　癸丑七月二十七夜夢遊華嶽廟二首 其二

牲碑別正朔　牲碑　正朔と別れ
祠祝虜衣冠　祠祝　虜の衣冠
神亦豈堪此　神も亦た豈に此に堪えん

出門山雨寒　　出門して　山雨寒し

（いけにえをつなぐ立石に彫り付けてあるのは敵国の年号で／やしろの神主がつけるのはえびすの装束だ。／やしろの神もこれに御心安くおわすはずはない。／門を出ると、山づたいの雨が冷たい。）

59　夢至洛中觀牡丹繁麗溢目覺而有賦（巻二十七）
（洛中に至るを夢みるに、牡丹の繁麗にして目に溢るを觀、覺めて賦する有り。）

兩京初駕小羊車　　兩京　初めて駕す　小羊の車
憔悴江湖歲月賒　　江湖に憔悴し　歲月賒し
老去已忘天下事　　老い去りて　已に天下の事を忘るるも
夢中猶看洛陽花　　夢中　猶お看る　洛陽の花
妖魂艶骨千年在　　妖魂　艶骨　千年在るも
朱彈金鞭一笑譁　　朱彈　金鞭　一笑して譁し
寄語氈裘莫癡絶　　氈裘に寄語す　癡絶する莫れ
祁連還汝舊風沙　　祁連より　汝を還さん　舊の風沙へと

（開封と洛陽の両都で小羊の車に乗って（幼年時代を過ごして）から／長らく俗世間に身を置いてきた。／年老いて既に天下に関心を失いつつあるが／夢の中ではなお、北方の洛陽の花を見る。／彷徨う魂、埋まった骨が、千年の都には残っているが／朱塗りの弓を背負い、金の鞭を奮って、すべて一笑に付すのみだ。／夷狄の地に取り残された人々に伝言してほしい、「いつまでも夷狄の好きにはさせません／夷狄の地から、いまにあなた方を故郷の地に帰還させましょう」と。）

60　夢至小益（巻二十八）
（夢に小益に至る。）

夢覺空山泪漬衿　　夢より覺めて　空山　泪衿を漬す
西遊歲月苦駸駸　　西遊の歲月　苦だ駸駸たり
葭萌古路緣雲壁　　葭萌の古路　緣雲の壁
桔柏浮梁暗櫟林　　桔柏の浮梁　暗櫟の林
坐上新聲猶蜀伎　　坐上の新聲　猶お蜀伎なるも
道傍逆旅已秦音　　道傍の逆旅　已に秦音
荷戈意氣渾如昨　　戈を荷い　意氣　渾なること昨の如し
自笑摧頽負壯心　　自ら笑う　摧頽　壯心を負うを

（夢から覚めると、人気のない深い山の中、涙で襟を濡らした。／私が西方へ行った期間は、あ

まりに速やかに過ぎ去ってしまった。／葭萌の古路は雲が立ち込める絶壁に面し／桔柏の浮き橋は暗いクヌギの林の中にかかっていた。／私の耳にはまだ新鮮に、蜀の妓女の言葉が残っているが／旅の道中で聞こえるのは、すでに陝西の音楽だ。／戈を担いで戦場へ馳せ参じようという私の意気は、昔から衰えることなく盛んだが／近頃では、このように老いて衰えたのにも関わらず、いまだに壮志に満ちている自分を、自分で笑いたくなる。）

61　記夢三首 其一（巻二十八）
（夢を記す。）

黄河袞袞抱潼關　　黄河　袞袞として　潼關を抱く
蒼翠中條接華山　　蒼翠たる中條は　華山に接す
城郭丘墟人盡老　　城郭　丘墟となり　人盡く老いたり
藥爐依舊白雲間　　藥爐　舊に依る　白雲の間

（黄河はたぎり流れつつ潼關を曲がってゆく。／深い緑の中條山はこの華山とは山続きに見える。／城の中は荒れ果てて住む人はみな老年。／白雲の重なるあいだ、丹薬の炉はむかしのまま。）

62　記夢三首 其二

西巖老宿雪垂肩　　西巖の老宿　雪　肩に垂る
白石爲糧四百年　　白石を糧と爲す　四百年
喜我未忘山下路　　我が未だ山下の路を忘れざるを喜び
慇懃握手一欣然　　慇懃に手を握って一たび欣然たり

（西巖の長老は雪にまがう白髪を肩にまで垂れ／白い小石を糧にして四百年を生き延びた。／私が山の路を忘れずにいたのはうれしいと／心のこもった手を握るひとときの喜ばしさ。）

63　記夢三首 其三

三髻山童喜欲顛　　三髻の山童　喜びて顛てんと欲し
下山迎我拜溪邊　　下山して我を迎え　溪邊に拜す
松陰拂罷蒼苔石　　松陰　蒼苔の石を拂罷す
接竹穿雲理舊泉　　竹を接ぎ　雲を穿ちて　舊泉を理む

（髪を三つに束ねた山童が喜んで慌て／山道を降りてきて私を迎え、渓流のそばで拝礼した。／松の陰で緑の苔に覆われた石をさっと払って座り／雲を突き刺すような背の高い竹は、古い泉をそのままに残している。）

64　六月二十六日夜夢赴季長招飲（巻三十）
（六月二十六日夜、季長のもとに赴き招きて飲すを夢む。）

少城駿馬逐春風　少城　駿馬　春風を逐う
二十年間萬事空　二十年間　萬事空し
清夢都忘雙鬢改　清夢　都て忘る　雙鬢改まるを
繡筵還喜一尊同　繡筵にて還喜す　一尊を同じくするを
烏巾掩冉簪花重　烏巾　冉を掩み　花重を簪し
羯鼓敲鏗列炬紅　羯鼓　敲鏗　炬紅を列す
安得此歡真入眼　安んぞ得ん　此歡　真に眼に入るを
碧油幢擁主人翁　碧油幢に擁す　主人の翁

（成都の少城へ向かう駿馬で春風をきって走ると／成都を離れてから経過した二十年間はまるで無かったかのようだ。／清々しい夢の中では髪や髭が白くなったことなど忘れ／刺しゅうを施した筵に座り、友人と一つの酒樽のもとに集まれたことを喜ぶ。／気楽に烏巾を被り、髭を掴んで酔い、花を髪に差す／太鼓を叩く音が響き、かがり火が並ぶ。／どうしたら実際に会えるだろう／碧油の幢の下にあるあなた（季長）に。）

65　七月二十一日午睡夢泛江風濤甚壯覺而有賦（巻三十）
（七月二十一日午睡し、夢に泛ぶ、江風濤して甚だ壯なり、覺めて賦する有り。）

夢中不記適何邦　夢中　記さず　何れの邦へ適くかを
風飽蒲颿入大江　風飽きて　蒲颿　大江に入る
久矣眼中無此快　久しき矣　眼中　此快無きや
蹴天雪浪濺船窗　蹴天の雪浪　船窗に濺ぐ

（夢の中でどの地方へ行ったのかは定かではないが／風が十分な強さで吹き、蒲草で編んだ船は長江に入った。／目の前の景色がこれほど速く過ぎていくのは久しぶりのことだ。／天から降ってきた吹雪が船窓に降り注ぐ。）

66　夢范參政（巻三十）
（范參政を夢む。）

夢中不知何歲月　夢中　歲月の何たるかを知らず
長亭慘淡天飛雪　長亭にて　慘淡たり　天雪を飛ばす
酒肉如山鼓吹喧　酒肉　山の如く　鼓吹喧しきも
車馬結束有行色　車馬　結束して　行色有り

我起持公不得語	我起き　公に持するも　語を得ず
但道不料今遽別	但だ道うのみ　今遽かに別るを料らずと
平生故人端有幾	平生　故人　端なること幾か有るも
長號頓足泪迸血	長號　頓足して　泪は血を迸らす
生存相別尚如此	生存して　相別るるに　尚お此の如くあらば
何況一旦泉壤隔	何況や　一旦　泉壤に隔たるを
欲懐雞黍病爲重	雞黍を懐わんと欲して　病重きを爲し
千里關河阻臨穴	千里　關河　臨穴を阻む
速死從公尚何憾	速死　公に從うに　尚お何をか憾まん
眼中寧復見此傑	眼中　寧ろ復す　此傑を見るを
青燈耿耿山雨寒	青燈　耿耿たり　山雨寒し
援筆詩成心欲裂	筆を援り　詩成りて　心裂けんと欲す

（夢の中では歳月など物ともせずに／今も（かつて范參政と別れた）宿場の、悲愴で物寂しく雪の降る様子を夢にみた。／宿場の中では酒や肉のごちそうが山のように積まれ、賑やかに音楽が演奏されているが／外では車馬が整列して、静かに出立を待っている。／私は范參政の傍に立ち、手を取ったが何も言うべき言葉が見つからずに／ただ「こんなに急に別れるなどと思いもしませんでした」と繰り返すのみだった。／范參政は日頃から度をわきまえて落ち着いた人柄だったが／この時ばかりは別れを惜しんで足を進めることができず、血の涙を流された。／生きて別れることでさえ、これほど辛いものであったからには／あの世とこの世とで別れるのは、どれほどの辛いものか。／生前の厚い情誼を思ってはいよいよ心は苦しく／故人の墓までは千里の道のりがあり、関所や河に隔てられている。／范參政の後に続いて早く死ねるなら、何も恨むことはない／目の前にまたこの英傑を見ることができるのだから。／（夢から覚めると）青い読書灯の光が細々と寂しげに揺れ、周囲の山には冷たい雨が降っている。／筆を取ってこの詩を書きあげ、心が張り裂けんばかりだ。）

67　正月十一日夜夢與亡友譚德稱相遇於成都小東門外既覺慨然有作（巻三十一）

（正月十一日夜、亡友譚德稱と成都小東門外に相遇するを夢み、既に覺めて慨然として作る有り。）

當年與子別江干	當年 子と　江干に別れ
漸老心知後會難	漸に老い　心に知る　後に會うことの難きを
豈料今宵清夢裏	豈に料らずや　今宵　清夢の裏
東門交轡說春寒	東門　轡を交え　春寒を說うを

（昔、あなたと川岸に別れてから／次第に年を取って、もう再会することは難しいだろうと心の中では分かっていましたが／まさか今宵、清々しい夢の中で／成都の東門で馬を並べ、春の寒さについて話すなんて（思いもよらない喜びでした。））

68　夢遊山寺焚香煮茗甚適既覺悵然以詩記之（巻三十二）
（夢に山寺に遊び、香を焚き茗を煮て甚だ適う。既に覺めて悵然たり、詩を以て之を記す。）

平日居山恨不深　　平日　山に居りて深からざるを恨み
暫來差足慰幽尋　　暫し足を差して來り　幽尋に慰む
僧歸共說道逢虎　　僧歸して　共に說う　道に虎に逢いしと
院靜惟聞風滿林　　院靜かなりて　惟だ風の林に滿つを聞くのみ
毫盞雪濤驅滯思　　毫盞の雪濤　滯思を驅
篆盤雲縷洗塵襟　　篆盤　雲縷　塵襟を洗う
此行殊勝邯鄲客　　此行　殊に勝る　邯鄲の客
數刻清閑直萬金　　數刻　清閑たり　萬金に値たる

（私が平素住んでいる山は残念ながら十分な静けさがないため／短い間ではあったが、夢で足を延ばし、山の深遠な所へやってきて心を安らかにした。／帰りがけの僧たちは口をそろえて、道中虎に会ったと言うのだが／院の中は静かで、風が林を吹き抜ける音しか聞こえない。／少量の白く濁った茶は日頃の物思いを払いのけ／香を焚き、篆文字のように曲折しながら立ちのぼるけむりは、世俗的な雑念を洗い流す。／この夢の旅は邯鄲の夢にも勝るような体験だった。／ひと時の静けさを得ることは、万金にあたるほど貴重なものだから。）

69　五月二十三夜記夢（巻三十二）
（五月二十三夜、夢を記す。）

夜漏欲盡雞初唱　　夜漏　盡きんと欲して　雞初めて唱す
夢到神仙信非妄　　夢に神仙に至る　信にして妄に非ず
泉流直春碧澗底　　泉流　直春す　碧澗の底
松根横走蒼崖上　　松根　横走す　蒼崖の上
徐行林際遇飛橋　　徐行するに　林際　飛橋に遇う
峭壁驚濤臨萬丈　　峭壁　驚濤すべし　萬丈に臨む
非惟履嶮足蹉踔　　非惟　嶮を履み　足蹉踔
已覺處憂神悄愴　　已に覺めて　憂する處　神悄愴たり
空巖滴乳久化石　　空巖　滴乳　久しく石と化し
寶蓋珠瓔紛物象　　寶蓋　珠瓔　物象に紛う
鬼神慘澹疑欲搏　　鬼神の慘澹たるを　疑いて搏えんと欲し
龍蜃蜿蜒誰敢傍　　龍蜃の蜿蜒たるに　誰か敢えて傍わん
長眉老仙乘白雲　　長眉の老仙　白雲に乘りて
握手授我綠玉杖　　手を握り　我に授く　綠玉の杖
三生汝有世外緣　　三生　汝は有す　世外の緣

一念已斷塵中障　　一念　已に斷つ　塵中の障
雖云曩事不復憶　　雖云　曩事　復び憶えず
憐汝瞳子神猶王　　憐れむ　汝の瞳子　神にして猶お王のごときを
何須更待熟金丹　　何ぞ須まりて　更に待つか　金丹の熟るるを
從我歸哉住崑閬　　我に從い　歸する哉　崑閬に住まんと

（夜、時刻を知らせる蝋燭が溶けてなくなるころ、ちょうど鶏が鳴いた。／夢で神仙の地に行きついたことは本当のことで、妄言などではない。／泉の流れは谷間に流れる碧緑の川に、真っ直ぐに注ぎ込み／松の根はそびえ立つ断崖の上に、縦横に張っている。／ゆっくりと進んでいくと、林が終わるところで、空に架かる橋に行きついた。／切り立った崖は驚くべき高さで、万丈を見下ろすようだ。／山岳は空しく消えて、丹薬は永久にただの石ころとなり／豪華な傘蓋や宝石の組紐も、俗世のものと紛れてしまってもはや区別がつかない。／鬼神が悲嘆に暮れているのを怪しんで捕えようとし？／龍がとぐろを巻いている姿に、誰が敢えて寄り添おうというのか。／夢では豊かな眉の老仙が白い雲に乗ってやってきて／私の手を取り、緑の宝石が付いた仙人の杖を私に授けてくれた。／（仙人が言うには）「三世（前世・今世・来世）のすべてにおいてお前は仙界と縁を持っているから／少し念じるだけで、俗世のしがらみから解放されるはずだ。／そうは言っても前世のことを思い出すことはできないだろう／可哀そうなことだ、お前の目は今も神聖な輝きを持っていて、王の目のようであるというのに。／どうしてお前は俗世に留まって丹薬が出来上がるのを待ち続けているのか／私について仙界に帰り、崑閬に住もうではないか」と。）

70　夢有餉地黄者味甘如蜜戯作數語記之（巻三十三）
（夢に地黄なる者を餉る有り、味は甘く蜜の如し、戯れに數語を作して之を記す。）

有客餉珍草　　客有りて　珍草を餉る
發奩驚絶奇　　奩を發きて　驚絶奇なり
正爾取嚼齕　　爾に正し　取りて嚼齕す
炮製不暇施　　炮製　施を暇さず
異香透崑崙　　異香　崑崙に透り
清水生玉池　　清水　玉池を生む
至味不可名　　至味　名づく可からず
何止甘如飴　　何くにか止む　甘さの飴の如きを
兒稚喜語翁　　兒稚　喜びて翁に語ぐ
雪頷生黒絲　　雪頷　黒絲を生ずと
老病失所在　　老病　所在を失い
便欲棄杖馳　　便ち欲す　杖を棄てて馳せるを
晨雞喚夢覺　　晨雞　喚きて夢より覺め
齒頰餘甘滋　　齒頰　甘滋を餘す

寄聲山中友　　聲を寄せん　山中の友
安用求金芝　　安んぞ用いん　金芝を求むるを

（夢で客が来て、私に珍しい仙薬を持ってきた。／箱を開けてみると、あまりに希少な薬が入っていたので極めて驚いた。／この薬に正対し、手に取って噛んでみると／火で炙ってつくられた薬の効果はあっという間である。／強い香りは頭頂に到り／透き通った水が口中に生じる。／味は言葉で言い表せないほど美味を極め／その甘さは飴どころではない。／子供が喜んで私に言う／「白髪が黒髪に変わりましたよ」と。／日頃の老いと病もたちまち消えてなくなり／杖を捨てて走り出したい気分になった。／明け方、鶏が鳴いて夢から覚めても／歯や口の中にはなお甘い味が残っていた。／山中で修行する友人たちに告げたい／山中で金芝（伝説の薬草）を探す必要などないのだと。）

71　記九月三十日夜半夢（巻三十三）
（九月三十日夜半の夢を記す。）

一夢邯鄲亦壯哉　　一たび邯鄲を夢む　亦た壯なる哉
沙堤金轡絡龍媒　　沙堤　金轡　龍媒を絡う
兩行畫戟森朱戸　　兩行の畫戟　朱戸に森たり
十丈平橋夾綠槐　　十丈の平橋　綠槐を夾む
東閣群英鳴佩集　　東閣の群英　鳴佩を集め
北庭大戰捷旗來　　北庭の大戰　捷旗を來たす
太平事業方施設　　太平の事業　方に施設されんとするに
誰遣晨雞苦喚回　　誰か晨雞を遣て　苦だ喚かしめ回さしむるや

（邯鄲を夢にみると、やはり勇壮な様子だった。／砂で築いた城壁に沿って、金の轡をはめた駿馬が揃っている。／赤い門の両脇には装飾のある戟が立ち並び／長い橋の両側には緑のえんじゅが植わっている。／砦の東閣には俊才が腰に帯玉を下げて集い／砦の北で大戦が起こると、素早く戦士たちを往来させる。／天下の大事業がまさに実行されようというこの時に／明け方の鶏を鳴かせ、私を夢から覚めさせたのは一体誰なのだ。）

72　十月二十八日夜雞初鳴時夢與數女仙遇其一作詩示予頗哀怨如人間語惟末句稍異予戲之曰若無此句不可爲神仙矣其一從傍戒曰汝當勿忘此規作詩者甚有愧色予頗悔之既覺賦兩絶句以解嘲　其一（巻三十三）
（十月二十八日夜、雞初めて鳴きし時、夢に數女仙と遇う。其一、詩を作りて予に示すに、頗る哀怨たりて人間の語の如く、惟だ末句、稍異なるのみ。予、之に戯れて曰う、若し此句無くんば神仙を爲す可からずと。其一、傍に從り、戒しめて曰く、汝當に此規を忘れて作詩なる者をする勿かるべしと。甚だ愧色有り、予、頗る之を悔す。既に覺めて兩絶句を賦し、以て嘲を解す。）

玉姝眉黛翠連娟　　玉姝の眉黛　翠にして連娟たり
弄翰閑題小碧箋　　翰を弄びて　閑かに題す　小なる碧箋
人世愁多無著處　　人世　愁い多く　著す處無し
故應分與蕊宮仙　　故應　分與す　蕊宮の仙

（美しい仙女の眉は、翡翠の色で細く緩やかに弧を描いている。／筆を取って、優雅に小さな碧玉の札の上に詩を作る。／俗世には憂いが多いから詩に書くべきこともない／だから蕊宮の仙界の様子を分題して詩にするのだろう。）

73　十月二十八日夜雞初鳴時夢與數女仙遇其一作詩示予頗哀怨如人間語惟末句稍異予戲之曰若無此句不可爲神仙矣其一從傍戒曰汝當勿忘此規作詩者甚有愧色予頗悔之既覺賦兩絕句以解嘲 其二

虹作飛橋蜃吐樓　　虹は飛橋を作り　蜃は樓を吐く
群仙來賦海山秋　　群仙　來たりて賦す　海山の秋
玉姝定自多才思　　玉姝　定めて自ずから才思多し
更與人間替說愁　　更に人間と替わりて愁いを說う

（虹が空に橋をかけ、蜃気楼が楼台を形作る景色の中／仙女が集まって、仙界の秋の様子を詩に賦す。／美しい仙女は決まって才女であるものなのか／人間と見分けがつかないような言葉で、愁いを詩に書き表す。）

74　五月七日夜夢中作二首 其一（巻三十四）
（五月七日夜、夢中に二首を作す。）

征行過孤壘　　征行　孤壘を過ぐ
寂寞已千年　　寂寞　已に千年なり
馬病霜菅瘦　　馬病みて　霜菅にして瘦せ
狐鳴古冢穿　　狐の鳴くは　古冢を穿つ
烟塵身欲老　　烟塵に身は老いんと欲するも
金石志方堅　　金石の志は方に堅かるべし
零落英雄盡　　零落　英雄盡く
何人共著鞭　　何人　共に鞭を著さん

（出陣して、孤立した城塞を通り過ぎる。／寂寞たる城塞内の様子は、既に千年も続くようだ。／馬は病気になり、毛も白くなって痩せ衰え／狐の鳴き声が古い墓を抉るようだ。／戦場に身体は老いていくばかりだが／金石のように堅い志はいっそう強く持つべきだ。／しかしながら、勇敢な兵士たちが尽く敗退するなかで／誰が私と共に、鞭を持って馬に乗ってくれるというのか。）

75　五月七日夜夢中作二首 其二

霜露薄貂裘　霜露　貂裘に薄す
連年塞上留　連年　塞上に留む
蘆笳青冢月　蘆笳　青冢の月
鐵馬玉關秋　鐵馬　玉關の秋
振臂忘身憊　臂を振るい　身の憊るるを忘れ
憑天報國讎　天に憑りて　國讎に報いんとす
諸公方袞袞　諸公　方に袞袞たり
好運幄中籌　好運　幄中に籌る

（霜の冷たさが貂の衣に染み入るなか／長年にわたって我が軍は砦に留まっている。／古代の笛の根が響いて、月が墓を青く照らし出し／馬は鎧を付けたままで、砦で秋を過ごす。／私は腕を振り上げて激情を表し、身体の疲れももはや忘れ／天を頼みに、国の仇を討ちたいと願う。／兵士たちは続々と集まり／天が我が軍に味方することを願い、幕中で謀をめぐらせているところだろう。）

76　六月二十四日夜分夢范至能李知幾尤延之同集江亭諸公請予賦詩記江湖之樂詩成而覺忘數字而已（巻三十四）
（六月二十四日夜分、范至能、李知幾、尤延之と江亭に同集するを夢む。諸公予に詩を賦して江湖之樂を記すことを請う。詩成りて覺むも、數字を忘るのみ。）

露箬霜筠織短篷　露箬　霜筠　短篷を織り
飄然來往淡烟中　飄然　來往す　淡烟の中
偶經菱市尋谿友　偶ま菱市を經て　谿友を尋ね
却揀蘋汀下釣筒　却って蘋汀を揀びて　釣筒を下す
白菡萏香初過雨　白菡萏　香ばしく　初めて雨過ぎ
紅蜻蜓弱不禁風　紅蜻蜓　弱くして　風に禁えず
吳中近事君知否　吳中の近事　君知るや否や
團扇家家畫放翁　團扇　家家　放翁を畫く

（露のおいた竹の皮と霜のおいた竹とで短い苫を編んで／飄然と漂い、煙の中を船で往来する。／ふと菱の実を売る市場を通って谿川の友人を訪ね／かえってまた蓬の生えたみぎはを選んで釣り竿の浮きをおろす。／通り雨が過ぎたばかりで白い蓮の花は芳しく／赤いとんぼが弱々しく風にも耐えられぬというように飛んだりしている。／呉中での近い出来事を諸君は知っていますか／団扇にはどこの家でも陸放翁を描いたのを使っておりますぞ。）

77　作夢（巻三十五）

（夢を作す。）

作夢今逾七十年　　夢を作し　今逾ゆること七十年
平生懐抱尚依然　　平生　懐抱すること　尚お依然たり
結茅杜曲桑麻地　　杜曲　桑麻の地に茅を結び
覓句灞橋風雪天　　灞橋　風雪の天に句を覓む
驃騎向來求作佛　　驃騎　向來　作佛を求め
淮南末路望登仙　　淮南　末路　登仙を望む
世間妄想何窮盡　　世間の妄想　何くにか窮まりて盡きん
輸與山翁一醉眠　　山翁に輸與せよ　一醉眠

（私は夢を描き続けてもう七十年になるが／日ごろから胸のうちに抱く思いは今なお昔と変わらない。／西安の桑麻の育つ土地に簡単な家屋を立てて住み／長安の灞橋の上で風雪の空を見上げながら詩を読みたいと願っている。／昔、驃騎将軍の可充は、若いころに仏になることを夢み／淮南の王安は、老年になってから仙人になることを夢みた。／人間の妄想というものはとどまるところを知らない。／だから今日も私に与えてくれ、ひと酔いの眠りを。）

78　丁巳正月二日雞初鳴夢至一山寺名鳳山其尤勝處曰味軒予爲賦詩既覺不遺一字（巻三十五）
（丁巳正月二日、雞初めて鳴き、夢に一山寺の鳳山と名づくに至る。其尤も勝れる處を、曰く味軒と。我、爲めに詩を賦す。既に覺めて一字をも遺れず。）

已窮阿閣勝　　已に窮まる　阿閣の勝れたる
更作味軒遊　　更に作す　味軒の遊
不盡山河大　　山河　大いなりて盡きず
無根日月浮　　日月　浮かびて根無し
吾身元是幻　　吾身　元より是れ幻なり
何物彊名愁　　何物か　彊いて愁を名づくるや
久覓卓庵處　　久しく覓む　卓れたる庵處
是間應可留　　是間　應に留まる可し

（古の鳳凰が巣を作ったという阿閣の木はそれだけで極めて美しいが／さらにここから最も景色の優れた味軒へと行く。／山河は果てしなく雄大であり／日月はふわふわと漂って定まった位置にじっとしていることがない。／俗世での私の身体など初めから幻である。／愁いなどというものにわざわざ名前を与えたのは一体誰なのだ。／これまでに長い間、草ぶきのいおりを建てるのに優れた場所を探してきたが／この場所はまさに求めていたような場所だから、ぜひとも留まりたいものだ。）

79　殘夢（巻三十五）

（殘夢。）

少時鐵馬蹴河冰　　少時　鐵馬　河冰を蹴るも
老去摧藏百不能　　老い去りて　摧藏し　百能わず
風雨滿山窗未曉　　風雨　山に滿ちて　窗未だ曉けず
只將殘夢伴殘燈　　只だ將に　殘夢の殘燈に伴わんとするのみ

（若いころは、鎧をつけた馬に跨り、北方の河川を飛び越えて走ったものだが／今は老いて進退も衰え、百まで生きることも叶いそうにない。／窓の外では風雨が山に滿ちて、夜がまだ明けずにいる。／ただ夢の残影が、燃え尽きようとしている蝋燭にまとわりついているだけだ。）

80　夢中遊禹祠（巻三十六）
（夢中、禹祠に遊ぶ。）

湖上無人月自明　　湖上　人無くして　月自ずから明るし
夢中彷彿得閑行　　夢中　彷彿として　閑行を得る
庭空滿地楸梧影　　庭空しくして　地に滿つ　楸梧の影
風壯侵雲鼓角聲　　風壯にして　雲を犯す　鼓角の聲
世異客懷增慘愴　　世異なりて　客懷　慘愴を增す
秋高歲事已崢嶸　　秋高くして　歲事　已に崢嶸たり
長歌忽遇騎鯨客　　長歌し　忽として遇う　騎鯨の客
喚取同朝白玉京　　同朝を喚取す　白玉の京

（湖の上には人気がなく、月の明るさが際立っている。／夢の中、ぼんやりとしながら、ひとり閑かに道を行く。／庭は閑散として、ただ葉の落ちた楸梧の影だけが地面に映っており／強い風が吹くなか、陣中の太鼓と笛の音が雲にまで刺さるように聞こえてくる。／世の中が移り変わっていくほどに、私の胸の内は悲壮なものになり／秋が盛りを迎えると、一年はあっという間に過ぎ去ってしまうのを寂しく思う。／声を放って詩を歌っていると、忽然と李白に会い／私を呼び止めて、天帝の居場所へと誘った。）

81　夢觀牡丹（巻三十七）
（夢に牡丹を觀る。）

忘却晨梳滿把絲　　忘却せん　晨梳の把絲に滿つを
楝花嫌不似胭脂　　楝花　胭脂に似ざるを嫌う
起來一笑看清鏡　　起來　一笑し　清鏡を看る
惟插梨花却較宜　　惟だ梨花を插すは　却って較宜なるのみ

（朝、髪を櫛で梳いたら、髪の束が抜けて櫛に沢山引っ掛かることなど忘れてしまおう／そんなことは、薄紫の楝の花が、紅でないことを嫌うようなものだ。／起き上がり、鏡に映る自分の姿を笑い飛ばす。／白髪になるのも、真っ白な梨の花を頭に挿しているようで、却って好ましいではないか。）

82　記戊午十一月二十四夜夢（巻三十八）
（戊午十一月二十四夜の夢を記す。）

街南酒樓粲丹碧	街南の酒樓　粲たる丹碧
萬頃湖光照山色	萬頃の湖光　山色を照らす
我來半醉躡危梯	我半ば醉いて来たり　危梯を躡む
坐客驚顧聞飛屐	坐客　驚きて顧み　飛屐を聞く
長縚短帽黄絁裘	長縚　短帽　黄絁の裘
從一山童持藥笈	一山童　藥笈を持ちて從う
近傳老仙嘗過市	近く傳う　老仙　嘗て市を過ぐるを
此翁或是那可識	此翁　或いは是れ　那ぞ識る可けんや
逡巡相語或稽首	逡にして相語を巡らせ　或いは稽首し
爭獻名樽冀餘瀝	爭いて名樽を獻じ　餘瀝を冀う
我欲自言度不聽	我　自ら言わんと欲するも　度に聽かれず
亦復軒然爲專席	亦復た　軒然と專席を爲す
高談方縱驚四座	高談　方に縱にして　四座を驚かすべくして
不覺鄰雞呼夢破	覺えず　鄰雞　呼びて夢の破るを
人生自欺多類此	人生　自ら欺けば　多く此に類す
撫枕長謠識吾過	枕を撫し　長謠して　吾過を識る

（街の南の酒楼は、鮮やかな碧玉の装飾が施され／広々とした湖の光る水面には、山の景色が映っている。／私がはやって来て少し酒に酔いつつ高楼に上ると／中にいた客たちは足音を聞き、驚いて振り返った。／外では、長い帯、小さな帽子、黄色の衣の老翁が／薬箱を持った山童を従えて歩いている。／最近、この辺りを仙人が通りがかったことがあると伝え聞いたが／この老翁が仙人であるかどうか分からない。／ためらいながら語り掛ける者もいれば、拝礼する者もいる。／彼らは争って名酒を献上し、滴り落ちた分をいただこうと躍起になった。／私も言葉をかけようとしたが許されず／彼を改めて上座に座らせた。／その高尚な話は縦横無尽で周囲を圧倒し／隣の家の鶏が鳴いて、夢から覚めたのにも気が付かないほどだった。／人生というものは自分を欺いていればこのようになってしまうものだ（結局仙人になれない。）／枕を抱いたまま、この長い詩を読み上げて、自らの過失を改めて反省した。）

83　微雨午寢夢憩道傍驛舍若在秦蜀間慨然有賦（巻四十）
（微雨の午寢、夢に道傍の驛舍に憩うに、秦蜀の間に在るが若し。慨然として賦する有り。）

吳中秋晩雨冥冥　　吳中の秋晩　雨冥冥たり
自笑閑愁又爾馨　　自ら笑う　閑愁　又た爾馨きを
身世已歸南北陌　　身世　已に歸す　南北の陌
夢魂猶寄短長亭　　夢魂　猶お寄す　短長の亭
濁醪可釀樽餘綠　　濁醪　釀ずる可し　樽は綠を餘し
明鏡無情鬢失青　　明鏡　情無し　鬢は青を失う
賴有釣船堪送老　　賴有り　釣船　送老に堪う
一汀鷗鷺共忘形　　一汀　鷗鷺　共に形を忘る

（会稽の秋の夜、雨が暗闇に降っているなか／理由もない愁いに今もまた襲われている自分を自分で笑う。／現在はもう遠い地方を行き来する生活を終えたはずなのに／夢の中では、魂がいまなお、大小さまざまな宿場をさまよい訪れる。／濁り酒は長い間醸造されすぎたせいで、樽が緑に変色し／磨かれた鏡は無情にも、鬢が白くなったのをはっきりと映し出す。／幸いにして、釣り船に乗る生活は、老後の生活を送るのに適している。／波打ち際にとまった鷗鷺と、ともに自分の姿かたちを忘れてしまおう。）

84　夢蜀（巻四十一）
（蜀を夢む。）

夢飲成都好事家　　夢に飲す　成都　好事の家
新妝執樂雁行斜　　新妝　執樂　雁行斜めなり
赭肩郫縣千筒酒　　赭肩　郫縣　千筒の酒
照眼彭州百馱花　　照眼　彭州　百馱の花
醉帽傾敧歌未闋　　醉帽　傾敧す　歌の未だ闋まざるを
罰觥瀲灩笑方譁　　罰觥　瀲灩たり　笑方に譁し
霜鐘喚覺晨窗白　　霜鐘　喚きて覺む　晨窗白し
自怪無端一念差　　自ら怪しむ　無端にして　一念差

（夢で、成都の趣味人の家にて宴会に参加した。／装いを改めた屋内で音楽を演奏し、屋外では雁が悠々と斜めに飛んでいる。／郫縣（成都西北）の、竹で醸造した郫筒の酒を千本も担いで肩を赤くし／彭州（成都西北）の輝くように鮮やかな花を百も荷に積んでいる。／酔って頭巾をあみだに被り、繰り返し歌われて終わることのない歌声に耳を傾け／なみなみと注がれた罰杯を飲むと、笑い声が巻き起こる。／鋭い鐘の音が鳴って夢から覚めると、窓の外は夜が明けかかって白くなっていた。／図らずも現実に戻ってしまったことが不思議でならない。）

85　夢中作遊山絶句二首 其一（巻四十一）
（夢中、遊山の絶句二首を作す。）

霜風吹帽江村路　　霜風　帽を吹く　江村の路
小蹇迢迢委轡行　　小蹇　迢迢たり　轡を委せて行く
忽到雲山幽絶處　　忽として到る　雲山　幽絶の處
穿林啼鳥不知名　　林を穿つ　啼鳥　名を知らず

（江沿いの村の路で、霜を帯びた冷たい風が帽子を吹くなか／小さく痩せた驢馬に乗って、手綱をたれながらとぼとぼと行く。／突然、雲が山にかかった、極めて静かな所へ差し掛かった。／名も知らぬ鳥の鳴き声が、林を突き抜けて聞こえている。）

86　夢中作遊山絶句二首 其二（巻四十一）

寺樓已斷暮鐘聲　　寺樓　已に斷ず　暮鐘の聲
照佛琉璃一點明　　佛を照らす　琉璃　一點の明
不道溪深待船久　　道せず　溪深に船を待ちて久し
老僧驚怪太遲生　　老僧　驚き怪しむ　太だ遲るを

（寺の高楼はすでに日暮れの鐘を鳴らし終え／仏像を照らすのは小さな瑠璃の石の光のみだ。／無意識に谷の深いところへやって来て、もう長い時間船が来るのを待っていると／老僧も船が甚だ遅れているのを、私と一緒になって驚き怪しんだ。）

87　夢中作（巻四十二）
（夢中の作。）
題注：己未十二月五日夜作，所書皆夢中事也
（己未十二月五日夜の作，書く所は皆、夢中の事也。）

長堤行盡古河濆　　長堤　行盡く　古えの河濆
小市人稀霧雨昏　　小市　人稀なりて　霧雨昏し
櫪馬垂頭嚙菅草　　櫪馬　頭を垂れて菅草を嚙む
驛門移路避槐根　　驛門　路を移して　槐根を避く
斷碑零落苔俱徧　　斷碑　零落　苔俱に徧し
漏壁微茫字半存　　漏壁　微茫　字半ば存る
催喚厨人燎狐兔　　催して厨人を喚び　狐兔を燎く
强排旅思舉清樽　　强いて旅思を排し　清樽を舉ぐ

（長く続く堤防の上を、古くからある河の堤防のところまで歩いてきた。／小さな市街に人は少なく、霧雨が降って暗い様子だ。／繋がれた馬は頭を垂れて草を噛んでおり／駅舎の門はあんじゅの根を避けるために、道から外れたところに建ててある。／崩れた石碑はさびれて苔に覆われ

／崩れた壁には書きつけられた文字の跡がわずかに残るのみだ。／料理人を催促して呼び寄せ、兎の肉を焼き／旅の愁いを無理やり忘れ、酒樽から酒を飲む。）

88　夢題驛壁（十二月二十七日夜）（巻四十二）
（夢に驛壁に題す。（十二月二十七日夜））

半生征袖厭風埃　　半生　征袖　風埃を厭うに
又向關門把酒杯　　又た關門に向かいて　酒杯を把る
車轍自隨芳草遠　　車轍　自ら隨う　芳草の遠きに
歲華無奈夕陽催　　歲華　無奈せん　夕陽の催るを
驛前歷歷堠雙隻　　驛前　歷歷たり　堠の雙隻たる
陌上悠悠人去來　　陌上　悠悠たり　人の去來す
不爲途窮身易老　　途に窮すを爲さざるに　身は老い易し
百年回首總堪哀　　百年　回首して　總べて哀に堪う

（私の人生の半分は旅先にあって、旅の塵を嫌ってきたが／今また酒杯を手に取って、関所へと行く。／車のわだちは芳しい草の香りが遠くへと漂うに従う。／時が過ぎて夕陽が迫りくるのをどうしようもない。／駅の前から道沿いに一里塚が並び、／小道には人々が悠々と行き来している。／終着点を見ることなく、この身は老いてしまい／これまでの長い人生を回想すると、すべて哀切なものに感じられる。）

89　三二年來夜夢每過吾廬之西一士友家觀書飲酒方夢時亦自知其爲夢也二首 其一（巻四十二）
（三二年來、夜、夢に每に吾が廬の西の一士友の家を過い、書を觀て酒を飲む。方に夢みる時に亦た自ら其の夢爲るを知る也。）

西鄰好友工談笑　　西鄰の好友　談笑を工みにす
每見明知是夢中　　見る每に　明らかに知る　是れ夢中なるを
樽酒不空書滿架　　樽酒は空しからず　書は架に滿つ
何時真得與君同　　何時か　真に君と同じきを得ん

（夢の中では、我が家の西隣には弁舌を巧みにする良き友人が住んでいるのだが／彼を夢にみるたびに、夢の中でこれが夢であることが分かる。／酒は樽に満ちて、本が棚にずらりと並んでいる。／いつか、本当に彼と会ってみたいものだ。）

90　三二年來夜夢每過吾廬之西一士友家觀書飲酒方夢時亦自知其爲夢也二首 其二

清言亹亹岸綸巾　　清言　亹亹たり　綸巾を岸く
久矣吾遊無若人　　久し　吾が遊に若の人無きや

自怪夢中來往熟　　自ら怪しむ　夢中　來往熟するを
抱琴携酒過西鄰　　琴を抱き　酒を携え　西鄰を過う

（綸巾をあみだに被り、水が流れるように話す彼が／近頃は私の夢に出てこなくなって久しい。／夢中で十分に行き来してしまったせいだろうかと疑問に思って？／夢？現実で？琴を抱き、酒を携えて彼の家を訪ねることにした。）

91　記夢（巻四十二）
（夢を記す。）

夜夢遊名山　　夜夢　名山に遊ぶ
翠壁開巖扉　　翠壁　巖扉を開ける
主人喜迎客　　主人　喜びて客を迎え
劇談皆造微　　劇談　皆造微たり
下臨萬里空　　下に臨む　萬里の空
渺渺一鶴飛　　渺渺たり　一鶴の飛ぶや
安得棄家去　　安んぞ得ん　家を棄てて去り
丹竈常相依　　丹竈の　常に相い依るを

（夜、夢で名山へ行き／翡翠の岩壁に取り付けられた扉をくぐった。／主人は喜んで私のことを迎え入れ／のびのびと話す言葉は、すべて精緻巧妙だった。／岩壁の下には万里の空を見下ろし／はるか彼方に、鶴の飛ぶ姿がかすかに見えた。／ただ家を捨て去って、丹薬を作る竈とともにいることのできないのが心残りだ。）

92　夢行秦晉間有作（巻四十四）
（夢に秦晉の間を行きて作る有り。）

夜店紬衾暖　　夜店　紬衾の暖
晨厨粟飯香　　晨厨　粟飯の香
驢肩雙酒榼　　驢肩　酒榼を雙べ
童背一琴囊　　童背　一琴を囊む
冰坼河聲壯　　冰　坼けて　河聲壯なり
郊平塔影長　　郊　平にして　塔影長し
古今均夢境　　古今　夢境に均し
不用弔興亡　　用いず　興亡を弔うを

（夜は宿の中で絹織物の掛け布団が暖かく／朝は厨房から粟飯を炊く香りがする。／驢馬の体には酒を入れた壺を並べ／従僕の背には琴を袋に包んで荷わせる。／上流で氷が砕けて水量が

増えた川の音は迫力があり／平らな田野には高い建物の影が長く伸びている。／夢の中の世界には、古今の時代の流れはないのだから／興亡のことを嘆く必要はない。）

93　病足晝卧夢中譫諄乃誦尚書也既覺口占絶句二首 其一（巻四十七）
（病足にて晝卧し、夢中に譫諄たりて乃ち尚書を誦する也。既に覺めて絶句二首を口占す。）

唐虞已遠三千歳　　唐虞　已に遠し　三千歳
每誦遺書涕泗濟　　遺書を誦する每に　涕泗濟す
濟濟九官十二牧　　濟濟たり　九官　十二牧
我獨不得居其間　　我獨り　其間に居るを得ず

（堯舜の時代は、さかのぼること今から三千年も前になるが／前人の遺した書物を越えに出して読むたびに、涙を流さずにいられない。／舜の設置した九の大臣、十二州の長官たちがずらりと並ぶなか／私だけがその中に入りそびれたのだ。）

94　病足晝卧夢中譫諄乃誦尚書也既覺口占絶句二首 其二

人能不食十二日①　　人　十二日食わざるを能くするも
惟書安可一日無　　惟だ書のみは　安んぞ一日として無かる可けんや
唐虞雖遠典謨在　　唐虞　遠しと雖も　典謨在り
病卧蓬窗時囁嚅　　病卧　蓬窗　時に囁嚅す
按：① 自注：趙岐、柳開皆嘗不食十二日不死。
（趙岐、柳開は皆嘗て、十二日食わずして死せず。）

（人は十二日間食べなくても生きていられるらしいが／書物無くしては、一日たりとも生きていられない。／堯舜の時代は遠いと雖も、『尚書』の「堯典」「舜典」といった書物は今にも残っている。／草窓のそばで病に臥せりながら、時々ぶつぶつと独り言を言う。）

95　十二月二日夜夢與客並馬行黄河上憩於古驛二首 其一（巻四十九）
（十二月二日夜、夢に客と馬を並べて黄河の上を行き、古驛に憩う。）

並轡徐驅百里中　　轡を並べて　徐驅す　百里の中
雲開太華翠摩空　　雲開きて　太華　翠にして空に摩す
是間合有神靈在　　是の間　合に神靈の在る有るべきも
七十餘年墮犬戎　　七十餘年　犬戎に墮つ

（客と馬を並べて、百里の間、ゆっくりと馬を走らせた。／雲間に見えた太華山は、青々として空に迫るようだ。／この地には神々が住んでいるに違いないけれども／建炎四年に張浚が敗戦

して以来、もう七十年余りのあいだ金に占領されたままになっている。）

96　十二月二日夜夢與客並馬行黄河上憩於古驛二首 其二

河濱古驛闢重門　　河濱の古驛　重門を闢き
雉兔紛紛黍酒渾　　雉兔　紛紛たりて　黍酒渾る
吾輩豈應徒醉飽　　吾輩　豈に應に　徒らに醉い飽きん
會傾東海洗中原　　會ず東海を傾け　中原を洗わん

（黄河沿いの古い駅舎では、門が開け放しになって門番も立っておらず／雉や兔が多く住み付いて、きびの酒が放置されて濁っている。／私はどうしていたずらに酒ばかり飲んで、この状態を放っておけるだろうか／必ず東の海を引っくり返して、この地の金軍を一掃してやるのだ。）

97　夢韓无咎王季夷諸公（巻四十九）
（韓无咎、王季夷の諸公を夢む。）

積雪欲照夜　　積雪　夜を照らさんと欲し
老雞方唱晨　　老雞　方に晨に唱わんとす
諸公逝已久　　諸公　逝きて已に久し
幽夢忽相親　　幽夢　忽として相い親づく
話舊殷勤意　　舊を話す　殷勤の意
追歡見在身　　追歡す　見在の身
悠然又驚覺　　悠然たるも　又た驚き覺む
撫枕一悲辛　　枕を撫し　一たび悲辛す

（積雪が白く光り／鶏が鳴こうとする夜明け前（に夢を見た）。／友人たちは亡くなってから既に久しいが／静かな夢の中で、突然、彼らと親しく接することができた。／厚い情誼をもって往年の出来事を語り合い／今も健在の身であることを喜び合った。／このような時間が永遠に続くかと思えたが、それでもまた驚いて目が覚めてしまった。／枕に横になったままで、この辛さに落ち込んだ。）

98　記夢（巻五十）
（夢を記す。）

信命從來不問天　　命を信じ　從來　天を問わざるも
經旬無酒亦陶然　　旬を經るに　酒無くしては　亦た陶然たり
夢爲估客揚州去　　夢に估客と爲り　揚州へ去く
水調聲中月滿船　　水調の聲中り　月　船に滿つ

（これまでずっと運命のままに従い、天を疑ったことはなかった／年月を経ると、酒がなくとも陶然とした気分になる。／夢で（蘇軾の詩にあるような）行商になり、揚州へ行くと／（杜牧の詩にあるように）「水調歌頭」が歌われる中、月の光が船に満ちている。）

99　九月十四日夜雞初鳴夢一故人相語曰我爲蓮華博士蓋鏡湖新置官也我且去矣君能暫爲之乎月得酒千壺亦不惡也既覺惘然作絶句記之（巻五十一）
（九月十四日夜、雞初めて鳴くとき、一故人を夢む。相い語げて曰く「我は蓮華博士爲り。蓋し鏡湖に新置せられし官也。我且に去らんとするに、君能く暫く之を爲さんか。月に酒千壺を得るは、亦た惡しからざる也」と。既に覺めて惘然たり。絶句を作りて之を記す。）

白首歸修汗簡書　　白首　歸修　汗簡の書
每因囊粟戲侏儒　　每に囊粟に因りて　侏儒に戲る
不知月給千壺酒　　知らず　月に千壺の酒を給せらるること
得似蓮華博士無　　蓮華博士の似きを得るや無や

（日々、白髪頭で歴史書の編纂事業にあたっており／少しばかりの給与のためにつまらない仕事をしている。／月に千壺もの酒が給与されるという／蓮華博士の官などにつけるものだろうか。）

100　夢韓无咎如在京口時既覺枕上作短歌（巻五十二）
（韓无咎に夢む、京口に在りし時の如し。既に覺めて枕上に短歌を作る。）

隆興之初客江皋　　隆興之初め　江皋に客す
連榱結駟皆賢豪　　連榱の結駟　皆賢豪なり
坐中无咎我所畏　　坐中の无咎　我の畏る所なるも
日夜酬唱兼詩騷　　日夜　酬唱し　詩騷を兼ぬ
有時贈我玉具劍　　有る時　我に贈る　玉具の劍
間亦報之金錯刀　　間亦　之に報ず　金錯の刀
舊遊忽墮五更夢　　舊遊　忽ち墮つ　五更の夢
舉首但覺鐵甕高　　首を舉げ　但だ鐵甕の高きを覺ゆるのみ
樽前美人亦黄土　　樽前の美人　亦た黄土
吾輩鬼錄將安逃　　吾輩　鬼錄より　將に安んぞ逃げんとす
死生一訣信已矣　　死生　一たび訣るれば　信ずるのみ
所恨膏火常煎熬　　恨む所の膏火　常に煎熬なるを
平生不愛葱嶺話　　平生　葱嶺の話を愛さず
方術亦陋葛與陶　　方術　亦た陋なり　葛と陶

但當東歸棄百事　　但だ當に東歸し　百事を棄て
爛醉海上觀雲濤　　海上に爛醉し　雲濤を觀るべし

（隆興年間の初めに、蘇州の沿岸で宴会に参加したとき／その場にいた面々はみな賢俊・豪放な人ばかりだった。／宴席の中にいた韓无咎を、私は畏れはばかっていたが／彼とは日夜詩を贈答し、共に試作する仲になった。／ある時、彼が白玉の剣を私に贈ってくると／私は金の刀を贈ってこれに返礼した。／しかしながら、真夜中の夢から覚め、昔の交遊は一瞬にして消えてしまい／頭を挙げると、蘇州の頑丈な古城の高さしか覚えていない。／酒樽の前にいた女性でさえもうあの世にいるのだから／私もあの世の死人名簿からどうやって逃れようというのか。／ひとたび死に別れてしまえば、信じるしかない／　　／私は普段から、仙術で空を飛べたという葱嶺の話を信じたことはない／　　（煉丹術に秀でた）葛洪と陶弘景でさえ、見識が狭い／ただもう俗世の物事を捨て去って東のかなたへ行き／海上で大いに酔いながら、波しぶきを眺めたいものだ。）

101　癸亥正月十日夜夢三山竹林中筍出甚盛欣然有作（巻五十二）
（癸亥正月十日夜、三山の竹林中に筍の出ずること甚だ盛んなるを夢み、欣然として作る有り。）

新春身不到家園　　新春　身は家園に到らざるも
東崦西村役夢魂　　東崦　西村　夢魂を役す
一夜四山雷雨起　　一夜　四山に雷雨起こり
滿林無數長龍孫　　滿林　無數に龍孫を長ず

（現在は臨安にいて、新春を郷里の家で迎えることはできなかったが／夢魂は家のある西村を訪れた。／一夜のあいだ、周囲の山々に雷雨が降りしきると／翌朝林の中は無数に生えてきた筍で一杯になっていた。）

102　二月二日夢中作（巻五十三）
（二月二日、夢中の作。）

零落薔薇委道傍　　零落の薔薇　道傍に委え
更堪微雨漬殘香　　更に　微雨の殘香を漬すに堪う
象床玉尺人何在　　象床　玉尺の人　何くにか在る
腸斷新裁錦一方　　腸斷　新裁す　錦一方

（枯れ落ちた薔薇の花は道端にしおれ／そのうえ、残われた香りを弱い雨が水に浸してしまうのをじっと忍んでいる。／象牙の寝台、白玉でできた尺を持った仙人はいったいどこにいるのだろうか／悲しみながら、新たな一地域（臨安）に赴任する。）

103　記夢（巻五十三）
（夢を記す。）

旅夢遊何地　　旅夢　何れの地へも遊ぶ
分明禹廟傍　　分明なり　禹廟の傍
不嫌村餉薄　　嫌わず　村餉の薄きを
但愛野蔬香　　但だ愛するのみ　野蔬の香
筍市連山塢　　筍市　山塢に連なり
菱歌起夕陽　　菱歌　夕陽より起きる
一蓑元所樂　　一蓑　元より樂しむ所なり
枉道懶衣裳　　枉道　衣裳を懶る

（旅先にいて、郷里を夢みるときには、どこへでも行くことができる。／今日の夢では、郷里の禹廟の近くへ行ったことが明らかに分かった。／村の食事が貧しいことを嫌わず／ただ野菜の自然な香りを愛することだ。／山の村落には筍市が連なり／山の西側からは菱を採る歌が聞こえてくる。／みの一枚だけを身に着けていることは元々好ましいことだから／曲がりくねった道を歩きながら、衣服を面倒に思った。）

104　夢遊三首 其一（巻五十三）
（夢に遊ぶ。三首）

太華峰頭秋氣新　　太華の峰頭　秋氣新たなり
醉臨絶壁岸綸巾　　醉いて絶壁に臨み　綸巾を岸く
世間萬事惟堪笑　　世間の萬事　惟だ笑うに堪う
禹迹茫茫九片塵　　禹迹　茫茫たり　九片の塵

（太華山の頂には、清々しい秋の空気に満ちている。／酔って頭巾をあみだに被り、絶壁から下を見下ろすと／世の中の万事は笑い飛ばすほどのものでしかないように思えてくる。／はるか遠くには禹廟がぼんやりと、塵のように小さく見えている。）

105　夢遊三首 其二

九秋風露洗頭盆　　九秋の風露　洗頭盆
萬里雲烟腰帯鞋　　萬里の雲烟　腰帯鞋
小甕松醪知已熟　　小甕の松醪　已に熟るるを知る
與君爛醉不須醒　　君と爛醉し　醒を須いず

（幾度も訪れた秋の風露が、かつて仙女が髪を洗ったと言われる石臼の中に満ちて／万里に連

なる雲煙が、かつて蘇軾が下ったとされる腰帯鞓に掛かっている。／小さな甕に入った松の酒が、既に熟しているのが分かったから／酔いから醒めることがないほど、君？と大いに酔いたいものだ。）

106　夢遊三首 其三

客途幽夢苦凄凄　　客途の幽夢　苦だ凄凄たり
滿眼山川意却迷　　滿眼の山川　意は却って迷う
條華朝驅雲外騎　　條華　朝に驅く　雲外の騎
河潼夜聽月中雞　　河潼　夜に聽く　月中の雞

（旅先で一人静かにみる夢は、凄まじく寂しいものだ。／見渡す限りに広がる雄大な景色のもとでは、自分の心は却って迷ってしまう。／中條山、華山では明け方、雲の上の高所で馬を走らせ／華山の東に至る潼水では、夜中、月明かりの中で鶏の鳴き声を聞く。）

107　夢行小益道中二首 其一（巻五十五）
（夢に小益の道中を行く。）

棧雲零亂馱鈴聲　　棧雲　零亂　馱鈴の聲
驛樹輪囷樺燭明　　驛樹　輪囷　樺燭の明
清夢不知身萬里　　清夢　身は萬里なるを知らず
只言今夜宿葭萌　　只だ言うのみ　今夜　葭萌に宿すと

（棧道に掛かる雲は散り散りになっているなか、荷物を積んだ馬に結び付けた鈴の音が鳴っている。／宿場に植わった樹は曲がりくねって、樺の木皮を巻いて作った灯りに照らされている。／清々しい夢のなかで、身は万里のかなた、郷里の山陰にあるとも気付かず／ただ今夜は、四川省葭萌の宿に泊まるのを当たり前に思っていた。）

108　夢行小益道中二首 其二

櫸柳林邊候吏迎　　櫸柳の林邊　候吏迎え
血塗草棘虎縱横　　血塗りの草棘　虎縱横
分明身在朝天驛　　分明なり　身は朝天驛に在り
惟欠嘉陵江水聲　　惟だ欠するのみ　嘉陵江の水聲

（櫸柳の木が並んだ林のそばで宿場の係りの人が出迎える。／草木は血に染まっていて、虎が縱横に走り回った後のようだ。／明らかに自分は嘉陵江近くの朝天驛にいるはずなのだが／唯一不自然なのは、実際には嘉陵江の水の音が聞こえないことだ。）

109　夢中賦早行（巻五十五）
（夢中、早行を賦す。）

夜分秉炬治裝齎　　夜分 炬を秉りて　裝齎を治め
千里霜風入馬蹄　　千里の霜風　馬蹄を入る
擁褐却尋孤驛夢　　褐を擁し　却って尋ぬ　孤驛の夢
垂鞭時聽近村雞　　鞭を垂れ　時に聽く　近村の雞
荒烟漫漫沉殘月　　荒烟　漫漫たり　殘月を沉め
宿莽離離上古堤　　宿莽　離離たり　古堤を上る
天色漸分寒更力　　天色　漸いに分かち　寒さ更に力まり
道傍沽酒坼官泥　　道傍の沽酒　官泥を坼く

（夜が明けないうちに、かがり火を手に取り、旅の服装と道中に必要なものを準備して／冷たい霜風の吹く千里の遠い道へ馬を進める。／粗末な着物を手で押さえながら、敢えて寂れた宿場を尋ねる夢を見た。／鞭を垂れて行くうちに、ちょうど近村で明け方の鶏が鳴く声がした。／荒涼たる風景が延々と続き、明るさを失った月が沈んでいく。／枯れることのない雑草が密集して生えた古い堤防を上っていく。／空の色が次第に明るくなっていく一方で、寒さは更に厳しくなる。／市で買った酒を道端で飲みながら、赴任の旅の塵を払う。）

110　八月四日夜夢中作（巻五十八）
（八月四日夜、夢中の作。）

太華巉巉敷水長　　太華　巉巉たり　敷水長し
白驢依舊繫斜陽　　白驢　舊に依りて　斜陽に繫ぐ
山深乳洞藥爐冷　　山深の乳洞　藥爐冷え
花發雲房醅甕香　　花發の雲房　醅甕香る
鄰叟一樽迎谷口　　鄰叟　一樽もて　谷口に迎え
蠻童三髻拜溪傍　　蠻童　三髻にして　溪傍に拜す
中原俯仰成今古　　中原　俯仰のうちに　今古を成す
物外自閑人自忙　　物外　自閑なるも　人自ずから忙し

（太華山は険峻で、敷水は長大である。／故事のように、私は乗ってきた白驢を夕陽の差す山に繫いだ。／山奥の鍾乳洞は丹薬を生成する炉を冷やし／花が咲いた隠者の住居からは酒の香りがしている。／数人の老翁が酒樽を持って、私を山の入り口に迎え／三髻の髪型をした山童が渓流のそばで私に拝礼する。／（太華山のある）中原は、時の流れなどほんの一瞬のものに感じられるほど雄大なものだ。／俗世を離れれば悠然たる時間が流れているというのに、俗世では人間は常にあわただしく生活している。）

111　明日復理夢中意作（巻五十八）
（明日、復び夢中の意を理めて作る。）

白盡髭鬚兩頰紅　　髭鬚を白盡して　兩頰紅なり
頽然自以放名翁　　頽然　自ら放を以て　翁に名づく
客從謝事歸時散　　客は　事を謝して歸りし時從り散じ
詩到無人愛處工　　詩は　人の愛する處無きに到りて工なり
高挂蒲帆上黄鶴　　高く蒲帆を挂げて　黄鶴に上り
獨吹銅笛過垂虹　　獨り銅笛を吹きて　垂虹を過ぐ
閑人浪迹由來事　　閑人浪迹　由來の事
那計猿驚蕙帳空　　那ぞ計らん　猿驚きて蕙帳空しからんとは

（口髭、頬髯は真っ白になり、両頬は紅である。／衰頽して自分で翁に放と名を付けた（すなわち放翁）万事を断って官途から帰った時から客は散じてしまい／詩は誰も愛するものがなくなった境地に達してやっと巧みになった。／蒲席の帆を高く掲げて黄鶴楼に登ったり／ひとり銅の笛を吹き鳴らして垂虹橋のあたりを通る。／暇な人間が、處定めずあちこちをぶらつくのは、よくありがちなことだ／隠者がいなくなり蕙帳が空になって猿が驚いたと昔の人は言ったが、そんなことに関わり合ってはいられないのだ。）

112　又明日復作長句自規（巻五十八）
（又た明日、復び長句を作り自ら規す。）

大學淵源不易窮　　大學の淵源　窮むること易からず
古人立志自童蒙　　古人　立志を童蒙自りす
醉猶溫克方成德　　醉いて猶お溫克なりて　方に成德せんとし
夢亦齋莊始見功　　夢みて亦た齋莊なりて　見功を始める
痛哭孰能悲陷溺　　痛哭す　孰か能く陷溺を悲しまん
力行猶足變雕蟲　　力めて行い　猶お足る　雕蟲を變ずるを
太空雲翳終當散　　太空の雲翳　終に當に散ずるべし
吾道常如日正中　　吾が道　常に日の正中の如し

（太学の根源を極めることは簡単なことではない／古人は幼いころから、自ら志を立てた。／飲酒して酔ってもなお、人に対して温厚で、敬意を失わず、これこそ徳を体現しており／夢の中でもまた、厳粛で誠実な態度を失わず、功績を立てようとする。／このような古人の度量が失われ落ちぶれていくことを悲しむ人がおらず、私は悲痛な気分になる。／努力して実践することで、やっと微小な改善が得られるようなものだが／空を覆う雲も最後には散り散りになって、晴れ渡るだろう。／私の主張は常に正午の太陽のようなものだ。）

113　甲子秋八月丙辰雞初鳴時夢劉韶美示詩八篇高古可愛明旦作此詩志之（巻五十九）
（甲子秋八月丙辰、雞初めて鳴く時、劉韶美の詩八篇を示すを夢む。高古にして愛す可し。明旦、此詩を作りて之を志す。）

韶美仙去三十年	韶美　仙へ去りて　三十年
一念及之常悵然	一念　之に及ぶや　常に悵然たり
秋窗忽夢接顔色	秋窗　忽として夢み　顔色に接す
萬里老鶴歸遼天	萬里の老鶴　遼天より歸するかと
贈詩溫其似玉瓚	詩を贈るに　其れ溫かくして　　玉瓚の似し
我亦粗識關雎亂	我亦た　粗く識る　關雎の亂
建安黄初不足言	建安　黄初　言うに足らず
筆端直覺無秦漢	筆端　直だ覺ゆ　秦漢無しと

（友人の劉韶美が亡くなってもう三十年になるが／ひとたび彼のことを思うと、今でも気持ちが落ち込む。／秋の窓辺の夢で、思わず彼の姿に接した。／万里のかなた、遥か遠くの天から鶴が舞い降りたかのようだ。／彼が私に贈ってくれた詩は穏やかで、玉でできた祭祀の器のようであり／『詩経』關雎の最後の部分を思い起こさせた。／漢末の建安、三国の黄初の時代のものでないことは言うまでもなく／高雅で素朴な詩編からは、ただ秦漢の時代よりも前のものであるということがうかがえた。）

114　夢中作（巻五十九）
（夢中の作。）
序：甲子十月二日夜雞初鳴夢宴客大樓上山河奇麗東南隅有古關尤壯酒半樂闋索筆賦詩終篇而覺不遺一字遂錄之亦不復加竄定也
（甲子十月二日夜、雞初めて鳴くとき、夢に宴客と大樓に上る。山河奇麗にして、東南の隅に古關の尤だ壯なる有り。酒半ばにして樂闋み、筆を索めて詩を賦す。篇を終えんとして覺め、一字として遺れず、遂ち之を錄し、亦た復び竄定を加えざる也。）

富貴誇人死即休	富貴を人に誇らば　死して即ち休む
每輕庸子覓封侯	庸子を輕んずる每に　封侯を覓む
讀書歷見古人面	讀書　歷らかに見る　古人の面
好義常先天下憂	好義　常に先だつ　天下の憂い
獨往何妨刀買犢	獨り往きて　何んぞ妨げん　刀で犢を買うを
大烹却要鼎函牛	大烹　却って要す　鼎函牛
坐皆豪傑真成快	坐は皆　豪傑なり　真に快を成す
不負凌雲百尺樓	負わず　雲を凌ぐ　百尺の樓

（富貴であることを人に自慢する癖は、死ぬまで直せないものだ。／凡人を軽んじながら、高官を横目に見ている。／書物を通せば、古人の姿をありありと見ることができる。／士大夫とは天下の憂いに先立って憂うるものだ。／私一人が、子牛を買いに行くのをどうして妨げることができよう／大鍋よりもさらに大きな鼎が必要になる。／宴席の客たちは豪傑ばかりで、ほんとうに気持ち良いものだ。／雲を凌ぐような高さの楼台　　）

115　甲子歳十月二十四日夜半夢遇故人於山水間飲酒賦詩既覺僅能記一二乃追補之二首 其一（巻六十）

（甲子歳十月二十四日夜半ば、山水間で故人に遇うを夢み、飲酒して詩を賦す。既に覺めて僅かに一二を記す能う。乃ち之を追補す。）

拂衣金馬門	衣を拂う　金馬門
稅駕石帆村	駕を稅す　石帆村
喚起華山夢	喚起す　華山の夢
招回湘水魂	招回す　湘水の魂
心親頻握手	心親しみて　頻に手を握り
目擊欲忘言	目擊ちて　言を忘れんと欲す
最喜藤陰下	最も喜ぶ　藤陰の下
翛然共一樽	翛然として　一樽を共にす

（（長安、漢の未央宮にあった）金馬門のもとで、衣の塵を払い／（浙江省）石帆村で車を停める。／華山に遊んだ夢を思い起こし／（長江の支流）湘水へ行った夢魂を呼び戻す。／出会った故人と心を寄せ合い、手を取り合って／目を見交わすだけで心の通じ合う、言葉のいらない友誼を結びたいと願う。／藤の木の陰で再会を喜び／嬉々として、酒を飲み交わした。）

116　甲子歳十月二十四日夜半夢遇故人於山水間飲酒賦詩既覺僅能記一二乃追補之二首 其二

小山緣曲澗	小山　曲澗に緣い
路斷得藤陰	路斷えて　藤陰を得る
忽遇平生友	忽ち遇う　平生の友
重論一片心	重ねて論ず　一片の心
興闌棋局散	興　闌にして　棋局散じ
意豁酒杯深	意　豁として　酒杯深し
雞唱俄驚覺	雞唱きて　俄かに驚きて覺め
凄然泪滿襟	凄然として　泪襟を滿たす

（小さな丘が、ゆるやかに曲がった谷川に沿って連なっており／路の行き止まりに藤の木陰を見つけた。／偶然、旧友に再会し／繰り返し、お互いの心の内を話し合った。／楽しい時間もた

けなわになって、棋局は終わりを迎え／気持ちは晴れ晴れとして、深酒する。／突然、鶏が鳴いて驚いて目覚め／がっかりして、着物を涙に濡らした。）

117　夜夢遇老人於松石間若舊嘗從其遊者再拜敘間闊老人亦酬接甚至云（巻六十）
（夜、老人と松石の間に遇うを夢む。舊し嘗て其の遊に從いし者の若し。再拜して間闊を敘す。老人亦た酬接甚だ至るとしか云う。）

遼海曾從化鶴丁　　遼海　曾て從う　化鶴の丁
百年塵土污巾瓶　　百年　塵土　巾瓶を污す
萬山深處遇行李　　萬山の深處　行李に遇い
再拜起時如醉醒　　再拜より起ちし時　醉いの醒むるが如し
綠樹巖前開藥笈　　綠樹の巖前　藥笈を開き
白驢背上指丹經　　白驢の背上　丹經を指さす
雲霄平步尋常事　　雲霄を平步するは　尋常の事
不用求方更解形　　用いず　方を求め更に形を解くを

（嘗て、遼東では鶴と化して仙人になった丁令威がいたが／長く俗世にいると、（仏教で僧が保持する）浄巾浄瓶も、塵に汚れてしまう。／（そう思いながら歩いていると）山の深くで偶然旅人に会い／再拝してから目を上げると、酔いが醒めたようにはっとした。／彼は崖前の緑木の下で、丹薬の入った箱を開き／乗っていた白い驢馬の背の上に、煉丹術の専門書を指し示した。／彼にとっては、空高く雲の上での歩行は通常のことであり／もはやこれ以上の仙術を求めようとはしないのだ。）

118　夢華山（巻六十）
（華山を夢む。）

古松偃蹇谷谽谺　　古松　偃蹇たり　谷　谽谺たり
太華峰前野老家　　太華の峰前　野老の家
久客未歸丹竈冷　　久しく客し　未だ歸らずして　丹竈冷ゆ
碧桃八十一番花　　碧桃　八十一番の花

（樹齢の長い松は高くそびえ、谷は険峻である。／華山の峰々を臨む道士の家には／来客も絶えて、丹薬を生成する炉も冷え切ってしまった。／（薬になる）碧桃が、八十一度目の花をつけている。）

119　夢中作（巻六十一）
（夢中の作。）

華山敷水本閑人　　華山　敷水　本より閑人
一念無端墮世塵　　一たび念えば　端無く世塵を墮とす
八十餘年多少事　　八十餘年　多少の事
藥爐丹竈尚如新　　藥爐　丹竈　尚お新たなる如し

（華山、敷水の地は人気が無く静かで／一度思いを馳せれば、限りなく俗世の塵を払い落とせるように思える。／私はこれまで八十年余りの間、様々な事があったが／華山にある、丹薬を生成する炉や窯は、今でも新品のようだ。）

120　二月晦日夜夢欲卜居近邑道遇老父告以不利欣然從之（巻六十一）
（二月晦日夜、夢に卜居をせんと欲し、近邑の道に老父に遇う、告ぐるに以て利せず、欣然として之に従う。）

夢中行卜居　　夢中　卜居を行わんとし
道遇白髯叟　　道に遇う　白髯の叟
一面出苦言　　一面して　苦言を出だし
戒我棄勿取　　我を戒しむ　棄てて取る勿れ
人之生實難　　人之生　實に難し
失脚墮虎口　　失脚　虎口に墮つと
我深感其言　　我　深く其の言に感じ
解衣奉杯酒　　衣を解き　杯酒を奉ず
豈知立談間　　豈に知らんや　立談の間
得此直諒友　　此に得んとは　直諒の友
起坐心茫然　　起坐して　心は茫然たり
天闊樓挂斗　　天闊くして　樓は斗を挂く

（夢の中で、占いで住むのに良い場所を選んでもらおうと思っていると／行く道に、白髪の翁に出会った。／翁は私を一目見て、忠告の言葉を口にした。／私を戒めて言うことには「人生は実に難しいもので／慎重に行動しなければ、虎口に墮ちることになるぞ」と。／私はその忠告に深く感じ入り／着物を解いて酒を取り出し、翁に献上した。／誰が予想できようか、立ち話する短い間に／ここに誠実で信じるに足る友人を得ようとは。／夢から覚めると、夢でのこの出来事に茫然とした／空は広く澄み渡り、楼にはまだ北斗の星座が掛かって見える。）

121　記夢（巻六十二）
（夢を記す。）

環立江頭千萬峰　　環りて立つ　江頭　千萬の峰
夢中於此倚枯筇　　夢中　此に於いて　枯筇に倚る

青冥誰見攲巾角　　青冥　誰か見ん　巾角を攲むくるを
碧瀣閑將洗筆鋒　　碧瀣　閑かに將む　洗筆鋒
一卷素書雲笈貯　　一卷の素書　雲笈に貯う
數升松麨水機舂　　數升の松麨　水機の舂
正呼鶴駕凌風去　　正に鶴駕を呼べば　風を凌えて去る
驚覺西山烟外鐘　　驚きて覺む　西山　烟外の鐘

（長江沿岸、千の山々が取り囲んで連なる地を／夢で訪れ、杖に寄りかかってその場に佇む。／青く幽玄な仙界で、頭巾を傾けた私を誰が見つけることができるだろう／夜半の紺碧の霧がかかる洗筆鋒の上を、静かに進んでいく。／一巻の道教の書物が、道教の蔵書を入れておく箱の中に収めてあり／松の香煎は、水力式の臼で作られる。／仙人の乗る鶴駕を呼べば風に乗って走り去る。／近くの西山の霞の向こうから鐘の声が聞こえて、はっと目が覚めた。）

122　乙丑七月二十九日夜分夢一士友風度甚高一見如宿昔出詩文數紙語皆簡淡可愛讀未終而覺作長句記之（巻六十三）
（乙丑七月二十九日夜分、一士友を夢む。風度甚だ高く、一見して宿昔の如し。詩文數紙を出だすに、語は皆簡淡にして愛す可し。讀むこと未だ終わらずして覺め、長句を作りて之を記す。）

客中得友絶清真　　客中　友を得る　絶めて清真なり
蓋未傾時意已親　　蓋の未だ傾かざる時　意は已に親しむ
枕冷不知清夜夢　　枕冷やかにして　清夜の夢なるを知らず
眼明喜見老成人　　眼に明らかに　老成の人を見るを喜ぶ
河傾斗落三傳漏　　河は傾き斗は落ち　三たび漏を傳う
霧散雲歸兩幻身　　霧散じて雲は歸り　兩幻身
心亦了然知是妄　　心亦た了然として　是は妄なるを知るも
覺來未免一酸辛　　覺め來たれば　未だ一酸辛を免れず

（宴席の客の中に、極めて純真素朴な友人を得て／夜がまだ明けないうちに、心が親しく通うほどになった。／これが冷たい枕の上でみた、清々しい夜の夢にすぎないとは気付かず／目の前にはっきりと、徳の高い人を見ることができて嬉しく思った。／（しかしながら現実には）天の川が傾き、北斗七星は空の低い所へ落ち、時刻を刻む夜漏は蠟を溶かして短くなり／目の前の光景は雲散霧消して、すべては夢の中の幻だったことが分かった。／心の中では、明らかにこれがただの幻だと分かっているつもりだが／夢から覚めた時のつらさは、どうにも免れようがない。）

123　夢行益昌道中有賦（巻六十三）
（夢に益昌の道中を行き、賦する有り。）

朱棧青林小益西　　朱棧　青林　小益の西
早行遥聽隔村雞　　早行　遥かに聽く　隔村の雞
龍門閣畔千尋壁　　龍門閣の畔　千尋の壁
江月亭前十里堤　　江月亭の前　十里の堤
酒舍胡姬歌折柳　　酒舍の胡姬　折柳を歌い
江津洮馬惜障泥　　江津の洮馬　障泥を惜しむ
倦遊重到曾來處　　遊ぶを倦い　重ねて到る　曾て來たりし處
自拂流塵覓舊題　　自ら流塵を拂い　舊題を覓む

（小益（四川省）の西には赤い橋と青い林が見える。／朝早く出立し、隣村から鶏の鳴く声が聞こえる。／龍門閣の傍らには高い岩壁がそびえ／江月亭の前には長い土手が続いている。／酒店では店の女性が折柳の楽府を歌い／洮河の馬は泥よけを惜しんでいる。／今や新しい場所へ行くのが面倒になってきて、かつて来たところをもう一度訪れる。／旅の塵を払い落とし、以前にも使った詩題（→108 夢行小益道中二首）をもう一度使うことにする。）

124　記夢二首 其一（巻六十三）
（夢を記す。）

少日飛揚翰墨場　　少日　翰墨場に飛揚し
憶曾上疏動高皇　　憶ゆ　曾て上疏し高皇を動かすを
寧知老作功名夢　　寧んぞ知らん　老いて作す　功名の夢
十萬全裝入晉陽　　十萬　全裝し　晉陽に入る

（若い頃、宮廷の翰林院に取り立てられて活躍し／かつて献言して高皇に用いられたこともあったが／老いてなお、功名を成す夢を見るとは思いもしなかった。／武具を完全に身に着けた十万の軍を率いて、晉陽（山西省太原市）に入ろうとは。）

125　記夢二首 其二

老來百事不關身　　老來　百事　身に關せず
北陌東阡一幅巾　　北陌　東阡　一幅の巾
忽夢行軍太行路　　忽として夢に行軍す　太行路
不惟無想亦無因　　惟わず　想無く亦た因無しとは

（年老いてからというもの、世の中のあらゆることは私の身には無関係になり／南北に通る道の北の端、東西に通る道の東の端に住み、頭巾を被って隠居しているが／突然、夢で太行路（山西省、河南省、河北省の三つの省の境界部分に位置する）に軍を率いた。／夢に想も因も関係ないとは思えない。）

126　夢中作二首 其一（巻六十四）
（夢中の作。）

繫馬朱橋上酒樓　　朱橋に馬を繫ぎ　酒樓に上る
樓前敷水拍堤流　　樓前の敷水　堤を拍ちて流る
春風又作無情計　　春風　又た作る　無情の計
滿路楊花輥雪球　　滿路の楊花　輥雪球

（朱橋に馬を繫ぎ、酒樓に上る。／酒樓の前に流れる敷水は、堤防を打って流れている。／春の風は無情に季節を移ろわせる。／道路一面に落ちた柳の花が、丸くなった雪の球のようだ。）

127　夢中作二首 其二

大慶橋頭春雨晴　　大慶橋の頭　春雨晴れ
行人馬上聽鶯聲　　行人　馬上に鶯聲を聽く
祥符西祀曾迎駕　　祥符の西祀　曾て駕を迎うるも
惆悵無人說太平　　惆悵す　太平を說ぶ人無きを

（会稽城中の東南にある大慶橋に差し掛かると、春の雨が上がって空が晴れ渡り／橋を渡る人（私？）は頭上に飛ぶ鶯の鳴き声を聞く。／かつて（北宋真宗の大中祥符 4 年（澶淵の盟の後）、汾陰で地を祀る儀式（西祀）が行われ、天から与えられたとされる天書（祥符）を都から泰山に伝えられ、天子が称えられたが／今はもはや、和議を結んだことによる当時の太平の世も失われ、平和を喜ぶ人もいないことが残念に思われてならない。）

128　記乙丑十月一日夜夢二首 其一（巻六十四）
（乙丑十月一日夜の夢を記す。）

夢裏江淮道上行　　夢裏　江淮の道上を行く
解裝掃榻喜新晴　　裝を解き　榻を掃きて　新晴を喜ぶ
店門邂逅綈袍客　　店門　邂逅す　綈袍の客
共把茶甌說養生　　共に茶甌を把り　養生を說ぶ

（夢の中で、長江と淮河の間の道を行く。／着物を着崩し、長椅子の上を手で払って座り、明るく晴れ渡った空を喜ぶ。／店の門のところで、厚絹で織った冬の着物を着た客と偶然出会い／店で共に茶碗を取って、互いの長寿健康を喜び合った。）

129　記乙丑十月一日夜夢二首 其二

旋糴街頭米數升　　旋糴の街頭　米數升
黄昏看上店身燈　　黄昏　看上す　店身燈るを
明朝山路聞饒石　　明朝の山路　饒石を聞く
買得烏騾喜不勝　　烏騾を買い得て　喜びに勝えず

（かいよねを行っている街頭で、米を少しばかり買い／黄昏時、店の灯りが灯るのを見た。／翌朝、山路で石の音を聞き／黒い騾馬を買い得たのが、嬉しくて仕方がない。）

130　十月十四夜夢與客分題得早行（巻六十四）
（十月十四夜、夢に客と分題し、早行を得る。）

蓐食寒燈下　　蓐食す　寒燈の下
脂車小市傍　　脂車す　小市の傍
驛門猶淡月　　驛門　猶お淡月
街樹正清霜　　街樹　正に清霜
觸目關河異　　觸目　關河異なり
興懷道路長　　興懷　道路長し
丈夫當自力　　丈夫　當に自力すべきも
雙鬢易蒼蒼　　雙鬢　蒼蒼に易わる

（夜明け前、寒々しい灯りのもと、布団の上で早い朝食をとり／小さな町の片隅で、車輪に油を差して出立する。／駅舎の門にはまだ朧げな月が掛かり／道の両脇に植わった樹には、冷たい霜が付いている。／目の前に広がる山河の様子は普段と異なって見え／行く道も果てしなく遠いような感覚が引き起こされる。／大丈夫であるからには、自分で自分を維持しなければならないはずだが／両方の鬢（耳際の髪の毛）は灰白色に変わってしまった。）

131　十二月二日夜夢遊沈氏園亭二首 其一（巻六十五）
（十二月二日夜、夢に沈氏の園亭に遊ぶ。）

路近城南已怕行　　路　城南に近づけば　已に行くを怕る
沈家園裏更傷情　　沈家の園裏　更に情を傷ましむ
香穿客袖梅花在　　香は客袖を穿ちて　梅花在り
綠蘸寺橋春水生　　綠は寺橋を蘸して　春水生ず

（路が城南に近づくほどに、足を進めるのが怖くなるというのに／ましてや沈家の園裏では、いっそう心が痛む。／梅の花は咲き誇り、香りが袖に滲みとおって／緑色の雪解け水は、寺院の橋下に満ちわたる。）

132　十二月二日夜夢遊沈氏園亭二首 其二

城南小陌又逢春　　城南の小陌　又た春に逢う
只見梅花不見人　　只だ梅花を見るのみにして　人を見ず
玉骨久成泉下土　　玉骨　久しく泉下の土と成るも
墨痕猶鎖壁間塵　　墨痕　猶お壁間の塵に鎖さる

（城南の小道に、春はまたやって来ても／梅の花を見るだけで、あの人の姿はない。／（唐琬の）玉のような身体は、とっくに泉下の土となってしまったが／庭園の壁面には、私が昔書きつけた詩の筆跡だけが、塵に埋もれていまでも残っている。）

133　夢中作（巻六十五）
（夢中の作。）

世事何由可控摶　　世事　何ぞ由　控摶す可きか
故山歸卧有餘歡　　故山に歸卧し　餘歡有り
澗泉見底藥根瘦　　澗泉　底を見るに　藥根瘦せ
石室生雲丹竈寒　　石室　雲を生じ　丹竈寒し
人遠忽聞清嘯起　　人遠くして　忽として聞く　清嘯の起こるを
山開頻得異書看　　山開きて　頻る得る　異書を看るを
一朝出赴安期約　　一朝に出赴するを　安んぞ期約せん
萬里烟霄駕紫鸞　　萬里の烟霄　紫鸞に駕す

（世の中の物事は自分で制御することができないから／故郷の山に帰って横になることにこそ楽しさがあるものだ。／（夢で見た）薬草が生じるはずの泉の底では、草の根が痩せ細っているのが見え／（仙人の眠るとされる）石室には雲が立ち込め、丹薬を生成する窯は冷え切っている。／人気のない山奥で、突然、声を長く引いて詩を歌う声（世俗を離れた人物の嘯という行い）が聞こえると／山が開けて、道教の珍しい書物が沢山現れた。／ある朝、出かけて安期先生（神仙）と会い／万里の雲の上を伝説の紫鸞に乗って駆けるものとしよう。）

134　二月一日夜夢（巻六十五）
（二月一日夜の夢。）

夢裏遇奇士　　夢裏　奇士に遇う
高樓酣且歌　　高樓　酣にして且つ歌う
霸圖輕管樂　　霸圖　管樂を輕んじ
王道探丘軻　　王道　丘軻を探る

大指如符券　　大指　符券の如く
微瑕互琢磨　　微瑕　互いに琢磨す
相知殊恨晩　　相い知ること殊に晩く
所得不勝多　　得る所　勝げて多からざるを恨む
勝算觀天定　　勝算　天定を觀
精忠壓虜和　　精忠　虜和を壓とす
真當起莘渭　　真に當に莘渭を起こすべくして
何止復關河　　何ぞ關河を復すに止まらんや
陣法參奇正　　陣法　奇正を參じ
戎旃相蕩摩　　戎旃　相い蕩摩す
覺來空雨泣　　覺め來たりて　空しく雨泣す
壯志已蹉跎　　壯志　已に蹉跎たり

（夢の中で、徳行に優れ才智の傑出した人物に出会い／高楼に上って、酒を飲み、歌って楽しんだ。／彼が覇道を語れば、管仲・楽毅の策略を優に超え／彼が王道を語れば、孔子・孟子の思想に及ぶようだった。／大いなる志は、皇帝から軍の総指揮を任された人のようであり／小さな欠点も、互いに磨かれて消えてしまうようだった。／お互いに知り合うのがこんなにも遅くなってしまい／多くのことについて十分に語りつくせないのを恨めしく思った。／彼には天下を統一する勝算があり／敵国との融和政策を打倒する純粋な忠実さを持っていた。／莘渭の地をも奪還すべきであるというのに／どうして關河のみを恢復することに止まろうか。／彼の陣法は奇兵術・正攻法を併せ持ち／軍旗が翻ってお互いに触れあうようだった。／夢から覚めて空しく雨のように涙を流した／勇壮な気概は、もはや散じてしまって跡形もない。）

135　自春來數夢至閬中蒼溪驛五月十四日又夢作兩絶句記之 其一（巻六十七）
（春來たりて自り、數夢にて閬中蒼溪驛に至る。五月十四日、又た夢み、兩絶句を作りて之を記す。）

騎驢夜到蒼溪驛　　騎驢　夜到る　蒼溪の驛
正是猿啼月落時　　正に是れ　猿啼く　月落の時
三十五年如電掣　　三十五年　電掣の如し
敗牆誰護舊題詩　　牆を敗り　誰か護らん　舊題の詩

（驢馬に乗り、夜、蒼溪驛（蜀の北部・閬州）に行きついたのは／ちょうど猿が鳴き、月が落ちた明け方の時間帯だった。／（蜀（王炎の幕府）を離れてからの）三十五年の時間は、電光が閃くほどの一瞬の間に過ぎ去ってしまった／（時間の）境界を取り払って、誰が昔書いた詩を大切にしようというのか。）

136　自春來數夢至閬中蒼溪驛五月十四日又夢作兩絶句記之 其二

亭皋敗葉先秋霣　　亭皋の敗葉　秋に先んじて霣ち
城上驚烏半夜啼　　城上の驚烏　夜半ばにして啼く
自笑遠遊心未已　　自ら笑う　遠遊して　心未だ已まず
年來頻夢到蒼溪　　年來　頻きりに夢む　蒼溪に至るを

（水辺の平地では、まだ秋にならないうちに枯れ葉が落ち／城壁の上では、驚いた烏が夜中に鳴く。／自分も可笑しく思う、いまだに蜀にいたころが忘れられず魂が遠くへ飛んでいき／近頃頻りに蒼溪驛を夢みる自分を。）

137　夢中作（巻六十八）
（夢中の作。）

萬里行求藥　　萬里　藥を求めて行き
三生誓棄官　　三生　官を棄つるを誓う
鶴巢投暮宿　　鶴巢　暮宿に投じ
松麩續朝餐　　松麩　朝餐に續く
進火金丹熟　　火を進めて　金丹熟し
凌風玉宇寒　　風を凌ぎて　玉宇寒し
人間日月速　　人間　日月速く
歳暦又將殘　　歳暦　又た將に殘われんとす

（（夢の中で）仙薬を求め、万里の遠くへ旅をしながら／三生、自分は出仕などしないと誓った。／夜は鶴の住処に寝泊まりし／朝食には松麩を並べる。／火を焚いて丹薬を生成し／風に乗って、冷たい大空を飛ぶ。／俗世では月日の流れが速く／この年ももう終わろうとしている。）

138　舟中記夢（巻六十八）
（舟中、夢を記す。）

石帆山下一漁翁　　石帆山の下　一漁翁
風雨蕭蕭卧短篷　　風雨　蕭蕭たり　短篷に臥す
幽夢覺時還自笑　　幽夢より覺める時　還た自ら笑う
閬州城北看蠶叢　　閬州の城北　蠶叢を看るを

（石帆山（紹興東南の山）の下で船を浮かべる、漁翁のような自分は／外に風雨の音を聞きながら、小舟の上で横になる。／愁いを帯びた夢から覚め、現実に戻ってきて、また自分で自分を笑う／閬州の城北、蜀の地を何度も夢にみることを。）

139　記夢（巻六十九）
（夢を記す。）

久住人間豈自期　　久しく人間に住みて　豈に自ら期せん
斷砧殘角助凄悲　　斷砧　殘角　凄悲を助く
征行忽入夜來夢　　征行し　忽として入る　夜來の夢
意氣尚如年少時　　意氣　尚お年少時の如し
絶塞但驚天似水　　絶塞　但だ驚く　天の水に似るを
流年不記鬢成絲　　流年　記さず　鬢の絲と成るを
此身死去詩猶在　　此身は死し去りても　詩は猶お在り
未必無人粗見知　　未だ必ずしも　人無し　粗ぼ見知

（久しく俗世に住んでいると、どうして期待しようか／石の台を断つ？　遠くでぼんやりと聞こえる角笛の音は、悲しみを増幅させる。／魂が遠くへ飛んでいき、昨夜夢を見ると／夢ではまるで若い頃のように意気が盛んだった。／辺境の城塞の上からは、天が水のように見えたのに驚いて／水の如く流れていく年月の間に、耳際の髪が糸のように細くなってしまったのを書き残そうとはしない。／私の体は死んでこの世から無くなっても、書いた詩は残るから／必ずしも　　）

140　夢中作（巻六十九）
（夢中の作。）

野鶴翩僊啄粒微　　野鶴　翩僊たりて　粒の微なるを啄え
碧桃縹緲著花稀　　碧桃　縹緲たりて　花の稀なるを著す
海山又見春風到　　海山　又た見る　春風到るを
丹竈苔封人未歸　　丹竈　苔封じて　人未だ歸せず

（仙界に住んでいる鶴は、小さな丹薬の粒を口に加えてひらひらと飛び／薬になる碧桃は、希少な花を咲かせて風に揺れている。／海山にはまた春がやってくるというのに／主人は未だ帰らず、丹薬を生成する窯は苔むしている。）

141　夢中作二首 其一（巻七十二）
（夢中の作。）

試說山翁事　　試みに說う　山翁の事
諸君且勿譁　　諸君　且た譁する勿れ
百年看似夢　　百年　看ること夢の似く
萬里不思家　　萬里　家を思わず

夜艾猶添酒　　夜艾くして　猶お酒を添え
春殘更覓花　　春殘れて　更に花を覓む
却嗤勾漏令　　却って嗤う　勾漏令
辛苦學丹砂　　辛苦して　丹砂を學ぶを

（試みに、山翁（陸游と知り合いの仙人）について話してみますが／皆さんはどうぞ騒ぎ立てたりなさいませんように。／（山翁にとっては）百年の時間も瞬く間に過ぎ去り／遠く離れた場所にいても、家に帰りたいと思うこともない。／夜が更けてもなお酒を手にし／春の終わりになっても更に花を求める。／却って勾漏令（西晋・東晋時代、丹薬の材料を探すために、勾漏令となって交趾に赴任しようとした道教研究家の葛洪のこと）をあざ笑う／苦労して錬丹術を学ぶなどとは。）

142　夢中作二首 其二

平羌江上月　　平羌江上の月
伴我故山來　　我を伴ないて　故山より來たる
幽興依然在　　幽興　依然として在り
浮雲正爾開　　浮雲　正に爾　開かんとす
清秋纔幾日　　清秋　纔かに幾日にして
黄葉已成堆　　黄葉　已に堆を成す
未醉江樓酒　　未だ　江樓の酒に醉わずして
扁舟可得回　　扁舟　回るを得るべけんや？

（平羌江（四川省の青衣江）の上にかかる月に／私は伴われて、郷里の山から（四川へと）（夢で）やって来た。／山河の深い趣は今も変わらずそこにあって／空の雲はちょうど開けて明るくなろうとしている。／清々しい秋になってからまだ数日しか経っていないというのに／黄葉した葉が地面に積もっている。／未だ河辺の酒楼で十分酔わないうちに／舟はどうして帰れるものか。）

143　記夢（巻七十三）
（夢を記す。）

衣紳飄舉髮颼颼　　衣紳　飄舉し　髮颼颼たりて
一鶴聊爲太華遊　　一鶴　聊として爲す　太華の遊
每過名山思小憩　　名山を過ぐる度に　小憩を思うも
天風浩浩不容留　　天風　浩浩たりて　留むるを容れず

（衣服と長い帯を舞い上げ、髪を颼颼と風になびかせて／鶴に乗った仙人（自分）は、楽し気に

太華山の上を飛んでいる。／名山に来るたびに、ここで一休みしたいと思うものだが／天には風が強く吹いていて、留まることを阻むのだ。）

144　夢蜀（巻七十六）
（蜀を夢む。）

自計前生定蜀人　　自ら計る　前生　蜀人と定るかと
錦官來往九經春　　錦官に來往す　九經の春
堆盤丙穴魚腴美　　盤を堆す　丙穴　魚腴の美
下箸峨眉栮脯珍　　箸を下す　峨眉　栮脯の珍
聯騎雋遊非復昔　　聯騎の雋遊　昔を復するに非ず
數編殘稿尚如新　　數編の殘稿　尚お新たなるが如し
最憐栩栩西窗夢　　最も憐れむ　栩栩たり　西窗の夢
路入青衣不問津　　青衣にて路に入り　津を問わず

（自分で推測する、前世は蜀の人だったのではないかと。／九度の春（乾道六年冬に冀州に到着してから、淳熙五年に成都を去るまでの九年間）を錦官城（成都）で過ごしたが／（成都にいたころは）丙穴（四川省城口県の南）の肥えた美しい魚を盆に乗せ／峨眉山でとれた珍しい木耳に箸を付けたものだ。／馬を連ねて進む友人は、昔のようではなく／書きかけの詩の原稿は、今なお新しく書かれたもののようだ。／悲しむべきは、うっとりとひたっていたのは、西の窓辺の夢にすぎず／道を歩いていても、青衣の下役人から桃源郷に入る津（道のり）を問われもしないことだ。）

145　異夢（巻七十六）
（異夢。）

山中有異夢　　山中　異夢有り
重鎧奮雕戈　　重鎧　雕戈を奮う
敷水西通渭　　敷水　西は渭に通じ
潼關北控河　　潼關　北は河を控す
凄凉鳴趙瑟　　凄凉　趙瑟を鳴らし
慷慨和燕歌　　慷慨　燕歌に和す
此事終當在　　此事　終に當に在るべくも
無如老死何　　老死を如何ともする無し

（山中で、平生と異なる変わった夢を見た。／夢の中では幾重もの鎧を着て、麗しい矛を奮った。／敷水は西のかた、渭水に通じ／潼關は北のかた、黄河をひかえている。／そこで物悲しく趙の瑟を鳴らし／憤慨して燕の歌（易水の歌）に和した。／この夢にあったようなことは、この先必

ずや実現するはずだが／それを見ずに老いて死ぬことをどうするわけにもいかない。）

146　記夢（巻七十七）
（夢を記す。）

夢遊異境不可識	夢に遊びし異境　識るべからず
翠壁蒼崖立千尺	翠壁　蒼崖　立つこと千尺
樓臺縹緲出其上	樓臺　縹緲として　其上に出ず
揮手直登無羽翼	揮手し　直ちに登るに　羽翼無し
門楣扁牓作八分	門楣　扁牓　八分を作す
奇勁非復人間迹	奇勁にして　人間の迹を復するに非ず
主人鹿弁紫綺裘	主人　鹿弁　紫綺の裘にして
相見歡如有疇昔	相見いて　歡ぶこと　疇昔有るが如し
探懐示我數紙書	懐を探り　我に示す　數紙の書
妙句玄言皆造極	妙句　玄言にして　皆造極なり
我即鈔之雜行草	我即ち　之を鈔するに　行草を雑う
主人儻怳如甚惜	主人　儻怳　甚だ惜しむが如し
夢中亦復知是夢	夢中　亦た復た　是を夢と知る
意恐覺時無處覓	意いて恐る　覺める時　覓むる處無きを
自量强記可不忘	自ら量る　强いて記して忘れざる可し
雞唱夢回空歎息	雞唱し　夢より回りて空しく歎息す

（夢で訪れた異境は、いずれの場所か分からなかった／千尺の高さの翠壁、蒼崖がそびえ立っていた。／その上には微かに楼台が出ているのが見えており／翼を持たないのに、手をはばたかせて飛び、直ちに崖の上まで登ることができた。／門の上の横木には八分の書体で扁額に題字が書かれていたが／抜きん出て鋭い字体であり、人間の筆跡を再現したのではないようだった。／迎え出た主人は鹿革の冠を被り、紫の衣を着て／お互いに会うと、まるで古くからの友人のように喜び合った。／彼が懐から取り出して私に見せてくれたいくつかの詩は／神妙で高尚な言葉を使っていて、どれも極めて優れた作品だった。／そこで私はこれらの詩を書き写したが、その際行書と草書を入り混ぜて書くと／彼は大いに残念がって、私の才能を手放しがたく思ってくれたようだった。／この度も、夢の中でこれが夢であると知り／目覚めた後、自分の求めるものが消えてしまうことを恐れた。／自分で意識的に、この夢の出来事を忘れないように記憶しようとしたが／ちょうど鶏が鳴いて夢から覚め、空しく溜息をついた。）

147　夢中江行過鄉豪家賦詩二首既覺猶歴歴能記也 其一（巻七十九）
（夢中、江を行きて鄉豪の家を過ぎ、詩二首を賦す。既に覺めて猶お歴歴として能く記する也。）

築屋傍江皋　　築屋　江皋に傍り
牆垣締結牢　　牆垣　牢を締結す
深門蔭楊柳　　深門　楊柳を蔭し
高架引蒲萄　　高架　蒲萄を引く
黍酒歡迎客　　黍酒もて　客を歡迎し
麻衫旋束縧　　麻衫もて　縧を旋束す
兒孫勿遊惰　　兒孫　遊惰する勿れ
常念起家勞　　常に念うべし　起家の勞

（鄉豪の家屋は河辺に沿って築かれており／垣根に固く守られている。／大きな門の奥には楊樹と柳の木が隠れ／高い渡し木には葡萄の蔓が連なっている。／黍米の酒で客を歓迎し／麻の衣でひもをぐるぐると束ねる。／子孫たちよ、遊び惚けて怠惰であってはいけないよ／常にこの家を創業した先祖の苦労を思わなければ。）

148　夢中江行過鄉豪家賦詩二首既覺猶歴歴能記也 其二
蒲席乘風健　　蒲席　風の健やかなるに乘じ
江潮帶雨渾　　江潮　雨の渾たるを帶ぶ
樹餘梢纜迹　　樹は梢纜の迹を餘し
崖有刺篙痕　　崖は刺篙の痕を有す
酒酹湘君廟　　酒を酹ぐ　湘君の廟
歌招屈子魂　　歌いて招く　屈子の魂
客途嗟草草　　客途　嗟くこと草草たり
無處采芳蓀　　芳蓀を采る處無きを

（蒲の葉で編んだ船の座席に座り、爽やかな風に乘って進む。／河に起こる波は、しとしとと降る雨をまとっている。／樹にはともづなを巻いた迹が残っており／崖には竿を刺して船を留めた後がある。／酒を地に注いで湘君（舜の妻）の廟を祭り／詩を歌って屈原の魂を呼び寄せる。／旅先で残念に思って嘆く／香草を採る所がないことを。）

149　夢曾文清公（巻七十九）
（曾文清公を夢む。）

有道真爲萬物宗　　道を有して　真に爲す　萬物の宗
巉然使我嘆猶龍　　巉然たりて　我をして　嘆えしめること龍の猶し
晨鷄底事驚殘夢　　晨鷄の底事　殘夢を驚かし
一夕清談恨未終　　一夕の清談　未だ終わらざるを恨む

（道を習得して、初めて本当に万物の宗（老子の言葉）となるものだ。／（夢で会った曾文清公

（陸游が若い頃に師事した曾幾のこと）は）堂々として、私を感心させる佇まいは龍のようだった（孔子がかつて老子のことを龍のようだと言ったことから、道を極めた人のたとえ）。／しかしながら明け方の鶏が（例のごとく）夢の名残を台無しにして／この一夜の清雅な談話が、未だ終わらないうちに目覚めてしまったのを恨めしく思う。）

150　夢中作（巻八十）
（夢中の作。）

久向人間隠姓名　　久しく人間に向かいて　姓名を隠し
看花幾到武昌城　　花を看に　幾たびか到る　武昌城
一壺春色常供醉　　一壺の春色　常に醉いを供い
萬里烟波懶問程　　萬里の烟波　程を問うを懶る
斜日挂帆堤外影　　斜日　帆を挂く　堤外の影
便風擊鼓驛前聲　　便風　鼓を擊つ　驛前の聲
丈夫入手皆勛業　　丈夫　入手すること　皆勛業なり
廊廟江湖未易評　　廊廟　江湖　未だ評すること易からず

（私はもう久しく人々の間に身を置いて、俗世の仮名を使って世を渡ってきたが／花を看て夢で幾度か武昌の城中（入蜀の時に通りがかった地）に至った。／酒壺を手に取りながら春の景色を眺めるには酔いが欠かせず／万里の遠く、俗世から離れた土地への行き方を尋ねるのを忘れてしまう。／日が傾くと、船に立てた帆が堤防の外に影を引き／順風のなか、出発を知らせる？太鼓の音が宿場の前に響く。／士大夫たるもの、功業を立てる必要があるが／朝廷と江湖のどちらが良いなどと評することは、私にはまだ難しい。）

151　書夢（巻八十一）
（夢を書く。）

我夢舉有司　　我夢に　有司に舉せらるるも
鷄唱起裹飯　　鷄唱して　裹飯に起つ
又夢趁早朝　　又夢み　早朝を趁う
漏舍坐待旦　　漏舍に坐して旦を待つ
既寤兩無有　　既に寤めて　兩有る無し
撫枕徒浩嘆　　枕を撫して　徒に浩嘆す
今雖去爲農　　今は去りて農を爲すと雖も
飯牛亦夜半　　飯牛　亦た夜半
何曾得放慵　　何ぞ曾て　放慵を得
美睡到日旰　　美睡　日旰に至るや
一笑俱置之　　一笑して　俱に之を置く

浮生固多難　　浮生　固より難多し

（私は夢で官位を得た／朝になれば起きて、（弁当にするための）飯を包む／再び夢に入って早朝のうちに／あばら家で座って夜が明けるのを待つ。／夢から覚めると、夢で手にしていたものは無く／横たわって無駄にがっかりする。／今は官界から退いて農作業の日々を送り／夜中に牛に食事を与えているけれども（CF:寧戚の故事：才能のある人が見出されずに下役についていること）／私はどうして気ままに／ゆっくりと日が暮れるまで眠ることなどできようか／（このような考えを）私は一笑に付して片づけてしまおう／浮世の人生には、ただでさえ難題が多いのだから。）

152　夢中作二首 其一（巻八十四）
（夢中の作。）

征途遇秋雨　　征途　秋雨に遇い
數士集郵亭　　數士　郵亭に集う
酒拆官壺綠　　酒　官壺の綠を拆き
山圍草市青　　山　草市の青を圍む
劇談猶激烈　　劇談　猶お激烈たるも
瘦影各伶俜　　瘦影　各伶俜す
四海皆兄弟　　四海　皆兄弟なれば
悠然共醉醒　　悠然　共に醉醒す

（旅の途中で秋雨に遭い／数人の士人たちと旅館に集った。／官製の酒の緑色の壺を開け／村の市場を青々とした木々が囲む。／言葉は今なお激烈であるものの／痩せた身体の影がさまよって揺れ動いている。／世の中の人はみな兄弟であるから（『論語・顔淵』「君子は敬みて失なく、人と与り恭しくして礼あらば、四海の内皆兄弟たらん」による）／我々は悠然と打ち解けて、酔うも醒めるも一緒だ。）

153　夢中作二首 其二

一客若蜀士　　一客　蜀士の若く
相逢意氣豪　　相い逢いて　意氣豪なり
偶談唐夾寨　　偶ま談ず　唐の夾寨
遂及楚成皋①　　遂に及ぶ　楚の成皋
頓洗風塵惡　　頓に洗う　風塵の惡
都忘箠轡勞　　都て忘る　箠轡の勞
蟬嘶笑餘子　　蟬嘶きて　餘子を笑う
辛苦學離騷　　辛苦して離騷を學ぶを

按：① 自注：二者皆所論事。（二者皆論ずる所の事なり。）

（（夢で集った数客のうちの）一人は、蜀の出身のようで／私と会って意気盛んであった。／偶然、唐の夾寨のことを話題にしたのをきっかけに／ついに話は楚の成皐のことにまで及んだ。／（彼と話していると）にわかに世俗の悪しき塵を洗い流し／馬に乗って遠くへ赴任した苦労をすべて忘れるようだった。／世間はやかましく騒ぎ立てて笑うだろう／苦労して屈原の「離騒」を学ぶ我々を。）

154　夢華山（巻八十四）
（華山を夢む。）

路入河潼喜著鞭	路は河潼に入り　喜び著しく鞭うつ
華山忽到帽裙邊	華山　忽ち到る　帽裙の邊
洗頭盆上雲生壁	洗頭盆の上　雲は壁を生じ
腰帯鞋前月滿川	腰帯鞋の前　月は川に滿つ
丹竈故基誰復識	丹竈の故基　誰か復た識らん
白驢遺迹但相傳	白驢の遺迹　但だ相い傳うるのみ
夢魂妄想君無笑	夢魂の妄想　君笑う無かれ
尚擬今生得地仙	尚お擬うる　今生　地仙を得るかと

（夢で河潼の道に入り、喜んで馬を走らせていると／突然、華山のふもとに至った。／洗頭盆の上には雲が壁のように立ち込め／腰帯鞋の前では月の光が川に滿ちている。／丹薬を生成する窯の古い土台がここにあるなどとは、誰が知っていようか／白驢のいた痕跡も、語り継がれているだけだ。／夢の中での妄想だから、笑わないでくれたまえ／私は今生で地仙となれると今もなお考えているのであるから。）

155　八月二十三夜夢中作（巻八十四）
（八月二十三夜、夢中の作。）

道士上天鶴一隻	道士　天に上る　鶴一隻
老僧住庵雲半間	老僧　庵に住む　雲半間
去來盡向無心得	去來　盡く無心を得るに向かい
癡黠相除到處閑	癡黠　相い除く　閑處へ到るを
江山千里互明晦	江山　千里　互いに明晦
魚鳥十年相往還	魚鳥　十年　相い往還す
高巖縹緲人不到	高巖　縹緲たりて　人到らず
醉中爲子題其顔	醉中　爲子　其顔を題す

（道を習得した道士は鶴に乗って天に上り／老僧は雲間の庵に住む。／これまでずっと無心の境地を得ようとしてきたが／愚かで悪賢いせいで、静かな地に行きつくことができなかった？？／江山は千里に渡って、明るいところと暗いところが交互に表れ／魚と鳥（隠逸の象徴となる動物）は、十年ごとに入れ替わる／峰はあまりにも高く霞んで見え、人が至ることはない／酔った中で、子（第三者）のために、その姿かたちを書き記しておこう。）

156　十月二十四日夜夢中送廬山道人歸山（巻八十五）
（十月二十四日夜、夢中、廬山道人の歸山するを送る。）

平生不到三公府　　平生　至らず　三公の府
晩歳歸來五老庵　　晩歳　歸來す　五老の庵
夙士極知成殿後　　夙士の極知　殿後を成し
吾曹所頼作司南　　吾曹の所頼　司南を作す
孤舟夜泊灘聲惡　　孤舟に夜泊し　灘聲惡く
小甕晨香雪意酣　　小甕の晨香　雪意酣なり
笑語床隅挂杖子　　笑語す　床隅に杖子を挂きて
即今惟汝是同參　　即ち今は　惟だ汝のみ是れ同參なりと

（あなたは平生三公の位に登ることはなく／晩年は廬山の東北にある五老峰に庵を構えて住んでいる。／以前、あなたは行軍の殿を務められるほどだったが／我々の頼るところといえば、指南（方位磁石）だけだ。／しかし今、ぽつんと船の中で夜泊すると、水の音が忌まわしく／朝、小さな甕に残る酒の香り、雪が今にも降ろうとしている。／寝床の隅に杖を立て掛けて戯れを言う／今はもはや、お前だけが私の連れ合いだ、と。）

157　夢中行荷花萬頃中（巻八十五）
（夢中、荷花萬頃の中を行く。）

天風無際路茫茫　　天風　無際にして　路は茫茫たり
老作月王風露郎　　老いて作る　月王　風露の郎
只把千尊爲月俸　　只だ千尊を把りて　月俸と爲すは
爲嫌銅臭雜花香　　銅臭の花香に雜わるを嫌うが爲なり

（天には風が際限なく吹き、道はどこまでも続いている。／老いたら就きたいたいものだ、月と風露の郎（仙界の官位）に。／（鏡湖に新設された仙界の官が）月に酒千樽を給与として与えられるのは／金銭の卑しい臭いが、蓮華の花の良い香りに混ざるのを嫌ったためだろう。）